

京都府遺跡調査概報

第 2 冊

1. 三河宮の下遺跡
2. 稚児野遺跡
3. 中尾古墳
4. 前櫛古墳
5. 羽戸山遺跡
6. 宮ノ平遺跡
7. 木津遺跡

1982

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足しました。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることを考える普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和56年度は34件の調査を受託しました。これらの発掘調査は、いずれも道路建設、学校建設、宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり、調査によって発見された遺跡の多くは、調査終了後破壊され、消滅する運命にあります。しかし、発掘調査したすべての遺跡が開発事業により破壊されていはいはずはありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

当調査研究センターでは、遺跡の保存のためあらゆる努力をするとともに、たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用に努めていく所存であります。この「京都府遺跡調査概報」は、正式の調査報告としてまとめる前に年度ごとに調査結果の概要を報告するために刊行するものであります。既に刊行している「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに、炎天の下、厳寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方々があります。この報告書を刊行するにあたって、これらの多くの関係者に厚くお礼を申し上げます。

昭和57年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

1. 三河宮の下遺跡 2. 稚児野遺跡 3. 中尾古墳 4. 前櫛古墳 5. 羽戸山遺跡
6. 宮ノ平遺跡 7. 木津遺跡

を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1 三河宮の下遺跡	加佐郡大江町三河	昭55. 11. 18 } 昭56. 3. 31	京都府土木建築部	竹原 一彦
2 稚児野遺跡	天田郡夜久野町稚児野	昭56. 10. 26 } 昭56. 11. 30	京都府農業開発公社	伊野 近富
3 中尾古墳	与謝郡伊根町亀島大浦中尾	昭56. 8. 25 } 昭56. 10. 7	京都府土木建築部	久保田健士
4 前櫛古墳	相楽郡加茂町尻枝前櫛	昭56. 12. 7 } 昭57. 2. 23	京都府道路建設課	戸原 和人 中塚 良
5 羽戸山遺跡	宇治市菟道羽戸山、五ヶ庄一番割	昭56. 7. 27 } 昭56. 11. 14	住宅都市整備公団	長谷川 達 大槻 真純 小山 雅人
6 宮ノ平遺跡	城陽市寺田宮ノ平、大川原	昭57. 1. 21 } 昭57. 3. 31	京都府住宅供給公社	大槻 真純
7 木津遺跡	相楽郡木津町木津殿城	昭56. 7. 6 } 昭56. 7. 22	京都府警察本部	大槻 真純

3. 本冊の編集には、調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1	三河宮の下遺跡発掘調査概要	1
2	稚児野遺跡発掘調査概要	38
3	中尾古墳発掘調査概要	49
4	前門古墳発掘調査概要	62
5	羽戸山遺跡発掘調査概要	107
6	宮ノ平遺跡発掘調査概要	143
7	木津遺跡発掘調査概要	147

挿 図 目 次

三河宮の下遺跡

第 1 図	調査地位置図	2
第 2 図	調査地位置図	4
第 3 図	調査地遺構平面図	5
第 4 図	6号住居跡実測図	6
第 5 図	7号・8号住居跡実測図	7
第 6 図	9号住居跡実測図	8
第 7 図	10号住居跡実測図	9
第 8 図	1号住居跡実測図	11
第 9 図	2号住居跡実測図	12
第 10 図	3号・5号住居跡実測図	13
第 11 図	4号住居跡実測図	14
第 12 図	11号住居跡実測図	15
第 13 図	前期縄文土器拓影	16
第 14 図	中期縄文土器拓影	17
第 15 図	中期縄文土器拓影	19
第 16 図	後期・晩期縄文土器拓影	20
第 17 図	後期縄文土器・土器底部実測図	21
第 18 図	打製石鎌実測図	24
第 19 図	切目石錘・礫石錘実測図	25
第 20 図	打製石斧・磨製石斧実測図	26
第 21 図	石匙・石錐・削器実測図	27
第 22 図	敲石・磨石実測図	29
第 23 図	土製品・石製品実測図	30
第 24 図	土師器・須恵器実測図	31

稚児野遺跡

第 25 図	調査地周辺遺跡分布図	39
--------	------------	----

第 26 図	大油子荒堀遺跡出土遺物実測図	41
第 27 図	調査地位置図	43
第 28 図	C-2・C-3 トレンチ平面・土層断面図	45
第 29 図	出土遺物実測図	47

中尾古墳

第 30 図	中尾古墳位置図	50
第 31 図	調査地地形図	51
第 32 図	中尾古墳平面図	52
第 33 図	土層断面図	53
第 34 図	石室実測図	54
第 35 図	第 2 次埋葬面平面図	56
第 36 図	第 1 次埋葬面平面図	56
第 37 図	出土遺物実測図 (1)	57
第 38 図	出土遺物実測図 (2)	59

前柵古墳

第 39 図	加茂町遺跡分布図	63
第 40 図	前柵古墳群地形図	65
第 41 図	2 号墳墳丘測量図及び中世墳墓・墓壙位置図	67
第 42 図	墳丘横断面及び石室内土層断面図	69
第 43 図	墳丘縦断面図	70
第 44 図	2 号墳石室実測図	71
第 45 図	棺台レベル模式図	74
第 46 図	石室内遺物出土状況	75
第 47 図	人骨出土状況	76
第 48 図	人骨及び木棺出土状況	77
第 49 図	奥壁壙一括遺物実測図	79
第 50 図	出土遺物実測図 (1)	82
第 51 図	出土遺物実測図 (2)	83
第 52 図	出土遺物実測図 (3)	84
第 53 図	装身具類実測図	88
第 54 図	鉄製品実測図	89

第 55 図	中世墳墓群配置図	91
第 56 図	1 号墓実測図	93
第 57 図	6 号墓実測図	94
第 58 図	7 号墓実測図	95
第 59 図	4 号墓実測図	96
第 60 図	中世墳墓出土遺物実測図	97
第 61 図	宝篋印塔・五輪塔実測図	98
第 62 図	五輪塔復元図	99
第 63 図	全階式宝篋印塔復元図	100

羽戸山遺跡

第 64 図	調査地位置及び周辺遺跡分布図	108
第 65 図	羽戸山遺跡 A・B・C 地区地形図	111
第 66 図	A 地区調査区域全図	113
第 67 図	住居跡 S B01 実測図	115
第 68 図	住居跡 S B02 実測図	116
第 69 図	土壙 S K01 実測図	117
第 70 図	A 地区礎石建物跡 S B03 及び石垣実測図	119
第 71 図	A 地区 S B01 出土土器実測図	121
第 72 図	A 地区 S K01 出土土器実測図	122
第 73 図	A 地区出土土器実測図	123
第 74 図	サスカイト片	123
第 75 図	B 地区地形図	125
第 76 図	B 地区北部平面実測図	126
第 77 図	テラス状遺構 S X01 土器出土状態	127
第 78 図	B 地区出土土器実測図	128
第 79 図	長頸壺記号文拓影	128
第 80 図	C 地区トレンチ関係図及び遺構配置図	131
第 81 図	C 地区 S K10 実測図	133
第 82 図	C 地区 S K19 実測図	133
第 83 図	C 地区 S K26 実測図	134
第 84 図	C 地区 S K10 出土土器実測図	135

宮ノ平遺跡

第 85 図	調査地位置図	143
第 86 図	トレンチ関係図	144
第 87 図	出土遺物実測図	145

木津遺跡

第 88 図	調査地位置図	148
第 89 図	トレンチ設定図	149
第 90 図	第 1 トレンチ(下)・第 2 トレンチ平面図	149
第 91 図	出土遺物実測図 (1)	151
第 92 図	出土遺物実測図 (2)	152

付 表 目 次

中尾古墳

付表 1	土器計測表	58
------	-------	----

前櫛古墳

付表 2	各古墳(群)における出土土器の組成	89
付表 3	管玉計測値	89
付表 4	中世墳墓一覧表	92

羽戸山遺跡

付表 5	調査地一覧表	107
付表 6	弥生式土器出土地点別分類表	137

図 版 目 次

三河宮の下遺跡

- 図版第1 (1)調査地遠景(南から) (2)調査地遠景(北東から)
- 図版第2 (1)調査地土層断面(北から) (2)G-5土層断面(南から)
- 図版第3 (1)A地区調査地(南東から) (2)A地区調査地(北から)
- 図版第4 (1)A地区調査地(南東から) (2)A地区調査地(西から)
- 図版第5 (1)B地区調査地(西から) (2)B地区調査地(北から)
- 図版第6 (1)6号住居跡(南から) (2)9号住居跡(北から)
- 図版第7 (1)7号・8号住居跡(東から) (2)石囲い炉跡1(東から)
- 図版第8 (1)石囲い炉跡1(南から) (2)石囲い炉跡2(東から)
- 図版第9 (1)配石遺構 (2)作業風景
- 図版第10 (1)10号住居跡(北から) (2)1号住居跡(西から)
- 図版第11 (1)4号住居跡(東から) (2)3号・5号住居跡(北から)
- 図版第12 (1)11号住居跡(南から) (2)10号住居跡(東から)
- 図版第13 (1)2号住居跡(東から) (2)2号住居跡カマド跡
- 図版第14 (1)土師器出土状況 (2)2号住居跡カマド内土師器出土状況
- 図版第15 (1)縄文土器出土状況 (2)石製装飾品出土状況
- 図版第16 (1)石錘出土状況 (2)石匙出土状況
- 図版第17 (1)前期縄文土器片 (2)中期縄文土器片Ⅰ
- 図版第18 (1)中期縄文土器片Ⅱ (2)中期縄文土器片Ⅲ
- 図版第19 (1)中期・後期縄文土器片Ⅰ (2)後期縄文土器片Ⅱ
- 図版第20 (1)晩期縄文土器片 (2)土偶・円錐形土製品・石製装飾品・多孔石
- 図版第21 (1)打製石鎌 (2)打製石鎌
- 図版第22 (1)切目石錘Ⅰ (2)切目石錘Ⅱ
- 図版第23 (1)礫石錘(2)打製石斧・磨製石斧
- 図版第24 (1)石匙・石錐・削器 (2)磨石・敲石
- 図版第25 土師器甕・土師器壺・須恵器杯

稚児野遺跡

- 図版第26 (1)調査地遠景(西から) (2)C地区(北から)
図版第27 (1)A-1区柱穴内遺物出土状況 (2)A-8区(南から)
図版第28 出土遺物

中尾古墳

- 図版第29 (1)中尾古墳遠景(南から) (2)中尾古墳遠景(西から)
図版第30 (1)石室調査前全景(南東から) (2)中尾古墳調査前全景(北東から)
図版第31 (1)石室検出状況(南東から) (2)奥壁部遺物出土状況(南西から)
図版第32 (1)石室中央部左側壁遺物出土状況(北東から)
(2)石室中央部右側壁遺物出土状況(南から)
図版第33 出土遺物(1)
図版第34 出土遺物(2)
図版第35 (1)出土遺物(3) (2)石室完掘状況(南東から)

前柵古墳

- 図版第36 前柵2号墳・中世墓群航空写真(左が北)
図版第37 (1)前柵古墳遠景(南西から) (2)前柵古墳遠景(南東から)
図版第38 (1)羨道部・外護列石(南西から) (2)外護列石(西から)
図版第39 (1)羨道部・閉塞石 (2)玄室
図版第40 (1)玄室内遺物及び棺台(1) (2)玄室内遺物及び棺台(2)
図版第41 玄室内遺物及び棺台(3)
図版第42 遺物出土状況(1)
図版第43 遺物出土状況(2)
図版第44 遺物出土状況(3)
図版第45 人骨出土状況
図版第46 石室内出土土器(1)
図版第47 石室内出土土器(2)
図版第48 石室内出土土器(3)
図版第49 石室内出土土器(4)
図版第50 石室内出土土器(5)
図版第51 (1)石室内出土土器(6) (2)石室内出土鉄製品
図版第52 (1)中世墓群復元全景(北から) (2)中世墓群墓壙全景(北から)
図版第53 1号墓検出状況

- 図版第54 3号墓検出状況
図版第55 4号墓検出状況
図版第56 (1)7号墓出土状況 (2)6号墓出土状況
図版第57 中世墓出土遺物

羽戸山遺跡

- 図版第58 羽戸山遺跡全景(航空写真)
図版第59 (1)A地区からの眺望 (2)A地区中央土壙群・SB01他(北から)
図版第60 (1)A地区SB01(西から) (2)A地区SB01(南から)
図版第61 (1)A地区SB02(北から) (2)A地区SB02竈(北から)
図版第62 (1)A地区北部土壙群(北東から) (2)A地区SK01(西から)
図版第63 (1)A地区SB03(東から) (2)A地区SB03石垣(南西から)
図版第64 (1)B地区伐採後の状況(北から) (2)B地区完掘後の状況(北から)
図版第65 (1)B地区SX01(北から) (2)B地区SX01(東南から)
図版第66 (1)B地区長頸壺(26)出土状態(北から) (2)B地区土器出土状態(北から)
図版第67 (1)C地区全景(東から) (2)C地区全景(西から)
図版第68 (1)C地区SK10(西南から) (2)C地区SK25・26・28等(北から)
図版第69 羽戸山遺跡出土土器

木津遺跡

- 図版第70 (1)第Ⅰトレンチ全景(西から) (2)第Ⅱトレンチ全景(東から)
図版第71 (1)SK01およびSD02(南から) (2)SD02北壁セクション
図版第72 (1)SD01(南から) (2)SD01北壁セクション

1. 三河宮の下遺跡発掘調査概要

1. はじめに

京都府土木建築部では、加佐郡大江町字三河^{（註1）}で、由良川の支流である三河川の河川防災施設事業が計画され、事業担当課である河湾課から文化財保護課に、同計画に係わる埋蔵文化財の問題についての問い合わせがあった。当該地は『京都府遺跡地図』に縄文時代遺跡である三河遺跡^{（註1）}（三河宮の下遺跡と改称）として周知の遺跡に登録され、文化財保護法に基づいて発掘調査の必要があると判断された。この三河宮の下遺跡は、昭和34年の開田工事中に現大江町史誌編さん委員長伊田半治氏によって、縄文時代前期から晩期にかけての遺物が採集され、また、昭和43年の同志社大学考古学研究会の分布調査^{（註2）}でも多量の遺物が採集された。

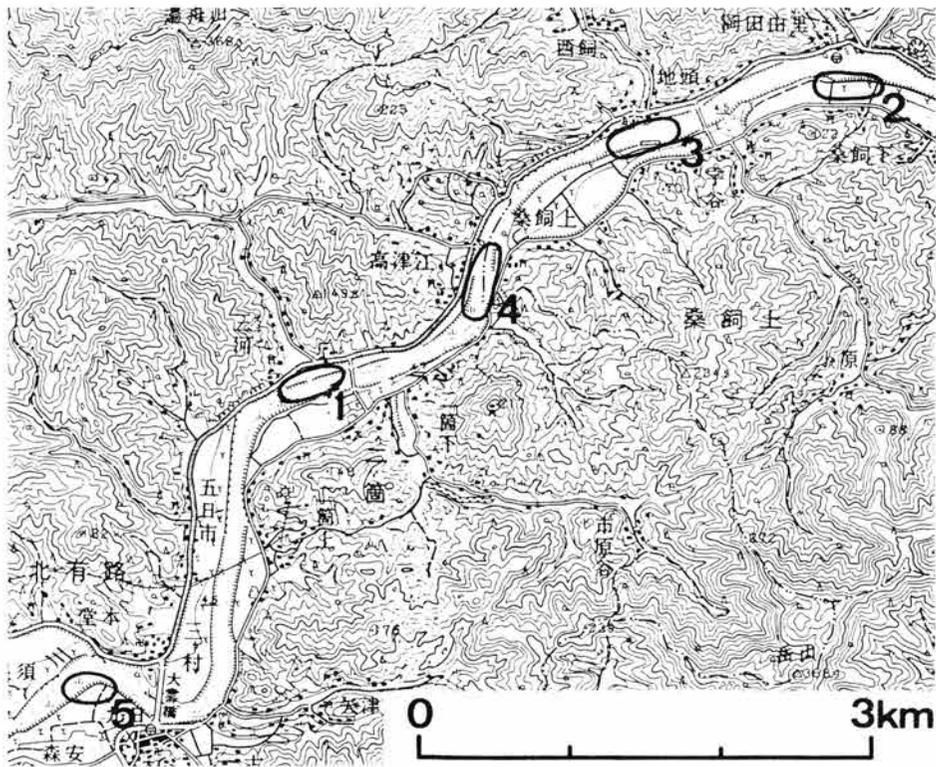
調査地は、三河川の流路として新たに開削される由良川の自然堤防部約1,500㎡のうち約800㎡を予定し、昭和55年11月18日～昭和56年3月31日の期間で発掘調査を実施した。

発掘調査は、京都府教育委員会が調査主体となり、京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係長 堤圭三郎、同じく埋蔵文化財調査員 竹原一彦が現地調査を担当した。出土遺物の整理作業は56年度の事業となり、その整理主体は56年度から新たに発足した(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターに引継がれた。整理作業は同センター調査員 松井忠春・竹原一彦の2名が担当した。

発掘調査にあたって大江町教育委員会をはじめ関係諸機関、地元の方々の御協力、御援助を得た。また、発掘調査に従事していただいた三河地区有志の方々、調査補助員・整理作業員^{（註3）}として参加して頂いた多くの有志学生諸氏^{（註3）}に対して、あわせ記して謝意を表します。

2. 位置と環境

三河宮の下遺跡は、京都府加佐郡大江町字三河小字高畠に所在し、由良川左岸際の自然堤防部に立地している。由良川は福井・滋賀の両県に端を接する北桑田郡美山町にその源を発する全長146kmの一級河川である。丹波山地を流れる由良川上・中流域では西流し、福知山盆地でその流れを北東方向に転じて若狭湾に注ぎ込む。福知山から若狭湾までの由良川下流域35kmは舞鶴市・宮津市・大江町の2市1町にわたっており、河川の両側には山脚がせまり、狭い谷平野部では緩い蛇行をみせている。この蛇行部凸岸に沿って自然堤防が良く発達している。由良川はその長さにかかわらず河口部に大きな平野をもたない。下流域ではわずかに



第1図 調査地位置図

1. 三河宮の下遺跡
2. 桑飼下遺跡
3. 地頭遺跡
4. 高津江遺跡
5. 高川原遺跡

自然堤防部と旧河道部の後背湿地が平地を形成するのみである。

三河宮の下遺跡は、由良川とその支流である三河川の合流部に位置している。この自然堤防部の海拔最高点は7.94mであり、近年まで桑畑が営まれ、旧河道部の後背湿地がわずかに水田として利用されていたにすぎない。梅雨・台風等による由良川の急激な水位上昇は海拔10mを越える場合もあり、自然堤防は冠水しその水流は各支流を逆流して谷奥まで洪水線がのびた。そこで近年の河川防災工事等で由良川河川敷の拡幅工事が行われ、それに伴う自然堤防上の遺跡が調査されてきている。

由良川下流域の各地から砂利採取に伴って川底中より縄文時代から平安時代にかけての遺物が発見され、当初は上・中流域からの流れ込みと考えられていたが、昭和47年に舞鶴市桑飼下の地で縄文時代後期から奈良時代にかけての遺跡が発見された。さらに昭和49年には大江町南有路の地で古墳時代の集落跡が調査された。両遺跡とも由良川の自然堤防上に立地している。桑飼下遺跡では縄文時代後期の炉跡を多数検出し、また各種の貴重な遺物が多数出

土している。高川原遺跡は古墳時代が主体をなす遺跡であるが、出土遺物の中に若干の縄文土器の破片がみられることから、現時点では自然堤防上に立地する最も上流の縄文時代遺跡とみられる。

この他に三河宮の下遺跡周辺の縄文時代遺跡は、地頭遺跡・高津江遺跡などでもみられるように、由良川に近接して存在している。

近年、西日本においてはこのような低地に存在する縄文時代遺跡の例が増加してきており、三河宮の下遺跡の資料が、これら西日本地域での縄文時代研究に寄与するものと思われる。

3. 調査経過

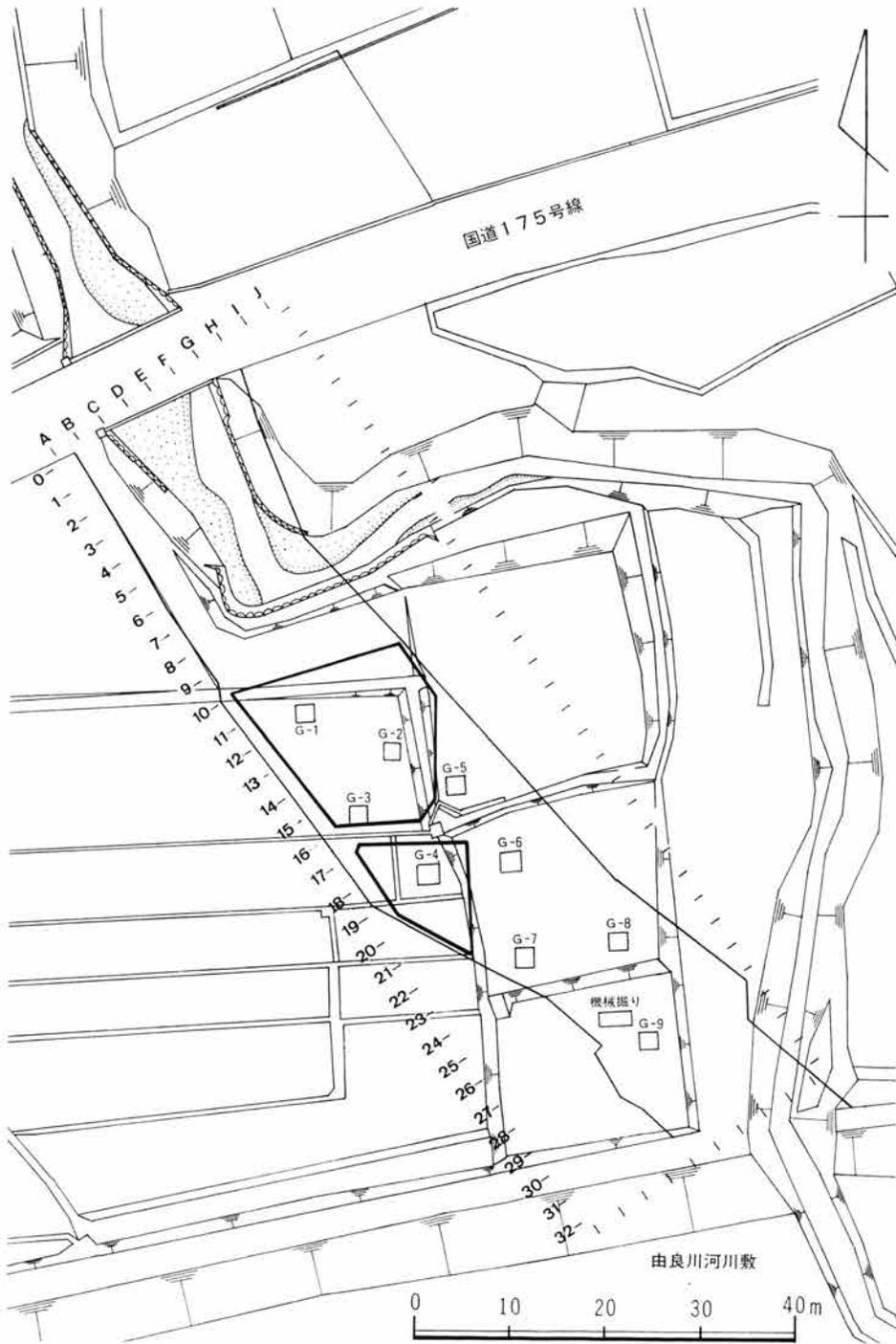
調査地は由良川自然堤防上の三河川河口部右岸に位置する。調査地の西半分は由良川の自然堤防部を残している。東半分は三河川の旧河岸斜面とみられる段丘部が存在する。

調査開始にあたり、調査対象面積約800㎡に9か所のグリッド(第2図G-1～G-9)を設定して試掘を実施した。試掘調査の結果、自然堤防部では地表下80cmまでは無遺物の堆積土で、その下層には茶褐色粘質土層(縄文～古墳時代遺物包含層)・暗茶褐色粘質土層(縄文時代遺物包含層)・明黄褐色粘質土層(地山層)が続く。段丘状をなす東部では遺物包含層は認められず、機械掘りによって海拔2m近くまで無遺物層であると判明した。G-5では遺物包含層が東へ約30度の傾斜で下っていた。

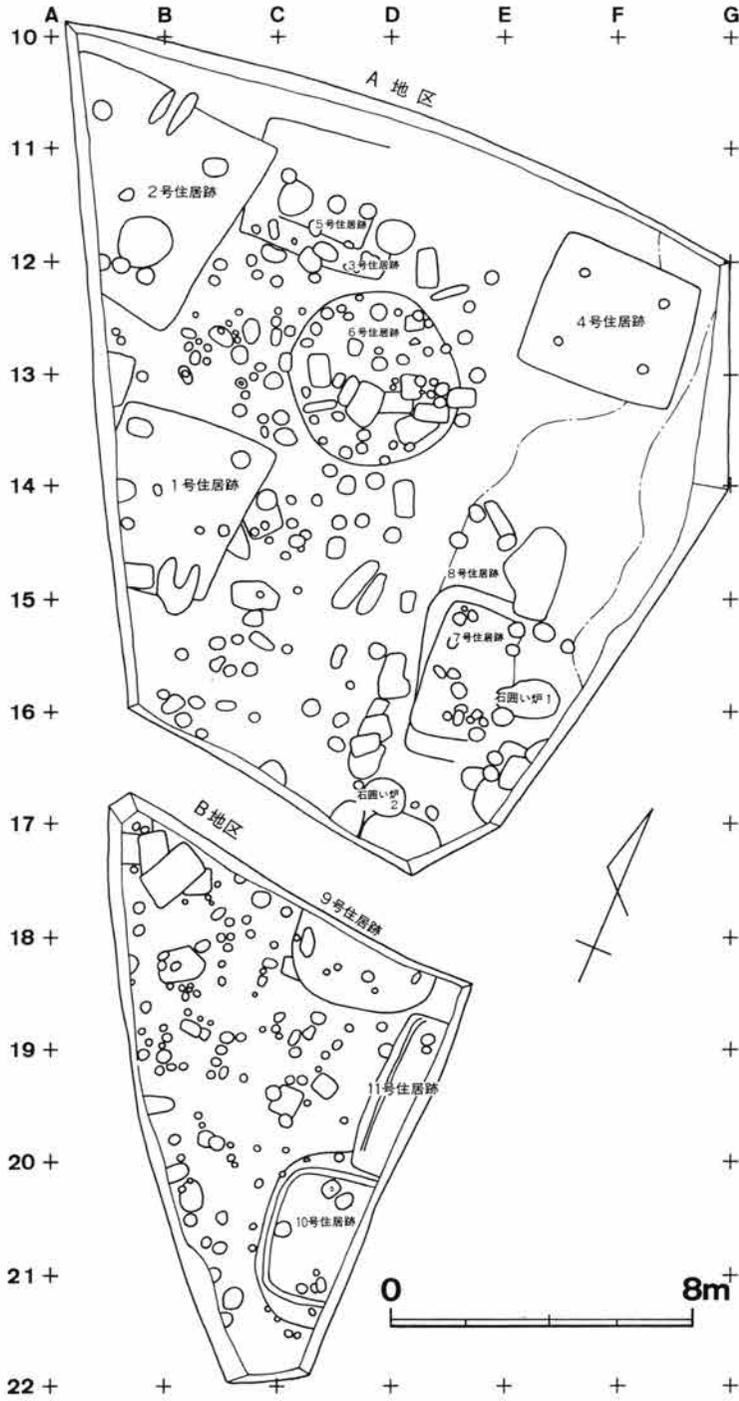
当初、自然堤防上に遺跡が存在すると考えられていたが、地山層が明黄褐色粘質土層であることから、西方の山脚から延びた河岸段丘上に遺跡が立地していたことが判明した。たびかさなる洪水の影響で順次自然堤防と化していったものとみられる。

調査予定地内では西半分に遺構が残っていると判断され、本調査は予定地西部の約300㎡にA・Bの2地区を設定し、発掘調査を開始した。調査初期の段階では天候も比較的安定していて作業も順調に進み、住居跡及び柱穴等を多数検出することができた。しかし、年明けと共に当地方は近年まれにみる豪雪にみまわれ、やむなく調査を一時中断することになった。調査の再開は天候が安定し始めた2月末となり、調査再会と同時に検出していた遺構の掘り下げから行った。これらの遺構は地山を掘り込んでおり、各遺構内の埋土はおおむね暗茶褐色粘質土・暗灰褐色粘質土といった2種類に分かれた。前者には縄文時代遺物のみが含まれており、後者には古墳時代遺物もみられた。

A地区では円形住居跡及び方形住居跡を8基検出し、埋土からみてそのうち2基は縄文時代の住居跡とみられ、残る6基は古墳時代の住居跡であった。その他に石囲い炉2か所・配石遺構3か所・多数のピット群がある。古墳時代の遺構として6基の住居跡の他にはほとん



第2図 調査地位置図



第3図 調査地遺構平面図

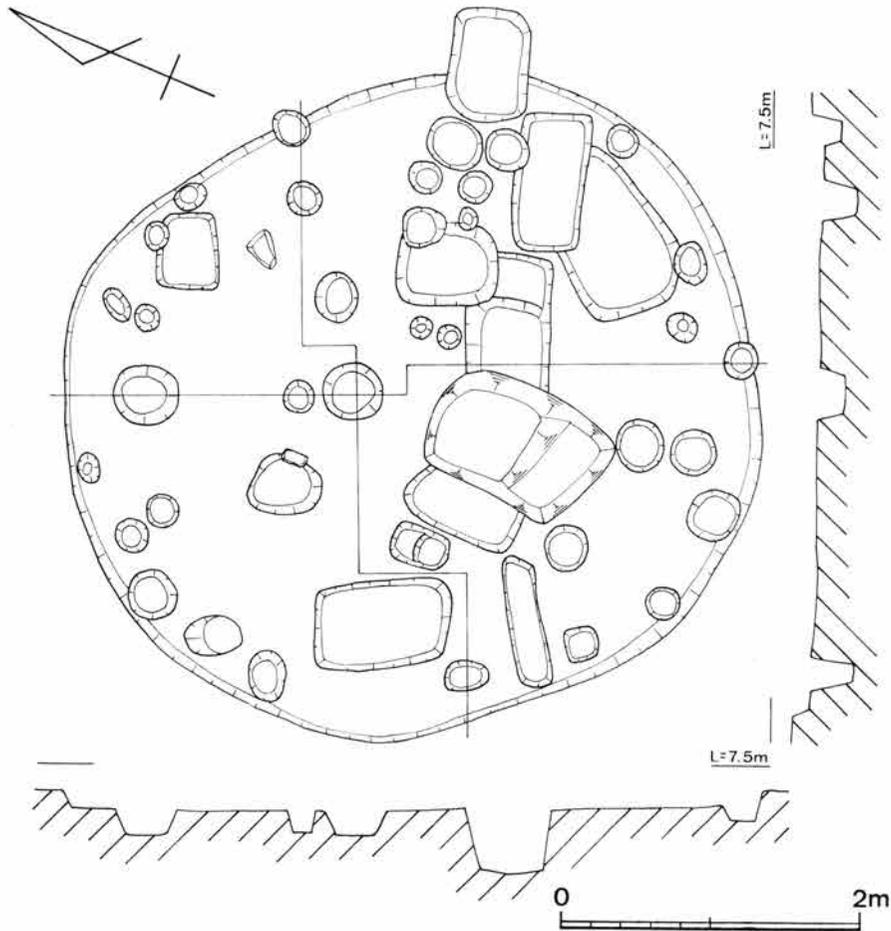
ど確認されず、若干のピットが存在したのみであった。他の大部分の遺構は縄文時代のものと考えられる。

B地区からは縄文時代と考えられる2基の住居跡と古墳時代の住居跡1基が検出され、また、A地区と同様に多数のピット群が存在した。

上記の各種遺構を発掘する間をぬって、各々の遺構の平面・断面・遺物出土状況等の写真撮影や実測図を作成し、昭和56年3月31日に現地調査を終了した。

4. 検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、重複したり後世の掘削等による攪乱をうけており、決して良好な状態ではなかったが、11基の住居跡と炉跡・ピット群が検出された。以下各々の遺



第4図 6号住居跡実測図

構について若干ふれておく。

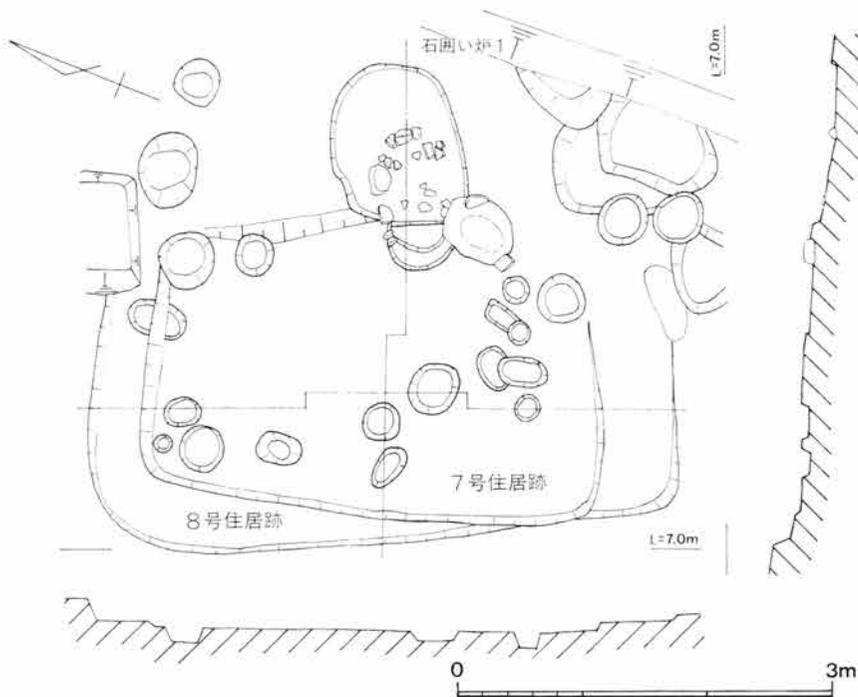
縄文時代遺構

6号住居跡（第4図）

この住居跡は、A地区のほぼ中央で発見されたものであり、東西4.7m・南北4.4mの平面が円形を呈する竪穴式住居跡である。側壁は大半が約20cmの残存高を測る。住居跡内には多数のピットが存在し、床面中央付近が若干凹んでいるが、ほぼ平坦に近い床面である。また、この住居跡では側壁に接するようにピットがめぐらされており、竪穴式住居跡の屋根をささえる柱穴と考えられる。住居跡内の床面は屋外部より堅く締っていた。住居跡内には炉跡は認められなかったが、中央やや南東に後世の攪乱層に切られたピットの埋土に若干の焼土がみられたことから、炉跡の存在した可能性は十分考えられる。この住居跡内からの出土遺物は少ない。床面からも小破片の縄文土器が出土しているが、時期を比定することは難しく、ここでは縄文時代後期と推定しておく。

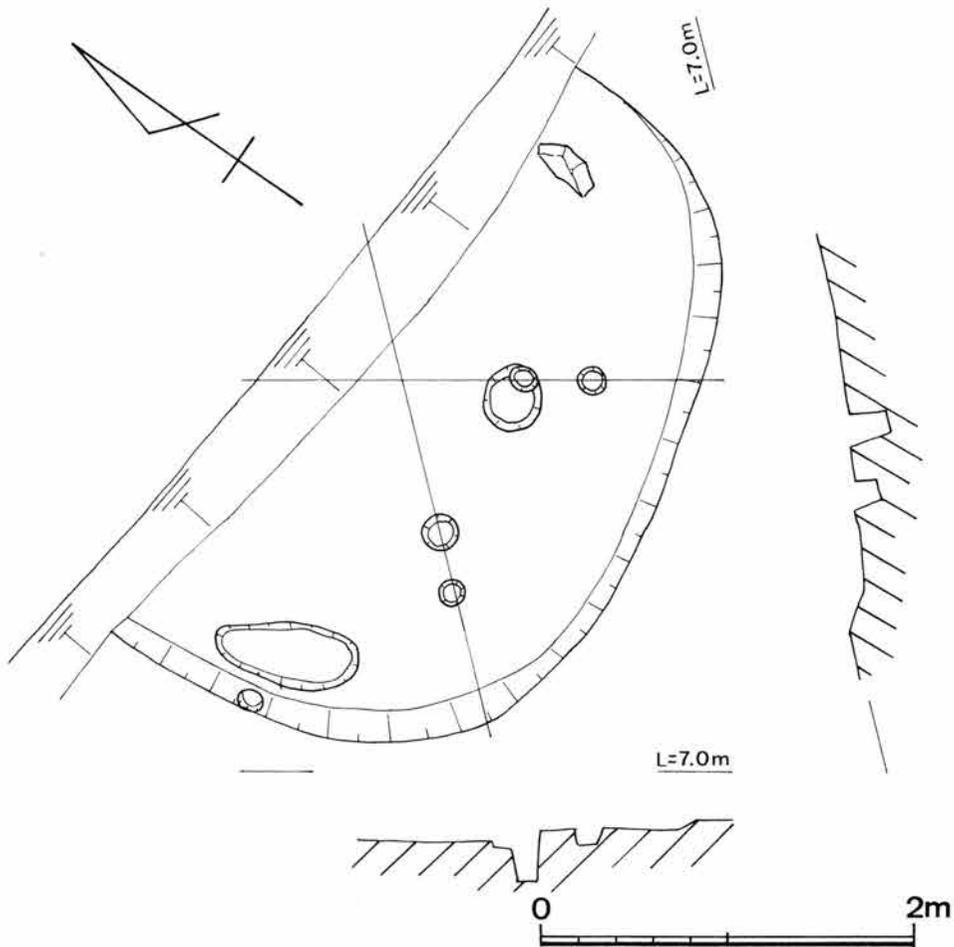
8号住居跡（第5図）

この住居跡は、A地区の南東で発見されたものである。平面は方形を呈するとみられる竪穴式住居跡で、東西約4.6mを計測する。住居跡の東半分は斜面にかかっておりすでに消滅



第5図 7号・8号住居跡実測図

していた。また、壁部を残している西半分もその大部分は7号住居跡と重複している。中央部には7号住居跡の掘削をまぬがれた石囲い炉1が存在した。この炉跡は3期に亘って営まれていた。第1期は東西1.2m・南北1mの規模で、配石を持たない炉跡である。第2期は規模を縮小し、西南方向にその中心を移動させ、周囲に配石を行った炉跡である。この炉跡内からは縄文時代後期初頭の土器片が出土した。炉跡をめぐる配石は10~20cm大の河原石を利用し、中には打ち割った河原石もみうけられた。第3期の炉跡はさらに規模を縮小し、南にその中心を移動している。一部に花崗岩等による配石も存在した。この炉跡は8号住居跡に伴う石囲い炉とみられる。住居跡内からは縄文時代後期の土器の他、切目石錘・硬玉製垂飾が出土している。



第6図 9号住居跡実測図

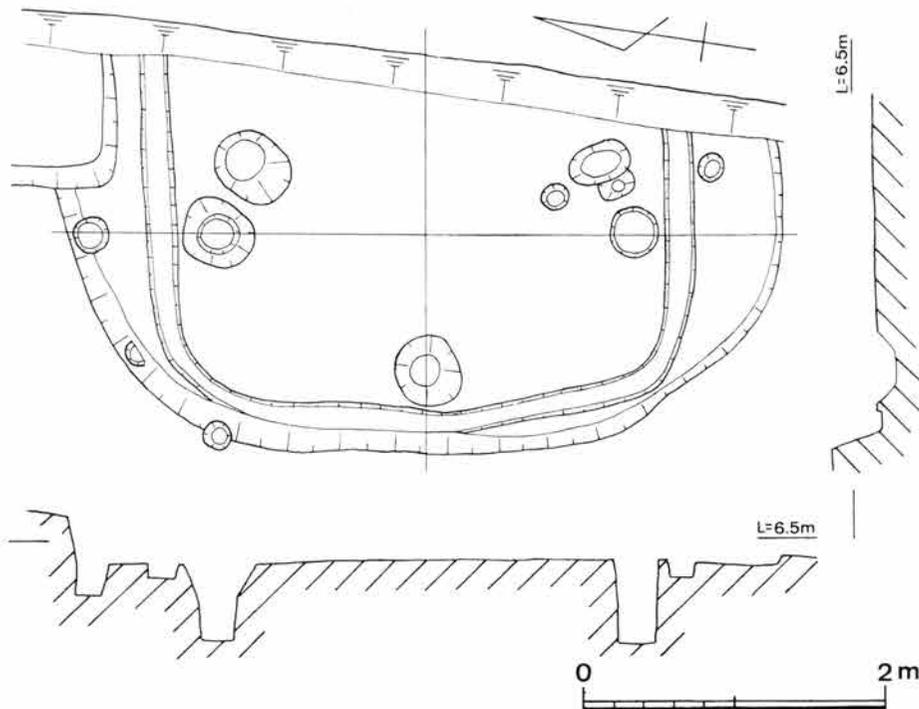
9号住居跡（第6図）

この住居跡は、B地区北端で検出された竪穴式住居跡である。住居跡の北半分は農業用排水溝のために掘り残した畦畔内に入っている。住居跡の平面形はさだかではないが、直径4mの円形もしくは隅丸方形を呈するとみられる。この住居跡の西壁は16cmの残存高を測るが、東壁部はその大部分が傾斜面にあたり残存していない。床面は壁面から中央部にかけて15cm近くも低まっており、大きく凹んだ状態であった。柱穴とみられるピットが4か所確認された。この柱穴はそのうち2つが主柱用とみられ、他の2つはこれら主柱を補助する柱用であったと推定される。

この住居跡内からの出土遺物は少量の縄文土器片と石鏃だけであった。縄文土器からの構築年代の推定はむずかしいが、縄文時代後期と考えられる。

10号住居跡（第7図）

この住居跡は、B地区の東部端において発見された隅丸方形の竪穴式住居跡である。壁は北西部の残りが最も良好で、約30cmの残存高を測るが、南壁では5cm程度の残存高でしかなかった。これは9号住居跡と同じく地山面が、南東方向に傾斜していることによる。床面は



第7図 10号住居跡実測図

平坦である。この住居跡には他の縄文時代住居跡と異なり、幅約20cmの溝をめぐらせている。溝は西壁部で壁面に接するが、北壁・南壁部では40～60cm近くも内側に入り込んでいる。柱穴も直径30cm・深さ60cmに達するものが4か所存在する。溝及び柱穴の状態から、この住居跡は一度その設計プランを変更している可能性が高いが、埋土等による変化は認めることができなかった。

今回の調査では炉跡の存在は確認されなかったが、調査終了後の昭和57年2月に、三河川新河道部掘削の立合調査で炉跡が発見された。この炉跡は床面をさらに20cm程度掘り込んだもので直径約60cmを測り、住居跡のほぼ中央に位置すると考えられる。この炉跡には配石等の遺構はみられなかったが、硬く焼き締った焼土の上に縄文時代後期の土器片が存在した。

石囲い炉跡2 (図版第8-(2))

この遺構は、A地区の中央南端部で発見された。炉跡は地山を15～20cm程度掘り込まれて存在したが、8号住居跡の石囲い炉跡と同様、3期に亘って使用されたとみられる。3期ともほぼ同一地点に存在するが、西から東方向にかけて中心部が若干移動したとみられる。これは炉跡の上面にあとから設置された花崗岩の配石状況から推定される。この炉跡内からの出土遺物は石鏃のみで、その他は認められず時期は不明である。この炉跡も当初は住居跡内に存在したものとみられるが、調査の段階で住居跡は確認されなかった。

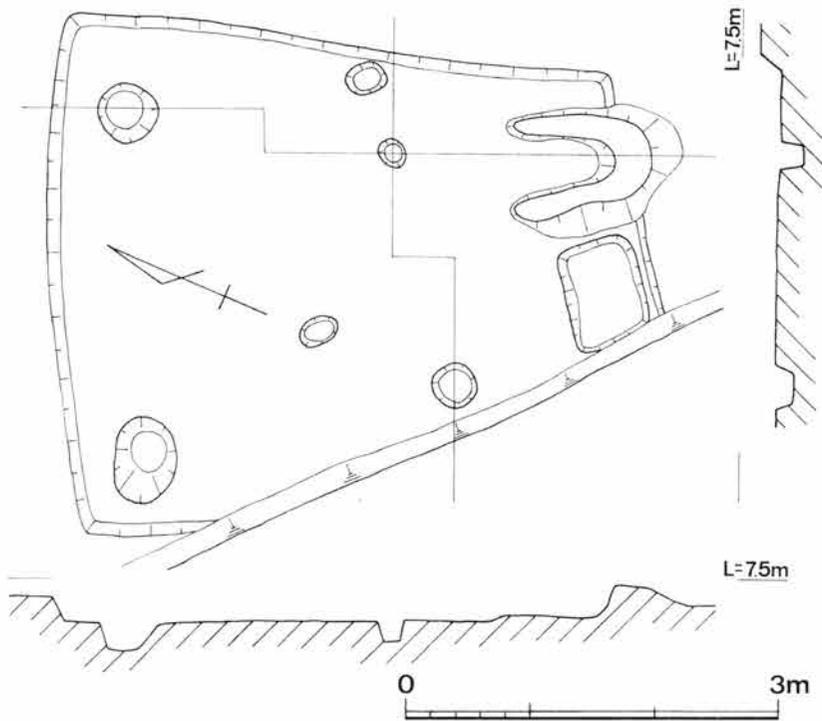
配石遺構 (図版第9-(1))

この遺構は、A地区6号住居跡の西部、ピット群の中で発見された遺構である。長径60cm・幅40cmの楕円形を呈するピットである。ピット内には花崗岩及び平坦面をもった河原石が、内壁の3方に存在した。内部に遺物は認められず、性格も不明である。

古墳時代遺構

1号住居跡 (第8図)

この住居跡は、A地区の中央部西端で検出された方形の堅穴式住居跡であり、竈を有する。平面形は長方形を呈し、東西4.4m・南北5.0mを計測する。床面の形状はほぼ平坦に調整されているが、中央部がやや低くなっている。竈は住居跡の南壁東端部に存在し、焚口は北方に開口している。竈内の底部は硬く焼け締っており、その上部には灰層がうすく広がっていた。また、焼土塊も多数含まれており、竈の上部施設が崩落したものと考えられる。竈の西側には貯蔵穴とみられる方形の浅いピットが存在し、内部より壺の一部とみられる土師器片が出土した。住居跡内中央西部には直径約30cmの範囲で焼土が認められ、炉跡とみられる。この住居跡内の埋土中から縄文土器・石器等の他に土師器、床面上から須恵器の杯身(第24図10)が出土している。これらの出土遺物等から、古墳時代後期初頭の住居跡と推定される。



第8図 1号住居跡実測図

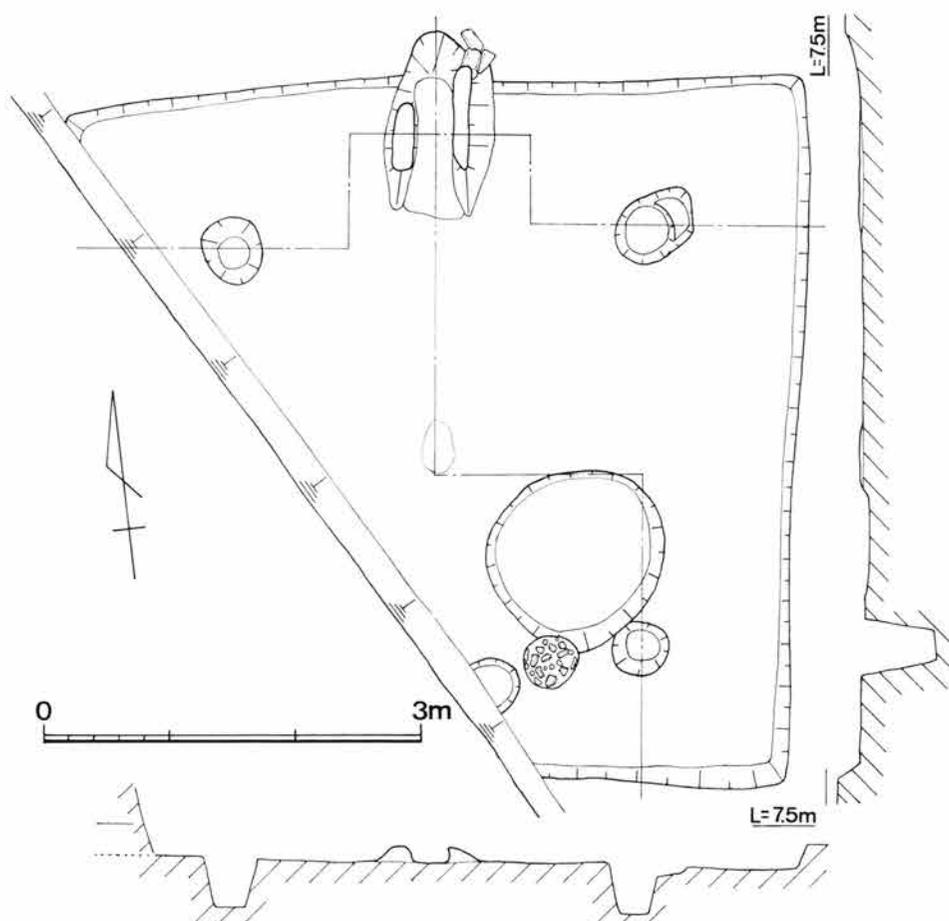
2号住居跡 (第9図)

この住居跡は、A地区西北端で検出した住居跡で、今回検出した住居跡中で最大規模のものである。住居跡の一边は6.5mの正方形を呈する竪穴式住居跡である。主軸はほぼ南北を示し、北壁の中央部に竈をもつ。床面は平坦であり硬く締っている。床面より直径約40cm・深さ40~50cmのしっかりした柱穴を3か所検出した。竈の中軸線上で住居跡の中央部には灰跡も存在した。竈はその煙導部が住居跡外に約40cm突出しており、竈は床面を形成後に粘土を貼り付けて構築している。内部はかなり焼けており、底面は硬く焼け締っている。また、内部には灰及び炭が認められた。

出土遺物は、縄文時代の遺物が多数を占めるが、竈内から小型壺・高杯、竈の西側からは完形の土師器壺がある。これらの遺物から見て、この住居跡は古墳時代後期に比定される。

3号・5号住居跡 (第10図)

この住居跡は、A地区北部2号住居跡の東側に位置し、西壁は2号住居跡にその一部を切られている。3号住居跡は東西3.8m・南北3.4mの方形の竪穴式住居跡である。また、この



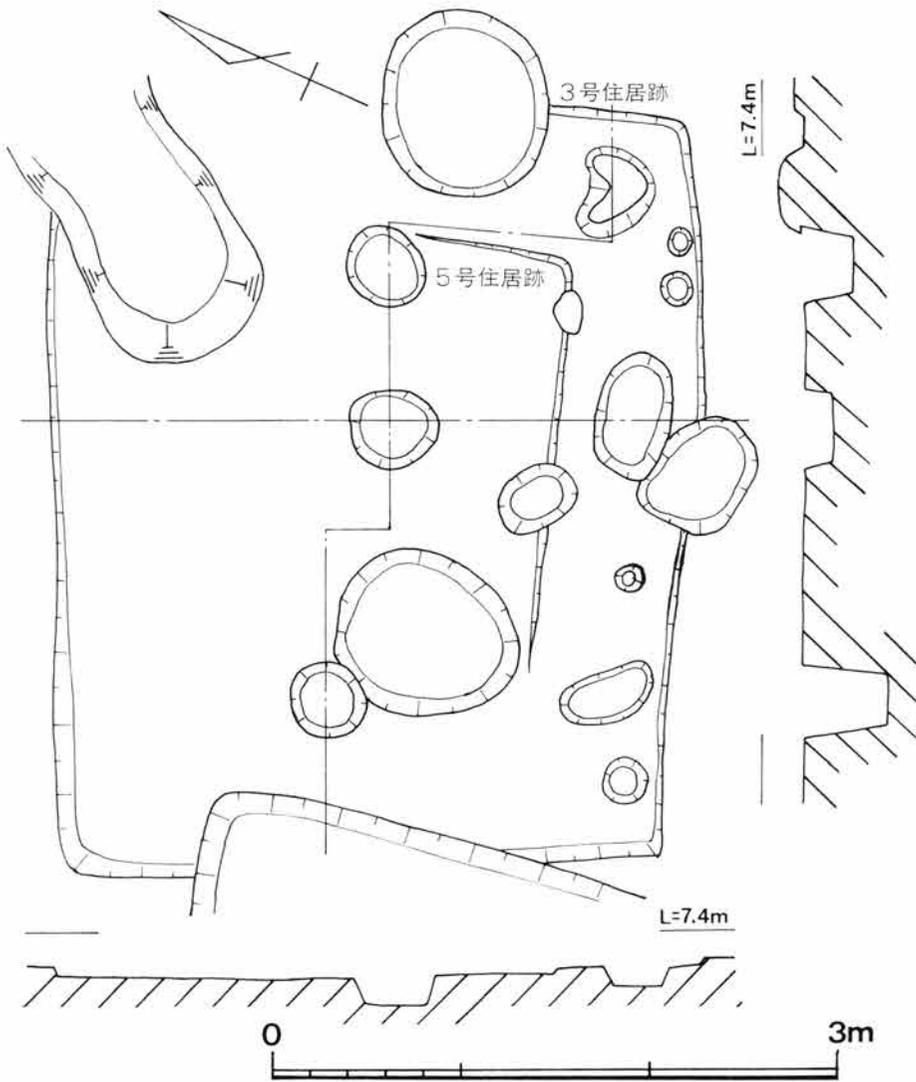
第9図 2号住居跡実測図

3号住居跡を切る状態で5号住居跡が存在するが、南壁及び東壁の一部を残すのみで、後世の削平により他の部分は失われていた。この両住居跡は共に南壁の東端部に竈をもっており、1号住居跡と同様の竈の在り方を示している。両者の竈は完全な形を残しておらず、焼土塊が残っていたことから竈と推定されたものである。住居跡の床面は平坦であり、硬く締っている。3号・5号の両住居跡とも壁面の残存高は、最も良く残している所でも10cmに満たない。

出土遺物は3号住居跡からの土師器甕（第24図1～5）のみである。ともに古墳時代後期の住居跡である。

4号住居跡（第11図）

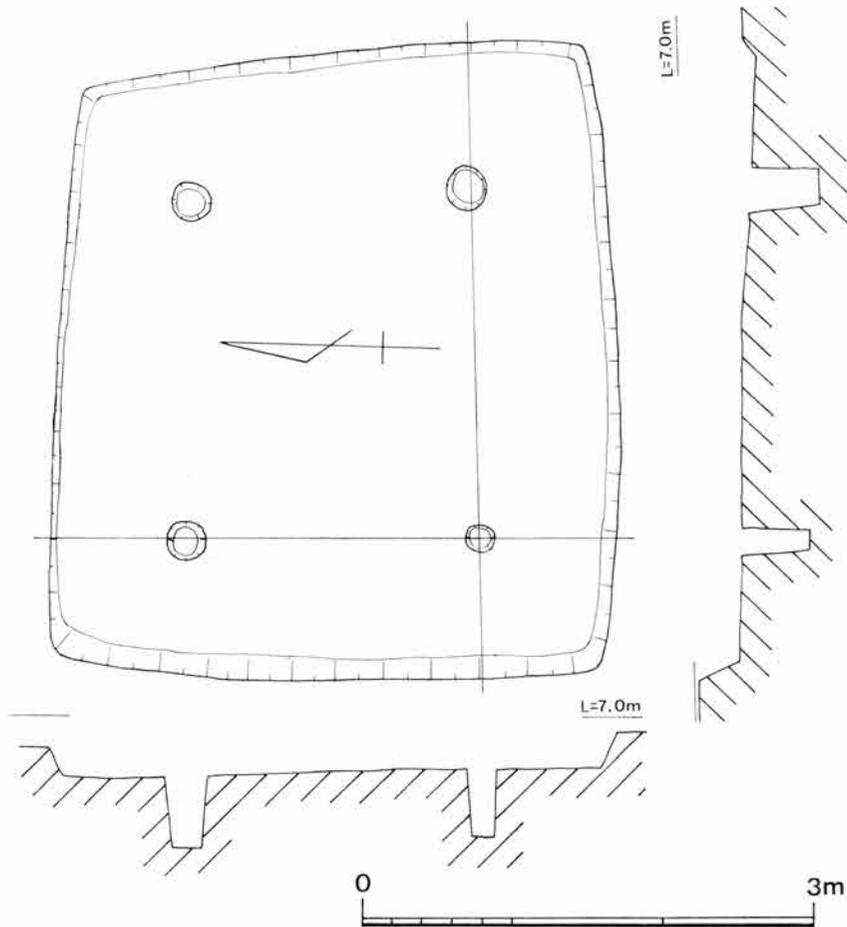
この住居跡は、A地区東北部で検出した東西4.2m・南北3.6mの方形の竪穴式住居跡であ



第10図 3号・5号住居跡実測図

る。住居跡は傾斜地に造られており、西半分は地山を掘り込み、東半分は縄文時代遺物包含層を掘り込んで平坦面を作り出している。

住居跡内には直径約30cm・深さ約45cmの柱穴が4か所認められた。出土遺物は縄文時代の遺物ばかりが認められたが、住居跡内の埋土は他の縄文時代住居跡の埋土と異なり、古墳時代住居跡の埋土と同様の暗灰褐色粘質土であった。また、住居跡の平面プランからも縄文時代より古墳時代の住居跡とみるのが妥当と考える。この住居跡には先に述べてきた古墳時代住居跡に存在した竈はみられなかった。



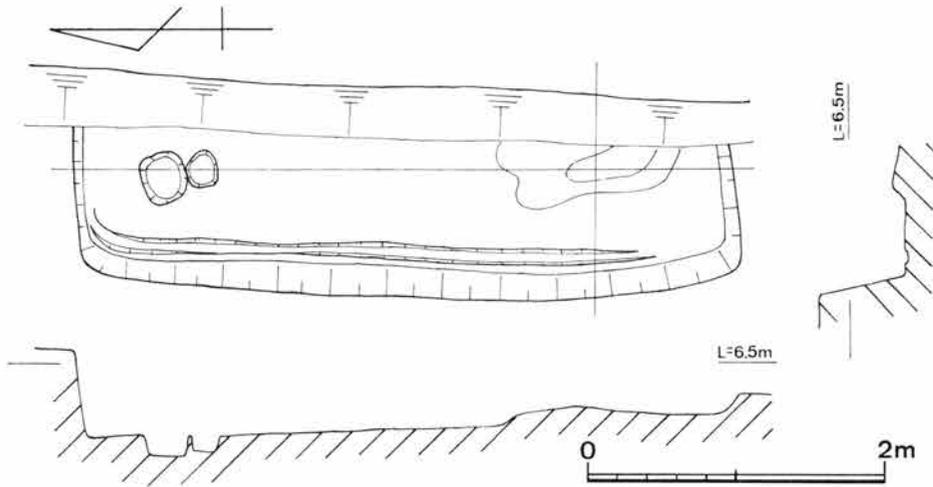
第11図 4号住居跡実測図

7号住居跡 (第5図)

この住居跡は、A地区南東で検出された8号住居跡と重複する、古墳時代の方形を呈する竪穴式住居跡である。南北3.7mを計測するが、東西方向は8号住居跡と同様に、東半分は削平されており規模は不明である。床面は8号住居跡の床面をさらに掘り下げて、平坦に仕上げている。8号住居跡の石囲い炉1は、この7号住居跡床面よりさらに下部にあったため、削平をまぬがれていた。多数存在するピットは、その大部分が古墳時代とみられ、ほとんどが10~15cm程度の浅い掘り込みである。

この住居跡からは、土師器片が少量出土したが、ピット内からの遺物の出土は認められなかった。古墳時代後期に属するものと推定される。

11号住居跡 (第12図)



第12図 11号住居跡実測図

この住居跡は、B地区で発見された南北4.4mの方形を呈する竪穴式住居跡と考えられる。各々の住居跡のうち最も良好に壁部を残しており、残存高は約60cmを測った。住居跡は西壁と北壁・南壁の一部が判明したのみである。西壁下の床面には溝が検出されたが、深さは床面とほとんど変わらず、西北・西南の両コーナー部から東側には溝は検出されなかった。西北コーナー近くで柱穴が確認されたが西南では存在しなかった。しかし、西南部では硬く締った焼土塊が存在し、竈が存在した可能性がある。B地区の西側は三河川の旧流路であり、この11号住居跡及び10号住居跡は、三河川の増水で削平を受けたとみられる。

これまでに述べてきた代表的な遺構の他に、多数のピット及び土壇状遺構がA・Bの両地区に存在するが、各遺構内から出土する遺物は小破片の縄文土器及び石器である。また、遺物の出土する遺構も全体からみれば少数であった。埋土の状況からほとんどの遺構は縄文時代のもものと推察される。多数のピット群は住居跡に伴う柱穴とみられるが、後世の掘削で上部施設はことごとく破壊されたものとみられ、判然としない。

5. 出土遺物

今回の発掘調査で発見された遺物は、整理箱で50箱にも及ぶ。出土遺物は縄文時代前期・中期・後期・晩期、弥生時代後期、古墳時代後期の3時代6期に亘っている。中でも縄文時代に属する遺物が最も多く、全体の80%近くを占める。古墳時代に属する遺物は、住居跡内から良好な状態で出土したが、それ以外にはほとんどみうけられなかった。弥生時代に属する遺物はごく少量であった。以下出土遺物について略述してみよう。

縄文土器

縄文土器は調査地の全域に認められたが、特にA地区のE区からF区にかけての出土が顕著であった。このE区～F区は旧三河川の河岸斜面であり、後世の掘削の影響を受けなかったものとみられる。縄文土器では後期のものが最も多量に出土し、次いで中期・晩期の土器がそれに続き、前期の土器は少量である。

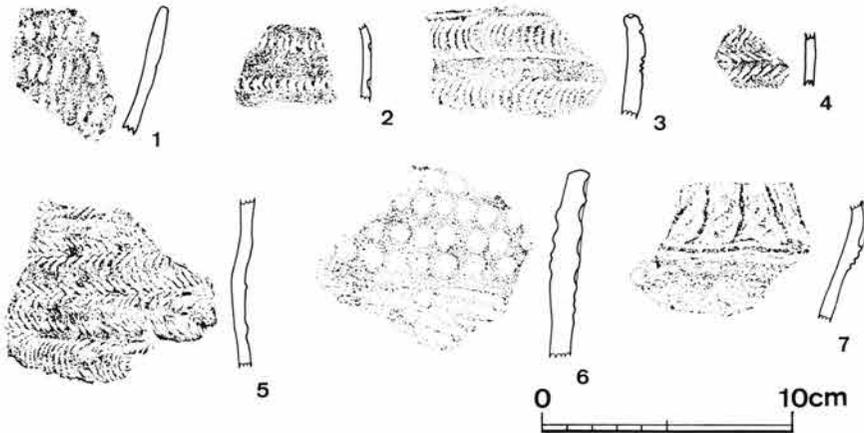
縄文時代前期 (第13図)

厚さ3mm～6mmの薄い土器で、表裏ともていねいに調整されている。(1)は口縁部に3列のD字状の爪形文を有し、表裏とも磨滅が進むが、裏面には条痕も一部認められる。(2)はC字状に右に開く爪形文をもつ。(3)は7mmの厚さをもつ器壁で、表裏とも綺麗に調整し条痕は認められない。口縁部に爪形文を有する。爪形文は細い平行沈線内に連続するC字形爪形文である。(4・5)は4mm～6mmの薄い器壁に連続C字形爪形文を有する土器である。これまでの土器はすべて北白川下層Ⅰ・Ⅱ式に比定される。(6)は厚さ8mm前後で表裏に粗い条痕を有し、口縁部に指圧痕状の凸凹をもつ。彦崎ZⅠ式土器とみられる。(7)は厚さ4mm前後の器壁で、縄文地(LR)^(注7)に竹管状の施文具によるみみずばれ状の細い凸帯を施す。特殊凸帯文とも呼ばれ、北白川下層Ⅲ式に比定される土器である。この形式は、丹後地方においては、丹後町平遺跡^(注8)において、平ZⅠ式に比定される。

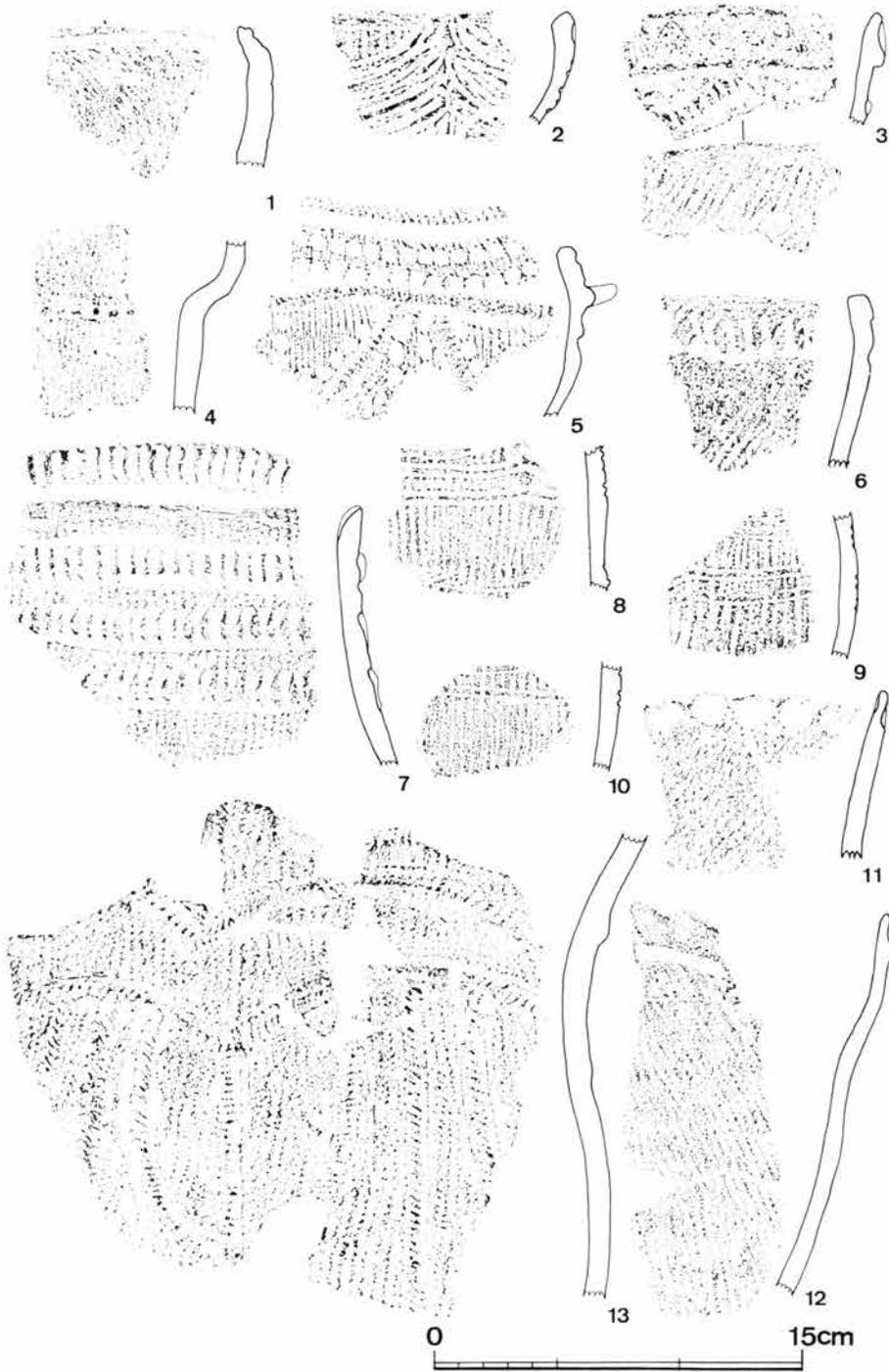
縄文時代中期 (第14・15図)

中期に属する土器は比較的まとまって出土している。

(第14図3)は口縁外面を肥厚させ、貝殻圧痕文を施す。表裏とも地文に堅くて撚りのかかりにくい繊維をもって施文している。また、刻目をもった凸帯を有する。(4)はキャリパー状口縁



第13図 前期縄文土器拓影



第14図 中期縄文土器拓影

をもつ深鉢とみられる。口縁部と胴部上端に押し引きの竹管文を有する。これらの土器は船元^(注9)I式とみられる。(5)は地文に条痕文を有し、口縁部に半円形の庇状の凸帯をめぐらせる。竹管文を有する凸帯と円棒による刺突文をもつ(6・7)は厚さ1cm前後・器表全体に粗い縄文を縦走させる。口縁部には太くて大きな爪形文を施文する。この爪形文は貼り付け凸帯上に施文する場合もある。(8)は(6・7)と同様であるが、貼り付け凸帯上に竹管による爪形文を有する。凸帯は直線と半円状の波状曲線等がみられる。これらの土器は船元II式の土器とみられる。(1)は厚さ1cm前後・口縁端部をやや内傾させ、竹管状工具による沈線と凸帯とからなっている。(8~10)は文様構成が(2)と似るが、文様は竹管文だけで構成される。浅い平行沈線は弧状を呈する。これらは船元III式とみられる。(11・12)は堅い撚りの縄文を全面に施す。口縁部は若干肥厚させ、指先にてつまみ上げる。縄文時代中期とみられるが、形式等は不明である。

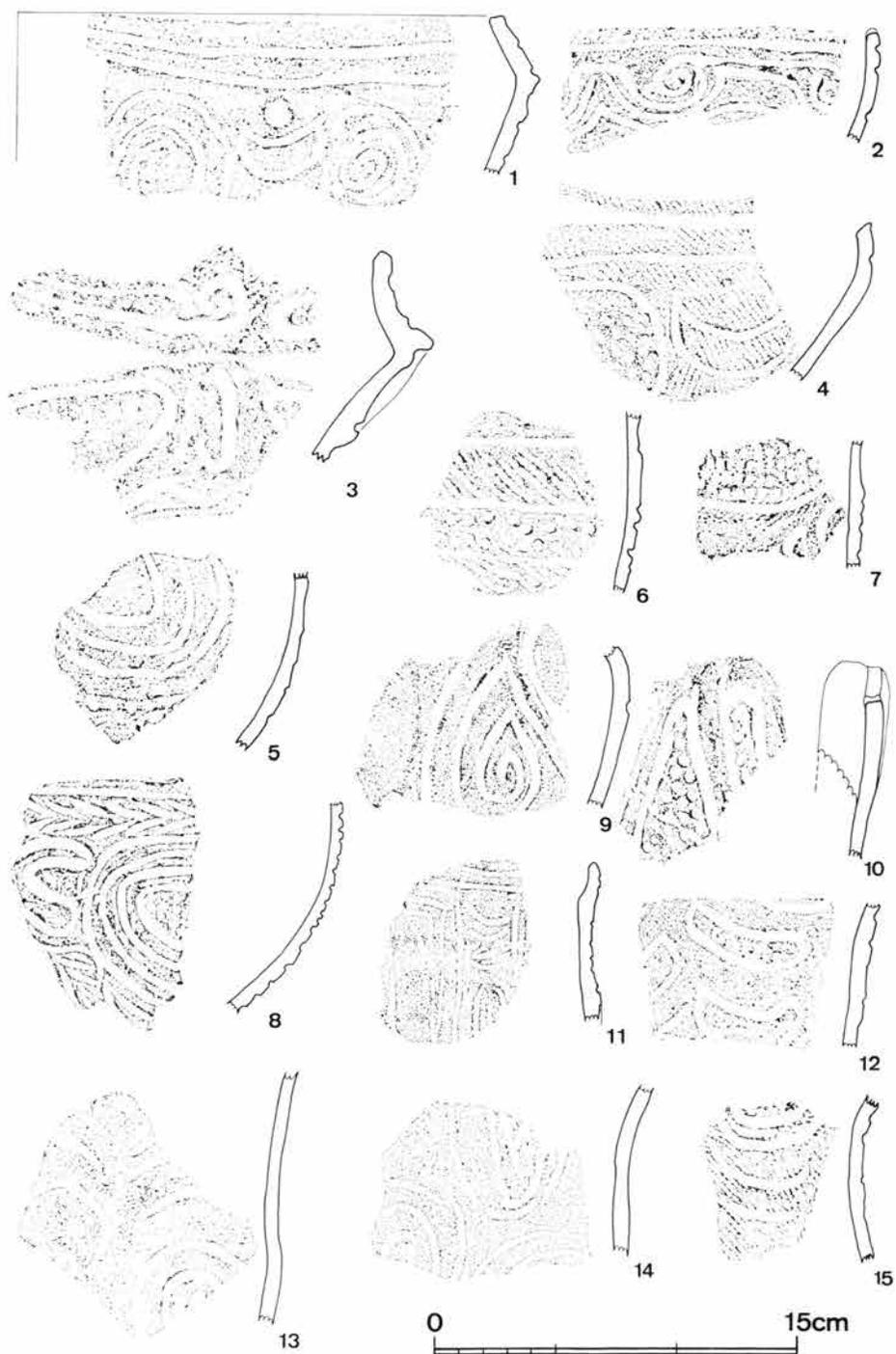
(第15図2)は浅鉢とみられ、4条の沈線による直線・波状・渦巻といった3種の施文を行っている。沈線文の外側にはRLの縄文を残している。(3・4・6)は沈線によって画された部分に刺突文を施すもので、その部分の縄文は磨消している。(3)は内湾する口縁部に低い波頂部をもち、その部分に渦巻文・波頂部直下の胴部には「J」字状の沈線文も認められる。(4・15)では沈線に画された部分の縄文を磨消し刺突を行うが、刺突をもたない部分は縄文を施文する。(1)は口縁部を内湾させる鉢で、縄文は認められないが、文様パターンから(2)と同様とみられる。

(5)は太い沈線で曲線を描き、沈線内に刺突をもつ深鉢とみられる。(9・10)は大きな波状口縁をもつ深鉢の波頂部である。太い沈線による渦巻文(9)と、沈線によって画された部分に刺突を行ったもの(10)がある。それぞれ口縁部は内湾させ、(10)では内湾部にも同様の施文を行う。(8)は沈線による曲線文・綾杉文などが全面に施文されている。(11~14)は深鉢の器形で、(11)は細い沈線にて懸垂文と短線文を施す。他の(12~14)は太い沈線にて曲線・弧線・渦巻文を表現する。これらの土器の多くは器壁の厚さが8mm前後である。

縄文時代後期 (第16・17図)

今回の調査において出土した縄文土器中のほぼ2分の1近くを占める。

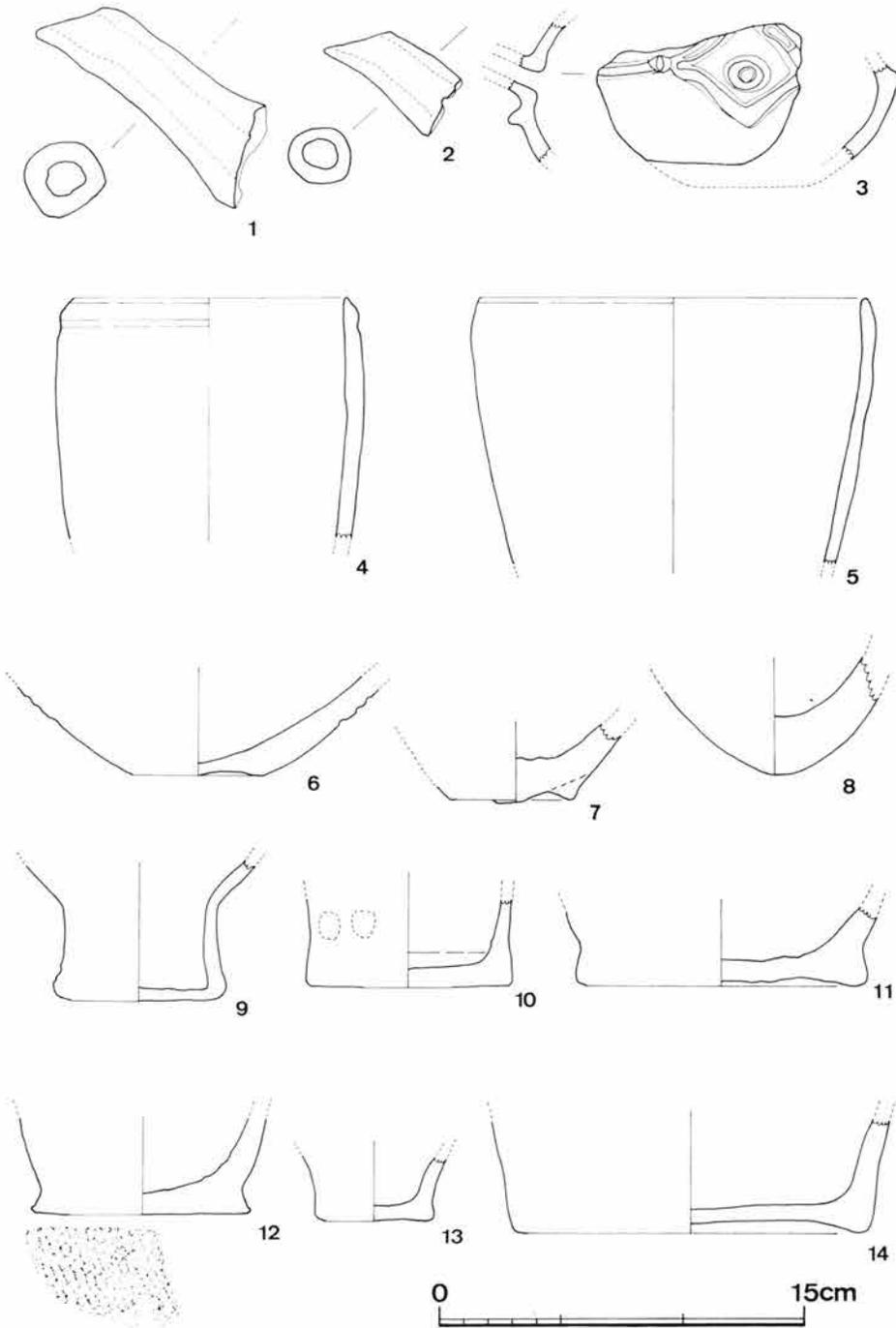
無文系の土器としては(第16図1, 第17図4・5)がある。(1)は肥厚させた口縁の一部に粘土紐を貼り付け、その部分に刺突と沈線を施文する深鉢である。(4・5)は胴部に屈曲がなく、口縁部は外反せず口縁端部は丸く、やや内湾させている。(4)は口縁部に1条の沈線的な浅い凹みをめぐらす。



第15図 中期縄文土器拓影



第16図 後期(1~6)・晩期(7~10)縄文土器拓影



第 17 図 後期縄文土器・土器底部実測図

条痕文系土器には(第16図2～6)がある。(2～5)はすべて内外面とも貝殻条痕が認められる。(2・4・5)は黒褐色を呈し、器壁も厚さ6mm前後で比較的薄い。口縁部に巻貝先端部による3条の平行沈線をめぐらせ、巻貝の腹縁部を器面に押し付け、さらに約60度程回転施文する扇状圧痕文を施す。この沈線と扇状圧痕文は胴部にも同様に施文される。(3)は厚手の器壁をもち、厚さ8mmで口縁端部は内湾しない。表裏面とも貝殻条痕文が認められ、口縁部表側に2条・裏側に1条の沈線を施す。沈線の幅は広く、巻貝の基部により施文したとみられ、沈線内に条痕が認められた。また2条の沈線の一部に少量の粘土塊を貼り付け、さらに巻貝腹縁をたんに押し付けた楕円の腹縁圧痕を施文する。(8)は胴部のくびれる平縁形の深鉢である。外面全体に粗い条痕が認められる。頸部の条痕は横位・頸部下半は斜位に施文されている。

縄文時代後期の土器にはこれら鉢・深鉢の他に注口土器(第17図1～3)がある。(1)は注口部のみで長さ10cmと長く、直径約3cmで基部から先端までほとんど厚味に変化は無い。注口部外面はヘラ削りで調整している。(2)は(1)と同様注口部のみである。注ぎ口が若干下がる形態で、先端にかけて細くなる。外面はヘラ削りで調整している。(3)は注口部を欠いた注口土器の胴部片である。沈線文系に属するとみられる。胴部推定直径約13cmとみられ、橙褐色を呈する。注口部の基部には凸帯により方形に区画され、横位の隅には刻目を有する粘土粒を貼り付けている。胴部の中央には凸帯を作り出すかのように2条の沈線を施文している。器表面はていねいに研磨されている。

以上、縄文時代後期の土器に関して述べてきた。後期初頭の土器として磨消縄文手法を特徴とする中津式土器^(注10)は出土しなかったが、この中津式土器に先行するとみられる平CⅢ式土器(第15図5・8～10)が出土している。この土器は無文地に沈線文・刺突文・綾杉文等を施文している。平CⅢ式土器は中期末と考えられているが、後期的様相も強いことから、今回出土の土器は後期初頭に含められる可能性も残している。

出土した土器中に後期中葉に属する遺物はほとんどみうけられなかった。

後期後葉の土器としては、縄文を用いず凹線と器壁研磨・巻貝圧痕文にて装飾された土器(第16図2～6)がある。この土器は施文等から宮滝式土器^(注11)とみられる。

今回調査分のうち、後期の土器においては後期後葉に位置するものが多数を占めている。

縄文時代晩期(第16図7～10)

この時期の土器は、晩期の段階でも終末段階にあたる。刻目をもった凸帯文を有する土器が主で、滋賀里V式とみられる。表面は平滑に仕上げ、口縁端部直下に一条の貼り付け凸帯をめぐらす。

土器底部 (第17図 6~14)

当遺跡において、時期的に細別することはできなかったが、土器の底部も多数出土している。多くは後期に属するものとみられる。底部は断面の形状によって7種に分けられる。平底のもの(6)・丸底のもの(8)・丸底の底部に粘土紐を高台状に貼り付けたもの(7)・底面から3~4cm上まではほぼ垂直に立ち上がり、それ以後著しく外反するもの(9・10)・底面の少し上で内側へ著しくくびれ、そのくびれ部の径は底部径より小さく、その後少し外方へ開くもの(11・12)・底面の少し上で内側へくびれるが、ほぼ底径と同じでその後少し外方向へ開くもの(13)・底面よりすぐ外方に開き、わずかに内曲するもの(14)もある。また、(12)はその底部に網代圧痕が認められた。圧痕は「経」の条と「緯」の条が共に「2本起え・2本潜り・1本送り」であった。網代原体の幅は3mm前後である。

石器

調査地全域から多数の石器が出土した。出土石器のうち石鏃・石錘等の狩猟具・漁撈具類が大半を占めている。石斧・石錐・敲石等も出土したが、石器全体からみれば少量である。

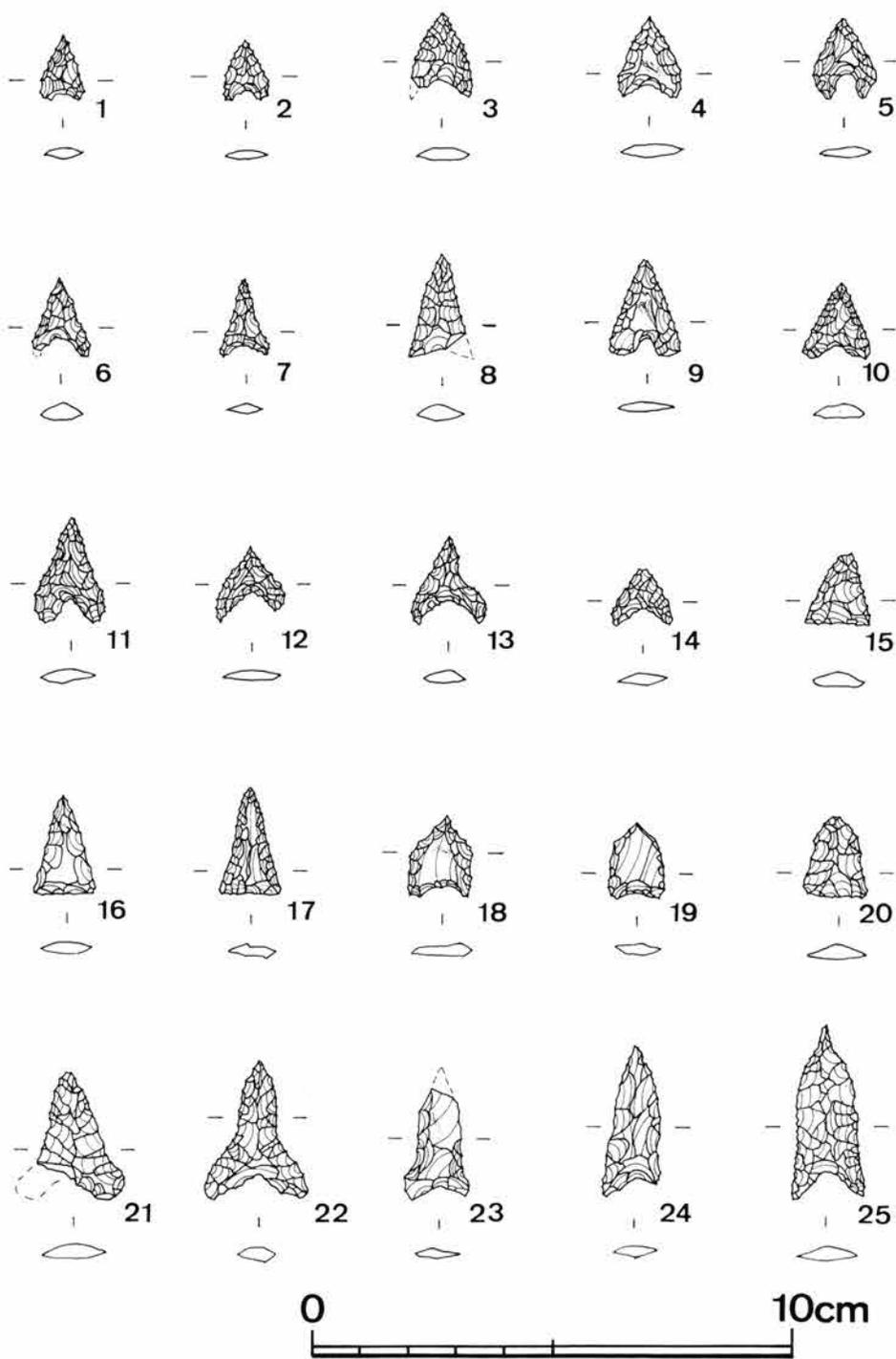
石 鏃 (第18図)

石鏃は総数152個にもものぼった。出土地点は調査地全域に亘っており、すべてが打製石鏃である。使用された石材はサヌカイトに類似するが全体的に白っぽく、二上山に産するサヌカイトよりも丹後半島に産する安山岩に類似する。その他の石材としてチャート・黒耀石の使用が認められる。石鏃基部の形状により、凹基無茎鏃(1~14・18・19・21~25)と平基無茎鏃(15~17, 20)に大別される。全長1cm前後のものから3.5cm前後のものまであり、重量・大きさともに様々である。凹基無茎式石鏃中には、いわゆる^(E12)鍛形鏃とみられるもの(9)や五角形鏃^(E13)(18~20, 23~25)が存在する。黒耀石製石鏃は(10)の1点のみ出土している。また、石鏃は基端部の形状も様々に変化をもつ。基端部に最大幅をもつもの(6~8・10)、基端部がやや狭くなるもの(1~5・11~14)、基端部が極端に外方へ突出するもの(21・22)が認められる。時期的にはすべて縄文時代に属する。後期から晩期にかけての五角形鏃や早期的な鍛形鏃の他は、その形状での時期決定はむずかしい。

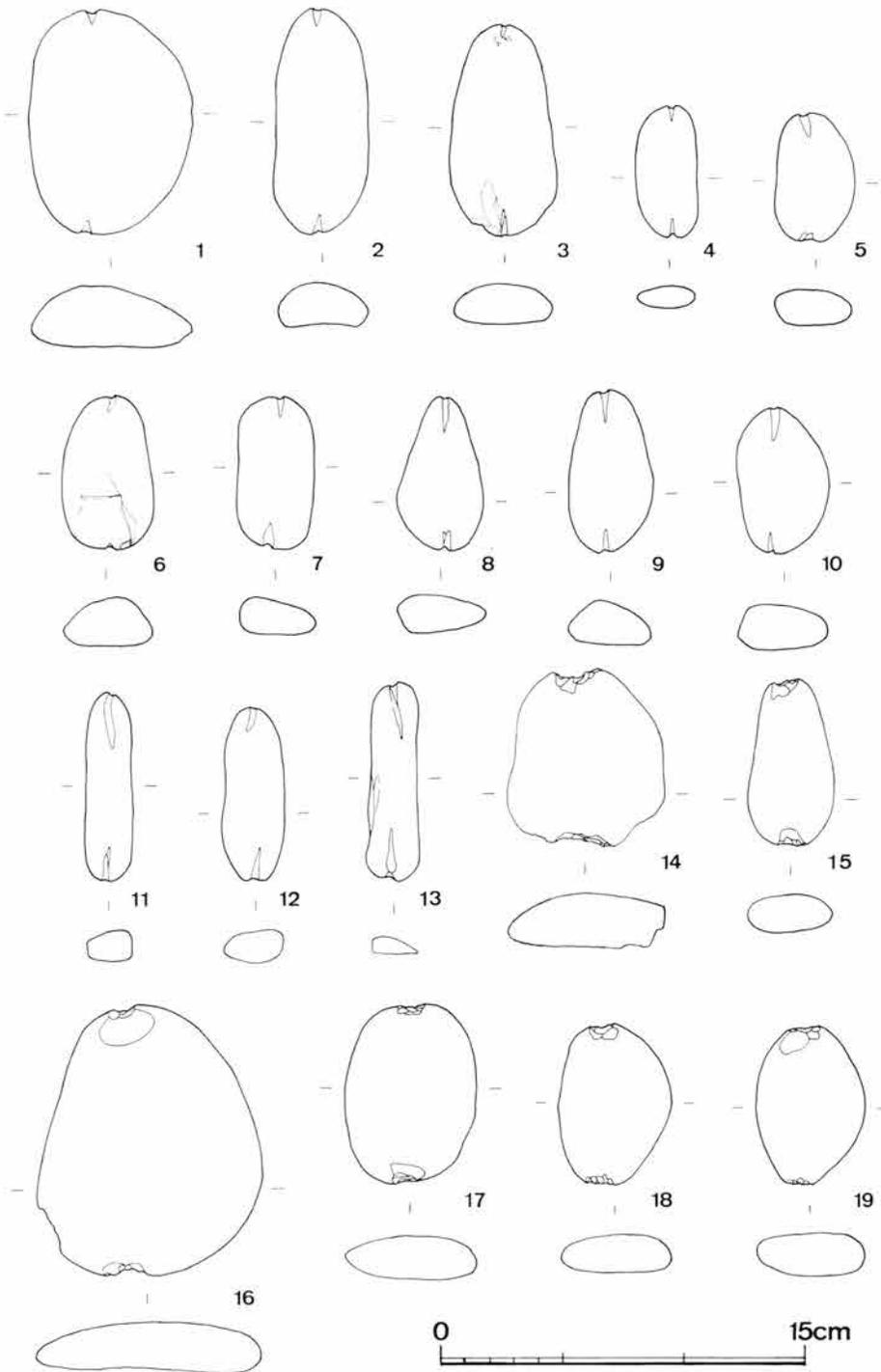
石 錘 (第19図)

総計82点が調査地全域から出土した。石錘は切目石錘(44点)と礫石錘(38点)に大別される。形状は縦長のもの・楕円形のもの、断面形も円形・扁平と各種認められるが、規格の統一性は認められない。石材も付近で採集される適当な河原石を利用している。

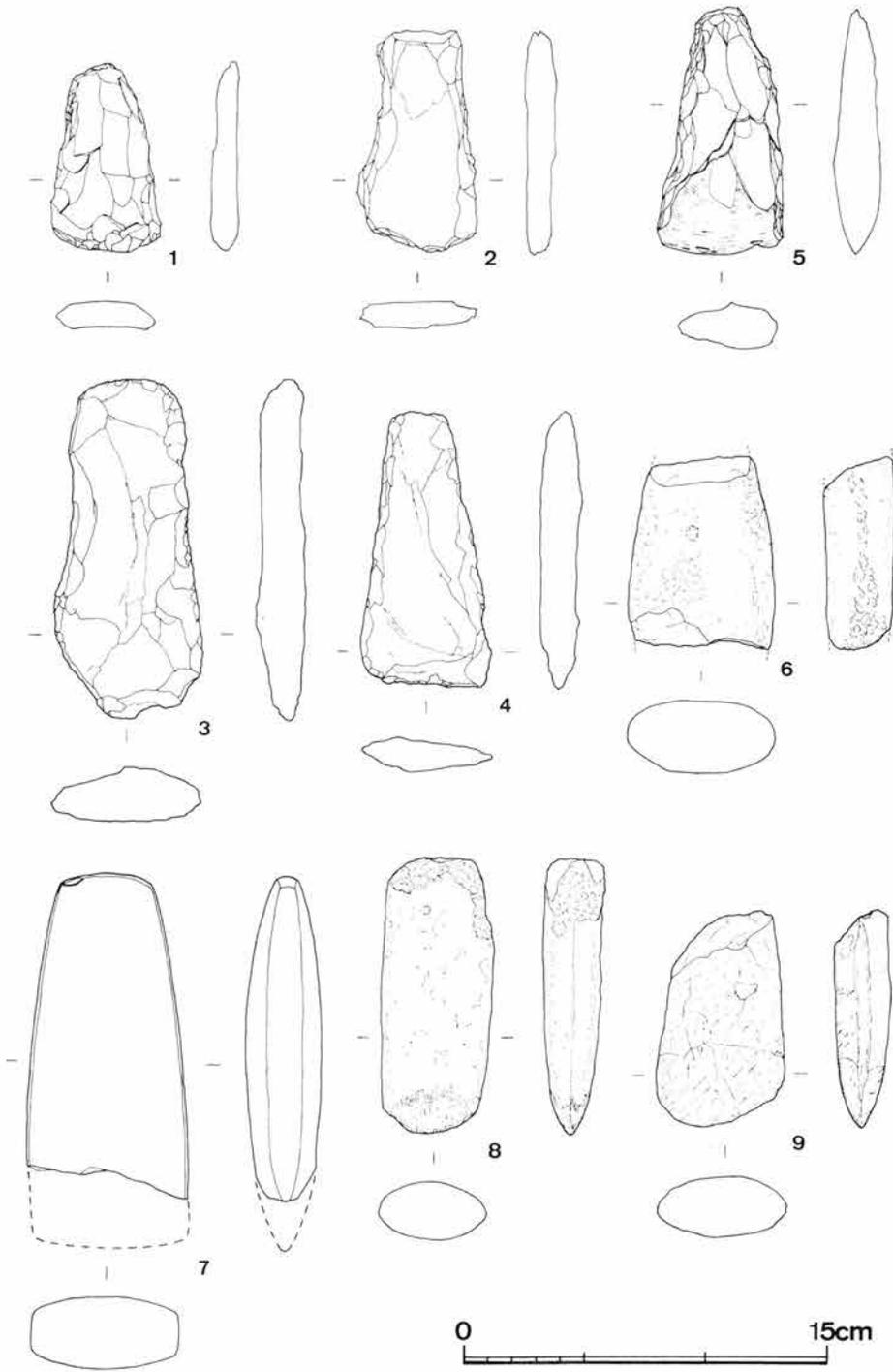
切目石錘はすべて長軸方向に縄掛け用の細い切り込みを両端に施している。重量も50~70g・100~120g近辺の重量をもつものが多数を占める。最も軽いもので20g(3)・最も重いも



第18図 打製石鏃実測図



第19図 切目石錘・礫石錘実測図



第20図 打製石斧・磨製石斧実測図

ので340 g (1)がある。形状等から漁網錘や釣りの錘として使用されたとみられる。

礫石錘は、長軸の両端を切目のかわりに数回の打撃を加えて抉りを作り出して縄掛けをつけている。軽いもので35 g・最も重いもので325 gを測った。礫石錘の一部は漁網用錘として利用されたとみられるが、大部分は編物を編む際のおもりとしての用途も考えられよう。

石 斧 (第20図)

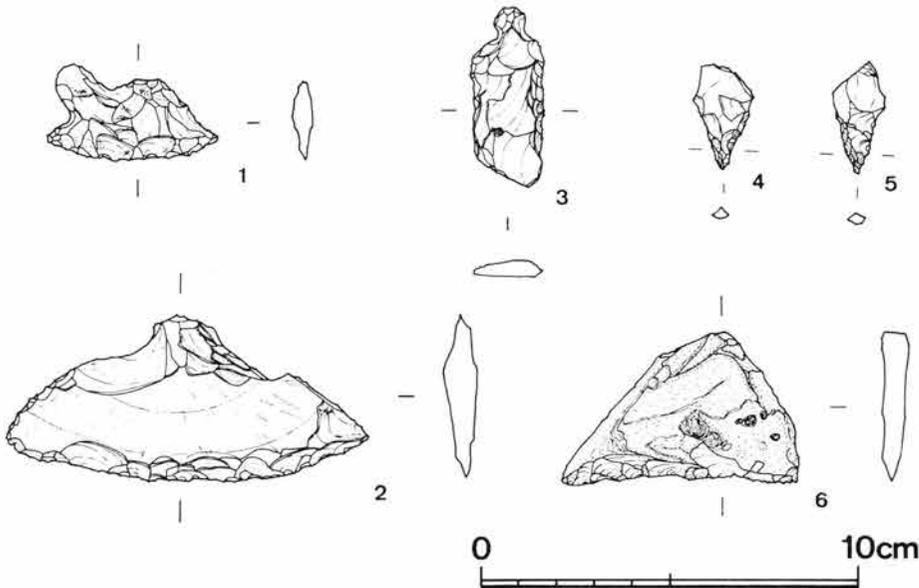
石斧は、土掘り具とみられる打製石斧と、工具とみられる磨製石斧に大別できる。

打製石斧は4点(1～4)出土した。それらは各所から散発的に出土したにすぎない。形態は短冊形(3)以外すべて撥形であり、概して扁平である。(1・2)において刃部に若干の使用痕が認められた他は、明確な使用痕は認められなかった。(1・2)の中央部両側縁に着柄時の擦痕が一部認められた。

磨製石斧(5～9)は8点出土した。打製石斧と同様散発的な出土である。(5)は刃部にのみ研磨を施す局部磨製石斧である。(6)は断面形が楕円形を呈し、頭部が細い乳棒状磨製石斧とみられる。(7)は定角式磨製石斧である。石斧の表裏両面と側面の間に稜を作り、器表全面を研磨している。

石 匙 (第21図1～3)

石匙は4点が出土した。これら石匙は横型と縦型の2形態に分けられる。



第 21 図 石匙・石錘・削器実測図

(1・2)はいずれも貝殻状の横長剥片を利用している。(2)は打瘤をとどめる上端につまみ部を作り出す。(1)は打瘤部と異なり左サイドにつまみを作り出す。両者はともに残りの周縁に細部加工を施す。特に外湾する刃部の調整は丹念である。(3)は右サイドに直線的な刃部・頂部には小さなつまみを作り出す。先端部に細部加工は認められず、第1次加工のまま残している。

石 錐 (第21図4・5)

石錐は2点出土している。両者とも不定形な剥片の一端に両端から細部加工調整して錐部を作り出している。使用石材は安山岩(4)・サヌカイト(5)である。使用による損耗は認められない。

削 器 (第21図6)

削器は2点出土している。(6)はサヌカイト製であり、表面に自然面を残す。横剥ぎの剥片を利用し、裏面には頂部に打瘤を残す。打瘤部と相対する先端に刃部を作り出す。刃部の調整は表裏両面から行っている。

敲石・磨石 (第22図)

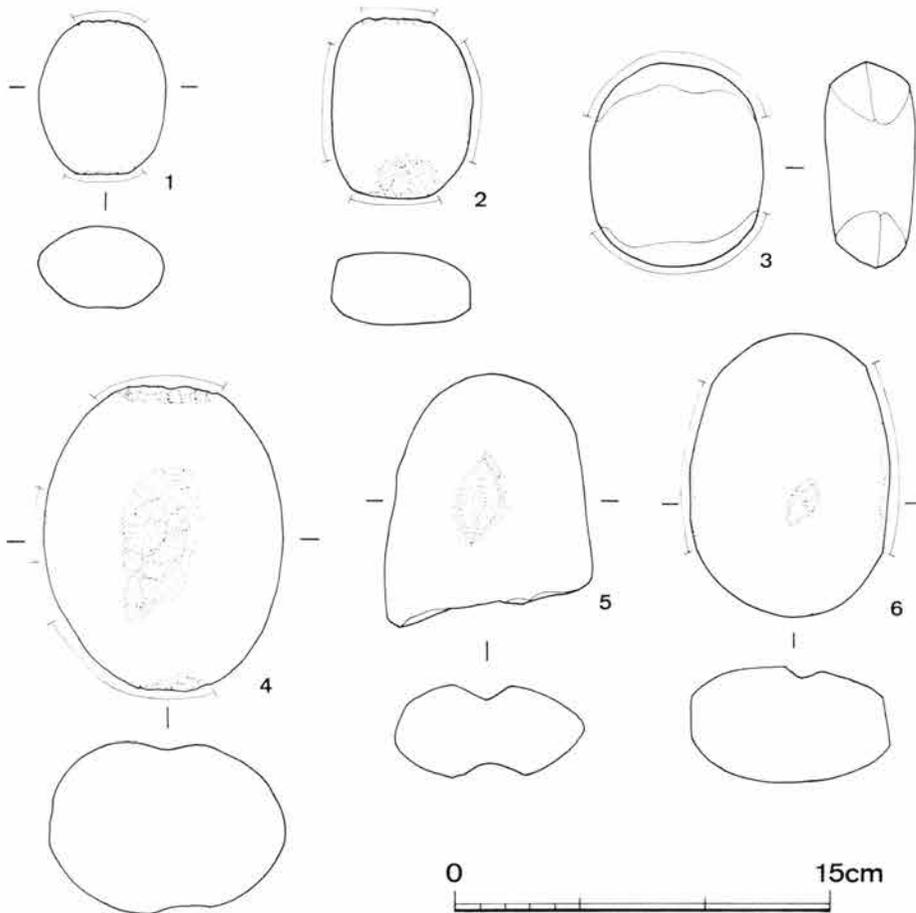
円礫・角礫を利用し、周縁部に敲打痕を認めるものを敲石(1・2・4～6)とした。敲石は12点が出土している。(1・2)は小型の円礫を利用し、周縁に敲打痕を認める。(4・6)は大型の円礫を利用し、周縁部に敲打痕を認める。この敲石には上・下両面中央に敲打痕を有する凹みをもつ。(5)は上下両面ともに敲打による凹みをもつ。3分の1程度を欠失しており、周縁部に明瞭な敲打痕は認められないが、ここでは一応敲石に含んでおく。使用石材は(5)の砂岩を除き、他はすべて花崗岩製であった。敲石は大型・小型に大別でき、大型の敲石にのみ上・下両面に凹みをもっている。

(3)は磨石である。周縁部に敲打痕は認められない。小型の円礫を利用し、長軸方向の両端には過度の使用により、あたかも面取りを行ったような磨耗痕が明瞭に認められる。

土製品・石製品 (第23図)

土製品としては、土偶と円錐形土製品がある。土偶(1)は2号住居跡の埋土中より出土した。頭部顔面は丸みをもった逆三角形を呈し、幅4.8cm・高さ3.2cmを測る。表面は平滑に仕上げている。眉・鼻・耳の各部分は粘土を貼り付けて形造り、耳部にはヘラで切り込みを入れ、つり上がった両眼と小さな口はヘラで表現している。この土偶は縄文時代中期末～後期のものとみられる。

円錐形土製品(2)は、やや内湾する直径4cmの平坦面を平滑に仕上げ、刺突文を円形にめぐらせる。錘部表面には燃糸文を施文しているとみられる。また、この錘部外表面の2分の1



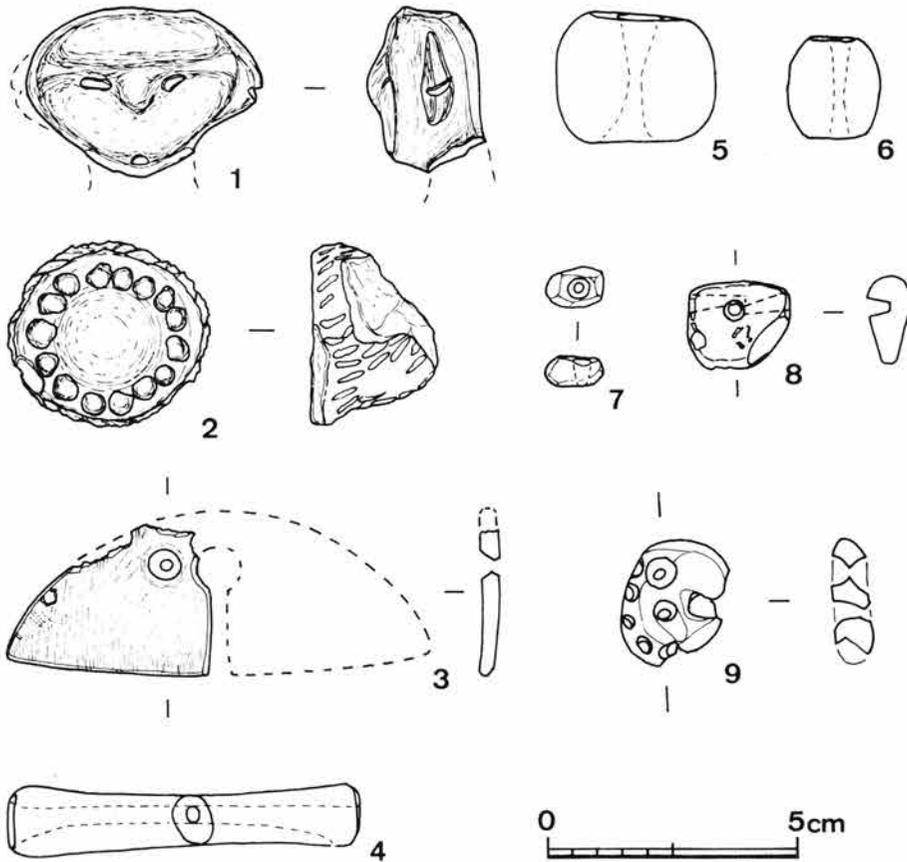
第22図 敲石・磨石実測図

近くは剥離痕が認められることから、元来滑車形の耳栓であったとも推察される。4号住居跡の埋土中から出土したが、縄文時代の遺物であろう。

石製品としては塊状耳飾(3)・垂飾(4～8)・多数の穿孔をもつ石(9)が出土している。

塊状耳飾(3)は、元来半月形を呈したものとみられる。厚さは約5mmの扁平なもので、約2分の1の破片である。完形品の場合、中央部やや上方に直径1cm程度の円孔をもうけ、下端から円孔まで切り込みを行ったものと推定される。使用法としては耳たぶに穴をあけ、耳飾を挿入してぶら下げたとみられる。一度破損したとみられ、切損部近くに補修孔を穿っている。

(4)は長さ7cmの管状を呈する石製品である。断面は楕円形を呈し、両端より穿孔する。両端の穿孔部で相対する一方向に紐等による擦痕磨耗が認められる。(5)はメノウ製の丸玉、(6)



第23図 土製品・石製品実測図

は硬玉製の管玉で胴部がふくらむナツメ状を呈する。(7)は硬玉製の臼玉で、中央で一方から穿孔を行っている。(8)は硬玉製管玉で(6)と同様に両端穿孔を行うが、穿孔に失敗したとみられ、さらに平坦面の一方から再度穿孔している。(4～8)はすべて表面を研磨しており、垂飾品とみられる。

(9)は扁平な丸石に上・下両端及び片方からの穿孔を行っている。用途は不明である。

古墳時代の遺物

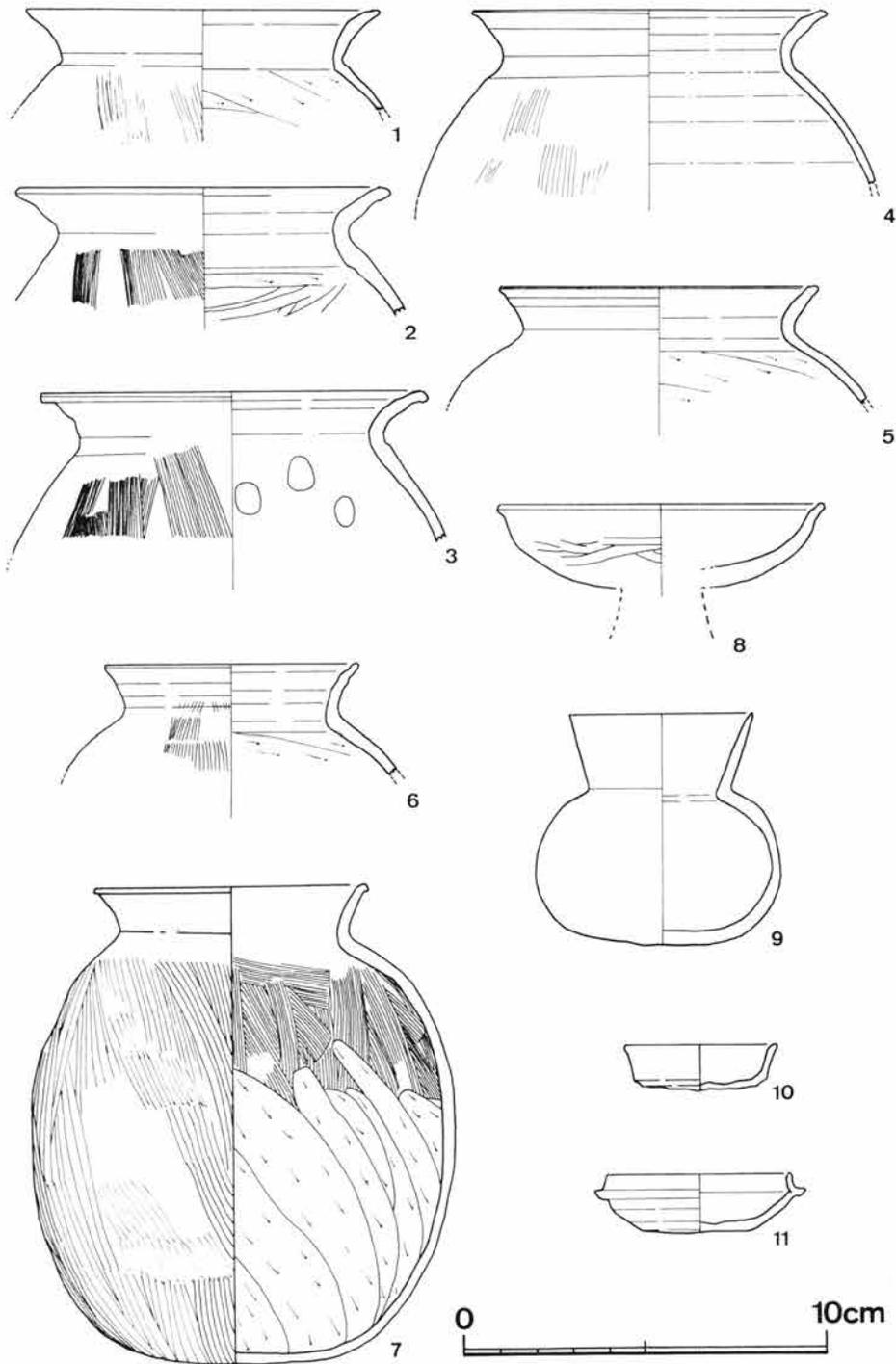
当遺跡からは古墳時代の遺物として土師器・須恵器が出土した。包含層中からは少量の破片が出土したが、大部分は住居跡に伴うものである。

土師器

甕・小型丸底壺・高坏がある。

甕 (第24図1～7)

(1～7)は「く」字状に短く外反する口縁をもつ。体部表面はハケ目調整を施し、裏面



第24図 土師器・須恵器実測図

はヘラ削りを行い器壁を薄く仕上げる。口縁部は肥厚させ、内側には横ナデによる稜線が顕著に残っている。また、内面には輪積み痕を残す。(7)の甕は体部内面の上部にはハケ目を残し、下部はヘラ削りを行う。内面上部にハケ目を残す甕は他の甕より若干新しい段階に比定されるものとみられる。

小型丸底壺 (第24図9)

やや胴張りの球形胴部に若干のふくらみをもつ口縁がつく。口縁直径に対して胴部直径が大きく、口縁端部は細く尖るようにして終わる。器壁は全体的に厚く仕上げている。

高 環 (第24図8)

環部は浅く底部から口縁にかけては稜を作らず、なだらかな丸味をもつ。口縁端部はつまみ上げて外反させる。

須恵器

環 (第24図10・11)

須恵器の出土は当遺跡では少なく、わずかに数個体分である。

環では立ち上がりのあるもの(10)・ないもの(11)とがある。(10)の立ち上がりは低く、内傾する。受け部は水平に近く、端部がやや上向きになる。底部にはヘラ起こし痕をそのまま残している。(11)は直径8.5cmで口縁部は底部から直線的に外上方へのび、端部は丸味をもつ。底部は上方でヘラ削りを行うが、底面にはヘラ起こし痕をとどめている。

上にみてきた遺物はすべて住居跡底面から出土したものである。(1～5)は3号住居跡、(6～9)は2号住居跡、(10)は1号住居跡、(11)は11号住居跡からの出土である。これらの遺物は6世紀後半～7世紀初頭の時期とみられる。

6. ま と め

今回の発掘調査面積はわずか300㎡にすぎない。その中で発見された遺構は、縄文時代と古墳時代の住居跡・石囲い炉跡・多数のピット群等である。出土遺物は縄文時代遺物が大部分を占めている。遺構・遺物の遺存状況は、遺跡の立地が由良川の氾濫原であるにもかかわらず良好であった。以下、今回の調査で明らかになった点及び今後の課題についてふれておきたい。

当遺跡の調査で判明した事柄について列記すると、

- (1) 縄文時代の住居跡4基、古墳時代の住居跡7基を検出した。また、縄文時代に属する多数の遺構(ピット群・配石遺構・石囲い炉跡等)を検出したことから、当遺跡は縄文時代から古墳時代に亘る複合遺跡であることが判明した。
- (2) 遺跡は調査地の西方に広がり、遺構・遺物等が良好に遺存しているものとみられる。

- (3) 縄文時代前期～晩期、古墳時代後期の時期が主体をなす遺跡であるが、縄文時代早期と弥生時代の存在する可能性も認められる。
- (4) 出土遺物の大半は縄文土器が占め、石器等の出土にも目を見張るものがある。土師器・須恵器の出土量は少量であった。
- (5) 由良川下流域において、桑飼下遺跡とともに縄文時代を代表する遺跡である。古墳時代においても桑飼下遺跡・高川原遺跡・由良川中流域の青野遺跡と同様、7世紀前後の集落跡としても重要な遺跡である。

以上の点が今回の調査で判明した三河宮の下遺跡の概要である。

由良川下流域には多数の縄文時代遺跡が河底中に存在している。桑飼下遺跡の調査により、これら河底遺跡は元来自然堤防上に立地していたと推定され、永年の由良川の浸食作用で河底に水没したものと判明した。由良川流域に河岸段丘や洪積台地の発達が弱いことから、集落立地の場として必然的に自然堤防部に目をつけられたとみられる。調査前は三河宮の下遺跡も自然堤防上に存在するとみられたが、地山層は明黄褐色粘質土であったことから、遺跡本来の立地は比高差の少ない舌状台地上であった。現在、洪積台地上の遺跡は、由良川流域では三河宮の下遺跡のみではあるが、調査前の状況は明らかに自然堤防を呈していたことから、他の場所においても三河宮の下遺跡と同様に、洪積台地上に遺跡が存在する可能性を考慮すべきものと思う。

京都府北部で発見された縄文時代の住居跡は、本遺跡で4遺跡目である。網野町浜詰遺跡^(注15)・夜久野町菖蒲池遺跡^(注16)・舞鶴市桑飼下遺跡で縄文時代の住居跡が確認されている。桑飼下遺跡からは、各住居跡のプランは不明であるが、48基にのぼる炉跡が検出されている。各炉跡相互の関係から同一時期に存在した住居跡は10基以上と推定された。また、可能性が低いとされながらも、中央広場的な空間の存在が報告されている。

三河宮の下遺跡の住居跡は円形・方形の2形態で、計4基が調査地の東部で検出された。この住居跡はほぼ縄文時代後期とみられ、同一時期ないし近接する時期に存在したと推定される。調査地の西部には多数のピットが存在するが、確実な住居跡の痕跡は認められなかった。この調査地西部の地域を、仮に中央広場的な性格をもつ空間とすると、検出した縄文時代の住居跡は集落東端部の住居跡とみられる。舌状に延びる洪積台地の先端が調査地にあたることからも、集落東端とみることは妥当と考えられる。遺跡は調査地の西側に広がることから、中央広場的空間をもつ円形集落が想定されるが、狭長な舌状台地といった立地条件から、南側の由良川方向に開口する馬蹄形を呈する集落の可能性も考えられる。集落の形態及び機能を把握するには、調査地以西での実体究明が必要といえよう。また、三河川以東の自然堤

防部でも、舌状台地及び遺跡の有無の確認が必要であろう。

古墳時代における三河宮の下遺跡の集落は、立地条件等からみて集落形態は縄文時代集落と大きく異なることはないとみられる。ただ経済基盤としての主体が、古墳時代の段階では縄文時代の狩猟・漁撈・採集から稲作農耕に変革している。この三河宮の下遺跡では由良川の後背湿地が稲作農耕の適地として利用されたことが十分うかがわれる。

古墳時代の住居跡には、その形態の上で竈を持つもの（4基）と持たないもの（1基）・不明（2基）に分けられる。当地域において住居内に作り付けの竈が出現するのは、古墳時代後期段階に入ってからである。各住居跡の構築年代にほとんど差が認められないことから、竈をもたない4号住居跡が他の住居跡より先行すると考えられる。竈を有する4基の住居跡中、竈を東南隅にもつもの3基・北壁中央部にもつもの1基の2形態が認められる。竈の差異によって直ちに住居跡の構築順序を決定することは困難である。4基の住居跡から出土した遺物も時期差は殆ど認められない。古墳時代住居跡の下限年代については、須恵器において宝珠つまみ等の出土が認められない。また、受け部をもつ須恵器杯も終末形式であることから、7世紀初頭段階に比定される。これらのことから、三河宮の下遺跡の古墳時代住居跡は、6世紀末～7世紀初頭の年代があたえられよう。

この時期の由良川の流域の集落遺跡には、下流域では桑飼下遺跡・高川原遺跡、中流域では綾部市青野遺跡^(注17)・同綾中廃寺^(注18)・同久田山遺跡^(注19)が存在する。低位丘陵上に立地する久田山遺跡の他は、すべて由良川自然堤防か河川敷に存在しており、ほぼ7世紀前半の遺跡である。久田山遺跡は6世紀末～7世紀前半の年代が考えられており、当三河宮の下遺跡とはほぼ同一時期の遺跡であり、ともに他の4遺跡より若干先行する時期の集落と推定される。

出土遺物については、個々について略述してきたが、縄文土器・石器・土師器・須恵器とバラエティーに富んでいる。そのうち大多数を占めるのが縄文時代の遺物である。縄文土器に関する限り、前期初頭から晩期末までの長期にわたる遺物が出土したことは注目されよう。

現在、由良川流域には福知山市武者ヶ谷遺跡^(注20)出土の縄文時代創草期土器以外に、前期以前の遺物は確認されていない。

今回の調査では、明確に縄文時代早期に属する遺物は出土しなかった。しかし、石鏃において鍬形鏃や黒耀石製石鏃がみられたことから、三河宮の下遺跡は縄文時代早期まで遡る可能性がある。

三河宮の下遺跡では、前期初頭の北白川下層Ⅰ式段階から確実に存在することが判明した。この北白川下層Ⅰ式の土器が出土した由良川下流域の遺跡に、舞鶴市八雲遺跡^(注21)がある。河底遺跡であり三河宮の下遺跡と同様に、縄文時代後期までの土器片が多数出土している。同じ

北白川下層Ⅰ式でも爪形文（3連のD字形）の施文から、三河宮の下遺跡より1段階古く位置づけられる。この他地頭遺跡から北白川下層Ⅰ式土器が出土する。当遺跡でみられる彦崎ⅡⅠ式・北白川下層Ⅲ式の各土器は、上記遺跡ではみられず、由良川流域では初見の土器形式である。丹後及び周辺地域では平遺跡・福井県鳥浜貝塚に出土が認められる。

縄文時代中期の段階に入ると前半では船元式・後半では里木Ⅱ式土器が、近畿北部の地域に広く分布する。当遺跡では船元式土器が中期の土器の大部分を占めている。里木Ⅱ式土器は少量しか出土していない。由良川流域で船元式土器が出土する遺跡には、八雲遺跡・地頭遺跡がある。里木Ⅱ式段階では八雲遺跡の他に高津江遺跡が加わる。丹後地域では平遺跡・柳谷口遺跡^(注23)・新樋越川河底遺跡^(注24)がある。

縄文時代後期の段階に入ると、西日本では中津式が始まる。由良川流域では八雲遺跡・桑飼下遺跡・地頭遺跡がある。丹後地域では平遺跡・浜詰遺跡で中津式土器が出土している。中葉段階では桑飼下遺跡から津雲A式・彦崎KⅠ式土器が出土している。丹後においては平遺跡・浜詰遺跡・柳谷口遺跡がある。後葉段階では三河宮の下遺跡で宮滝式土器が出土したが、由良川流域ではこの段階以降の遺跡は存在しない。丹後では平遺跡・浜詰遺跡で宮滝式土器が出土している。

晩期の段階では、由良川流域では三河宮の下遺跡のみである。周辺地域では平遺跡・菖蒲池遺跡・大油子荒堀遺跡がみられる。

以上、由良川流域に分布する各遺跡をみてきたが、各遺跡から出土する土器の大部分は、三河宮の下遺跡出土の各形式土器に含まれる。由良川流域においては、この三河宮の下遺跡が最も早い段階で集落が営まれ、縄文時代の最終末まで連続と続き、弥生時代に移行する段階で三河宮の下遺跡は終息する。

次に出土遺物からみた縄文時代の三河宮の下遺跡の性格について、若干の考察を行ってみよう。

三河宮の下遺跡の出土遺物は土器と石器に大別できる。これらの出土遺物から当遺跡の経済基盤を、ある程度推測することができよう。

縄文時代の経済基盤は狩猟・漁撈・採集活動により成り立っている。石器についてみると、三河宮の下遺跡からは石鏃に代表される狩猟具の出土が著しい。また、切目石錘等の出土は由良川・三河川及び湖沼での網漁等を想定できよう。狩猟の対象物としては、桑飼下遺跡においてニホンジカ・イノシシ・キツネ・タヌキ等の捕獲が確認され、鳥類の捕獲も推定されている。当遺跡からも少量の獣骨片が出土したが、種を同定するまでに至っていない。桑飼下遺跡では狩猟具において石鏃の出土が圧倒的であることから、弓矢による狩猟が想定され

ている。当遺跡においても上記の各種動物が、弓矢による捕獲対象となったであろう。

次に漁撈活動においては、桑飼下遺跡でコイ科・アユ・スズキ・フグ類・その他の魚類が捕獲されている。これらの魚類は当遺跡に於いても網漁等で捕獲がなされていたことは、十分考えられる。

三河宮の下遺跡ではこれら狩猟・漁撈具が、出土石器中の大部分を占めている。桑飼下遺跡では出土石器のうち狩猟・漁撈具の占める割合は低く、打製石斧の出土が著しい。この事は三河宮の下遺跡の石器組成と大きく異なる。桑飼下遺跡では打製石斧の使用による、自然堤防上での根茎類の採集が推定された。打製石斧の出土量及び多量の堅果類の出土から、桑飼下遺跡の経済基盤は採集活動を主とし、狩猟・漁撈活動を従として成り立っていたと推定されている。

三河宮の下遺跡では、桑飼下遺跡同様な経済基盤を認めることはできない。むしろ狩猟・漁撈活動がその経済基盤の主体を占め、採集活動を従としたものと考えられよう。調理具としての敲石（一部は工具とみられる）・磨石等の出土・遺存しにくい自然遺物とを考えあわせると、この採集活動を従と考えるには不確定要素が多い。三河宮の下遺跡の経済基盤を確定するには遺跡全体の調査が必要であり、今回の調査では遺跡の大まかな性格が判明しただけである。三河宮の下遺跡の全容を把握するには今後の調査をまたねばならない。

由良川流域における低地の縄文時代集落遺跡には、近接する地域・同一時期を中心とする集落遺跡において、その性格に差異を生じている。桑飼下遺跡・三河宮の下遺跡に認められる差異は、今後当地域の歴史を考えていく上で興味もたれるところである。

今後周辺地域の縄文時代遺跡との関連等、残された問題点及び研究課題は多いが、今回の報告が多少なりとも近畿地域の縄文時代文化研究に役立てばさいわいである。

(竹原 一彦)

(注1) 大江町教育委員会『高川原遺跡発掘調査報告書』(大江町文化財調査報告第1集) 1975

(注2) 同志社大学考古学研究会「京都府由良川流域における縄文文化」(『同志社考古』8) 1971

(注3) 発掘調査補助員(順不同)

橋本 稔・徳網克己・盛本 勲・小野 仁

整理員(順不同)

江田恵美子・小山みのり・中井真由美・山口和子・唐渡 栄・榎原弘美・小川志津香・寺升初代・丸山美子

(注4) 舞鶴市教育委員会『桑飼下遺跡発掘調査報告書』1975

(注5) 梅原末治「京都府北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第16冊) 1935

(注6) 岡山県瀬崎町彦崎貝塚出土の土器を指標とする。前期土器はZ I式・Z II式、後期土器はK I式・K II式とされた。Z I式は結節状圧痕文・指頭圧痕文、Z II式は突帯文、K I式は緑

帯文、KⅡ式は口縁・胴部に縄文、頸部はへら磨きを特徴とする。

(注7) こよりのように1回だけ撚りをかけたとき、時計回りに撚ったものにr、反時計回りに撚ったものをℓとする。さらに2つ折りして撚ったrの縄は $L\left\{\begin{matrix} r \\ r \end{matrix}\right.$ 、もう一方のℓを撚った縄は

$R\left\{\begin{matrix} \ell \\ \ell \end{matrix}\right.$ と表記する。さらにもう1度折って撚った縄をそれぞれ $R\left\{\begin{matrix} L\left\{\begin{matrix} r \\ r \end{matrix}\right. \\ L\left\{\begin{matrix} r \\ r \end{matrix}\right. \end{matrix}\right. \cdot L\left\{\begin{matrix} R\left\{\begin{matrix} \ell \\ \ell \end{matrix}\right. \\ R\left\{\begin{matrix} \ell \\ \ell \end{matrix}\right. \end{matrix}\right.$ として表

記する。

(注8) 堅田 直『平遺跡調査概要』(帝塚山考古学シリーズ1) 1966

縄文時代前期北白川下層Ⅲ式(平ZⅠ式)~晩期滋賀里Ⅱ式(平BⅠ式)までの各土器型式が出土する。平ZⅠ式・平ZⅡ式(大歳山式)・平CⅠ式(船元式)・平CⅡ式(里木Ⅱ式)・平CⅢ式(中津式に先行)・平KⅠ式(中津式)・平KⅡ式(元住吉山Ⅱ式)・平KⅢ式(宮滝式)・平BⅠ式に分類される。

(注9) 岡山県倉敷市の船元貝塚出土土器を指標とする。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式に細分され、縄文地に弧状の沈線文を施文するのが一般的である。隆起線文・爪形文も認められる。

(注10) 岡山県玉島市黒崎中津貝塚出土の土器を指標とする。地文は細い縄文を施し、曲線的な沈線にかこまれた部分を磨消す。渦状沈線と磨消縄文を特徴とする。

(注11) 末永雅雄「宮滝の遺跡」(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第15冊) 1944

(注12) 鍬形鎌は縄文時代早期にのみ認められる凹基式無柄式石鎌である。挟りこみが深く、かえりの部分が角ばった形を呈する。鍬形鎌は中部以西において、押型土器に伴う。

(注13) 五角形鎌は縄文時代後期から晩期にかけて出土する無柄式石鎌である。先端部近くに綾をもつ。

(注14) 渡辺 誠『縄文時代の漁業』1973

同 「勝山市東部における“もじり編み”用錘具の民俗調査」(『古宮遺跡発掘調査報告書』勝山市教育委員会) 1978

(注15) 岡田茂弘「京都府浜詰遺跡発見の堅穴住居址」(『先史学研究』1) 1959

(注16) 夜久野町教育委員会『菖蒲池遺跡発掘調査報告書』(夜久野町埋蔵文化財発掘調査報告1) 1973

(注17) 綾部市教育委員会『青野遺跡A地点発掘調査報告書』(綾部市文化財報告 第2集) 1956

同 『青野遺跡第2次発掘調査概報』(綾部市文化財調査報告 第3集) 1976

同 『青野遺跡第3次発掘調査概報』(綾部市文化財調査報告 第4集) 1978

同 「青野遺跡第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集) 1981

(注18) 綾部市教育委員会「綾中廃寺跡第1次・第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集) 1981

(注19) 綾部市教育委員会『久田山』(綾部市文化財調査報告 第5集) 1979

(注20) 福知山市教育委員会『武者ヶ谷遺跡発掘調査報告書』1977

(注21) 小江慶雄「舞鶴市八雲地先由良川河底出土の先史遺物について」(『京都学芸大学紀要』21) 1962

(注22) 倉敷考古資料館「里木貝塚」(『倉敷考古館研究集報』第7冊) 1971

(注23) 島田暢行「京都府網野町柳谷出土の縄文式土器」(『思想』11) 1961

(注24) 竹野郡網野町新樋越川の開削工事で発見された遺跡である。

2. 稚児野遺跡発掘調査概要

1. はじめに

稚児野遺跡は、天田郡夜久野町字井田小字稚児野に所在する弥生時代から平安時代にかけての周知の遺跡である。本報告は、当該地に畜産養豚団地を建設する計画がなされ、京都府農業開発公社から当調査研究センターに調査依頼があった。これを受けて昭和56年10月26日から11月30日まで現地調査をした概要である。

調査主体 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査依頼者 京都府農業開発公社

調査担当者 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課調査員

松井忠春・伊野近富・竹原一彦・戸原和人

調査協力 夜久野町教育委員会・京都府教育委員会・京都府中丹教育局

京都府立丹後郷土資料館・夜久野史友会・井田地区・京都府農業開発公社

京都府養豚農業協同組合

調査期間中多くの方の協力があつた。特に作業に従事していただいた夜久野町の方々に感謝致します。^(注1)

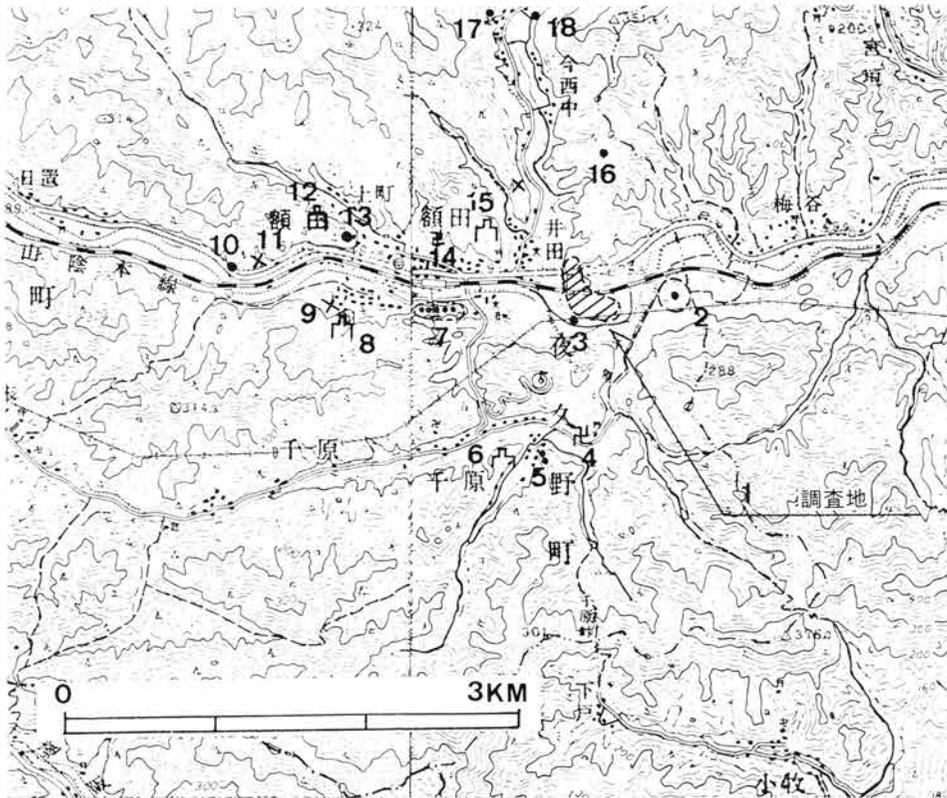
2. 調査概要

当該地は、国道9号線や国鉄山陰線の通る河岸段丘面から比高約20mの稚児野台地にある。開発予定面積は約50,000㎡で、うち発掘対象面積は約2,000㎡である。まず、夜久野町の位置と歴史的環境を述べ、次いで調査の進展等にふれていきたい。

稚児野遺跡のある夜久野町は、^(注2)京都府の西北部に位置し、西は兵庫県和田山町、北は同但東町、南は同青垣町、東は京都府福知山市に接している。板生・直見・畑の三河川により谷が開け、これらが合流して牧川になり、南部を東流して福知山に至る。牧川周辺には河川段丘面を良好に認めることができる。稚児野台地は畑川が牧川に合流する地点の東隣にあり、古代は比較的住み易い地であったといえる。

夜久野町に人が住み始めたのは、縄文時代草創期に遡る。兵庫県に近い夜久野ヶ原にある茶堂遺跡から採集された凝灰岩製の打製石斧がその資料である。その周辺一帯は第四期前期（今から数十万年前）、近くの田倉山の噴火で流れ出た溶岩が、のちに風化して形成された黒土層が堆積している。今後、この一帯が調査されれば、草創期やそれ以前の遺跡が発見される可能性がある。次いで早期の遺跡としては、菖蒲池遺跡、牧川を越えたところに大油子荒掘遺跡がある。これらの遺跡から晩期の土器片も出土しており、縄文時代を通じて人々が生活していたらしい。なお、今回調査した稚児野遺跡でも縄文土器片を採集しており、牧川沿岸に縄文時代の遺跡が集中するらしい。

弥生時代になると、石鏃・磨製石斧・土器片が発見された平野臼ヶ森遺跡がある。また、日置遺跡では銅剣形石剣・石包丁・磨製石斧・敲石があり、高内でも磨製石斧などが採集さ



第25図 調査地周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|----------|-----------|----------|-----------|------------|
| 1. 稚児野遺跡 | 2. 大野遺跡 | 3. 稚児野古墳 | 4. 薬師寺跡 | 5. 千原古墳群 |
| 6. 愛古城跡 | 7. 五宝山古墳群 | 8. 向嶋城跡 | 9. 向嶋遺跡 | 10. コブ屋敷古墳 |
| 11. 鳴岩遺跡 | 12. 月輪城跡 | 13. 月輪経塚 | 14. 長福廃寺跡 | 15. 井田城 |
| 16. 今西経塚 | 17. 那須古墳 | 18. 休石古墳 | | |

れている。概して牧川の河岸段丘上に遺跡が集中するらしい。

古墳時代になると、長者ヶ森古墳を始め、多くの後期古墳が営造されている。

奈良時代になると、末・高内窯跡群が営まれ、平安時代前期まで続く。なお、大油子荒堀遺跡から平安時代の緑釉陶器・黒色土器が出土しており、今後の調査によれば、集落跡発見も期待できよう。

今ここで、昭和55年に調査された大油子荒堀遺跡出土の遺物を若干紹介し、今後の研究の基礎資料としたい。^(注3)

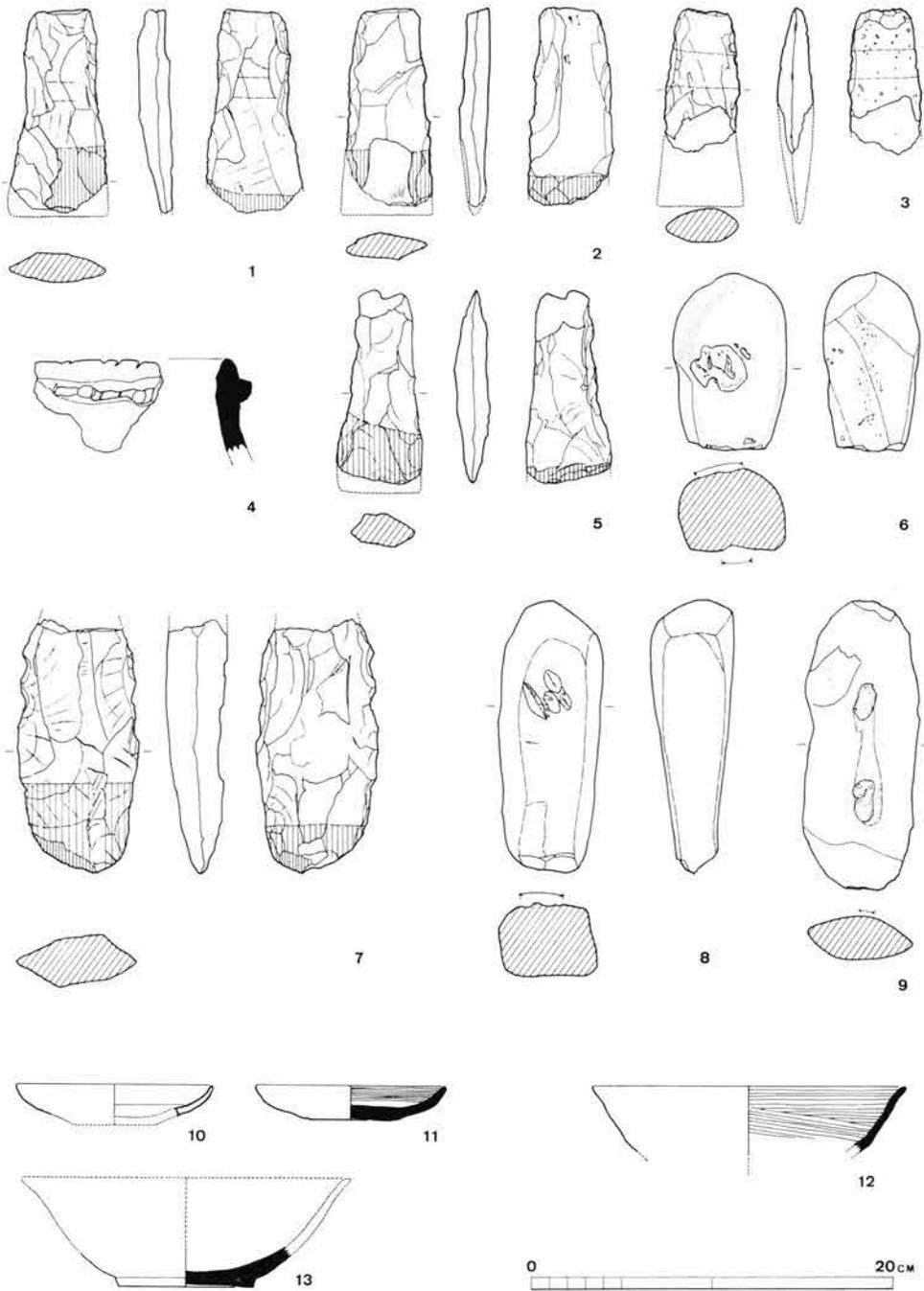
大油子荒堀遺跡は、昭和55年同地区内のは場整備事業に伴い調査された遺跡で、出土品は縄文時代から鎌倉時代に及ぶ。連綿と集落が営まれた可能性のある遺跡である。縄文土器片はA地点出土として、楕円押型文1、爪型文10、半截竹管文1、刺突文1があり、おおむね早・前期に属する。B地点から中期の沈線文土器片2、C地点から晩期船橋式に類似する甕口縁部片1、粗製甕片多数が出土している。量的には晩期がもっとも多い。縄文時代の石器は打製石斧45(内大型が14)、敲石12、凹み石1、磨石3、石皿1、石鏃11、石錐1、刮片石器9が出土している。

打製石斧はほとんど撥形で、刃部には長軸に平行な使用痕(擦痕)が認められることから横斧として使われたらしい。なお刃部を正面から見た場合、左右どちらか一方が他方より摩耗し、刃が短くなっているが、これはきき腕との関係が考えられよう。つまりきき腕側の刃部がより摩耗したと考え得る。図示した石斧の見方は、側面図を中心として左側が石斧使用者から考えた場合遠い方に当たり、右側が手前である。そして、刃部の長線の上に縦線を描いているが、これが使用痕のある部分と方向を示している。また、より使用痕が顕著な場合は縦線の数を多くしている。石材は灰色を呈する凝灰岩系。これらの外、未製品16、石屑33がある。

敲石は長軸に対して斜め方向に2つの窪みをもつもので、石器製作用と考えているものである。平面が円形気味のもの8、図26の8・9のように長いもの3、あと図26の6のような中間形態のものもある。

石鏃は凹基無茎式のもの5、平基無茎式のもの1、不明4である。石材は灰色チャート4、赤色チャート3、サヌカイト4である。

土器は晩期船橋式併行期と考えられるもの(図26の4)を始め、晩期の粗製品が多量に出土している。このことから石器のほとんども同時期と考えられるが、この中で群を抜いて多く出土した打製石斧の意味について述べたい。このような打製石斧が多量に出土した遺跡としては舞鶴市桑飼下遺跡がある。主体となる時期は後期中葉であり、調査者の渡辺誠氏は



第26圖 大油子荒掘遺跡出土遺物実測図

打製石斧：1～3・5・7，繩文土器片：4，敲石：6・8，中国製白磁皿：10，
 黑色土器皿：11，同碗：12，緑釉陶器碗：13

「多量の打製石斧によって各種の根茎類の採集も盛んであった^(注4)」状況を推定している。大油子荒掘遺跡の打製石斧も使用痕のあり方から同様の性格（土掘り具）が推定できよう。但し、桑飼下遺跡が中尾佐助・佐々木高明氏のいう半栽培段階、照葉樹林文化前期複合段階に相当するとしても、大油子荒掘遺跡の場合は、次の段階である焼畑農耕段階に到達していた可能性が高い。これは石鎌の少ないことから狩猟に依存する度合が小さかったことが知られるにもかかわらず、多くの人々が居住できたのは焼畑農耕段階に到達したと考えざるを得ないことによる。

大油子荒掘遺跡出土の遺物で特筆すべきものに中国製陶磁器がある。第26図の10は白磁皿^(注5)で、大宰府出土の輸入陶磁器分類案では白磁皿Ⅷ-1に相当する。12世紀中葉ぐらいから日本で出土するらしい。今後平安末～鎌倉時代の集落遺跡では注意すべき遺物である。同13は緑釉陶器である。焼きは須恵質で黄緑色の釉が全面にかかる。9・10世紀ごろか。山城産か。とすればなぜこの地に運ばれてきたのか問題となるだろう。一般集落では出土しないものである。

以上のように、大油子荒掘遺跡は縄文時代を通じて人々が居住し、特に晩期には焼畑農耕による食糧事情の好転により、集落が営まれた可能性を指摘できた。

また、平安時代に関しては緑釉陶器や中国陶磁器^(注6)、更には灰釉陶器（2片）も出土しており、今後集落の確認とその性格の追求がまたれる。

稚児野遺跡調査内容

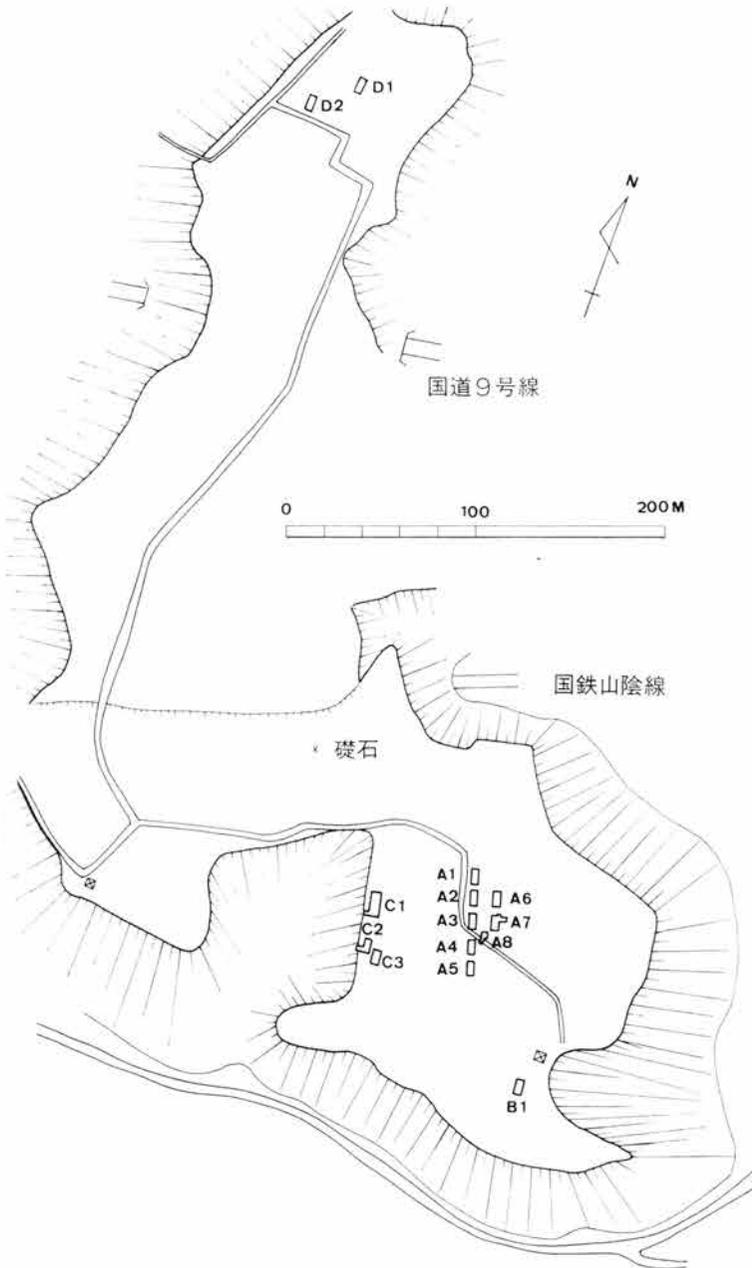
調査地は稚児野台地のほぼすべてに亘り広さを極めたが、既に昭和46年に夜久野町教育委員会によって発掘調査されている箇所があり、今回はその成果を加味し発掘地を選定した。すなわち、高所である北部台地に2条、低所である南部台地に10条のトレンチ（4×8m）を設定した。その後2トレンチを追加し遺跡の確認に努めた。発掘面積約500㎡。なお低地に設定したトレンチは大きく3か所に分れており、発掘順にA～C地区と呼称することにした。また高所はD地区と呼称した。

A地区

A地区は、A1～A8までのトレンチを発掘した。層序は表土直下から20cmほどが灰褐色土（耕作土）でその下が黄（赤）褐色（地山）であった。

A1の北部で円形ピットを4か所検出した。径は約20cm、埋土は暗褐色土であった。北西隅のピットからは天目茶碗片を検出した。柱間は不揃いではあるが、平面が台形気味の簡単な建物があっただけらしい。

A2・A3ではコンクリート管を検出した。



第 27 図 調 査 地 位 置 図

A4・A5は遺構なし。

A6・A7では江戸時代もしくは明治時代の暗渠を検出した。南から北へ傾斜する幅40cm、深さ10cmの溝の中にグリ石が詰め込まれていた。これは畑地に伴うものである。この終息部分を確認するためにA8を設定した。暗渠排水は現道の下で止まっていることを確認した。これらのトレンチでは黒色土が遺存していた。

A地区の出土遺物は天目茶碗片1（室町末期～江戸初期、美濃製）と明治時代以降の茶碗片少量であった。

B地区

B地区は谷部に近く、なんらかの包含層が検出できると考えトレンチを設定したが、表土直下から約20cmが灰褐色の耕作土で、その下は黄褐色粘質土（地山）であった。遺構・遺物ともになし。

C地区

C地区は谷すそに当たり、包含層の残りやすい地形であった。ここではトレンチを3か所設定した。

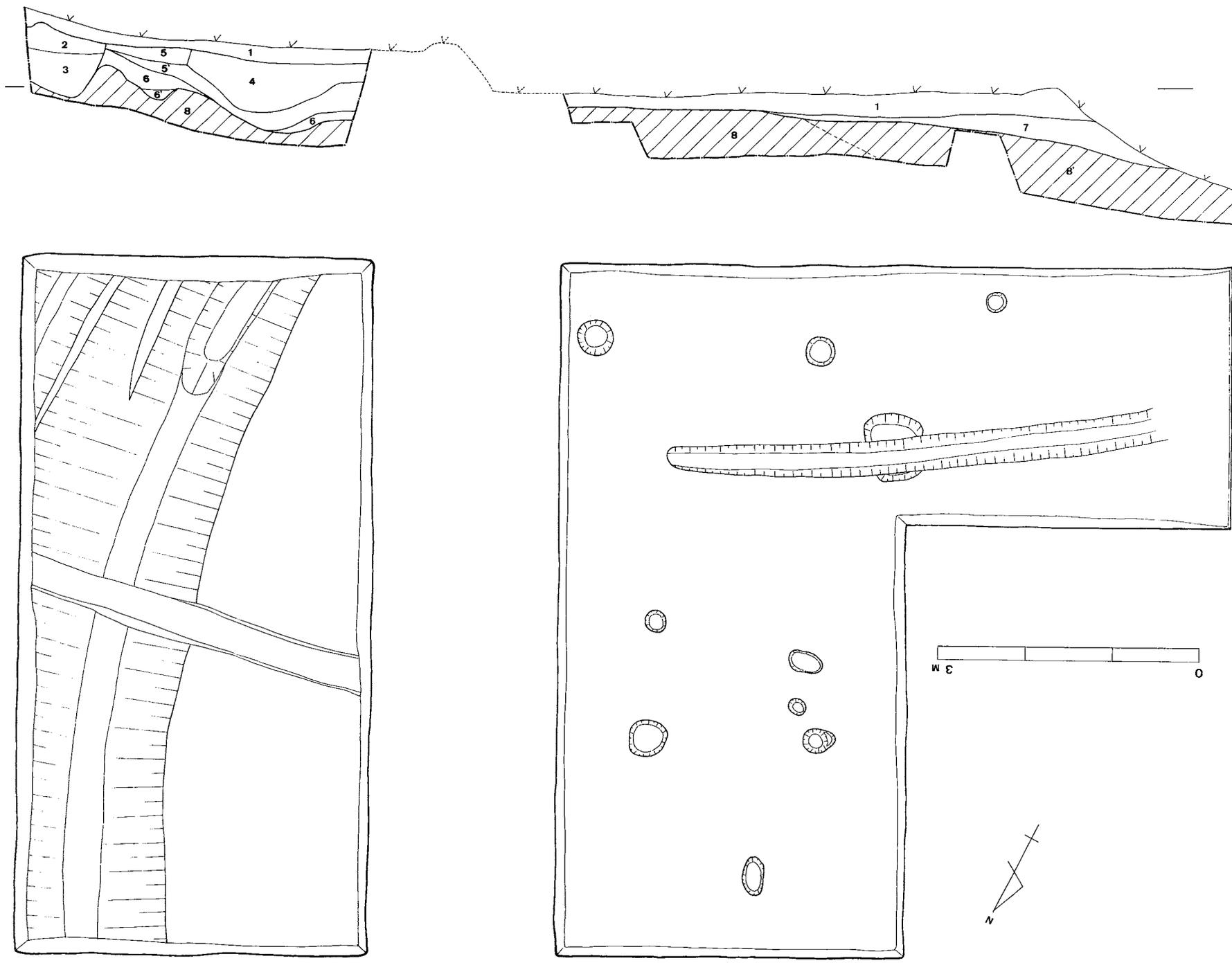
C1は当初4×8mのトレンチであったが北部で土錘の入ったピットを検出したため、その続き具合を調べるために約2m北側へ拡張した。しかし、表土下20cmの耕作土の下は円礫を多量に包含する黄褐色土（地山）のみで遺構はなかった。また南部では谷へ通じる傾斜が認められたので、谷側（西側）へ約3m拡張した。すると現地形とほぼ同じ角度（約40度）で谷に落ち込む地形を検出した。

C2は当初4×8mのトレンチであったが谷への傾斜具合を見るため谷側（西側）へ約3.5m拡張した。するとC1と同様の傾斜地形を検出し得た。

なおC1・C2の旧地形は緩傾斜地であったらしく、トレンチの西半と東半では地山の質が相異していた。すなわち西半では円礫を包含する黄褐色土、東は黄褐色粘質土のみであった。かって東が高く西に低い地形であった所を、畑地をつくる際カットしたと考え得る。

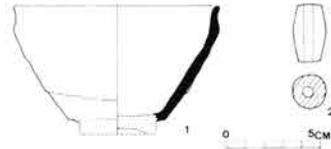
C3は、C2の上の畑地に設定したトレンチで、北から南へ傾斜する溝を検出した。幅2m、深さは北端で20cm、南端で40cmであった。この溝の東側は1mほどの崖面となっており、西側は緩傾斜地となっていた。したがってこの溝は崖の真下につくられた排水溝であることが判明した。この溝からは須恵器甕の体部片を検出し得た。雑なタタキ目を施したもので奈良～平安時代のもと考えられる。C1からも同時代の土錘（第29図2）が発見されており、わずかながら人跡を認めることができた。

D地区



第28図 C-2・C-3 トレンチ平面・土層断面図
 1. 耕土(暗褐色土) 2. 黄褐色土(茶褐色土斑) 3. 黑色粘質土(黒色粘土斑) 4. 黄褐色粘質土 5. 黒褐色粘質土(灰色味)
 6. 黒褐色粘質土(茶褐色土斑) 7. 黒褐色粘質土(旧耕土か) 8. 黄褐色土(地山) 黄褐色砂礫土

D地区では2か所にトレンチを設定した。現地表面から20cmほどで黄褐色粘質土(地山)を検出した。遺構・遺物ともなし。ただ樹木を植えた際の円形ピットが規則正しく発見されたのみであった。



第29図 出土遺物実測図

1. 天目茶碗 (A-1トレンチ)
2. 土錘 (C-1トレンチ)

小 結

以上のとおり、今回の調査地では遺構・遺物ともほとんど20cmの耕作土と以んで検出されなかった。層序は一様下地山という単純なものであり、この耕作土自体も近代以降の可能性が強いものであった。昭和46年の夜久野町教委発行の「稚児野遺跡発掘調査概要」によれば、昭和31年に開田工事が行われ、高所を削り谷部を埋めたようである。今回確認した一様な層序はこの開田工事に帰因すると考えられる。

なお、谷に近いところや、稚児野台地の所々では黒色土層が遺存している。これが近世以前の表土であったことは、トレンチ調査で発見されたピットや溝の埋土となっていることから確認できる。しかし層を成して遺存してはおらず、開田工事の際完璧に近い形で削平されたと考えられる。

3. ま と め

当該地は広い台地にあり、集落が営まれていたことはほぼ間違いないと思われる。しかし、今回の調査結果によればその痕跡は消滅したと判断するしかなく、今後の調査に余り期待すべき状況ではない。ただし、かつて人々が居住していたことは奈良～平安時代の遺物が発見されたことにより再確認できたし、更に室町時代末期頃にも人跡を認めることができた。

なお、調査地外であるDトレンチの南50mぐらいの所で縄文土器片を採集した。この付近は黒色土が表土層となっており、古代以来の地形が比較的残っているところでもある。現在この真下に国道9号線のトンネルがあり、旧前も交通路として利用された地でもある。このような拠点に縄文土器が発見されたことは何んらかの遺構が埋没していることを想起させる。同地点より更に南50mぐらいの所では中川淳美氏が打製石斧3点を採集しており、また縄文土器片も採集されている。中期船元式と考えられるものとのことである。今回採集した土器片は口縁端部内側に縄文を施すもので、一応後期と考えている。打製石斧も同時期であろう。以上のことから縄文時代中・後期に人々が居住していたことがわかる。この地が大油子荒掘遺跡のような拠点的な集落となるのか、キャンプサイトになるのかは今後の調査成果によって判断できよう。夜久野に於いて黒色土層は注意すべき土層と言えよう。

(伊野 近富)

(注1) 塩見熊好・衣川安正・居相光恵・片山 都・岡本文子・藤岡滝之助・青山 勇・石田喜好・大橋梶男・衣川定・衣川保雄・上田栄一・芦田富美・榊井みつ子・安達重美・安達久仁子・衣川あや子・荻野ふみ子・的場寿恵子・佐藤逸次郎・的場 剛・加藤忠信

(注2) 『京都夜久野の文化財』夜久野町教育委員会 1981

(注3) 夜久野町教育委員会・上田陽一氏の御好意により、出土品の一部を掲載することができた。なお、大油子荒掘遺跡の概要については現地説明会パンフレットや調査報告書を参照されたい。

(注4) 渡辺 誠「第3章 縄文時代」(『福知山市史』第1巻) 1976

(注5) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」(『研究論集』4九州歴史資料館) 1979

(注6) 中国製陶磁器は、本文中の1片の他、白磁碗片1(口縁端部を短く外反させた、釉調の明るいもの)、青磁片1(くすんで灰色がかかるもの)がある。

3. 中尾古墳発掘調査概要

1. はじめに

伊根町大浦地区において、伊根港道路の改良新設工事が進められることになり、宮津土木工営所より自然石が並んで露出している箇所を事前に調査してほしいとの依頼があった。そこで現地を視察したところ、横穴式石室を有する古墳あるいは中世の古墓であろうと推定されたため、発掘調査を実施することとなった。そして、調査過程において、横穴式石室をもつ古墳であることが判明したため、小字名を採って「中尾古墳」と命名することにした。

今回の調査は、京都府土木建築部の依頼により当調査研究センターが実施したものであり、現地調査は、昭和56年8月25日から同年10月7日にわたり行った。なお調査期間中、地元関係者や伊根町教育委員会の方々には多くの御協力を頂いた。^(注1)心より謝意を表したい。

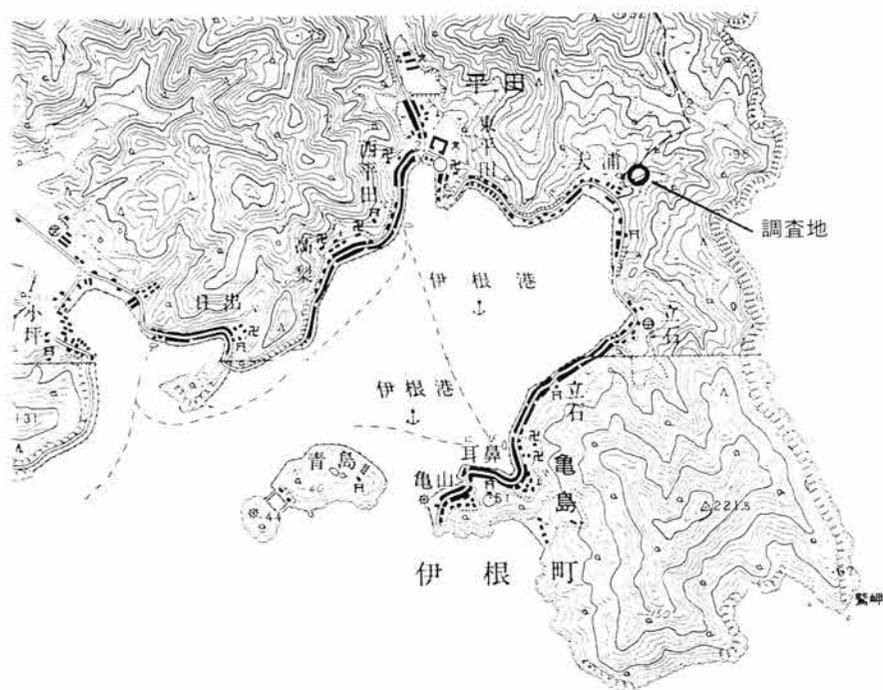
2. 古墳の位置と環境

中尾古墳は、京都府与謝郡伊根町亀島字大浦中尾にある。若狭湾をかこむようにしてのびる丹後半島の端部にあたり、南には静かな入江として知られる伊根湾が望める。伊根湾は、古くから漁港として利用されており、現在でも「舟屋」と呼ばれる家々が湾をとりまくようにして並んでいる。付近には、平野はあまりなく山が海岸線にせまっており、わずかに丘陵の谷間を開墾して農業が営まれている。

古墳は、伊根湾にむかって南西にのびる丘陵稜線上にあり、海拔約26.5mに立地する。そこからは、伊根湾およびその沿岸地を一望でき、遠くは若狭湾や丹後の山々を望める。付近には、同様な丘陵がいくつかみられる。

周辺の遺跡としては、伊根町泊地区に横穴が知られるが内容については不明な点が多い。^(注2)また、最近同町の津母では製塩遺跡が確認され、須恵器・土師器・黒色土器・土製支脚等が出土したということである。^(注3)時期的には、平安時代全期間にわたるものとされている。また、同町本庄地区では、組み合わせ式石棺を出した来迎寺裏古墳があるが、これも内容について不明な点が多い。

周辺地域での調査も少なく、また確認された遺跡も極めて少なく、中尾古墳の周辺の歴史的な環境について多くを語る材料はない。なお、調査後中尾古墳の立地する丘陵近辺を散策した際、同丘陵と隣接する丘陵に数基の横穴式石室の石組みと思われる箇所が認められた。



第30図 中尾古墳位置図

このことから、中尾古墳が後期古墳に一般的にみられる群集墳の一基であることもある程度推定できるかと思われる。

3. 調査概要

まず調査の経過について、概略を述べる。調査地は、最近まで畑地として利用されており、およそ14m×14mの平坦地をなしている。調査は、その平坦地の南東部に集まる石の箇所から行われた。その石の箇所の表土を除去したところ、細長い「コ」字状の石列が確認された。また、その石列の中心から放射状に4本の細長いトレンチを入れた結果、中心から6.5m前後の地点で、地山面の、溝状の掘り込みが弧状に認められた。石室では、天井石および側壁石の一部の転落状況が確認され、その直下から須恵器等の遺物がほぼ同レベルで検出された。また、石室周辺の表土および耕土を除去したところ、平面プランがほぼ長方形をなす石室構築のための掘方のラインが明瞭に認められた。以上のことより、当該地が横穴式石室をもつ直径約13mの円墳であることが判明した。なお、畑地開墾の際、盛土部分はほとんど削平されたとのことであり、また天井石および側壁石の一部は、平坦地南東隅へ移され石垣として利用されたという。さらに、古墳の南西部分については、道路改良新設工事に伴い削り取ら



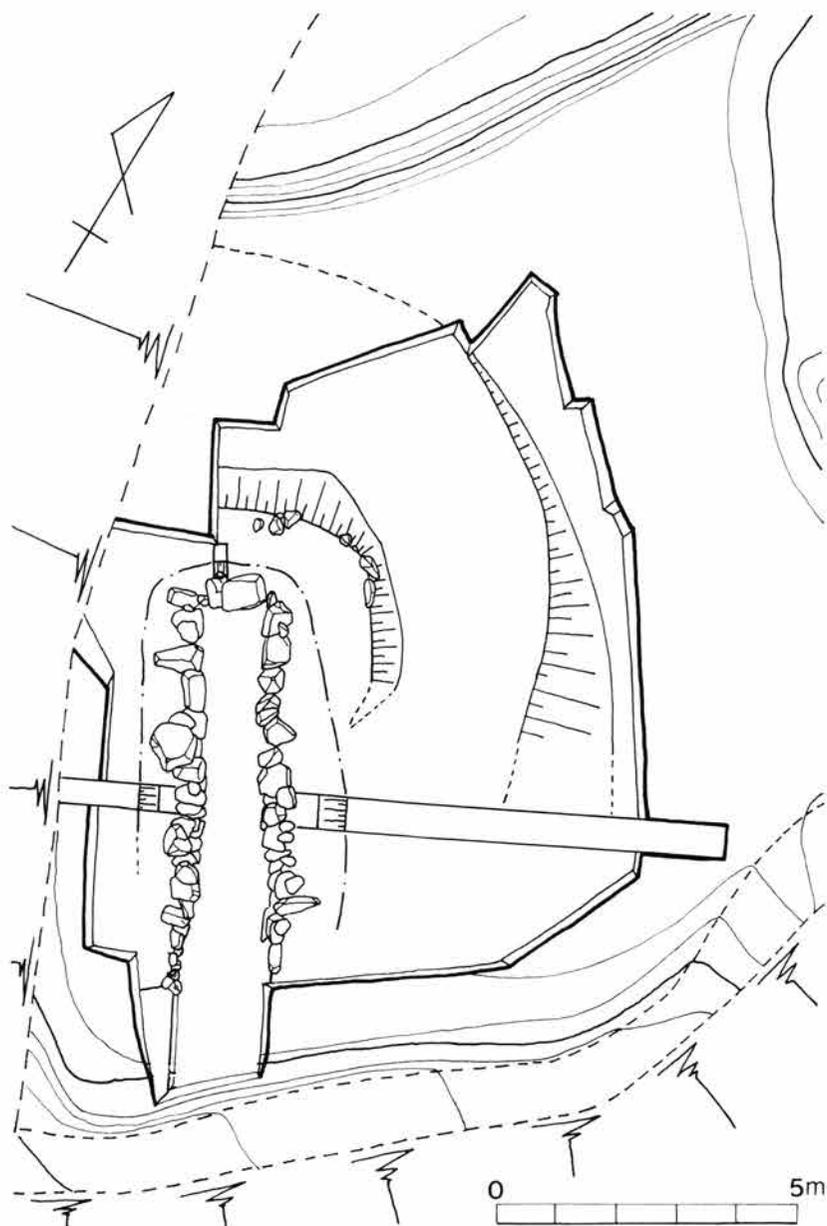
第 31 図 調査地地形図

れており、詳細な点については不明である。

では、以下で墳丘・石室・埋葬面・遺物の出土状況・遺物について、記述することとする。

丘 墳

先述したように、本墳は南西にのびる丘陵稜線上にあり、丘陵端より約 100m のところである。この丘陵稜線部分は、ほとんど畑地として利用されており、本墳も例外ではない。発掘調査前にすでに畑地として平坦にならされており、さらに今度の道路改良新設工事の際南西部が削られていることなどから、墳丘の規模の確認を困難にした。しかし、石室の北東から北にわたり、幅約 1m 前後の地山層の掘り込みが見られ、ほぼ石室の中心から 6.5m 程にあたる。この溝状の掘り込みが、ほぼ墳丘端を示すものと考えられる。一部耕作の際の攪乱により明瞭でないが、ゆるやかな円弧をとることが認められた。以上より、本墳の墳丘は、径が 13m 前後でやや楕円形をなす円墳と推定される。^(注4)

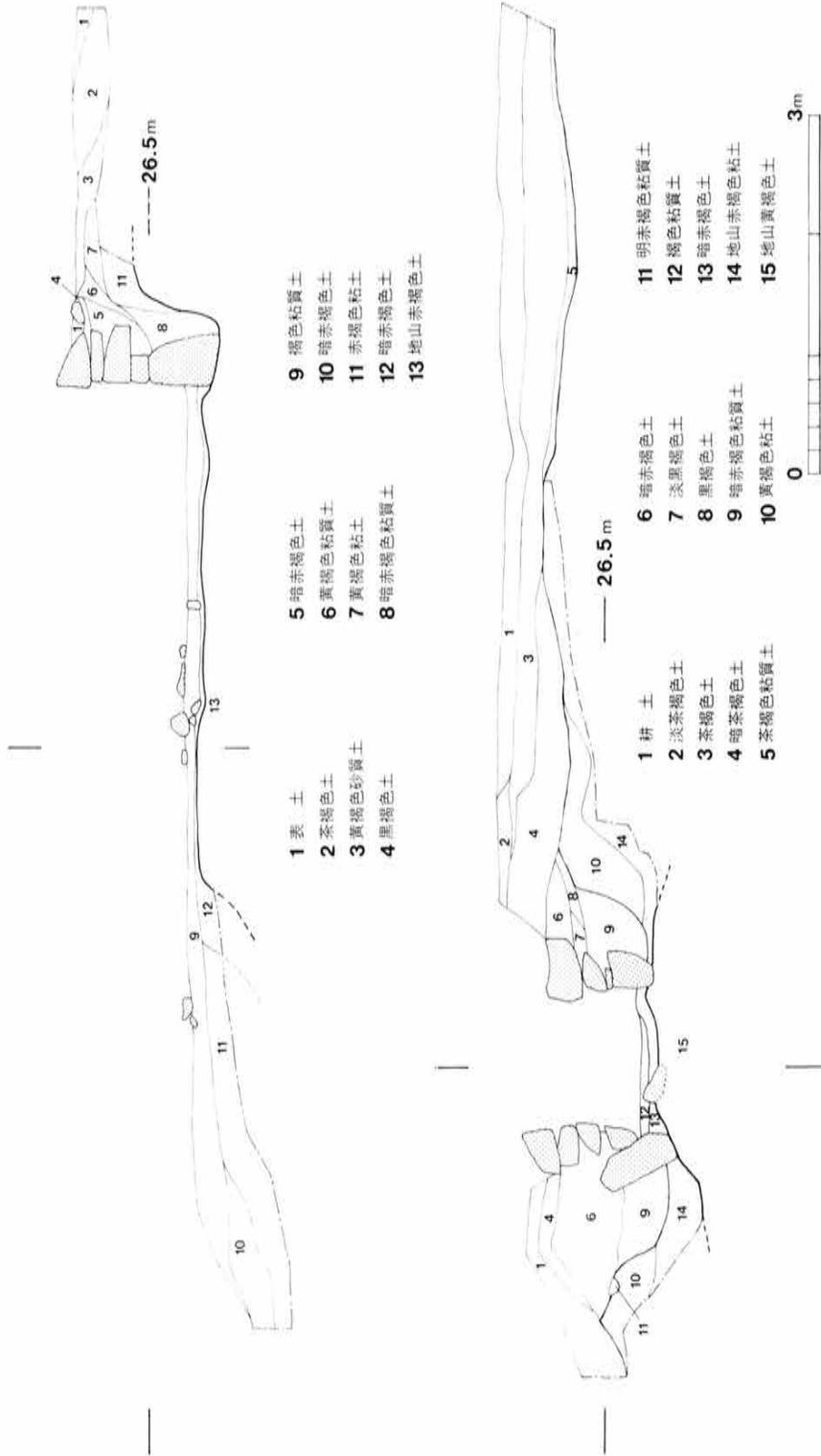


第32図 中尾古墳平面図

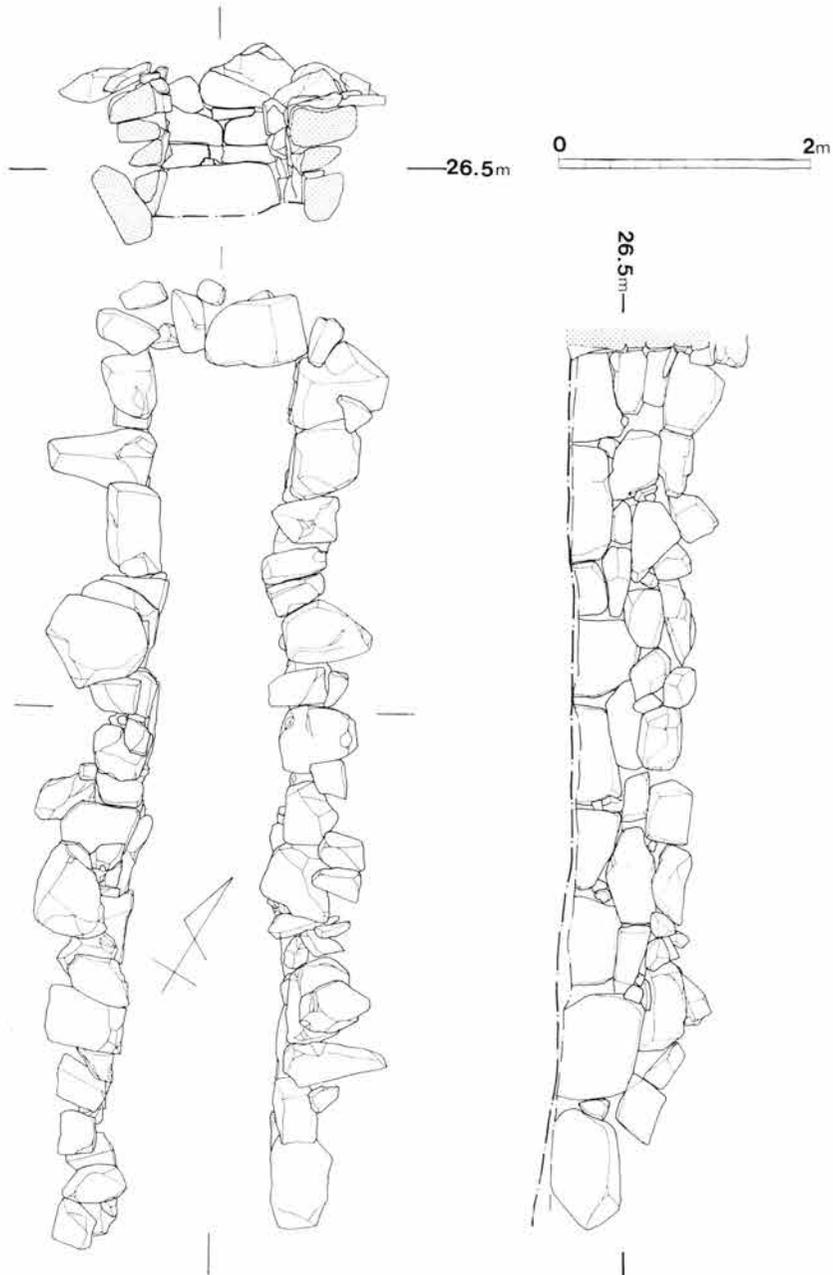
さらに、石室奥壁部周辺では、石室構築のための掘方によって、地山面が明瞭な段を残す部分^(注5)が認められ、30cm大の石が不整に検出された。

内部主体

石室の構築のための掘方について述べると、深さが奥壁側で1m、右側壁側で1m、左側



第33図 土層断面図



第34図 石室実測図

壁側で1m弱、奥行が7.5m（推定）、幅3m前後のやや胴張りをもち長方形プランをもつ。断面的には、逆台形の掘方であり、地山層である赤褐色粘土層および岩盤層を掘り込んでいる。掘方の底部は、石積みを考慮してか、ほぼ平坦をなしており、最下段の石を設置する際安定性をもたせるために「コ」状に溝を掘り込んでいると思われる。^(注6)

石室について述べると、無袖式の横穴式石室であり、全長7.3m、幅は奥壁部で1.2m、中央部で1.2m、開口部で1.45mを測り、現残存の高さは1.2m前後である。石室は、ほぼ南東方向に開口しており、奥壁より4mの地点から左側壁がやや開き気味になっている。

石室の石積みについて述べる。まず奥壁では、幅1m、高さ50cmの石を中央に設置し、その両側に縦長の石を立て、最下段としている。2、3段目は、厚さ20cm程度の板石をほぼ左右対称に並べ、小口積みにしている。4段目以上は、石の大きさ・積み方もやや雑な印象を受ける。奥壁のなす面は、ほぼ垂直に立ち上がっている。次に、右側壁について述べると、3段ないし4段まで残存しており、最下段で9石横長に並べられている。奥壁から7番目の石までは大きさ等整っているが、第8番目の石がやや大きめであることが注目される。2段目以上は、最下段に比して小ぶりの石をやや乱雑に積んでいる。左側壁では、奥壁付近を除き、3段ないし4段まで残存している。最下段の石は、右側壁に比して大きさも不整であるが、いずれも横長に8石並べられている。そして、第6番目の石が右側壁の第8番目の石に対応するように、やや扁平ではあるが大きめのものであることが注目される。2段目以上については、右側壁に比して雑な積み方である。左右側壁ともほぼ垂直に立ち上がっている。

全体的には、奥壁および付近の石積みは比較的ていねいな印象を受け、開口部では人頭大の石を雑に積んでいる。また上段の石は、裏込めの土に接する面が多く、石積みの際の石の重みを分散させるかのようなようである。なお、使われた石材は、安山岩系のものである。^(注7)

埋葬面

石室内の堆積土および転落石を除去すると、褐色粘質土面が同レベルで検出され、遺物もほぼこの面で検出された。その他に、棺台に用いられたと思われる小石列が、奥壁部、石室中央右側壁側に認められた。これらのことから褐色粘質土上面を埋葬面であると判断した。さらに、褐色粘質土層を除去すると、その直下から石室中央部より奥壁にかけて暗赤褐色土の平坦な面が認められた。開口部にかけては、赤褐色粘質土がその暗赤褐色土面に続くように、わずかな傾斜をもって検出された。石室中央やや奥壁寄りの地点では、上面の扁平な石が径約1mの円をなしてその暗赤褐色土面にのって認められて、注目された。また、暗赤褐色土と赤褐色粘質土の境に、石室中軸方向と直交する形で、拳大の石が3つ並んで検出された。これらのことから、暗赤褐色土および赤褐色粘質土の上面も、出土遺物こそないが、も

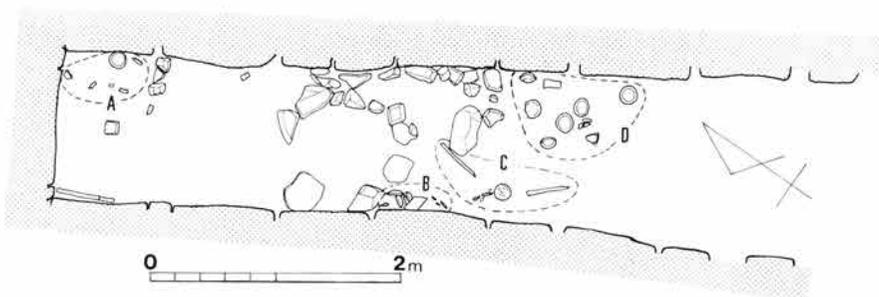
う一つの埋葬面とも考えられる。^(注8)

以上より、本石室の埋葬面は2面あったと推定される。築造時のものを、下面の方とすると、石室構築の際に平たく削られた岩盤層の上に、10cm弱の厚さで暗赤褐色土を敷いて玄室部分の埋葬面を形成し、さらに削平された地山層の赤褐色粘(質)土層を開口部付近に敷くことにより羨道部分を造成したと思われる。^(注9)そして、先述した3個の石列が玄室部と羨道部の区切りにあたると推定される。これは、石室の石積み・遺物の出土状況からも、ほぼそう判断されるかと思われる。なお、開口部では厚さ20~30cmの黒褐色土の広がりを確認したが、詳細な点はよく分らなかった。

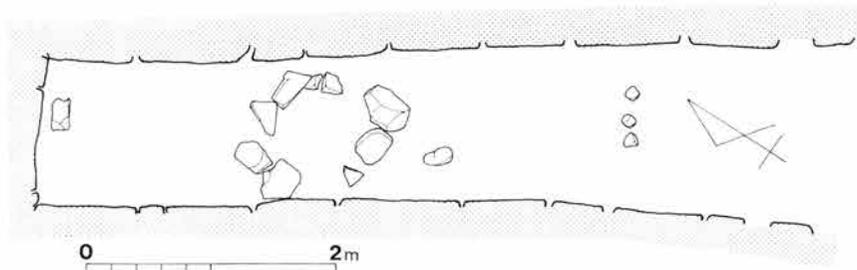
さて、上の埋葬面については、おそらく追葬時におけるものと考えられる。それは、遺物(須恵器)にみる時期差や遺物の出土状況等からも肯首されるものとする。

遺物の出土状況

遺物は、石室中央部より奥壁部にかけてほとんどが検出された。検出状況は、暗赤褐色土上面にほぼあたり、奥壁部よりおよそ4群に分かれて出土した。ここで、その4群を奥よりA群、B群、C群、D群と呼称することとする。A群は、石室奥壁右隅にあたり、高杯(21)がレベルではやや低位で、14・13・18・20の杯および高杯(22)がほぼ同面で破片として出土した。A群は、右側壁に対し垂直に並ぶ3個の石により区画された部分にほぼおさまってい

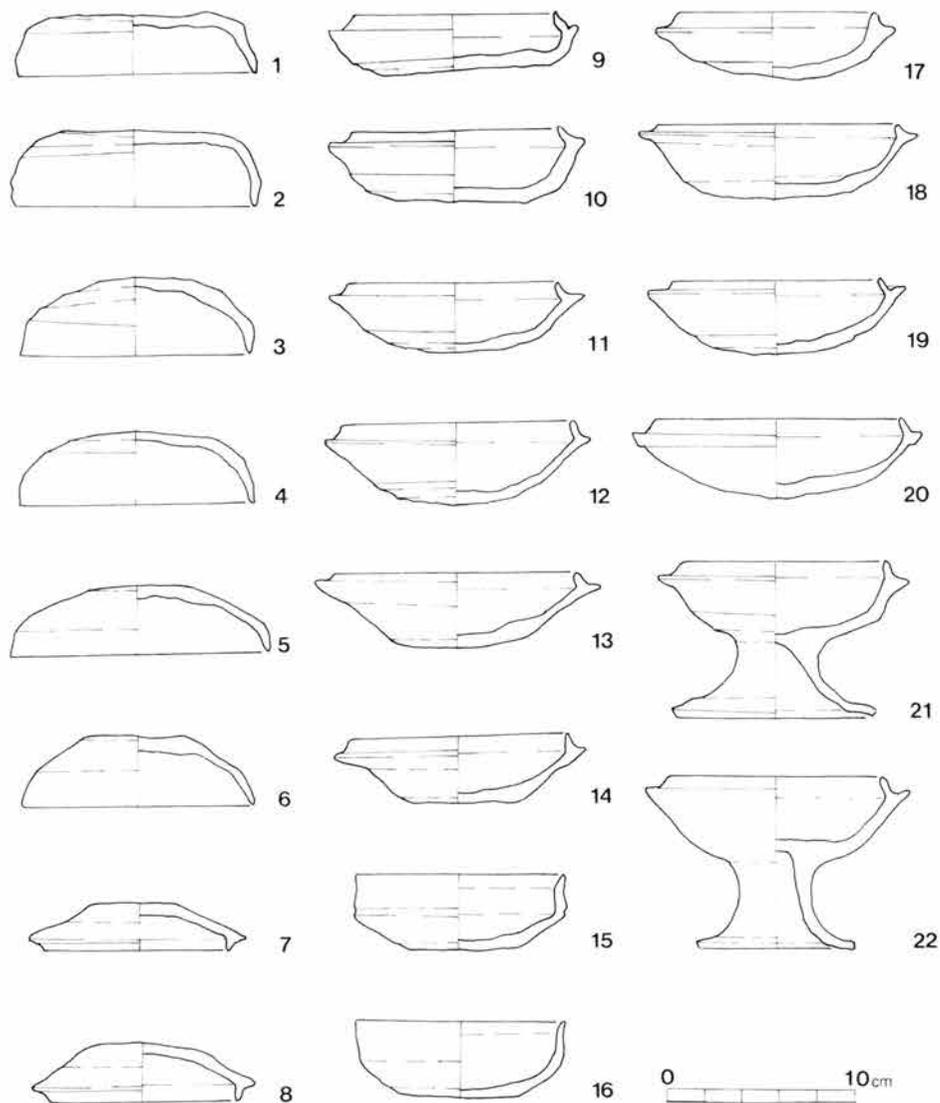


第35図 第2次埋葬面平面図



第36図 第1次埋葬面平面図

た。B群は、石室中央左側壁にあたり、杯類が重なった状態で出土した。杯蓋の1・2・3・8および杯身の9が上位で、杯蓋の7および杯身の10・11・16が下位であった。B群では他に7・9・10の鉄鏃が、B群の杯類をはさんだ石の上層より出土した。C群は、B群同様石室中央左側壁にあたり、B群よりやや開口部寄りの第2次埋葬面上である。C群では、杯身(15)と鉄鏃の5・6・8および鉄刀2振り^(注10)が出土した。D群は、石室中央右側壁側にあたり、杯蓋の4・5・6と杯身の11・12・17・19および鉄斧が出土した。なお、杯身の17は、左側壁石に



第37図 出土遺物実測図(1)

たてかけられた状態で出土しており、注意をひいた。以上の4群の埋葬面からの出土とは別に、鉄刀の2が奥壁部左隅にたてかけられた状態で出土した。また、開口部の埋土中からも須恵器片が出土した。

遺物

石室内より出土した遺物は、須恵器29点（杯蓋8点・杯身18点・有蓋高杯3点）・鉄刀3振り・鉄小刀1点・鉄斧1点・鉄鏃10点あまりである。以下、各遺物について概略を記すこととする。

須恵器

杯蓋と杯身ではその組み合わせを確認することが困難であったが、出土地点・焼成・胎土等を考慮に入れるならば、1-9、2-10、3-11、6-14、7-15、8-16がセットになるようである。全体としては、蓋・身もいずれも小型のものが多く、身の口縁部の立ち上がりが高い形式のものである。なお細部に多少の差異が認められる。

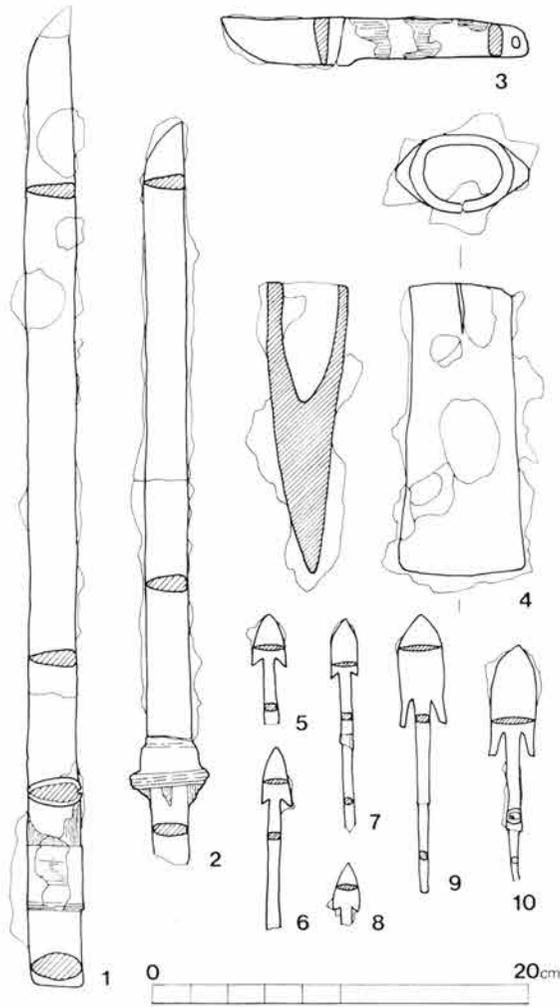
まず杯蓋についてみると、天井部に削りのため平坦面をもち、天井部と口縁部の境に粗い削りを施すもの（1・2）。いずれも口縁部の端は丸くおさめられており、砂粒が多く、青紫色を呈する。次に、天井部からおよそ2分の1程粗く回転削りがなされ、扁球状の体部をもつもの（3・4）。口縁端部は丸く、小砂粒を含み、青灰色を呈する。さらに、内外面ともナデを施され、天井部と口縁部の間にややおい屈曲をもつもの（5・6）。口縁端部は丸くやや外傾気味で、灰褐色を呈する。さて、7・8については身とも思われるが、小型で扁平な器形15・16とセットになることなどから考えて、蓋とした。^(註11)形態的には、杯身の13・14を逆

付表1 土器計測表 (単位cm)

番号	器種	口径	器高	出土地点	番号	器種	口径	器高	出土地点
1	杯蓋	12.4	3.1	B群	12	杯身	12.2	4.2	D群
2	〃	12.6	4.0	〃	13	〃	12.8	4.0	A群
3	〃	12.2	4.0	〃	14	〃	10.6	3.4	〃
4	〃	12.4	3.0	D群	15	〃	11.0	4.1	C群
5	〃	14.6	3.7	〃	16	〃	11.0	4.0	B群
6	〃	12.2	3.8	〃	17	〃	10.4	3.5	D群
7	〃	9.8	2.5	B群	18	〃	12.6	3.8	A群
8	〃	9.9	3.0	〃	19	〃	10.8	3.8	D群
9	杯身	10.6	3.0	〃	20	〃	13.2	4.2	A群
10	〃	10.7	3.7	〃	21	高杯	10.4	7.3	〃
11	〃	11.0	4.7	D群	22	〃	11.2	9.2	〃

転させたもので、天井部と口縁部の間にくびれをもち、口縁部に短く下方にのびるかえりをもつ。胎土・焼成ともよく淡青灰色を呈する。

杯身についてみると、扁平で平底あるいはやや丸底をなし、底部付近に粗い削りを施すもの(9・10・17・18)。厚手で砂粒も多く紫青色を呈するもの(9・10・17)と、薄手で淡青灰色を呈するもの(20)に分かれる。次に、底部付近に粗い回転削りを施し、体部が扁球状をなすもの(11・12・19・20)がある。胎土・焼成とも良好で、青灰色を呈する。18は口縁直下に明瞭な段をもつ。さらに、体部外面にナデを施し、体部にくびれをもつもの(13・14)。胎土・焼成とも良好で、淡青灰色を呈する。15・16についてであるが、蓋とも思われるが、ここでは身と判断した。口縁部内面および体部は、比較的ていねいなナデにより、口縁部は直口である。蓋の7・8とセット



第 38 図 出土遺物実測図 (2)

になり、15については体部に一条の凹線をもつ。胎土・焼成ともよく、淡青灰色を呈する。

高杯であるが、21・22のいずれも透孔のない有蓋高杯である。21は、口縁部の受け部がほぼ水平に突出しており、立ち上がりも上方に短く出ている。杯部下半を粗く削っている。22は口縁部の立ち上がりが内傾しており、杯部外面はていねいなヨコナデを施す。21は、胎土に若干の砂粒を含み、青灰色に焼けている。22は胎土・焼成ともよく、淡青灰色を呈する。

次に鉄器についてみる。

鉄刀。1・2いずれも直刀である。1は、全長11.2cm、刀長60.0cm、刀幅2.6cmを測る。茎部に、木質の付着および糸を巻きつけた痕跡を認める。また茎端に、断面卵形の短い筒形の

金具があり、鉄製の円頭把頭金具とも思われるが、銹蝕が激しく判然としない。2は、全長40cm、刀長33.0cm、刀幅2.4cm、茎長4.2cm、茎幅2.0cmを測る。鞘口の金具が遺存し、短い金銅板を被せ、貴金具でしめている。茎部に木質の付着を認める。

鉄小刀(3)。現存長17cm、刀長7.0cm、刀幅2.8cm、茎長9.8cmを測る。茎端に目釘をとどめ、また木質の付着を認める。

鉄斧(4)。袋状のもの。全長16.0cm、幅6.4cmを測る。重さは、0.73kgを測る。

鉄鏃(5・6・7・8・9・10)。5・6・7・8は、腸快柳葉式にあたる。7は、茎部に木質の付着をみる。9・10は、いずれも平根腸刳式にあたる。

以上、遺物の概要を記したが、須恵器の杯類について整理してみると、大きく2つの時期に分けることが可能かと思われる。Ⅰ期は、蓋の天井部および身の底部を粗く回転削りする段階で、杯蓋の1・2・3・4、杯身の9・10・11・12・17・18・19・20がそれに含まれる。Ⅱ期は、蓋の天井部および身の底部に回転ヘラ切りがなされる段階で、杯蓋の5・6・7・8、杯身の13・14・15・16がそれに含まれる。Ⅰ期は、田辺昭三氏編年でいうTK-209に比定され、7世紀前後^(註12)にあたりと考えられる。Ⅱ期は、田辺編年でいうTK217に比定され、7世紀前半の新しい段階にあたりと考えられる。なお、有蓋高杯については、Ⅰ期に含まれると考えられる。

4. む す び

以上のように、調査の概要を記してきたが、最後に少しまとめてみることにする。

中尾古墳は、径約13mの楕円形の円墳であろうと推定され、内部主体に無袖式の横穴式石室をもつ。埋葬については、2回程が考えられ、築造年代としては7世紀の初頭にあたる。そして、一時期あとに追葬がなされたと考えられる。被葬者については、周辺での調査が十分なされていない現段階では言及するのは困難と言わざるをえない。しかし、古墳の立地や付近の地形——農業に適する平野が極めて少ないこと・古くから海を生活の糧としてきた土地柄等——を考慮するならば、なんらかの形で海とかかわりをもつ有力者の墓と推測されようか。

今回の調査では、古墳の遺存状態等もあり十分なことは判明しがたい。今後の調査にゆずる点の多いことを痛感している。最後に、今回の調査に御協力していただいた多くの人に感謝の意を表し、調査概要を終わりたい。^(註13)
(久保田 健士)

調査員 水谷寿克・久保田健士

調査補助員 岡崎研一・原沢則広・玉井泰則・日下和彦・松元達也・山本義昭・三原 進

作業員 吉本二郎・田中晴彦・今岡真一(以上敬称略)

- (注1) 伊根町教育委員会社会教育主事坂中宗一郎・同向井義夫両氏および伊根町漁協の方々には、特にお世話になり感謝している。
- (注2) 海蝕洞窟を横穴として利用したらしく、須恵器の出土が伝えられる。
『京都府遺跡地図』京都府教育委員会 1972
- (注3) 丹後郷土資料館資料課長百田昌夫氏の御好意により、出土遺物を実見する機会を得た。
- (注4) 楕円形をなす円墳の類例は、丹後においていくつかある。
丹後町 大成古墳群9号墳
峰山町 桃谷古墳
などがよく知られるものである。
堤 圭三郎・高橋美久二「大成古墳群発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1986 樋口隆康「峰山町桃谷古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会) 1960
- (注5) 石室の天井部および側壁上部の崩落状況から考えて、それらの部分に使用されたものと推定できるかもしれない。
- (注6) 左側壁部については、その溝状の掘り込みを確認するに至らなかった。
- (注7) 本墳南西側にあたる工事区内の土層断面には、石室の石材と同じ安山系の岩塊が露出しており、築造の際の周辺で比較的容易に石材を確保できたものと推測される。
- (注8) 丹後町の大成古墳群においても、埋葬面の下層からもう1面の平坦面を検出しているが、そこでは埋葬に先立つ整地層と判断されている。
堤 圭三郎・高橋美久二「大成古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査報告』京都府教育委員会) 1968
- (注9) こうした羨道部・開口部の造成については、他の報告でも指摘されている。
『嵯峨野の古墳時代—御堂ヶ池群集上発掘調査報告』京都大学考古学研究会 1971
- (注10) 鉄刀2振りのうち、第38図の1についてのみ図化した。
- (注11) 本古墳とはほぼ同時期に調査された久美浜町の湯舟坂2号墳出土の須恵器の中に、このタイプと同様のもので、天井部につまみをもつものともたないものがあるという。京都府教育委員会の奥村清一郎技師の御教示による。
- (注12) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』 1966
同 『須恵器大成』 1981
および『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会 1971 を参考にした。
- (注13) 調査期間中、宿舎を提供して下さった伊根町の民宿与謝荘(倉田周三氏)のみなさんには、ひとかたならぬお世話になり感謝しています。

4. 前柵2号墳発掘調査概要

1. はじめに

ここに報告する前柵2号墳は、京都府の最南端、相楽郡のほぼ中央に位置する加茂町大字尻枝小字前柵55番地の4に所在する。加茂町は、東・北は笠置町・和束町、西北は山城町、西は木津町、南は奈良市とそれぞれ接する。東部は笠置山系、北部は鷲峰山系、南・西部は奈良山丘陵に囲まれた山間の平野である。加茂町平野を形成している新川・赤田川・大谷川はそれぞれ北流して町の中央へ流れ込む。前柵2号墳を含めた前柵古墳群はそのうち大谷川水系によって形成された谷底平野に面した丘陵稜線上に立地する(第39図)。

前柵古墳群は『京都府遺跡地図』^(注1)では前柵古墳として記載されているのみで、今回調査した2号墳以下5号墳までは同書編集発行当時確認されておらず今回初めて確認された。なお『京都府遺跡地図』記載のものを1号墳とし、今回新たに確認された古墳を順に番号を設けた。

この度、京都府道路建設課が一般道木津一大柳生線の拡幅工事を計画し、丘陵端を切り崩したところ、地元有識者^(注2)が古墳の存在を確認するに至った。そのため、府道路建設課と府文化財保護課との間で協議がもたれ、文化財保護法に基づき早急に発掘調査を実施することとなり、当調査研究センターに調査依頼があった。

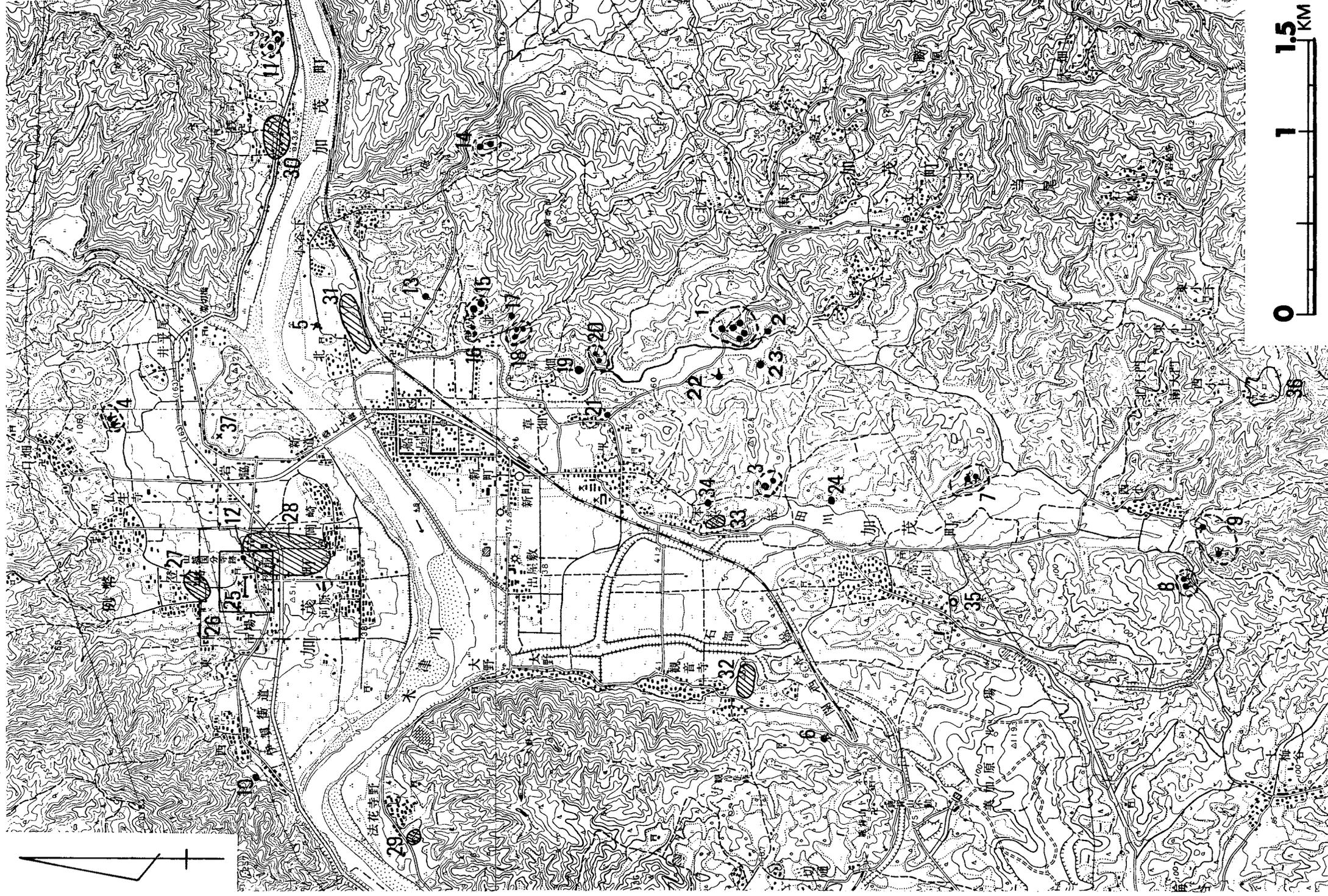
発掘調査と併行して実施した分布調査で新たに3基の古墳が発見され、前記2古墳と合わせて全体で5基からなる群集墳であることが判明した(第40図)。

このうち調査の対象となった2号墳は、発掘調査の結果、外部施設、内部施設共に良好な保存状態であることが明らかとなった。これを受けて、府道路建設課はこの古墳を保護する形で工事の計画を変更され文化財保護の顕彰に努められた。

2. 調査経過

昭和56年12月7日、現地へ器材を搬入し、8日から墳丘の伐採を開始、10日の慰霊祭^(注3)の後、石室内埋土の除去作業をはじめた。

調査は、主体部のみならず墳丘自体の構造及び原地形を確認するため、墳丘全面にわたって発掘区域を設定した。しかし調査の進行に伴って石室が完存していることが判明し、さらに墳丘の東裾部から中世墓群が新たに発見されるなど、予想外の成果があった。このため、



第39図 加茂町遺跡分布図

- | | | | | | | | |
|------------|-----------|-----------|-----------|---------------|-----------|-----------|-------------|
| 1. 前門古墳 | 2. (前門)古墳 | 3. 塚穴古墳 | 4. 狭間瓦窯 | 5. 北瓦窯 | 6. 節句田窯跡 | 7. 栗田窯跡 | 8. 新池窯跡 |
| 9. 西小窯跡 | 10. 椎ノ谷古墳 | 11. 縄手古墳 | 12. 考古墳 | 13. 高塚古墳 | 14. 森山上古墳 | 15. 寺上古墳 | 16. 灯明寺墓山古墳 |
| 17. 龍王山古墳 | 18. 六丁山古墳 | 19. 石塚古墳 | 20. 草ヶ山古墳 | 21. (里)古墳 | 22. 西門窯跡 | 23. 井手塚古墳 | 24. 砂原山古墳 |
| 25. 山城国分寺跡 | 26. 恭仁宮跡 | 27. 小ノ林遺跡 | 28. 例幣遺跡 | 29. 国分尼寺跡(推定) | 30. 銭可遺跡 | 31. (北)遺跡 | 32. 観音寺遺跡 |
| 33. 高田遺跡 | 34. 野上古墳 | 35. 大木屋遺跡 | 36. 浄瑠璃寺 | 37. 流岡山石鏡採取地点 | | | |



第 40 图 前柵古墳群地形图

約1か月の調査予定が大幅に延び、昭和57年2月23日に現地調査を終了した。

なお、発掘調査期間中、府木津土木工管所、加茂町教育委員会、府山城教育局、府文化財保護課、地元尻枝地区から援助があった。また、堀平義・清水彰男の両氏からは調査の便宜を計って頂いた。さらに地元有志の方々並びに学生諸君の積極的な参加があった。^(注4)記して謝意を表します。

3. 前柵2号墳の調査

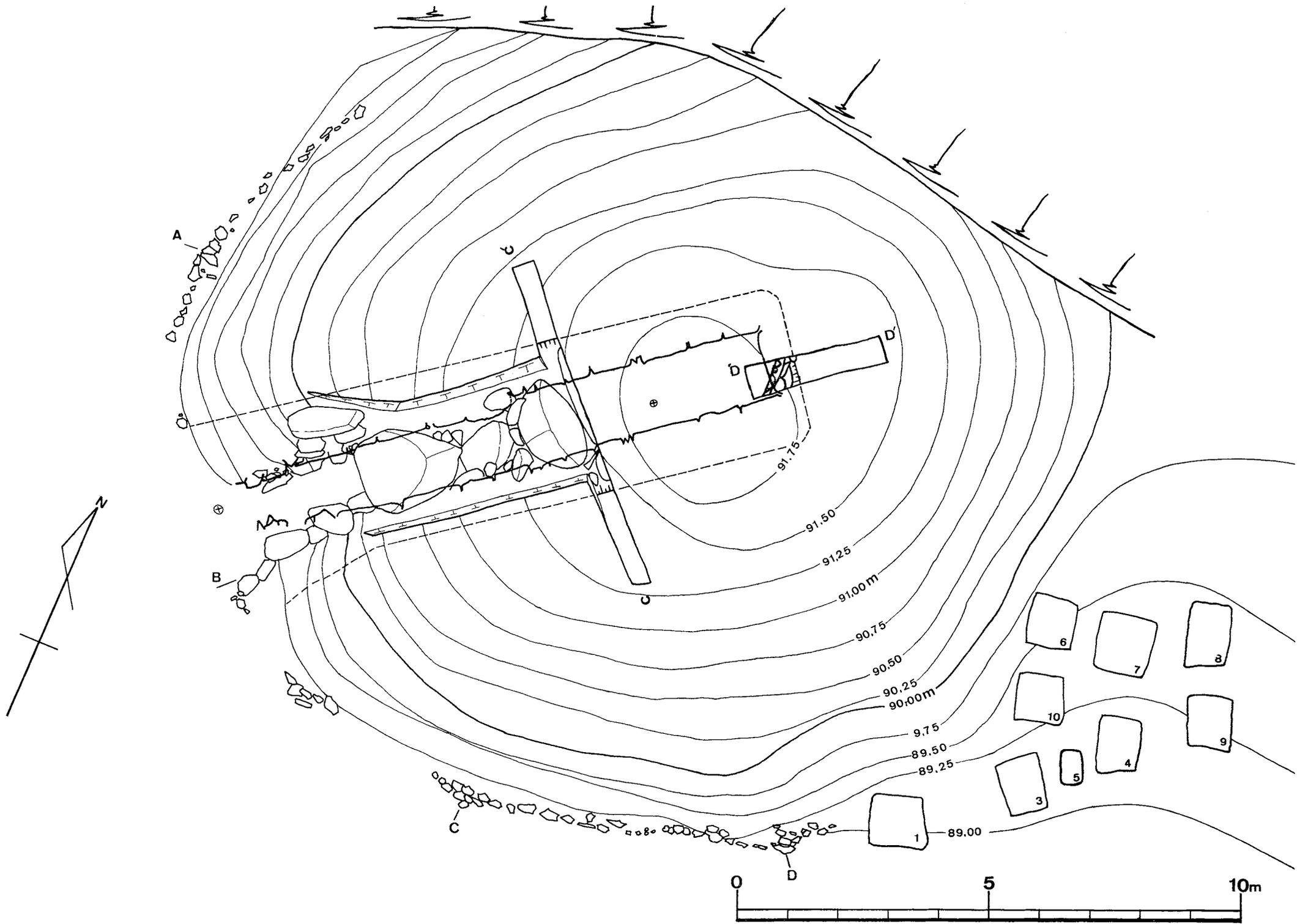
(1) 前柵古墳群と周辺の古墳

加茂平野周辺に分布する古墳は、木津川に流入する小河川水系ごとに点在している。すなわち、赤田川水系では塚穴古墳群・野上古墳・砂原山古墳が、大谷川水系では高塚古墳・寺山古墳群・灯明寺裏山古墳群・龍王山古墳・六丁山古墳群・石塚古墳・草ヶ山古墳群・前柵古墳群・井手塚古墳^(注5)が、丑谷川水系では森山上古墳群がそれぞれ所在する。これらの小支群のうち、大谷川水系のものがその中心的位置を占めている(第39図)。

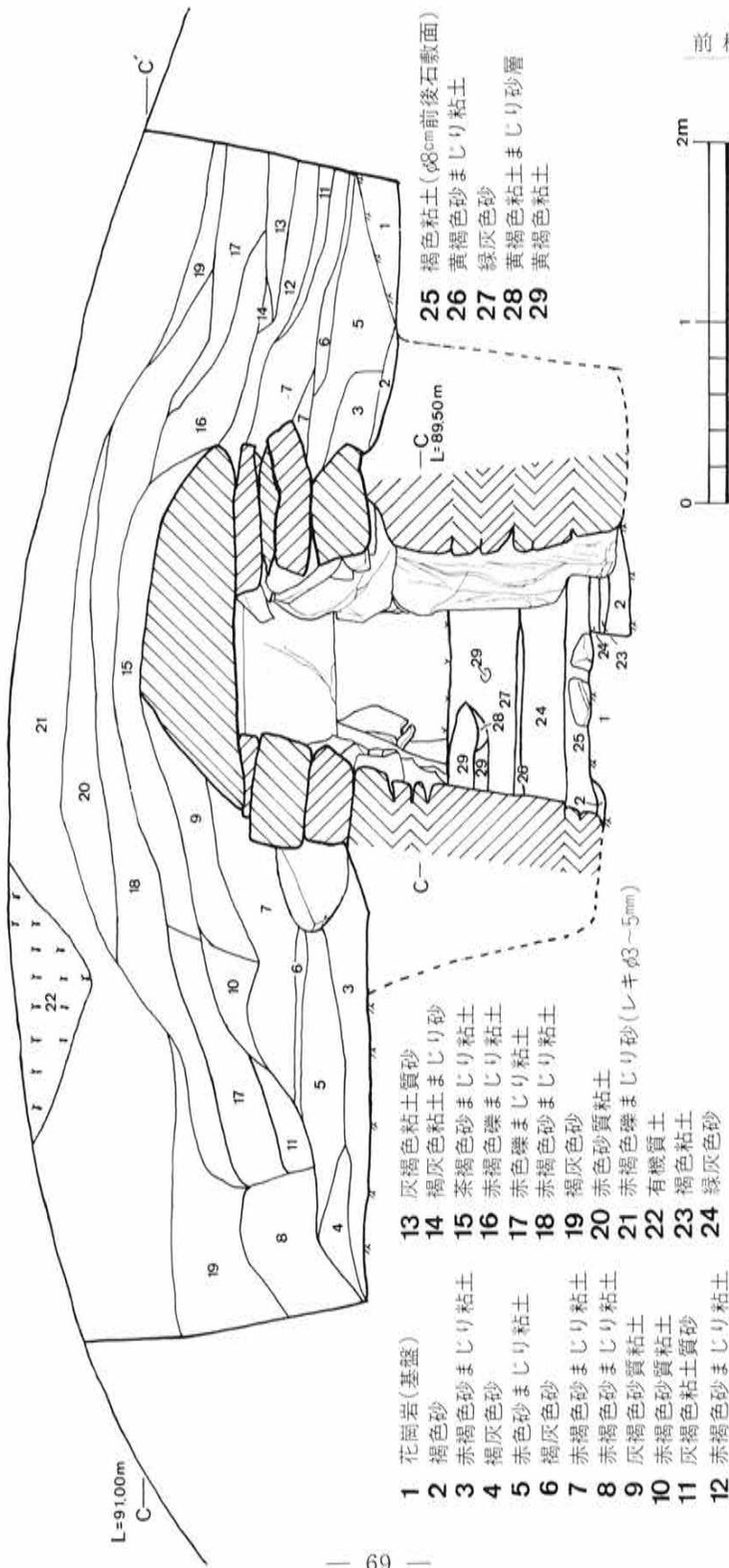
『京都府遺跡地図』に記載されている前柵古墳は現在すでに消滅している。今回新たに発見された4基を加えると、本古墳群は現在知られている加茂町内の古墳群の中でも最も大きな群をなすものと言える。2号墳は後述するとして、3号墳は海拔96mの丘陵稜線上に所在する。現在墳丘は失われており天井石が露出している。石室は、玄室長3.1m、幅1.4m、現存高1.6mを測る。玄室の天井石は3枚、羨道部の天井石は1枚で、玄室天井石の最大ものは長さ1.8m、幅1.3m、厚さ0.8mを測る。羨道部は地境の崖面に露出しており開口方向はほぼ西向きである。4号墳は海拔87mを測る稜線上にあり、墳丘の形状をよく残しているが、石室の天井石は近年持ち去られたらしい。石室幅1.2mを測り、側壁は右側壁が2石、左側が1石現存する。墳丘の南側には天井石に使用されたと思われる巨石一個が転落している。石室は3号墳と同じくほぼ西に開口している。したがって、3・4号墳ともに石室は、西方へのびる尾根筋に向かって開口していることが分かる。5号墳は、海拔80mを測る丘陵稜にある。近年の道路拡幅工事の折、削平をうけたと言う。現在畑の傾斜面に2個の巨石があるが、旧状を窺うことは出来ない。また、工事の時、鉄製の刀らしきものが数口出土したらしい。2号墳は、古墳群中3号墳に次いで高位置に立地し、海拔92m、現大谷川河床との比較差24mを測り、たび重なる道路の拡幅によって崖に突出した古墳のように見える。旧状はもっとなだらかな斜面であったと思われる(第40図)。

(2) 墳丘及び外部施設(第41～43図)

墳丘は、丘陵の先端部を整形して営まれた円墳であるが、石室の主軸方向がやや長い楕円



第41图 2号墳墳丘測量図及び中世墳墓・墓塚位置図



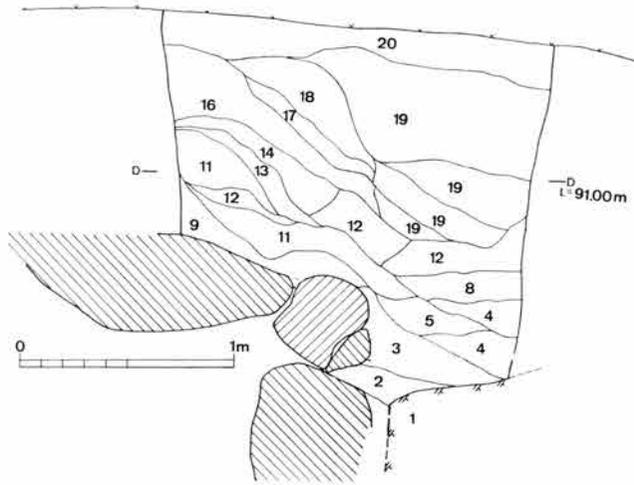
- 25 褐色粘土(φ8cm前後石敷面)
- 26 黄褐色砂まじり粘土
- 27 緑灰色砂
- 28 黄褐色粘土まじり砂層
- 29 黄褐色粘土

- 13 灰褐色粘土質砂
- 14 褐灰色粘土まじり砂
- 15 茶褐色粘土まじり粘土
- 16 赤褐色礫まじり粘土
- 17 赤色砂まじり粘土
- 18 赤褐色砂まじり粘土
- 19 褐灰色砂
- 20 赤色砂質粘土
- 21 赤褐色礫まじり砂(レキφ3~5mm)
- 22 有機質土
- 23 褐色粘土
- 24 緑灰色砂

- 1 花崗岩(基盤)
- 2 褐色砂
- 3 赤褐色砂まじり粘土
- 4 褐灰色砂
- 5 赤色砂まじり粘土
- 6 褐灰色砂
- 7 赤褐色砂まじり粘土
- 8 赤褐色砂まじり粘土
- 9 灰褐色砂質粘土
- 10 赤褐色砂質粘土
- 11 灰褐色粘土質砂
- 12 赤褐色砂まじり粘土

第42図 墳丘横断面及び石室内土層断面図





第43図 墳丘縦断面図

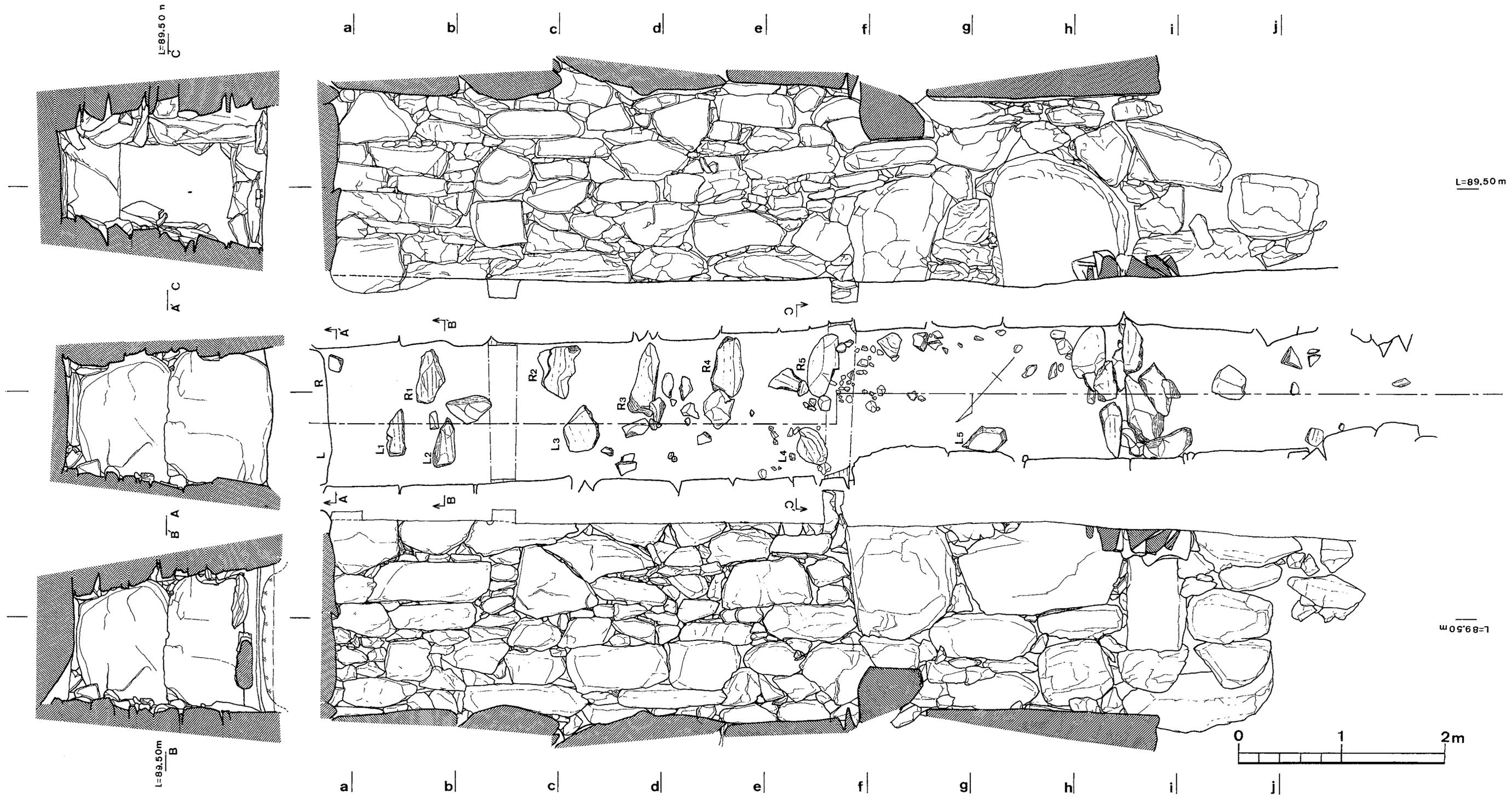
形を呈する。墳丘裾部をめぐる列石によって、長径19.5m、短径18.5mを推定復元できる。墳丘は、基盤層を掘り込んで石室壁を積み上げ、三段目よりは裏込めの粘土を積みながら五段目まで構築し、天井石を被せて盛土している。そして周囲には外護列石を配しその景観を整えているが、列石は羨道部から外側へラップ状に開く。墳丘西側の列石は、一段もしくは二段目まで遺存している。比較的良好な保存状態を示しているように見えるが北に進むに従って状態が悪くなり、基底石を失ってしまっている。ただ、石室開口部より約5mのところにある人頭大の石二段は、他の石より大きなものが使われており、造営時の区画を意味するもの(A)と推測される。

墳丘東側の列石の中にも同様のものが認められる。石室開口部より1mのところの一辺30cm以上の四角い石が立っている(B)。又開口部より7mの所で人頭大の石を三段積み上げ二辺の稜をなしている(C)。開口部より13mの所では人頭大の石を縦に四段積み上げ二辺の稜をなす(D)。これらの石組みA・B・C・Dの各点と墳丘中心部とを結ぶと、それぞれが約40度の角度をもって配置されていることがわかる。

このことによりこの古墳が墳丘の外護施設を造営するために用いた測量は、9か所の基準ポイントを持っていたと想定される。まず、これらの石は墳丘中央より等距離で測量され数段積み上げた後、その間を埋める形で列石を積み上げていったと推定される。

(3) 内部構造及び埋葬施設(第44・45図)

横穴式石室は、かなり古くから天井石の一部が露出しており、地元ではこれをもって「塚」と呼んでいた。露出していた天井石は羨道・玄室の各一石で、玄室と羨道の境の天井が一段



第44图 2号墳石室実測図

低くなっているため二つの石の間が陥没していた。調査前、盗掘塚とされていた所である。天井石の上部は粘土で覆われていたようであるが、天井石の接合が極めて粗雑であるため、永年の間に多量の粘土が石室内へ雨水と共に流入し、石室内部全体を埋めてしまったと推定される。

石室は、両袖式で、壁は持ち送り式になっている。天井部は玄室で四枚、羨道部で二枚の巨石から構成されている。その規模は、羨道部で天井幅0.7m、床面幅1.0~1.15m、高さ1.9m、袖部の天井は一段低く1.4mを測る。袖は、左側壁で0.25m、右側壁は左側壁より0.1m広い。天井幅は玄室入口部で1.95m、奥壁で1.8mを測る。

石室は(1)で述べたように、尾根の基盤層を掘り込み、一段目の石を横長に置く。袖石は他の石よりも深く掘り込んで縦長に埋めている。玄室内の壁は五段に積まれ、最下段の石を除いて、長軸0.6~1.1m、短軸0.3~0.6mの自然石の比較的平坦な面を室内に向けて平積みし、それらの石の隙間に長軸0.3m程度の自然石をはめ込んでいる。

羨道部の壁は三段に積まれており、一段目の掘り込みは袖部同様深い。石は長軸1.0~1.2mの巨石を使用している。二段目以上は玄室と同様の組み方がとられている。また、左側壁では短軸0.6m、長軸1.2mの縦長の石が目にとまる。これは閉塞石を意識したものであろう。

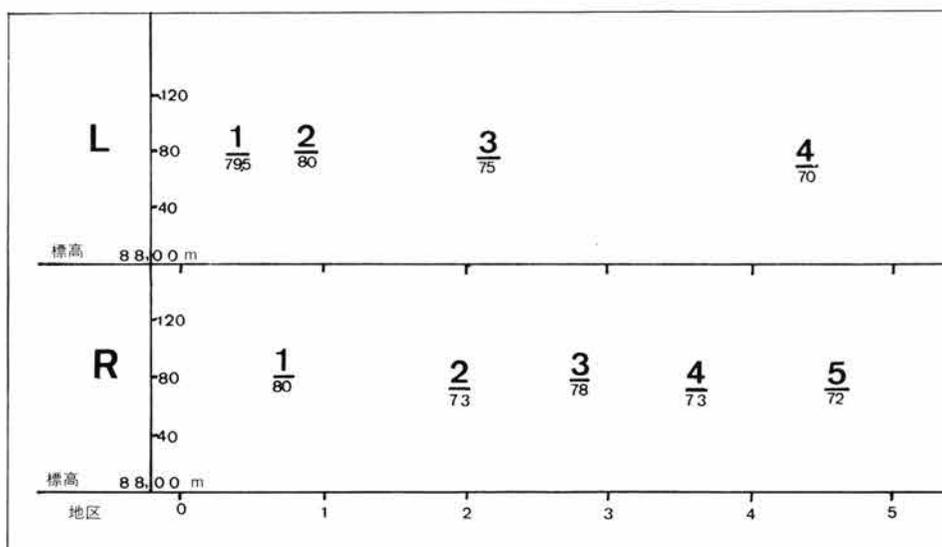
奥壁は下段に中軸1.0m×長軸1.2m、上段に中軸0.9m×長軸1.2mの自然石をいずれも長軸を縦位置にして二段に積み、天井部との隙間を0.2m×0.7mの石で塞ぎ、さらに人頭大の石で補填している。

石室内は天井部まで砂と粘土で埋まっており、床面上部でも土器を封じ込めたりして各時期の文化面が水平をなさず、凸凹の状態であった。床面上部約0.5mまでは数枚の粘土と砂の層が認められ、羨道部では掻き出された遺物がその上に散乱していた。断ち割りで確認した玄室床面付近の層序は、上層から、砂層、礫敷粘土層(約5cmの床面)、砂層(花崗岩の風化による真砂)、花崗岩基盤の順で、基盤は全体に水平をなさず、うねりをみせる。また玄門付近から基盤が羨道部入口に向かって緩やかに下向している。従って床面は奥から外へ下る緩斜面となる。

石室内では、石床・棺台・閉塞石の三種類の施設と、側壁掘方・二次の掘方が検出された。

石床は、まず粘土を張った上に直径8cm余りの河原石を敷き並べて床面としたものであるが、幾度にもわたる追葬によって掻き出されたりしてその大半が失われ、玄室入口付近でわずかに検出されたにすぎない。

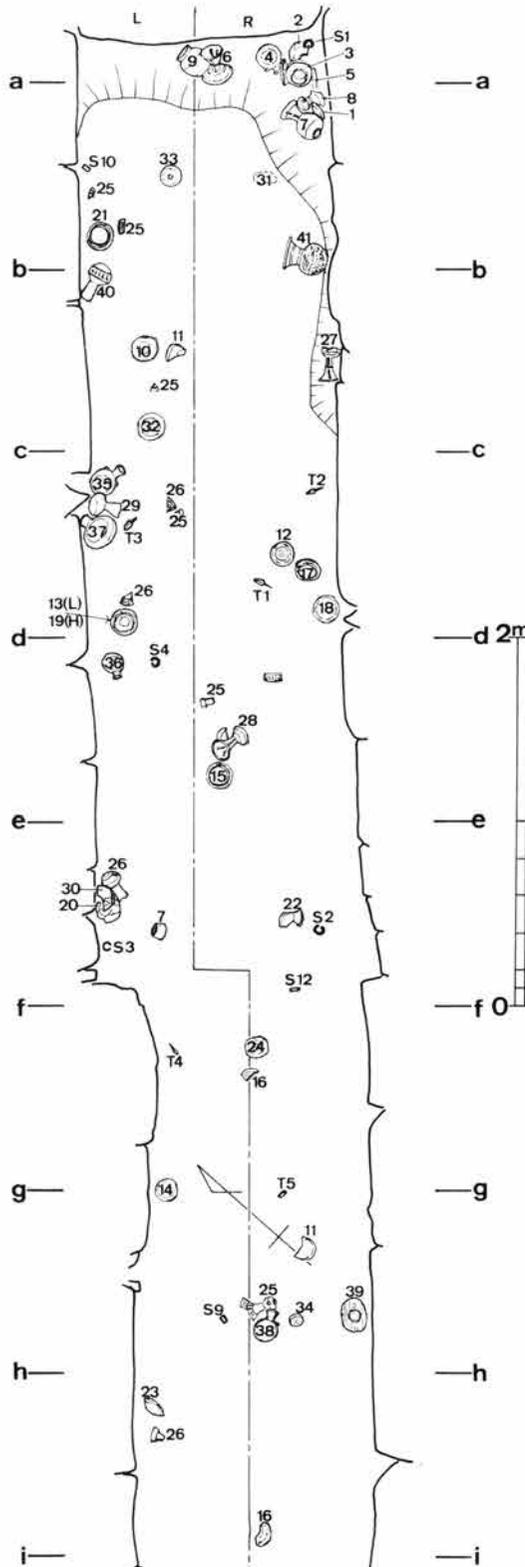
棺台(第44図、図版第45)は、石床の上に粘土や礫で固定した長軸0.4~0.6cmの石の施設で、木棺を載せた台である。玄室内で二列にわたって検出され、幅の狭い玄室に二列の棺が



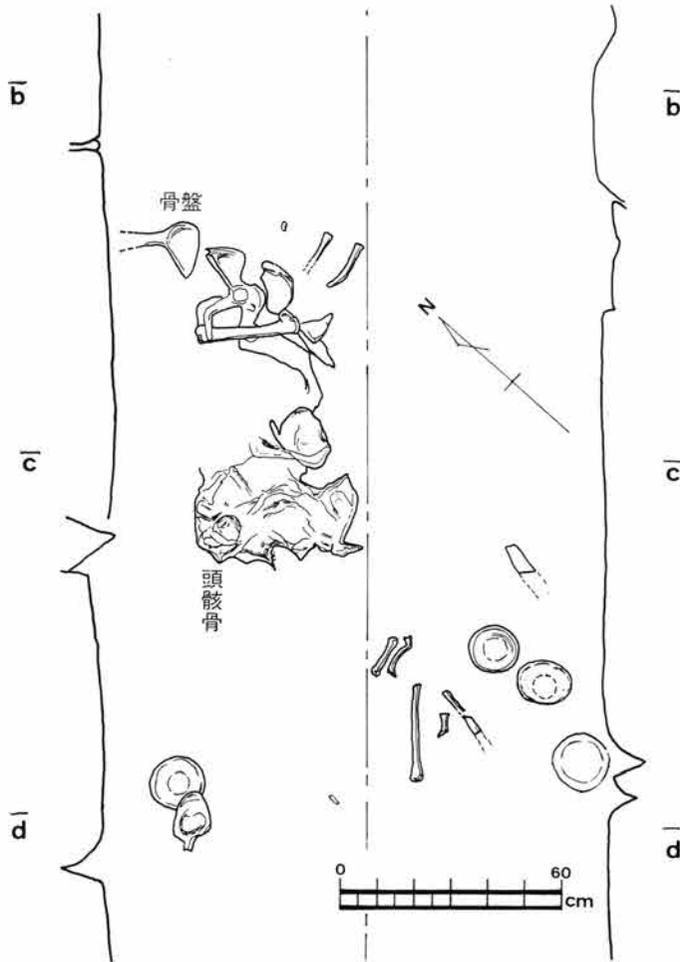
第45図 棺台レベル模式図

平面箇所にて何度かにわたって追葬されていた。石室内地割は、便宜上、石室中軸より右側をR、左側をLとし、奥壁からa・b・c……と1m割とし、さらに奥から順に右列をR₁・R₂左列をL₁・L₂に細分して以下記述する。各棺台のレベルをみると、R₁とR₂は7cmの差をもち、同一時期のものでないことが分かる。R₁とR₃は2cm程度の差で、棺を置くことは可能ではあるが、R₃の棺台の上では入口方向に伸びる木棺の痕跡を検出しているから、奥の二石は別々の棺台である。もちろんR₂がより古い時期に属するものである。R₃の棺台は、R₄・R₅とは8cm以上高く、より新しいものである。R₄・R₅は3cm程度のレベル差があり、それらの中間部で出土した人骨の棺台と考えてよかろう。石室左列では、L₁・L₂はほぼ同一レベルである。L₃はL₁・L₂より5cm深く、この地区でのより古い時期の棺台である。なお、L₄上面より人骨（頭骸骨・歯）が検出された。また人骨下より出土した高杯蓋(32)は追葬のために奥壁土壌に埋納された遺物とセット関係をなす。L₄は単独で検出されたが、そのレベルから考えて、第1次埋葬期と併行するものであろう。この地区ではレベルの高い棺台を確認していない。あるいは第1次埋葬のみであったかも知れない。

次に側壁掘方・二次掘方（第44・46図）についてである。玄室の奥壁及び側壁の断ち割りによって側壁より3～5cmの幅でこれと並行する掘方を検出した。これは石室最下段の石を据えるための施設で、袖石部では特に深く幅40cm深さ25cmを測る。これらの掘方は粘土塊や粘土の薄層をはさむ砂で覆われていた。また奥壁付近では、粘土床が失われ、細・中砂を中心とする粘土混じり土の盛り上がり確認された。埋土を取り除いたところ、粘土床上面か



第 46 図 石室内遺物出土状況



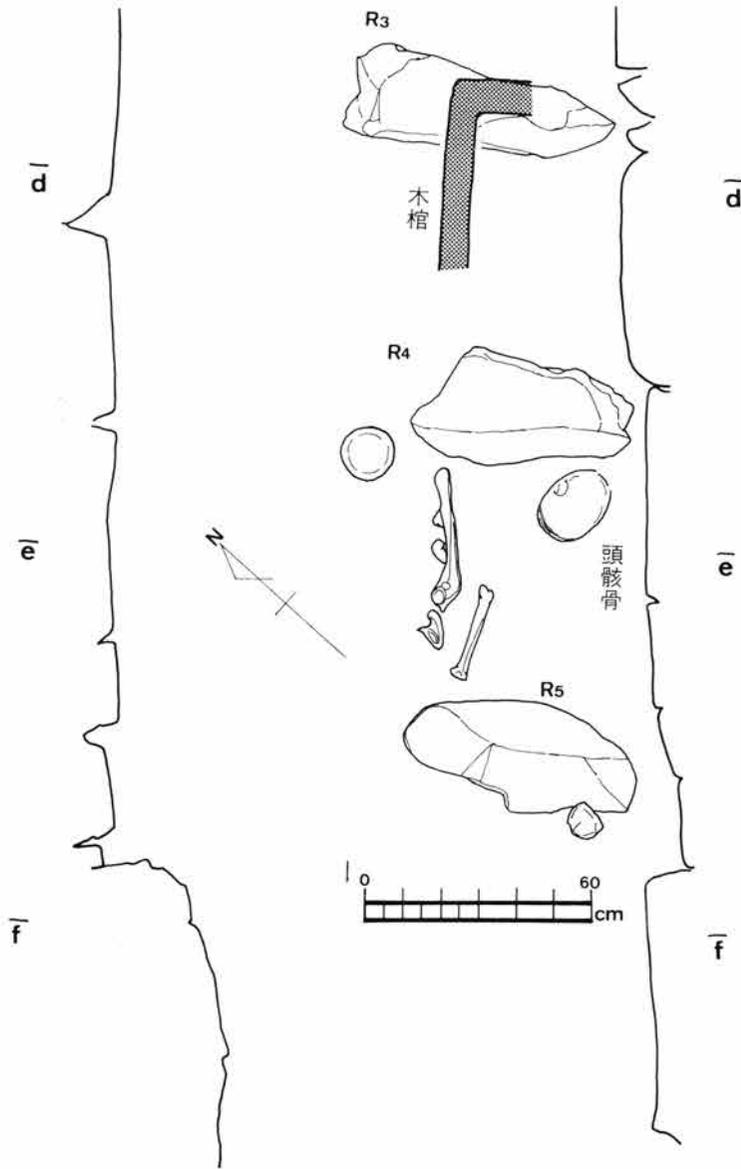
第47図 人骨出土状況

ら20cm以上花崗岩の基盤を掘り込んだ土壌を検出した。土壌は奥壁と両側壁に三方を画され、L区奥壁端(L_b区)より0.5mからコの字にまわり、R区奥壁端より2.2m(R_c区)で終わる。R_c区では側壁築造期の掘り方と二次掘り方が一部一致しており、奥壁付近の二次掘り方との構築法が異なる可能性を有している。(戸原 和人)

(4) 遺物出土状況

埋葬遺物には、埋葬主体である人骨と副葬品としての土器・鉄器・石製品などがある。

木棺(第48図, 図版第43-5・6)は、棺台R₃の左上隅で、幅8~10cm、高さ10cmを50cmにわたって検出した。木質や釘などは確認できなかった。棺が朽ちる段階で随時上層の砂が流入し、その砂は頭骸骨内にも及んでいた。釘を確認していない点から、釘使用を要しない



第 48 図 人骨及び木棺出土状況

形のものであった可能性がある。

人骨（第47・48図、図版第45）については、横穴式石室で人骨が出土する例は、木棺使用の場合稀である。当古墳では3体の人骨を確認できた。1体は棺台 R₃ の上部で出土した木棺痕の中の頭骸骨とその周辺部及び上層での人骨片で、棺台 R₃ に伴うⅡ期の埋葬主体である。次に棺台 R₄・R₅ の中間部で確認された頭骸骨及び大腿骨であるが、これは棺台 R₄・R₅ に伴うⅠ期の埋葬主体である。3体目は棺台 L₃ の上で検出された頭骸骨及び骨盤、大腿骨

である。これは棺台 L₃ に伴う I 期埋葬主体である。

次に土器・装身具類（第46図，図版第42～44）についてである。須恵器・土師器・装身具類・鉄製品などの副葬品の出土状況は、大きく分けると下記のとおりである。

- 1 奥壁土壌に投与された一群
- 2 羨道部上面に掻き出された一群
- 3 棺台の上面もしくは礫敷粘土床面において、原位置が若干移動した状況で検出されたもの

すなわち、1は、奥壁土壌を埋めた砂層中、もしくは基盤に接した状態の一群である。詳細については4-(1)で触れるが、土器9個体、金環1個体を含んでいた。土器は礫敷粘土面より下位であった。2は羨道部中央の羨道床面より約50cm高い位置—海拔89.3m～89.15m—の一群である。遺物として、蓋杯類、台付甕、提瓶、短頸壺の蓋、管玉、刀子などが長さ約1mにわたって掻き出された状態で出土した。3は、ほぼ最終床面上に分布し、棺台との関係で注目される。その一部は群をなすかのように側壁際に集められている（例えば、L_d区の提瓶・壺など、L_r区の杯身・壺・甕など）。原位置を保った状態で出土した器種では蓋杯類が多く占め、他の器種は羨道部の提瓶を除いて移動が顕著である。

4. 前柵2号墳出土遺物

出土遺物には、須恵器・土師器の土器類と金環・管玉の装身具、鉄鏃や刀子の鉄製品がある。土器類では、石室内からは41個体、他に甕の体部・頸部片数点が出土した。しかも、棺台に付随して原位置を保つもの、追葬に従って土壌の掘方内に埋められたもの、片付けられ集積しているものなど、それぞれ出土状況を異にしている。以下順を追って述べることにする。

(1) 奥壁土壌出土一括資料（第49図）

石室内最奥部、長さ80cm、幅130cmの土壌中より出土した土器には以下のものがある。

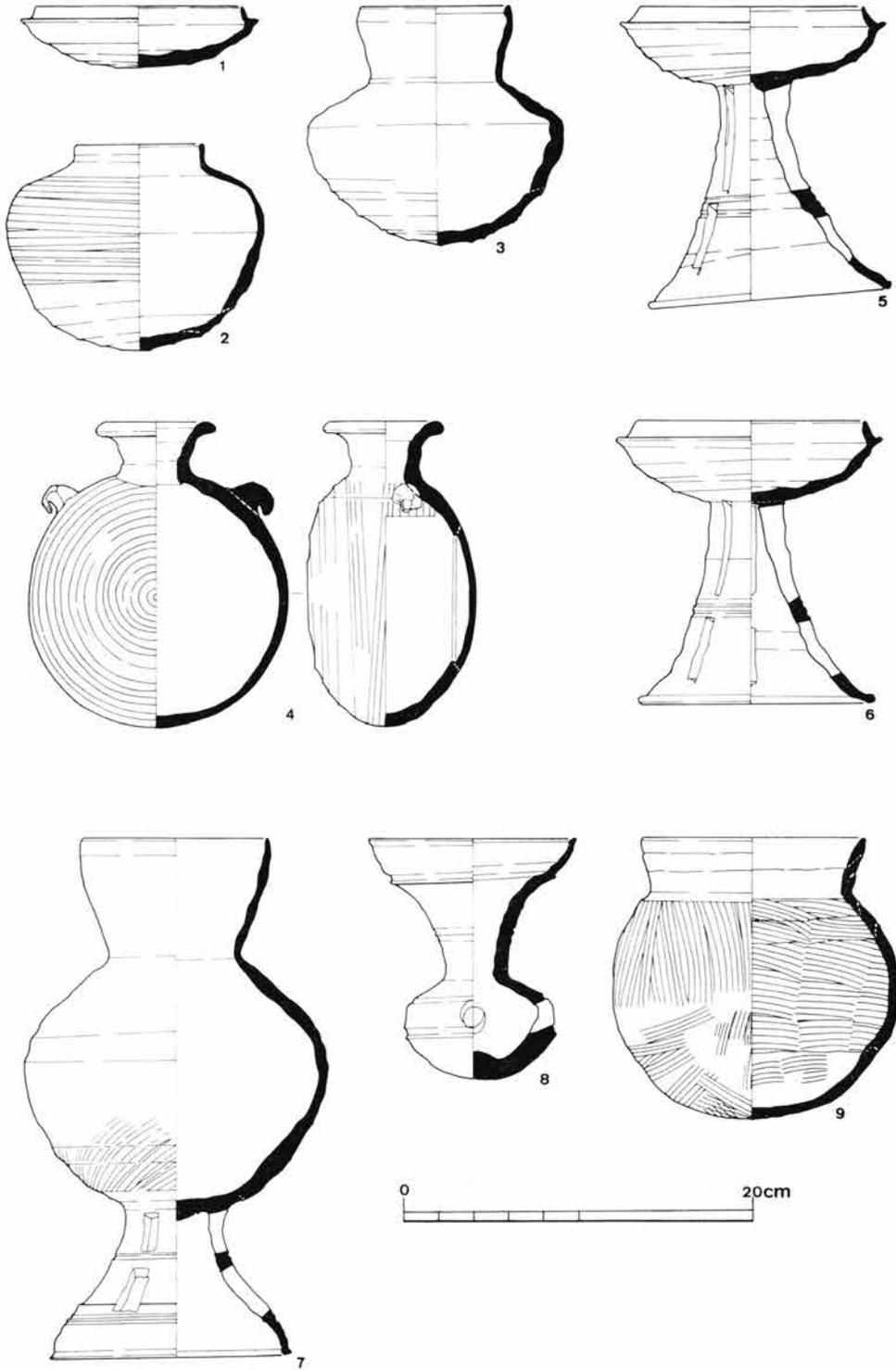
須恵器：杯身1，短頸壺1，壺1，提瓶1，高杯2，台付壺1，甕1

土師器：甕1

（以上9個体）

それぞれは不規則に投棄された状態で集積し、花崗岩の基盤に接していた。

杯身（第49図1） 口径11.7cm、器高3.6cmを測る。立ち上がりが内傾しながら斜め上方に伸び、端部は丸くおさめる。底体部外面の2分の1以上をロクロ時計回りでヘラケズリし、内面はヨコナデするが内面中央には最終の直線ナデはみられない。細かい砂粒を含むが精良な胎土である。外面灰色、内面黒灰色を呈す。



第 49 図 奥壁塚一括遺物実測図

短頸壺(第49図2) 口径7.1cm, 器高11.7cmを測る。体部上半はカキ目調整の後ヨコナデを施し, 下半はロクロ反時計回りでヘラケズリする。体部内面下半は, 成形時の粘土紐巻き上げ痕が明瞭であり, 底部外面にはヘラオコシ時のヘラが当たった痕跡がある。胎土は径1~2mmの砂粒を多く含みやや粗い。口縁部から肩部にかけての外面には, 焼成時の被蓋状況を思わせる変色があるが, 出土した蓋(第51図34)とは焼成時でのセットではない。緑灰~灰色を呈する。

壺(第49図3) 口径8.4cm, 器高13.7cmを測る。口縁は外反した後内湾し端部にやや内傾して終わる。最大径を体部上半に有し, 不明瞭な稜をもつ。体部外面下半はロクロ時計回りでヘラケズリし, 上半部は口縁にかけてヨコナデする。体部内面は成形時の粘土紐に沿って断面が波うつ上をヨコナデとタテナデを併用して調整する。淡灰色を呈し, 径2~4mmのチャート・石英からなる砂粒を含むやや粗い胎土である。底部外面には黒色の粒子がみられる。

提瓶(第49図4) 口径5.7cm, 器高17.6cmを測る。今回の出土例中には環状の耳をもつものと鉤状の耳をもつものがあるが, 本例は後者に属する。口頸部は短く外反し, 端部を丸くおさめる。なお口頸部及び体部は中軸上で左右対称形をなす。6条/cmの粗いカキ目調整とロクロ時計回りのヘラケズリが体部表・裏面にそれぞれ施されている。耳の接合前に口頸部のヨコナデが行われ肩部にまで及ぶ。体部側面の肩部では耳の貼り付け痕が明瞭に観察できる。口頸部内面の上位には強いヨコナデのための稜線がある。径2~8mmの砂礫を認めるが, 全体に精良な胎土である。焼成はあまく, 淡灰色を呈する。

高杯(第49図5・6) 5は口径12.5cm, 受部径15.2cm, 器高16.5cm, 6は同12.9cm, 同15.2cm, 同16.3cmを測る。ともに受部立ち上がりが斜め上方に内傾する有蓋高杯である。杯部外面下半は脚部接合前にロクロ時計回りでヘラケズリし, その上半をヨコナデ調整する。底部内面には最終の直線ナデが入る。脚部外面中位には2条の沈線が入り, 上・下半を画する。5の脚部内面にはうねりの稜がみられる。3方2段のスカシは不定形であり, 上下段ではずれ, 粗い成形である。さらに6では脚部外面中位に非常に細かいカキ目調整が施されている。胎土は, 5よりも6が粗く, 径3~8mmの礫が混入し, 白っぽい砂粒も多い。堅緻な焼成であり, 青灰色を呈する。

台付壺(第49図7) 口径10.7cm, 器高29.2cm, 脚部高8.6cm, 体部径17.3cmを測る。口頸部から口縁部にかけて内湾し, 端部を丸くおさめる。最大腹径はほぼ中位にあり, そこに不明瞭な幅広の回帯を有する。台部は外反の後内湾し下端で平坦面をなし肥厚する。体部外面下半はヘラオコシ時のヘラケズリ痕がみられ, さらに斜め方向の連続したカキ目調整を経た後ヨコ方向にナデ消す。台の外面は2段の長方形三方スカシを上下に画するかのよう

線が施される。底部外面に同心円文状の文様が有り、中心に刺突痕をとどめる。頸部以下はヨコナデされ薄手に調整している。径4～5mmの礫を含むが精良な胎土であり、青灰色を呈する。

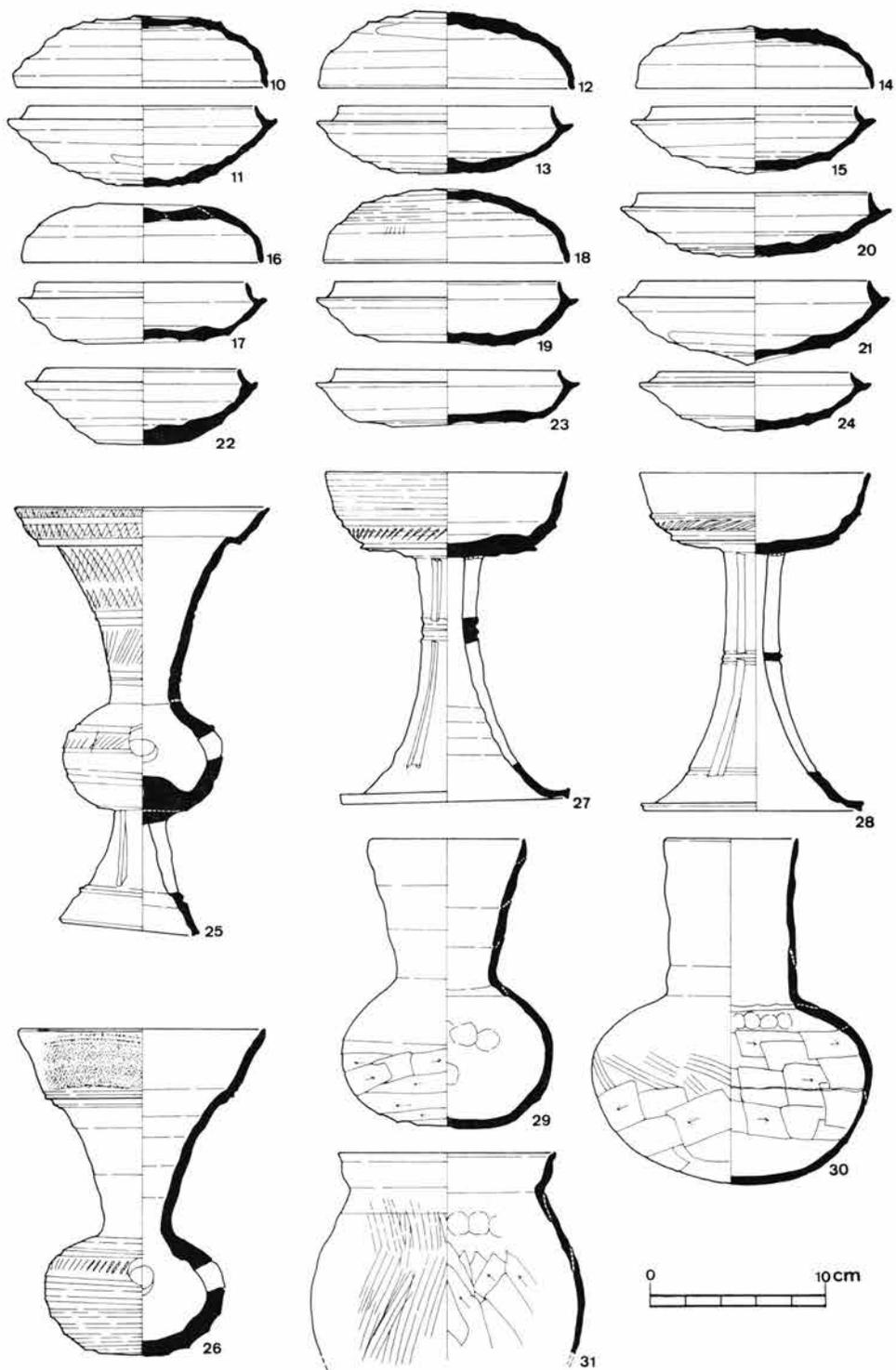
甕（第49図8） 口径11.8cm、器高13.9cmを測り、小型品である。頸部はゆるやかに外反し、外面に稜をなす。若干の肥厚をみる端部で内湾しておわる。頸部外面中央には2条の不明瞭な沈線が走る。穿孔された注口は径1.51cmを測り斜め上方に向く。体部外面には注口をはさみ、大小合わせて2条の沈線がめぐる。施文はなく、内外面ヨコナデするのみである。胎土は精良で、頸部外面等に自然釉と思われる黒色のタール状の粒子が付着している。

土師器・甕（第49図9） 一括資料中土師器は本例一点のみである。口径部12.5cm、器高16.2cmを測る。「く」の字状に屈曲して、外向きに伸びた口縁は肥厚せず丸くおさめる。体部はほぼ球形であるが焼けひずみがみられる。肩部から頸部にかけては断面において内傾する擬凹線が観察でき粘土紐成形がなされる。口縁内外面はヨコナデ、体部外面は頸部からすこし下った位置から最大腹径まで規則的な連続タテハケ、以下を不定方向のハケ調整後ナデ消す。体部内面は屈曲部から若干下った位置から幅3～4cm単位のヨコハケを左方向に施し、以下をハケ調整後ナデ消す。径2～3mmのチャート礫等を含む胎土であるが精良である。肩部外面には幅2～3cm程度の黒斑を認めるが、火にかけられ使用された痕跡はない。黄褐色を呈する。胴部には赤色顔料の塗布が観察される。

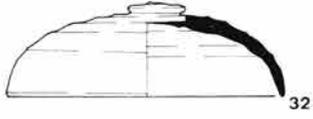
(2) 初期葬及びそれ以降の土器

前記一括遺物は初期の埋葬の際使用された土器がそれ以降の追葬によって奥壁に片付けられたものと推測されるが、初期の埋葬を含めて、原位置を保つものから羨道部付近にまで掻き出されたものなどを以下概観してみたい。

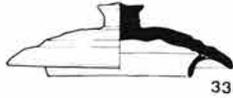
杯身・杯蓋類（第50図10～24） 杯身と杯蓋はセット関係もしくはセットに想定できるものにA・B両タイプがある。杯身A（11・13・15）は、底部が平底でなく、立ち上がりは斜め上方に伸び端部を丸くおさめる。底体部高の3分の1前後の高さまでヘラケズリを施している。奥壁土坑出土の杯身1は本類に属するものである。11は口径13.3cm、器高4.7cmを測る。羨道部にかき出された破片と接合可能であった。立ち上がりは1ほどではない。淡灰色を呈し、やや粗い胎土である。13は口径12.1cm、器高3.9cmを測り、底部外面に広くスス状のものが付着し、胎土は精良である。内面中央には最終の直線ナデが施される。15は口径11.4cm、器高3.9cmで、底部外面には強いヘラケズリがなされる。端部は直立して尖り気味に終わる。砂粒はほとんど含まず、暗灰色を呈する。杯蓋A（10・12・14）は杯身Aにそれぞれ対応する。10は口径14.0cm、器高4.2cmで、口縁端部内面に明瞭な段がつき、前欄出土



第50図 出土遺物実測図(1)



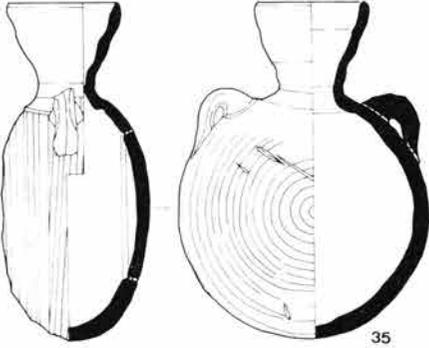
32



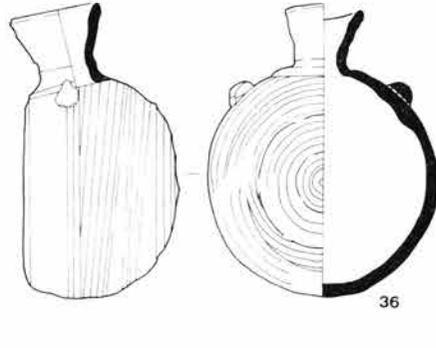
33



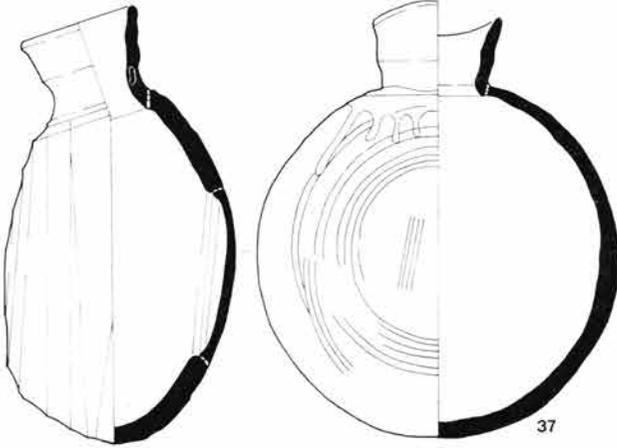
34



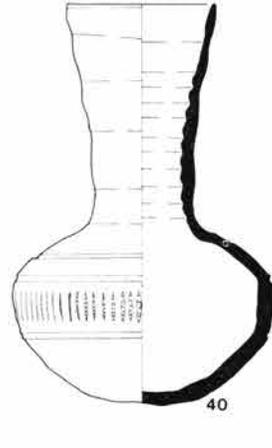
35



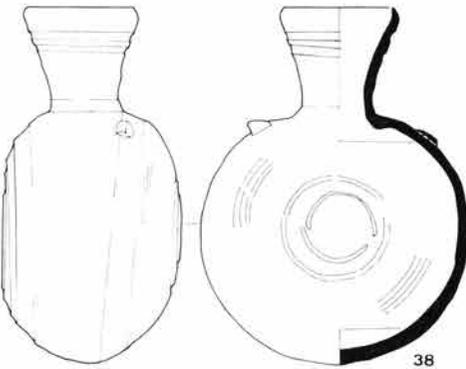
36



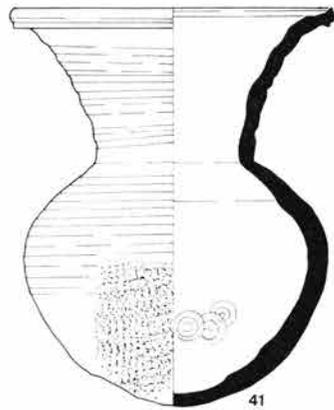
37



40



38

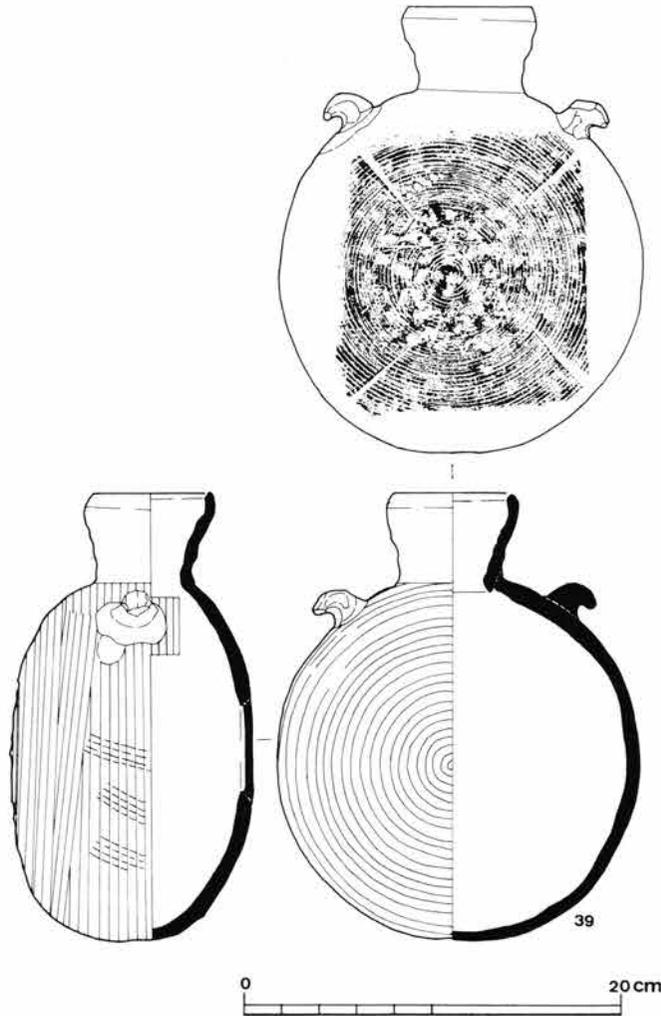


41



第 51 图 出土遺物実測図(2)

杯・蓋類の中では古い様相をみせる。L₆区で11に近接して出土した。径1～2mmの砂粒を含み、暗灰色を呈する。12は口径14.4cm、器高4.5cmで、比較的大型品である。天井部外面には若干のケズリのこしがみられる。外面全体にススが附着し、13の色調に酷似する。14は口径13.4cm、器高3.6cmで、端部は尖り気味におわり、天井部がヘラケズリのために扁平になり、ヘラオコシ時に残った粘土塊が付着している。14のみA類において反時計回りのロクロでヘラケズリを行っている。黒色の粒子が多くみられ、径5mmの礫も含むが、胎土は精良と言える。杯身B（17・19）は杯蓋B（16・18）に対応する。杯身Bは薄い端部を有し、底部外面を強くヘラケズリしたため扁平になっている。17は口径11.7cm、器高3.45cmあり、



第52図 出土遺物実測図(3)

端部は若干肥厚する。なお閉塞石上面にまで搔き出されていた16とセットになる。19は口径12.8cm、器高3.5cmあり、端部は尖り気味に終わり、受部下半には明瞭な稜線がはしる。底部中位にはヘラオコシ時の原体による押圧痕が認められ、ヘラケズリは底面全体に及ぶ。なお19は13と底部を接して同位置に存在し、13が台として使用された可能性がある。23は杯身Bの形式に含まれるが、セットにあたる蓋は見あたらない。23は口径12.5cm、器高3.2cmあり、B形式で唯一反時計回転のロクロ成形がなされ、内面中央は直線ナデで調整される。淡灰色を呈し、精良な胎土である。杯蓋BはAと区別しがたいが、16にあっては天井部が凹むまでに極端にヘラケズリがなされている。口径13.6cm、器高3.4cmを測る。天井下端は強いナデのため凹む。16は羨道部 L_g 区と R_i 区より出土した破片からなり、玄室内より搔き出されたと推察される。18は口径13.9cm、器高4.15cmあり、天井部を比較的丸くヘラケズリ調整する。ヘラの原体はカキ目状のキザミを有し、一部縦方向に原体の擦痕が認められる。内面中央は直線ナデが施され、他は強いヨコナデ調整である。紫灰色を呈し、粗い胎土である。他にセット関係のない杯身としては20~22・24がある。20は口径13.1cm、器高3.6cmを測り、杯身Aに近似するが、立ち上がりが厚手に始まり尖って終わる。ヘラケズリの位置は低く、底部中位は強いヨコナデのため凹む。砂粒を若干含み、土師質である。21は口径12.8cm、器高4.8cmを測る。立ち上がりが厚手であり、底部は尖り気味である。内面には直線ナデが施され、底部外面上半はカキ目状の横線が入る。焼成は軟質で、乳灰色を呈する。22は口径11.1cm、器高4.4cmを測る深手の杯身である。底部は厚手で外面にはヘラオコシ時のケズリのこしがみられる。やや焼成が軟らかく、淡灰色を呈し、精良な胎土である。原位置出土と考えられ、 R_i 区の棺台に据え置かれたと推測される。24は口径10.9cm、器高3.45cmであり、杯・蓋中最も小さい。立ち上がりは大きく内傾し、端部は尖って終わる。内面中央には最終の直線ナデが施され、外面は反時計回りのロクロでもってヘラケズリがなされる。砂粒多く、粗製で、黒色斑を多く認める。

台付甕 (第50図25) 口径14.4cm、器高24.2cmを測る。径2cmの注ぎ口が斜め上方に向かって穿たれた球形の体部に、ラップ状に開きつつ二段にわたって外反する口縁部と、三方スカシをもち、下位に一条の突帯を有する脚部が接続する。口縁部には上位に1条、中位に2条、下位に2条の凹線を施す。口縁端から中位凹線までに連続する斜交字状文を施し、中位から下位凹線文の間には斜線文を施す。体部には注口を挟んで2条の凹線を施し、間に斜線文を施す。脚部は体部下半の反時計回りのロクロヘラケズリの後接合され、調整はナデ仕上げである。体部内面、口縁部内面には焼きぶくれがあり、自然釉が付着している。胎土は精良である。hライン付近の搔き出し遺物中より検出された。

壺 (第50図26) 口径13.8cm, 器高18.7cmを測る。口縁部と口頸部の間に稜線が入るが、25ほど明瞭ではない。端部は単純に終わる。体部外面は径1.5cmの注口が穿たれ、同位にカキ目原体によるナナメ押圧が二条の沈線に挟まれた中間部に施されるが、上半はカキ目調整、下半はカキ目原体によって削られる。なお口縁外面は波状文が施される。内面はすべてヨコナデ仕上げである。径2~4mmの砂粒や礫が混入するが精良な胎土である。20, 土師器30と共にL_r区の棺台に付随するセット土器の一つであろう。

無蓋高杯 (第50図27・28) 共に口縁部が直立ぎみで二条の突帯を低位に有する杯部にラッパ状に開く脚部が接続する。27は、口径13.6cm, 器高19.0cmを測り、体部中位に斜め方向の連続カキ目押圧が施され、脚部中位の二条の凹線をはさんで二段の二方スカシを有する。脚端部はやや外反する。28は口径13.0cm, 器高19.5cmを測り、体部中位に斜めのカキ目押圧痕が施される。脚部下位にも一条の凹線が付加され三方スカシを有する。27の調整は28よりシャープである。棺台の関係から奥壁一括資料の一つに加えることには躊躇される。

土師器 (第50図29・30・31) 29は30と共に単純口縁を有する壺である。口径8.6cm, 器台16.7cmを測る。口縁部は外反するカーブからやや内湾して終わる。頸部から口縁にかけて内傾する接合面をもつ擬凹線が観察し得る。体部最大径は中位をやや下ったところにあり、以下外面をヨコ方向にヘラケズリする。30は口径7.5cm, 器高19.8cmある。直立する口縁部から頸部にかけて外傾する接合面をもつ擬凹線がある。口縁部から肩部にかけて外面をヨコナデ調整、体部をナナメハケ調整後下半を斜め方向でヘラケズリする。体部内面は右方向のヘラケズリを連続させる。共に外面には赤色顔料を塗布する。31は口径12.2cmを測る甕である。口縁は内湾した後つまみ出された端部で終わるが内側に凹面を呈する。外面はナナメハケで調整した後、頸部より少し下った位置までヨコナデする。体部内面は左上向きにヘラケズリを施す。火を受けた痕跡はなく、赤褐色を呈する精良な胎土の土器である。なお31はR_b区の棺台が据えられた粘土床面に破片となって散在していた。

杯蓋 (第51図32) 口径14.1cm, 器高4.9cmを測る。奥壁一括遺物中の有蓋高杯とセット関係にあり、追葬骨の下より出土した。天井部をロクロ時計回りでヘラケズリし、他をヨコナデする。調整ざかいより若干下った所にハケ原体様のアタリがみられる。やや粗質な胎土である。

蓋 (第51図33・34) 33は口径7.3cm, 器高3.9cmを測り、受部がたちあがり、天井部につまみを有する。天井部は反時計回りのロクロでヘラケズリし他をヨコナデする。立ち上がりは内湾して終わる。胎土には砂粒を多少含み、青灰色を呈する。台付壺 (第12図7) とセット関係にある。原位置を保っていたと思われる。34は口径8.6cm, 器高3.3cmを測る。天井部

から内湾して伸びた口縁部はややつまみ出して終わる。天井部はヘラケズリをロクロ時計回りで施し以下をヨコナデする。外面は自然釉がかかり暗灰色を呈する。hラインにおける搔き出し遺物の一つであるが、奥壁一括遺物中の短頸壺（第12図2）とセット関係にある。ただ焼成時でのセット関係ではない。

提瓶（第51・52図35～39） 提瓶は全部で6個体出土した。35は口径5.5cm、器高16.6cmを測る。扁平な体部とやや内湾する口縁を有する。肩部には対称的に環状の耳が付加されている。裏面を削った後、体部全面に同心円状のカキ目調整（7条/cm）を施し、その後口縁部から頸部にかけてヨコナデする。胎土は砂粒を多く含み、青灰色を呈する。これと群をなすものに37がある。口径6.0cm、器高21.7cmを測る大型品であり、口縁部を主軸からずらして接合する。体部は表面を非常に細かくカキ目調整し、裏面を反時計回りのロクロでヘラケズリした後、頸部までヨコナデを広げている。体部上位には灰釉のタレが付着し、細砂粒を含んだやや粗い胎土である。36は口径4.1cm、器高15.4cmの小型品である。厚手の口縁と豆状の耳を有する。体部裏面は平坦面をなし時計回りロクロで4回のヘラケズリを施す。表面の大半は耳接合前にカキ目調整がなされる。径2～4mmの砂粒を含み、やや粗い胎土である。38は口径5.5cm、器高18.7cmを測る。不定形の耳を両肩部に有す。口縁は端部で内湾し、外面下位に2条の沈線を施す。体部表面はカキ目調整後ナデ消し、裏面はロクロ時計回りでヘラケズリされる。外面中央の同心円状の凹線は蓋接合時に入ったものであろう。39は口径6.2cm、器高23.8cmを測り、提瓶中最も大型品である。口縁端部は内湾して終わり、鉤状の耳が肩部につく。体部側面はヨコハケ後、表裏面とも明瞭なカキ目（4条/cm）が施される。表面中央には調整時の指頭痕が数多くみられる。羨道Iライン側壁に垂直に据えられ、小石で栓蓋した状態で出土したが、搔き出し遺物群とはレベル差からも性格を異にする。

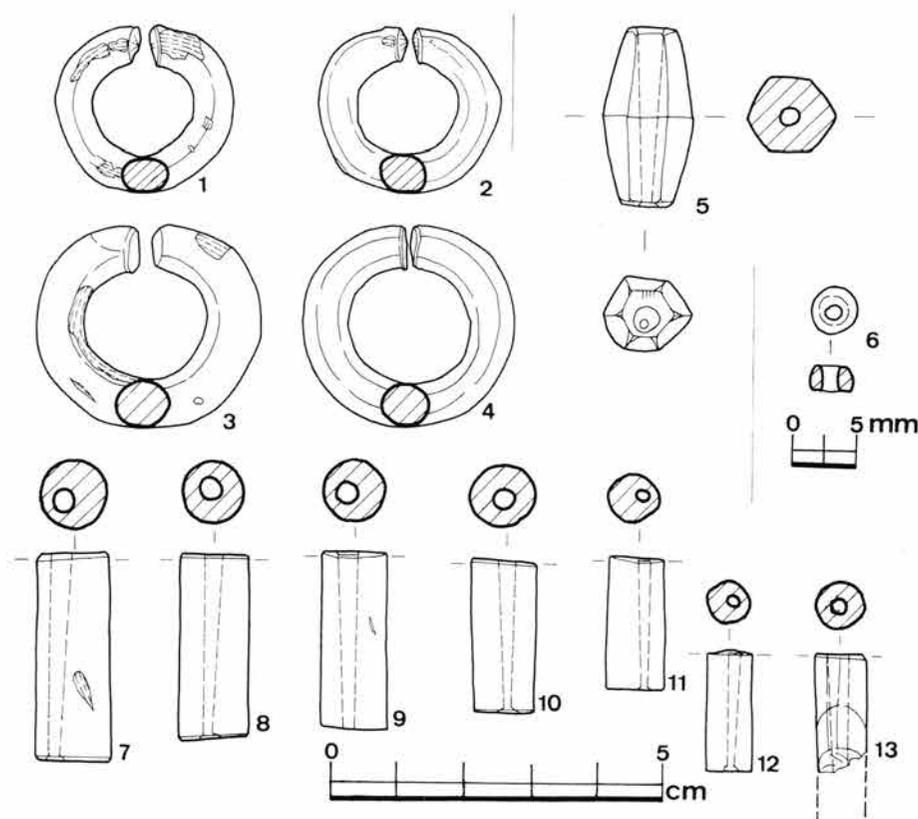
長頸壺（第51図40） 口径7.7cm、器高20.8cm、断面楕円形の体部にやや外反する口縁部が伸びる。体部中位には2条の沈線をはさんで、タテ位置でカキ目状の原体による連続押圧を加える。体部下半はヘラ削り（方向不明）後ヨコナデ調整する。口縁部内面のうねりは、粘土水引きの際できたものと思われる。胎土は精良で、青灰色を呈する。

広口壺（第51図41） 口径16.4cm、器高21cmの大型品である。大きく外反する口縁部は端部で外側に稜線、内側に弱い凹面をもち、肥厚して終わる。体部は若干タテ長の球形である。口縁部外面は不明瞭な沈線とカキ目調整が施された後ヨコナデ、体部上半はカキ目後下半で平行タタキを直交させ連続調整する。体部内面下半は青海文と呼ばれる同心円文がみられる。砂粒混じりだが精良な胎土で、青灰色を呈する。

その他に外面にカキ目もしくはタタキ目、内面に同心円文を有する須恵器甕体部、頸部片

を数点、墳丘埋土中より発掘した。

装身具類（第53図1～13、付表3）には耳環・キリコ玉（水晶玉）、ガラス玉、管玉がある。まず耳環について、1は径2.7cm、断面径0.65cmを測り2もほぼ同じ大きさである。ともに銅芯金張りである。断面はやや楕円形を呈する。2は杯身（第50図22）が据えられた棺台（R-5）上から検出された。3・4は径3～3.5cmと同規格のもので、銅芯銀張りである。3はL₁区の土器群のはるか上方から出土し、1は奥壁一括遺物の上層から出土した。キリコ玉（第53図5）は、長さ2.7cm、最大幅1.4cmを測る。菱形の両端を切り落した形状で、断面六角形を呈する。穴は片面穿孔で色は白色透明、内部に若干鉱物を含有する。玄室埋土より出土した。ガラス玉（第53図6）は、径0.35cm、長さ0.18cmを測る。非常に小型のもので、他に破片が数点ある。透明な淡緑色を呈する。玄室床面付近の埋土から出土した。管玉（第53図7～13、付表3）は全部で7個体出土した。長さは3.15cmから1.82cmまで大きさに差異がある。すべて濃緑色の碧玉製で、いずれも一方向より穿孔される。石室内から散在して出土した。



第53図 装身具類実測図

付表 2 各古墳(群)における出土土器の組成

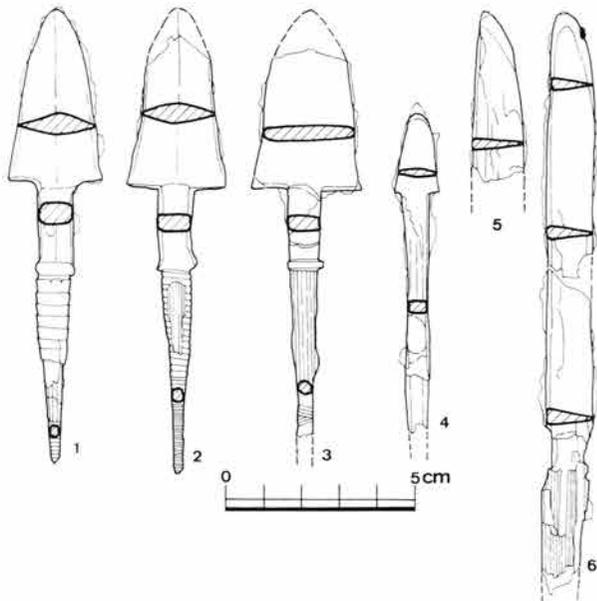
遺跡名	器種	杯身	杯蓋 ※1	高杯	甗	平瓶	提瓶	壺	甕	土師器	その他
前柵 2 号 墳 (%)		11 (51.4)	8	4 (10.8)	3 (8.1)	0	6 (16.2)	5 (13.5)	※2	4	0
旭山古墳群 (%)		14 (56.0)	14	6 (12.0)	1 (2.0)	1 (2.0)	1 (2.0)	7 (14.0)	1 (2.0)		5 (10.0)
小玉岩古墳群 (%)		11 (91.7)	11		0 (4.2)	0	0	1 (4.2)	0	2	0

※1 蓋杯としてセットになるもの以外の蓋を含む。

※2 石室内より一点出土したが、墳丘盛土からの流入か。

付表 3 管 玉 計 測 値 (単位cm)

No.	7	8	9	10	11	12	13
径	1.18	1.00	1.03	0.98	0.80	0.69	0.79
長	3.15	2.90	2.78	2.35	2.00	1.82	—
穴(大)	0.35	0.27	0.32	0.29	0.15	0.23	0.32
穴(小)	0.15	0.12	0.15	0.10	0.08	0.10	—



第 54 図 鉄 製 品 実 測 図

鉄製品（第54図1～6） 鉄鎌と刀子に二分される。鉄鎌（第54図1～4）には平根式1～3と細根式4の2種類がある。1は身部長6.7cm，同幅2.6cm，中央に若干の稜が入る。茎部は右回りでラセン状に桜皮が巻かれる。茎部下には鉄芯上に糸が巻かれる。2は身部長7.1cm（復元長），身部幅2.65cmである。不明瞭な鑄を観察した。茎部は1と同じつくりである。3は身部幅3.0cm，断面は扁平な丸形を呈する。茎部の残存状況は悪い。4は細根柳葉式鉄鎌と呼ばれるもので，身部長2.1cm，同幅1.2cmを測る。篋被部が残存するのみで，茎部については不明である。4が羨道L_g区から，その他はすべてL_d地区から出土した。刀子（第54図5・6）は二本検出された。5は切先部片であり，残存長4.7cm，身幅1.5cmを測る。6は刃部中央を欠いており，長さは不明である。茎部には木質が残存している。5は羨道部R_h区から，6は玄室埋土中より出土した。（中塚 良）

5. 前門中世墳墓群の調査

前門2号墳の東側斜面上に中世墓が造られており，一部は調査地点よりさらに北東方向に及んでいるものと思われる。

古墳の調査が開始され確認された遺構で，確認当初は列石の延長線上にあった為古墳の付属施設かと思われたが，調査地拡張に伴いそれが10基からなる中世墳墓群であることが判明した。

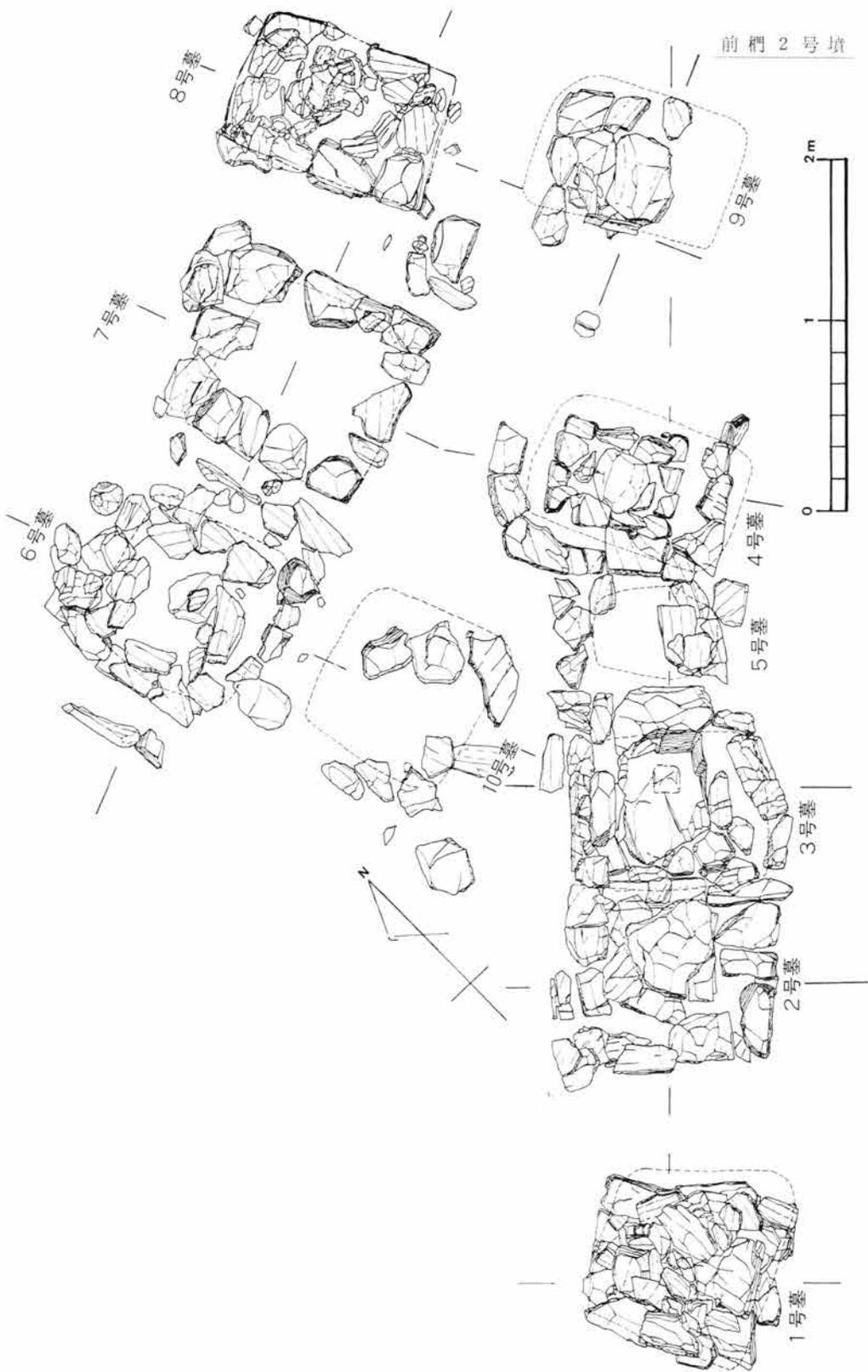
(1) 墓の配列（第55図，図版第52）

中世墓の配置をみると，大きく分けて二列に分けられる。すなわち，尾根の主軸に平行して斜面の中央部に伸びるもの（6～8号墓）と，古墳と地形に制約されながら前者より一段低い所を尾根の主軸と斜行して並ぶ一群（1～5・9号墓）と，さらに両者の間の一基（10号墓）とからなる。

これらの墓は辺を接したり共有したりしながら整然と並び，互いに重複することなく占地している。このことから，これらの墳墓は限定された区域の中で，ある一定の規則性をもって継続的に営まれたものと考えられる。

(2) 上部構造

それぞれの墓は石組みによってその墓域を区画しており，いずれも遺存状態はかなり良好であった。石組みは長辺0.3～0.6mの河原石を並べて，正方形もしくは長方形に区画し，その内部に扁平な板石を敷き並べている。これらの石組みは，程度の差はあれど，いずれも中央部が凹んでいた。その石組みを詳細に検討すると，中世墓の石組み（地上標識）の構造の一端がよくわかる。すなわち，まず前述した河原石で画された外郭の石組みの上に板石を敷



第 55 图 中世墳墓群配置图

き並べ、その上に内郭の石組みを築き、さらに土盛りした後に一辺0.4~0.8mの扁平な石を置いて五輪塔や宝篋印塔の基礎としていた。つまり、三段に組まれた石組みの基壇の上に五輪塔や宝篋印塔が建つことになる。このような構造を最もよく残していたのは2~4・9号墓である。

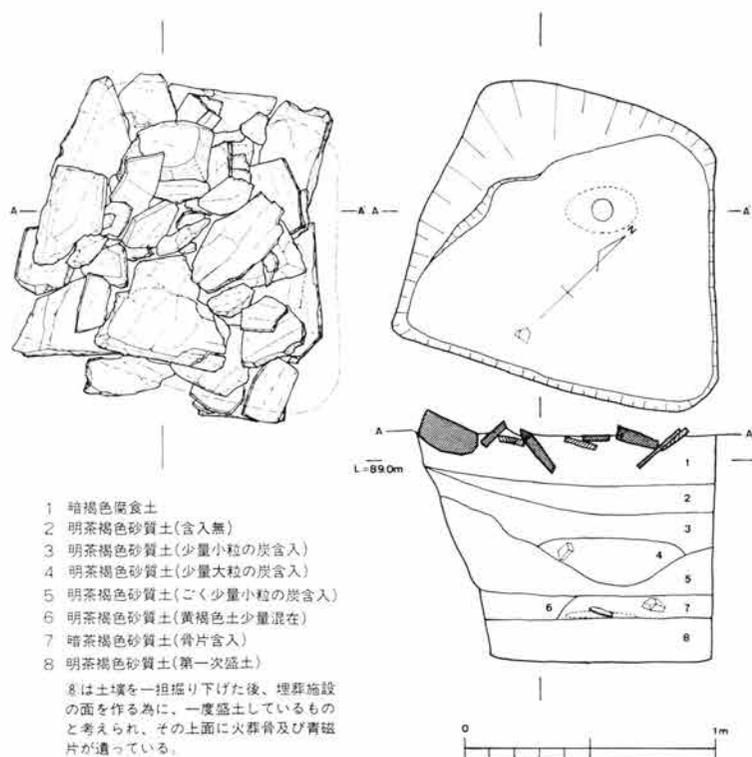
(3) 埋葬主体

石組みを取り除くと、石組みとほぼ同一プランの墓壇の輪郭が検出された。墓壇は深さ0.3m程度の浅いものと、0.8m以上の深いものとに大別できるが、これは遺骸の埋葬方法の差によるものと考えられる。火葬墓もしくは火葬墓と思われるものに1・6・7・10号墓があり、その墓壇の深さは0.3~0.4mを測る。ただ1号墓は特異で、まず岩盤を0.9mまで掘り下げ、土を入れて壇を若干浅くしてから埋葬している。

火葬墓は、1号墓が少し離れた地点にあるにもかかわらず、すべて墓壇の掘方の軸をほぼ同じくしている。埋葬方法としては、いずれも墓壇とは別の場所で一旦火葬に付して後に改葬する方法をとっている。埋葬の形態は、漆器製の蔵骨容器を埋納し、青磁椀・漆器皿・短刀を副葬したもの(7号墓)、蔵骨器はみとめられないが火葬骨がある程度墓壇の中央部に集

付表4 中世墳墓一覧表

墓No.	地上標式	石組規模(m)	墓壇規模 タテ×ヨコ× 深さ(m)	埋葬形態	備考
1	?	0.97(1.2)× 1.15(1.2)	1.1×1.18 ×0.9(0.7)	平面台形の掘方をもつ火葬墓	一端葬壇を深く掘った後0.2m埋め戻し、火葬骨を収める。和鏡・青磁片
2	宝篋印塔	1.4×1.2	—	—	1辺0.6mの宝篋印塔の基礎とその他の破片が散布
3	宝篋印塔	1.45×1.45	1.0×1.2 ×1.0	平面正方形の土葬墓か	0.58×0.8の基礎の上に宝篋印塔の台座、他各部の破片が散布
4	五輪塔	下段 1.6×1.2 上段 0.85×0.7	1.35×0.9 ×0.85	平面長方形の土葬墓	1辺0.4mの基礎の上に五輪塔の地輪、土葬墓、短刀
5	?	1.3×0.7	0.85×0.6 ×0.57	平面長方形の小型土葬墓	No.3, No.4の各辺を利用した小型墓。墓壇内に石を入れる。
6	五輪塔	1.5×1.4	1.1×1.1 ×0.3	平面正方形の火葬墓	付近に五輪塔の水輪他各部片が散乱、火葬骨青磁椀、短刀
7	五輪塔か	1.5×0.8	1.2×1.2 ×0.41	平面正方形の火葬墓	6号墓と軸を並ぶ、火葬骨、青磁椀、漆器、蔵骨器、皿、短刀
8	?	1.2×1.0	1.4×0.93 ×0.83	平面長方形の土葬墓か	
9	五輪塔	1.05×0.95+α	1.3×0.9 ×0.65	平面長方形の土葬墓か	0.5×0.4mの基礎石の上に地輪が座り、付近に風・空輪散布
10	?	計測不能	1.1×1.1 ×0.3	平面正方形の火葬墓か	6号墓と軸を同じくする。



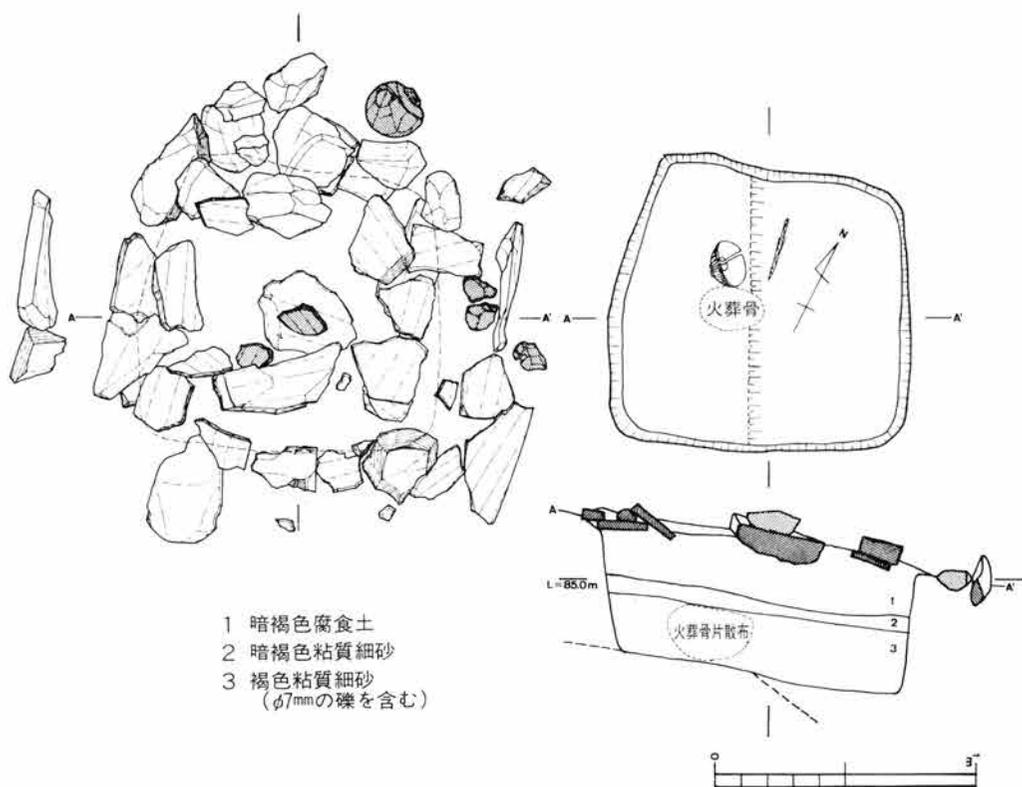
第 56 図 1 号墓実測図

中し青磁碗・短刀を副葬したもの(6号墓)、一平面に広く炭と火葬骨が散布し青磁碗片・和鏡(蓬来鏡)を副葬したもの(1号墓)、副葬品も火葬骨も確認できなかったもの(10号墓)など、各々に差異がある。

土葬墓もしくは土葬墓と推定されるものは3~5・8・9号墓で、そのうち土葬骨の出土によって土葬墓と確認できたものは4号墓一基のみである。土壌の深さは、いずれも0.8m以上におよぶ。5号墓は小型土壌であるため浅く、9号墓は斜面立地のため現存内壁面の立ち上がりは低く築造時には他の墳と同様の規模を有していたものと推定される。

それぞれ土葬墓は、2・3号墓を除いて、火葬墓のような方位のまとまりはない。2号墓は埋葬主体を伴わず、あるいは3号墓に付随する施設として把えるべきものかも知れない。5号墓は3・4号墓の中間に位置し、両墓の石組みを共有する形で営まれているが、墓壇の方位は4号墓のそれに近い。また8・9号墓は同一軸線上に縦列に営まれている。

土葬墓の埋葬法を知ることができるものは、先述した4号墓のみである。4号墓は、人骨(頭骸骨か)とともに短刀一振りが出土した。釘などの棺を想起させる痕跡は何もなかった。



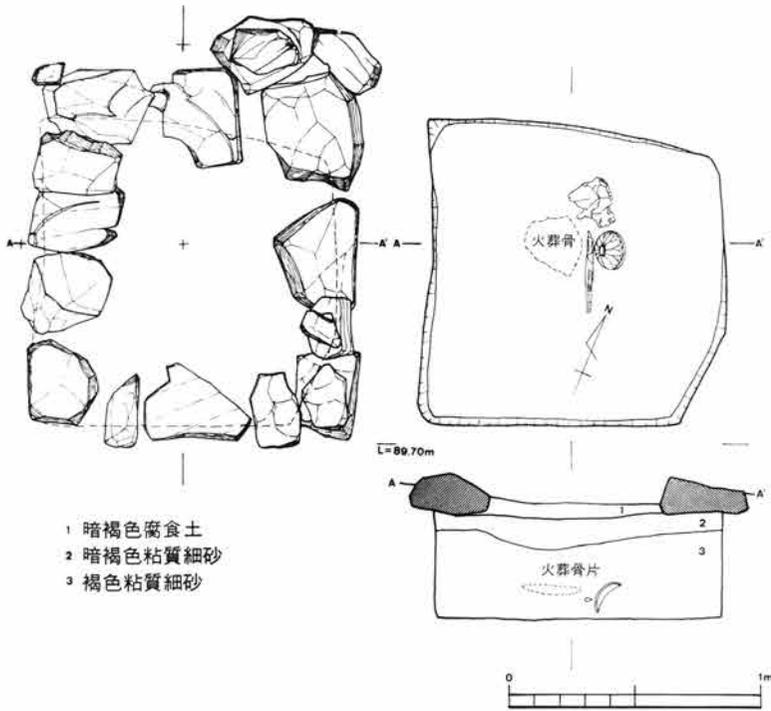
第57図 6号墓実測図

墓塚の深さを考えると棺に収めることも不可能ではないが、上部石組み墓塚の陥没の状態からみて棺が使用されたとは考えがたい。被葬者は、坐位屈葬か側臥屈葬で直葬されたものと思われる。

(4) 出土遺物

中世墓内からの出土遺物としては、1・6・7号墓から出土した青磁碗、4・6・7号墓から出土した短刀、1号墓から出土した和鏡（蓬萊鏡）、7号墓から出土した漆器皿、漆器製蔵骨箱などがある。また中世墓地表には石製品が散在し、五輪塔、宝篋印塔の各部破片が認められた。墓塚の陥没によって、地輪・台座を残して原位置を留めるものはないが、比較的残りのよいものから当時の石塔形態を窺い知ることができる。以下概観してみよう。

青磁碗（第60図1・2・6） 3点出土している。2点は完形品、1点は底部のみで、いずれも中国龍泉窯系の輸入品である。1は口径15.9cm、器高6.6cm、高台径5.4cmを測り、体部外面に鎗蓮弁（複弁）文を配する。釉は灰緑色で高台内面および畳付部は露胎である。磁胎



第 58 図 7 号墓実測図

は赤味をおびた色を呈しており、中還元焰焼成されていることがわかる。内外面には貫入がみられる。2 は口径16.3cm、器高6.3cm、高台径5.5cmを測る。外面に蓮弁文を施すが、蓮弁の幅は1より狭く、弁の中央の鑄のないものである。釉調は黄緑色、磁胎は暗青灰色を呈しており、強還元焰焼成されていることがわかる。高温で焼かれているにもかかわらず、このような発色をしているのは釉薬に含まれる鉄分が多かったためと考えられる。内外面には貫入がみられる。6 は底部のみの破片で、復元すると高台径5.2cmを測る。外面には鑄蓮弁文を施す。釉調は灰緑色、磁胎は暗青灰色を呈しており、強還元焰焼成によるものであろう。

短刀(第60図3~5) 3 は4号墓出土で、土葬墓中唯一の副葬品である。現存長31.9cm、刃部長22.9cm、刀身2.4cm、棟厚0.5cm、茎幅1.65cmを測る。関部は、鋒側が直角に刃側が斜めに切られている。また、茎には関部から2.2cmの所に径2~3mmの楕円ないし方形の目釘穴が穿たれている。茎尻は欠損している。刃部には鞘木の木質が12cmにわたって残り、刃先には4cmの広さで漆が残っている。4 は7号墓出土で、青磁碗や漆皿とともに副葬されていたものである。全長32.8cm、刃部長21.9cm、刀身幅2.3cm、棟厚0.5cm、茎幅1.7cm、茎尻幅1.0cmを測る。関部の造りは3と同様である。刃先、関部、茎部にそれぞれ鞘の木質を残す。

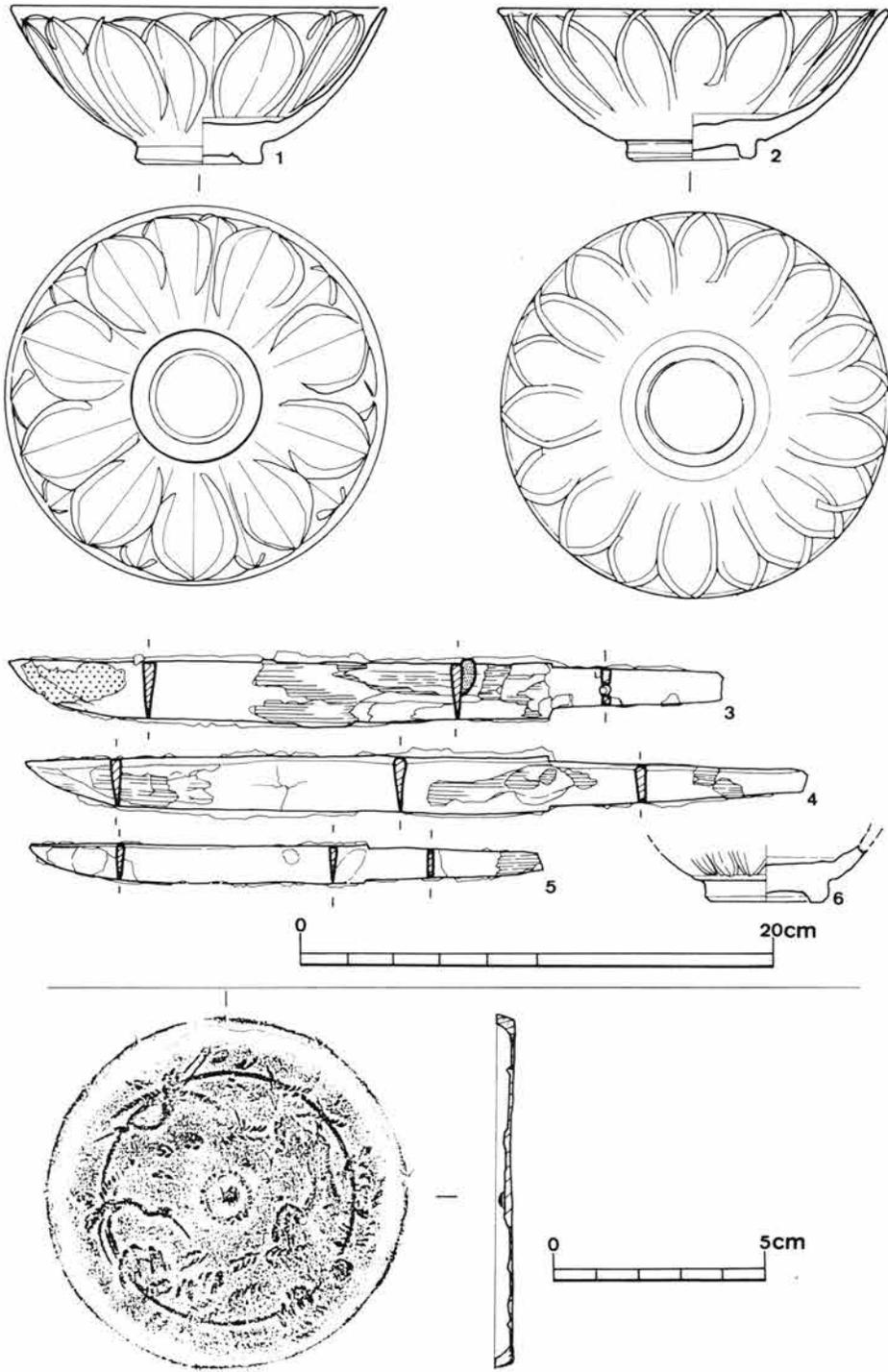


第59図 4号墓実測図

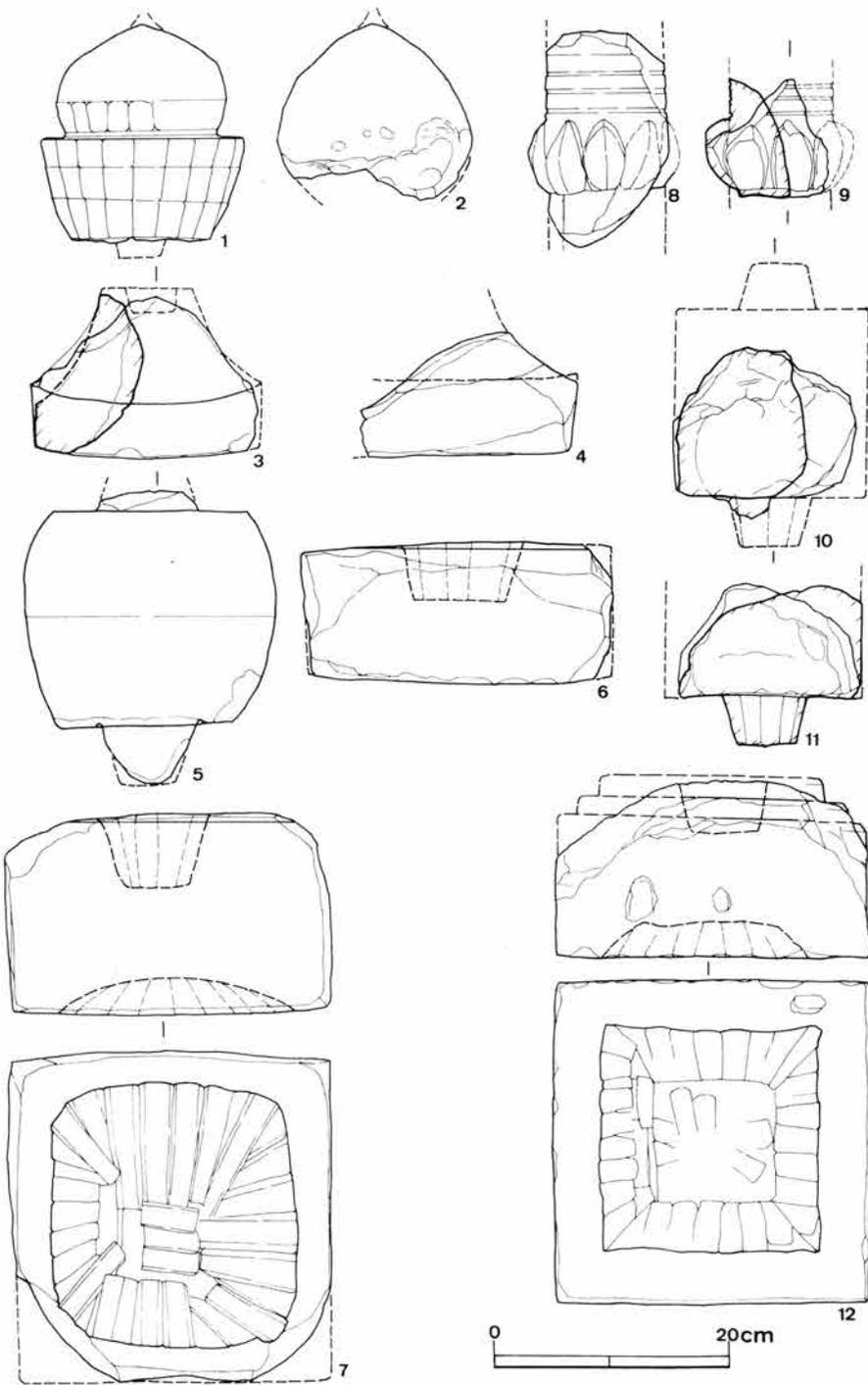
5は6号墓出土で、青磁碗と共に副葬されていたものである。現存長21.5cm、刃部長14.3cm、身幅1.6cm、棟厚0.3cm、柄幅1.35cmを測り、茎尻に向かって細くなる。関部の作りは、3・4と同様である。茎尻付近に柄木の木質を残す。

和鏡<蓬萊鏡>(第60図7) 蓬萊鏡は1号墓出土で、青磁碗片と共に副葬されていたものである。材質は青銅。直径9.0cm、界圏径6.0cm、鈕座径1.2cm、縁厚0.4cm、内区厚0.05~0.15cm、重量64.1gを測る。鏡面の磨耗が著しく、長期に亘って使用されていたものであろう。蓬萊鏡は、巨巖、松、波、洲浜、竹、鶴、亀、雁、飛雲を基本的な題材とした風景を現わす鏡で、中国人が夢みた不老不死の仙薬があるという理想郷を和風化して表現したものである。時期は鎌倉時代中期以降のものと考えられる。

五輪塔(第61図1~7) 五輪塔は空・風・火・水・地輪が出土しており、台座には自然



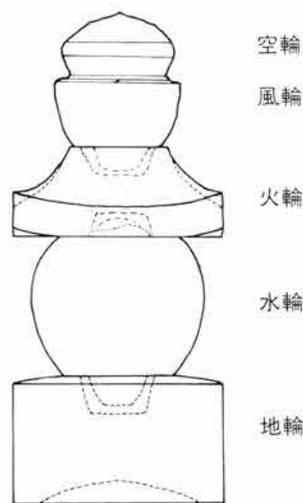
第 60 图 中世墳墓出土遺物実測図



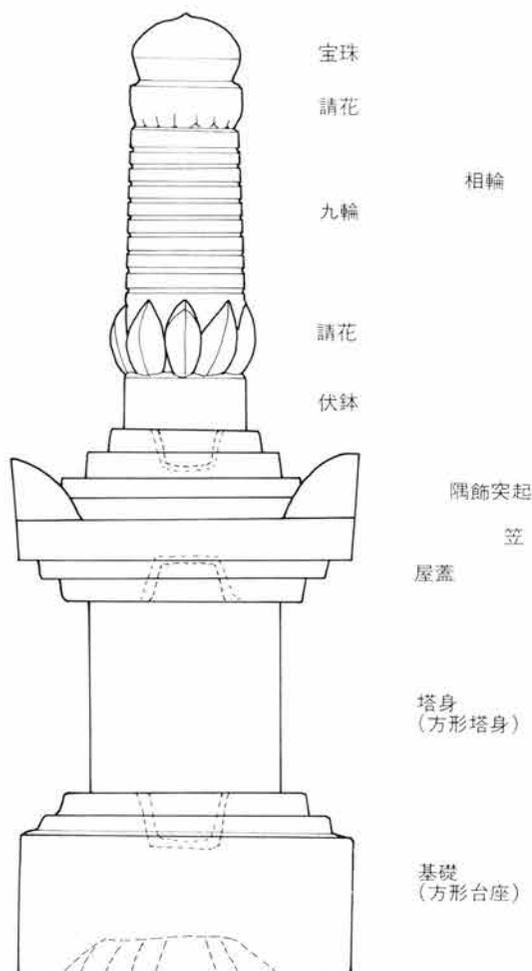
第61図 宝篋印塔・五輪塔実測図

石が使用されている。それらはすべて散乱しており、組み合わせあった状態のものは一つもなかった。材質は凝灰岩で、非常にもろく風化が激しいため原形をかなり損っている。1は空・風輪で、一石で作られている。2は空輪のみである。1・2とも空輪の先端部分がわずかに欠けており、全容はわからないが、なだらかに立ち上がっていると思われる。1は空輪最大径が14.5cm、現存高9.4cm、風輪は鉢形をしており、上部最大径で17.2cm、全高8.8cmを測る。空輪の最大径より下位と風輪に三段のノミによるカット面を残す。ノミ幅は2.7cm（9分）である。2は空輪で最大径16.7cm、現存高16.0cmを測る。1より大型である。空・風輪のそれぞれの値の比率は、奈良県大王山中世墓群出土のもの^(注6)と比して、空輪がかなり小さい。これは時期差を示すものかも知れない。3・4は火輪であるがともに破損している。3は軒端高4.7cm、現存高13.6cmを測り、軒の反りは中央からなだらかに端に及んでいる。4は軒端高6.6cm、現存高10.1cmを測る。3より大型で軒の反りもさらにゆるやかである。上下両面にあるとおもわれるホゾ穴は、小片であるため観察できない。5は現在確認できる唯一の水輪である。最大径が中央よりやや上方にあり、肩が張り、一般的な五輪塔と同様上端が広く、下端が狭い。上端径16.6cm、最大径19.4cm、下端径14.8cm、高さ18.1cmを測る。上端の火輪に取り付く凸ホゾは基底の径9.0cmで、高さ1.6cmを残す。下端の地輪に取り付く凸ホゾは上端のものよりやや小さく、基底径8.0cmで断面台形を呈し、高さ4.9cmを測る。上端・下端のホゾ共に付け根の周囲に製作時の幅0.2cmのノミ痕がめぐる。6・7は地輪である。6は4号墓よりの検出で、幅26.4cm、高さ12.0cm、凹ホゾは平面隅丸方形で断面逆台形を呈している。上端幅10.8cm、下端幅7.4cm、深さ4.8cmを測る。上面は端から1.0cm盛り上がっている。7は9号墓よりの検出で、平面27.2×28.4cm、高さ17.1cm、凹ホゾは平面隅丸方形、断面逆台形を呈している。上端幅11.2×9.5cm、下端幅6.8×6.2cm、深さ6.2cmを測る。また、下面には22.5×20.6cm、深さ3.0cmの平面隅丸方形、断面ゆるやかなカーブの凹みを削り込んでいる。使用されたノミ幅は1.8cm（6分）である。これら出土の各部で五輪塔を復元すると第62図のようになり、鎌倉時代の後半から室町時代にかけての五輪塔の形式を示すものになる。

宝篋印塔（第61図8～12） 宝篋印塔は、相輪（伏鉢、請花、九輪の一部）、塔身（方形塔身）、基礎（方形台座）が出土している。五輪塔と同じく散乱していたため、旧状



第 62 図 五輪塔復元図
(S=1/10)



第 63 図 全階式宝篋印塔復元図 (S=1/10)

を留めるものはない。しかし基礎の位置から3号墓に祀られたものであることは明確であるし、また九輪の出土位置からみて、2号墓の上にも宝篋印塔を祀っていた可能性がある。材質は凝灰岩製で、風化が著しい。8・9は相輪である。いずれも小破片で全体をうかがうことはできない。8は伏鉢の部分と請花、九輪の一部を残す。伏鉢は本来五輪塔の風輪のように鉢型であるが本例は方形を呈する。ただ風化が著しいために方形と化した可能性もある。一辺10.0cm、残存高4.8cmを測る。請花は8枚の花弁からなり、最大腹径13cm、高さ6.4cmを測る。九輪は径10.2cm、溝幅0.3~0.4cmで区画され、輪幅1.2cmを測る。現在4段を残す。9は、8より小さく、請花最大径12.7cm、高さ6.0cmを測る。九輪は復元径9.0cm、溝幅0.2~0.3cmで区画され、輪幅1.0cmを測る。現在3段を残す。10・11は塔身である。塔身は方形であると考えられるので別個体であろう。ともに同タ

イプで、塔身の一辺16.7cmを測る。凸ホゾは円錐台形で基底径7.4cm、上端径5.2cm、高さ4.4cmを測る。ホゾには1.9~2.0cm幅のノミ痕を残す。12は基礎(方形台座)にあたり、3号墓出土である。1.6cm・2.0cmの階段状の削り出しを3段もち、幅27.2×28.4cm、高さ17.1cmを測る。上面中央の凹ホゾは隅丸方形で上端10.0cm、下端5.4cm、深さ6.2cmを測る。また下面には隅丸長方形の、幅22.5×20.6cm、深さ3.0cmの断面ゆるやかなカーブの凹みを削り込む。幅1.8cm(6分)のノミ痕がある。これら出土の各部片で宝篋印塔を復元すると第63図のようになる。屋蓋(笠・隅飾突起)が出土していないため五輪塔の復元以上に難しいが、おそらく全階式の宝篋印塔であったと思われる。

5. む す び

前柵古墳群は現在 3 基を残しており、今回調査を実施したのは 2 号墳のみである。2 号墳を除く各古墳は後世の乱掘・破壊のため著しく旧状を損なっているが、2 号墳の調査により前柵古墳群の様相、南山城地方における六世紀末の古墳の様子を知る上で貴重な知見を得ることができた。また、新たに発見された鎌倉時代後半から南北朝時代中頃の墳墓は、当地方の中世の墓制を知る上で貴重な資料となるものである。以下、調査の成果を要約してまとめにかえたい。

(1) 前柵 2 号墳の構造について

前柵 2 号墳の外形・施設・出土遺物については既述したとおりである。この古墳の特徴としては玄門部に横架された天井石が一段低くなっていることがあげられるが、これに類似した古墳としては、近くは大谷川をはさんで西南方 500m に所在する井手塚古墳が知られる。また、岡山県牟佐大塚・コウモリ塚、島根県大念寺古墳、滋賀県正福寺丁子古墳などがあるが、詳しい検討はまたの機会に譲りたい。このような施設はもともと玄室と羨道を面積的にも空間的にも区別し、その意味を明瞭にしていた横穴式石室が、退化した段階で、尚玄室と羨道を区画しようとして考え出した省力的・合理的な方法であったのではなかろうか。

また、羨道部に巨石を使用した理由の一つとして、古墳の立地が上げられる。玄室の側壁は基盤の花崗岩の上に直接据えられ、床に粘土が張られているが、羨道部付近では尾根が下がると共に基盤が下っており、床面も石室の造営時に持ち込まれた石が埋められ、その上面に粘土が張られている。このように大きな石を用いることによって壁の状態を安定させようとしたのではなかろうか。

次に石室内検出の棺台について、3-(3)で述べたように、各地区で重複して埋葬されたことを示す状態で検出され、これらの前後関係を検討してみると、ある程度この古墳に葬られた被葬者数、あるいは石室内空間の利用過程が推測できる。棺台のレベルだけで被葬者数や埋葬順序を結論づけることはできない。しかし土器の出土状況、棺台の検出状況、人骨の出土状況を合わせて一定の判断を試みるならば、

- a：初期の段階から埋葬に棺台が使用されたこと。
- b：初期もしくは途中の段階で 2 個一対の棺台すべてが移動されてしまうことなく、どちらか一方の台を残していること

を考慮して、この石室内に葬られた被葬者は 7 名と推定される（羨道部埋葬があった場合は 8 名以上となる）。

次に追葬のおこなわれた順序（石室内空間利用）であるが、L₃を初期のものと考えたと

L₁ もしくは R₂ がこれに続くものである。そして R₄・R₅ となる。ここまでを I 期の埋葬と考えたい。次に R₁ ないし L₁・L₂ のどちらかで追葬が行われ、R₃ (木棺痕をもつもの) が最も新しい追葬となる。これらを II 期の追葬と考える。しかし、これら 2 期の埋葬は土器形式からみても間断なく行われ、七世紀直前段階で追葬を終了していたと推定できる。

(戸原 和人)

(2) 前柵 2 号墳出土の土器について

奥壁に接したかたちで掘り込まれた土壌に投与された遺物は、玄室奥の初期埋葬がなされた後、次の埋葬の段階で片付けられた可能性が大きく、さらに埋積していた土が単一層をなしていたことから、古墳造営初期の一時期の供献形態を示す一括資料であることが推測できる。土壌中の唯一の杯身 (第49図1) はプロポーシオンや調整などから TK209 併行期^(注7)の年代を与え得る。

奥壁に向かって左側壁に沿う位置 (L 区) から出土した高杯の杯蓋 (第51図32) は土壌内の高杯とセットをなし、もう一つの蓋 (第51図33) は台付壺 (第49図7) と組み合わせることから、前者が原位置を保っているとする土壌遺物は L_a~L_d 区に据え置かれた棺の埋葬より移動されたものと考えられる。セット関係にある杯蓋 (第50図10) と杯身 (第49図11) に関して言えば、杯蓋が端部内面に段をとどめる形態から TK209 型式より一型式さかのぼる TK43 型式に類例を求めることができる。L_a 区では第50図13と同19のように杯身 A と B とが接し合った形で上下に位置するが、大型の杯身 A は供献された後、棺台の一部として利用され、上面に B が据えられたことも考えられる。玄室では側壁に沿って何組かの異なった土器で組成されるセットではあるが、それが同一時期の供献セットであったかどうかは推測の域を出ない。R_r 区の棺台 (R_s) 上の杯身 (第50図22) は初期埋葬土器より明らかに新しいタイプであり、TK209 型式でも後段階に入るものと思われる。

羨道部中軸ライン中央の台付壺 (第50図25)・蓋 (第51図34)・提瓶 (第51図38) の一群は、蓋杯 (第50図16, 第50図23・24) など新しい様相をみせる遺物が羨道部もしくはその付近に供献され、若干の堆積の間隙を置いてその上層に掻き出されたものであろう。提瓶 (第52図39) は明らかに据え置かれたままの状態出土し、閉塞石に付随したものである。提瓶が全体的な丸みを失い体部の片面を扁平化していくとするならば、第51図36・同37はより新しいタイプに属する。二者が口縁部を中軸からずらすのは、平瓶出現前に対応するものであろうか。

土師器は甕 2 個体、壺 2 個体が出土した。甕 (第49図9) は所謂布留式土器の器壁を薄くする為の内面ヘラケズリをせず、ハケ目による調整で終わっている。美濃山狐谷横穴出土の

甕は、形態的には9に類似し、第50図31の体部内面ヘラケズリ調整より新しい形式であると言える。その意味で布留式土器の特徴をより多く残していると言える。壺（第50図29・同図30）は両者とも体部外面をロクロ未使用でヘラケズリし、内面の一部をもケズる。本来穀物等を貯蔵する機能を持つ壺が弥生時代末すでに否定されている。^(注9)今回出土の壺は古墳時代後期の段階は言うまでもなくそれ以前から供献形態としての新たな機能を保有しており、少なくともこの時期まで残ったと言える。埋葬形態として共伴する意味は大きく、須恵器導入後、質的な変化が土師器に生じ別個の価値を持つようになったと考えられる。

須恵器と共伴する土師器資料は近辺では久世廃寺古墳時代集落遺跡^(注10)や久津川遺跡群^(注11)に出土例をみるが、前者S B01の出土の甕は端部内面に一段下ったところに若干の肥厚をみせ、体部内外面肥厚するもので、報告では須恵器からTK 209型式に相当するとするが、前門古墳出土の甕（第51図31）よりは調整などからみて後出であろう。後者の久津川遺跡群芝ヶ原遺跡の資料は六世紀後半から七世紀初頭のものであり、これも内外面をハケ調整している。集落跡出土土器と古墳出土土器の比較には難があるが、当古墳出土例は、前記美濃山狐谷出土例とともに土師器の流れを知る上で船橋OV^(注12)以降から所謂歴史時代、地方寺院成立までの間を埋める貴重な資料を得ることができたと言えよう。

次に本古墳に供献された土器群の性格を土器消費の観点から若干述べてみたい。

中村 浩氏は「古墳群における遺物の状況が即消費(需要)のそれであるとは断定し難いかもしれないが、生産地における器種構成のあり方とも若干の差を認めながらも、ほぼ対応しており、このような状況が消費(需要)＝古墳群、生産(供給)＝窯の図式が須恵器の動態に適用できる」とした。今回出土した須恵器は胎土・焼成の面では少なくとも複数の窯で焼かれた可能性がある（白っぽく瓦器様のもの、赤灰色を呈する粗い胎土のものなど、杯蓋の胎土の観察）。これは単一の窯から須恵器が一元的な供給をうけたものではなく、各窯からの供給、もしくは他の共同体からの供給によって需要地としての古墳に運ばれたものであり、多元的な供給体制下にあったことを推測させよう。前門古墳の須恵器はⅡ型式第4段階の一部と同第5段階^(注13)に属し、生産段階の時期区分でD期に位置する。器種構成は付表2に示したように、蓋・杯あわせて46.3%と圧倒的に多く、以下壺、提瓶、高杯、甕の順である。綴喜郡井手町小玉岩古墳群^(注15)では蓋・杯91.7%、京都市旭山古墳群^(注16)では同じく56.0%と蓋・杯の多さが目立つ。小玉岩、旭山両古墳群ともD期後段階、7世紀代に造営された古墳群である。中村氏はD期における生産器種の組成を「蓋杯41.42%、甕31.11%、壺3.3%、高杯0.95%、以下甕、皿、鉢、平瓶、提瓶の順」と報告し、須恵器供給源の有り方を示して、生産地での甕の比率の大きさから「古墳だけでなく、他の部分の需要先」を求めようとしている。他の

古墳群のデータからも言えるのだが、前柵2号墳より出土した甕の大半が破片となって墳丘の盛土中から出土し、直接の供献形態での組成とは関係なく、古墳造営の際動員された人々らが使用したものと推察されることから、古墳出土の土器そのものが単に生産側の器種セットをD期において表わさないという検証にもなる。前柵古墳「群」としての全体の把握が今後の課題であり、この時期に対応する周辺の須恵器窯の資料の報告を期待したい。

以上を要約すれば、

- 1 古墳副葬品は大まかにTK209型式、Ⅱ型式の第4、5段階に含まれる
- 2 奥壁土城の一括資料は一時期に埋納されたセット関係にある
- 3 土師器は南山城の後期古墳時代における良好な基準資料となろう
- 4 需要地としての古墳の須恵器組成は生産地の状況とは必ずしも一致しないので、地域ごとの把握が今後必要であろう。(中塚 良)

(3) 前柵中世墳墓群

5-(4)で述べた青磁碗は、蓮弁の形状、器形からみて、京都大学構内遺跡編年の中世京都Ⅰ期新^(注17)～Ⅱ期古^(注18)の間の時期に入り、烏丸線内遺跡No.36土壙34、No.3土壙6、左京内膳町遺跡のSK326、SK154^(注19)、同志社キャンパス内遺跡編年のⅡ期SK401、Ⅲ期SK306^(注20)、平安京左京四条一坊遺跡の鎌倉時代ⅡSD03上、SE6^(注21)の遺物と併行関係にあると考えられ、13世紀末に比定される。

19枚の蓮弁で飾られている青磁碗は、前者の複弁に対して単弁化し、弁の幅は5～7mm狭くなっている。また、鑄が失われ、文様の彫りが浅くなっている。これらのことを考え合わせると、形式的にみて後者は前者の退化形式と考えることができる。この種の蓮弁文は、「鑄蓮弁」と、14世紀後半に出現する「剣先蓮弁」との間を埋める数少ない資料となるものである。時期としては、14世紀前葉～中葉と考えておきたい。

これらの出土遺物からみると、前柵中世墳墓群が造営された時期は13世紀末から14世紀後半と考えることができるが、輸入陶磁器のみでその時期を確定することは困難とおもわれる。また、前柵中世墳墓群の被葬者は、副葬品の和鏡・青磁碗などからみて、階層的には一定以上の地位の人々を想定したい。ここに葬られた人々が生存していた13世紀中葉から14世紀後半にかけての当地は、賀茂庄と称され、東大寺、興福寺などの所領下であった。恐らくこれらの墳墓の被葬者は、所領の重要な地位にあった人々であったかも知れない。(戸原 和人)^(注22)

- (注1) 『京都府遺跡地図』京都府教育委員会 1972
- (注2) 加茂町文化財愛好会幹事 東 清二氏
- (注3) 岩船寺住職に依頼した。
- (注4) 参加者は以下のとおりである。
- | | |
|-----|--|
| 作業員 | 岩田匡司, 大浦良雄, 森川政彦(故人), 岩田照子, 岩田好代, 川嶋秀子,
西嶋清美, 森崎千寿代 |
| 補助員 | 赤川一博, 足利 真, 狭川真一, 中塚 等, 中塚 良, 難波洋三, 西山祐司,
菱田哲郎 |
| 整理員 | 青地佐都子, 足利 真, 狭川真一, 谷田久美子, 中塚 等, 中塚 良 |
- (注5) 『西欄窯跡』(加茂町文化財調査報告第2集)加茂町教育委員会 1981
- (注6) 『奈良県宇陀郡大王山遺跡』榛原町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1977
- (注7) 田辺昭三『陶邑古窯趾群』1 平安学園考古学クラブ 1966
- (注8) 久保田健士「美濃山狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第5冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- (注9) 丸山竜平「弥生式・土師式土器とは何か—その画期と終焉」
- (注10) 奥村清一郎・福山敏男「久世廃寺発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第4集 城陽市教育委員会) 1976
- (注11) 近藤義行・辻本和美・黒田恭正「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集 城陽市教育委員会) 1978
- (注12) 田辺昭三・原口正三・田中 琢・佐原 真, 『船橋 I』平安学園考古学クラブ
- (注13) 中村 浩「須恵器の生産と流通—とくに古墳時代の状況について」(『考古学研究』第28巻第2号) 1981.9
- この中で「古墳時代」(Ⅰ型式～Ⅱ型式, Ⅲ型式の一部)を生活段階の画期として, A期(Ⅰ型式1・2段階の一部), B期(同型式2～4段階), C期(同型式5段階・Ⅱ型式1～2段階), D期(同型式3段階以降)の四期と氏はされる。
- (注14) 中村 浩他『陶邑 I』大阪府教育委員会 1976
- (注15) 『小玉岩古墳群』(井手町文化財調査報告 第1集)井手町教育委員会 1976
- (注16) 『旭山古墳群発掘調査報告』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第5冊)(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981
- (注17) 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター 1981
- (注18) 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ—1974, 75年度』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980
- (注19) 平良泰久他「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財調査概報(1980-3)』京都府教育委員会) 1980
- (注20) 『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物・資料編Ⅱ』同志社大学校地学術調査委員会 1978
- (注21) 『平安京跡発掘調査報告—左京四条一坊—』平安京調査会 1975
- (注22) 「東大寺領諸荘田数所当等注進状」(『東大寺統要録』)に東大寺領賀茂庄, 興福寺領賀茂庄, 右大将(藤原実能)家賀茂庄, 賀茂神社領賀茂庄などの名がみえる。

5. 羽戸山遺跡発掘調査概要

1. はじめに

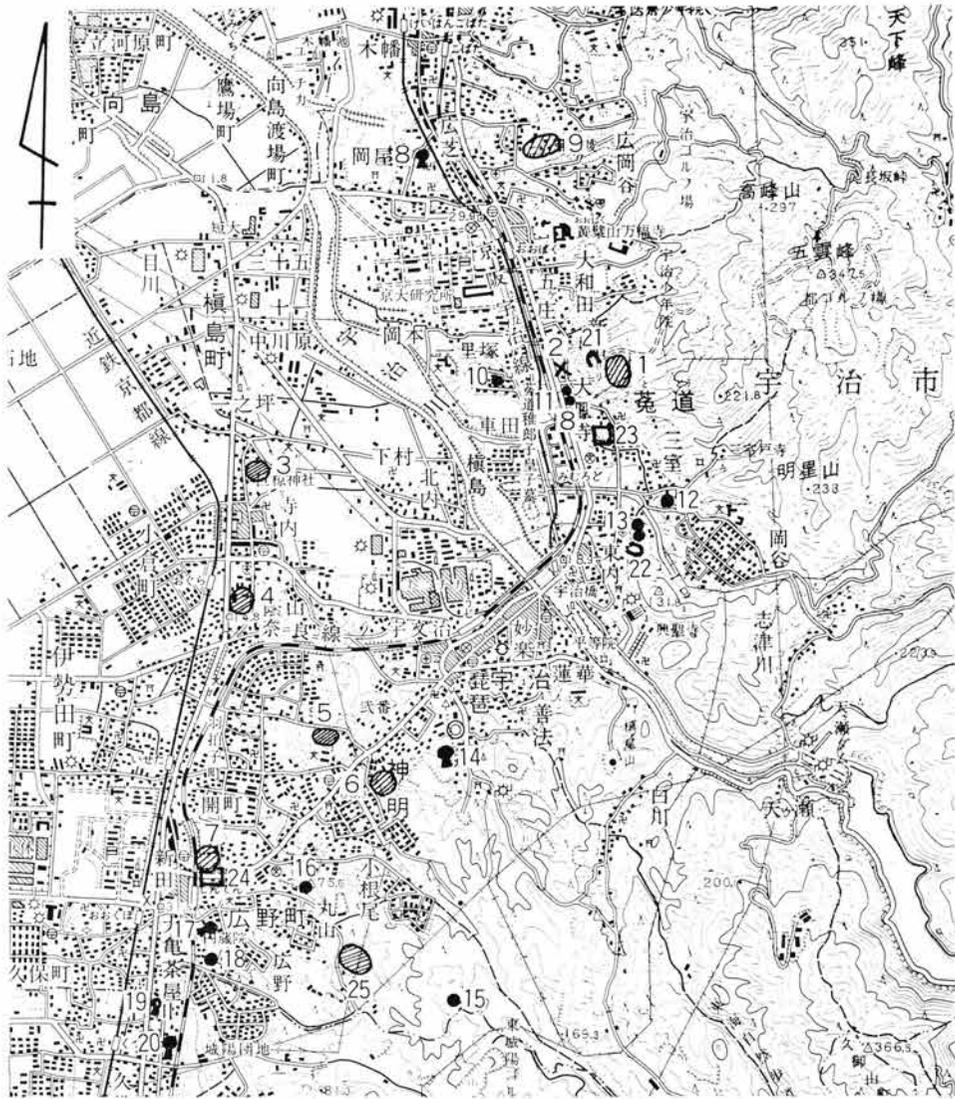
当調査は住宅・都市整備公団によって計画されている宇治団地（仮称）建設予定地内における遺跡の発掘調査である。団地建設予定地は京都府宇治市の北部で、大字五ヶ庄及び菟道と称される地域にまたがる約 20ha が対象とされている。この予定地内に所在し、今回の調査対象となった遺跡は昭和55年、同公団の依頼を受け、京都府教育委員会が行った遺跡分布調査によって発見されたもので、遺跡の可能性を有するものとして、下表に示す10地点があげられた。その成果をもとに、協議が重ねられた結果、今回、当調査研究センターが発掘調査を担当することとなり、昭和56年6月、対象地の伐採作業を開始した。

現地調査は当センター調査員長谷川 達・小山雅人・大槻真純が担当したが、調査に参加いただいた調査補助員・整理員の方々をはじめ、数々の御援助・御指導をいただいた宇治市教

付表5 調査地一覧表

番号	名 称	種 類	所 在 地 大 字 小 字	立 地	規 模	現 状	備 考
1	一番割1号墳	円墳	五ヶ庄・一番割	丘陵稜	径12m, 高2.0m	完 存	
2	一番割2号墳	円墳	五ヶ庄・一番割	丘陵稜	径13m, 高1.8m	完 存	
3	一番割3号墳	円墳	五ヶ庄・一番割	丘陵稜	径15m, 高2.0m	完 存	
4	五雲峰1号墳	前方 後円墳	五ヶ庄・五雲峰	丘陵稜	全長 30m 前方部 長15m, 高2.5m 後円部 径15m, 高 4m	半 壊	南側崩壊
5	五雲峰2号墳	円墳	五ヶ庄・五雲峰	丘陵稜	径15m, 高2.5m	半 壊	
6	五雲峰3号墳	円墳	五ヶ庄・五雲峰	丘陵稜	径11m, 高2.5m	完 存	
7	五雲峰4号墳	円墳	五ヶ庄・五雲峰	丘陵稜	径13m, 高2.5m	完 存	
8	羽戸山古墳	円墳	菟道・羽戸山	丘陵端	径15m, 高2.0m	完 存	
9	一番割城跡	城跡	五ヶ庄・一番割	丘陵端	南北長約 40m 東西長約130m	完存か?	削平地 中世か?
10	羽戸山城跡	城跡	菟道・羽戸山 上野	丘陵端	南北長約100m 東西長約 80m	完存か?	削平地 中世か?

育委員会・京都府教育委員会の方々、また伐採作業に関する労をとっていただいた宇治市森林茶業課の服部利行氏、宇治市森林組合の方々等、調査の進行にあたり御協力をいただいた方々には、心より御礼申し上げます。



第 64 図 調査地位及び周辺遺跡分布図（5 万分の 1）

1. 羽戸山遺跡
 2. 隼上り遺跡
 3. 巨椋神社遺跡
 4. 神楽田遺跡
 5. 石塚遺跡
 6. 神明遺跡
 7. 広野町遺跡
 8. 二子塚遺跡
 9. 宇治陵
 10. 瓦塚古墳
 11. 隼上り古墳
 12. 池上古墳
 13. 二子山古墳
 14. 丸山古墳
 15. 一本松古墳
 16. 庵寺山古墳
 17. 坊主山古墳
 18. 金比羅山古墳
 19. 芭蕉塚古墳
 20. 久津川車塚古墳
 21. 隼上り瓦窯
 22. 山本窯跡
 23. 大鳳寺跡
 24. 広野庵寺跡
 25. 八軒屋遺跡
- ※遺跡名は仮称のものも含まれる。

2. 遺跡の位置と環境

羽戸山遺跡は京都市の南に接する宇治市の北部、宇治川東岸の丘陵上にある。丘陵中でも、その縁辺部にあたり、足下ともいえるところから沖積平野となり、極めて眺望の良好な位置に立地している。この丘陵は標高約70m、古生層によって形成されている醍醐山地に接し、西麓に南北にのびる新生代層、いわゆる大阪層群よりなる丘陵であり、砂・粘土・および大小の礫を主体とし、極めて浸蝕を受け易い性質をもっている。

遺跡の立地する丘陵より周辺を見ると、宇治川が近くを流れ、遠く京都盆地の南部を一望できる。その中央には、近年、干拓によって水田化されているが、かつて多くの河川の流入した巨椋池が存在したことが知られている。そこに宇治川・木津川・加茂川・桂川、あるいは山科川が流入していたことは、逆に宇治が一つの津となり、山城各地方・近江・大和、あるいは河内・摂津へと広がる古代からの交通の要所であったことがうかがえる。

そのような条件を持つ宇治市の歴史を概観するが、弥生時代までの様相は必ずしも明確ではない。旧石器・縄文時代の遺跡は現在までのところ知られていない。弥生時代では既に6か所の遺跡が知られているが、発掘調査などによるものではなく、遺物が採取されたことによって確認されたもので、具体的な様相は不明である。神明遺跡では数多くの石鏃等の石器が得られているが、他は石鏃などの単独出土に近いものが多く、羽戸山に近い西牟上り遺跡も石包丁の出土が伝えられているに過ぎない。しかし、それらの出土位置から、弥生時代の遺跡が、旧巨椋池周辺を意識したものと、それよりやや高位の段丘上に立地したものがあることがわかる。

古墳時代になると、現在の城陽市方面を意識して造られたとも考えられる一本松古墳、南・北二墳から成り、多くの副葬品が出土した二子山古墳、全長約100mで周濠を入れると約170mの規模を有すると考えられる前方後円墳の二子塚古墳等、多くの古墳が知られている。また羽戸山遺跡に近い所では西牟上に横穴式石室を有すると考えられる牟上り1・2号墳や、直径約30mの瓦塚古墳があり、他にも丘陵上、あるいはその裾部等から、古墳、あるいは古墳時代の遺物の出土が伝えられている地点も多い。

その後、白鳳時代の大鳳寺跡、宇治川南岸の広野廃寺跡などから土地の有力豪族によって寺院が建立されたことが知られるとともに、最近発見された牟上り窯跡等、瓦窯・須恵器窯も醍醐山地西麓に点々と知られている。それらから、大規模とはいえないが、特殊な技能を持った人々が生活していたことも窺える。

さらに平安時代には摂関家である藤原家の足跡が多く残され、宇治平等院、あるいは宇治陵として形を留めている。また三室戸・岡屋は津（港）として利用されていたことが知られ、

古代の圃場整備跡ともいえる条里制もその痕跡を随所に残している。

あまりにも簡略ではあるが、宇治市の歴史を概観し、いくつかの遺跡をあげたが、古墳・寺院等が目を引くのに反し、それらをささえた人々の集落は、八軒屋遺跡等が知られるに留まり、数的にも質的にも不明な部分が多い。しかし、菟道・木幡などの地名は『日本書紀』・『古事記』、あるいは『万葉集』などでも度々登場し、古くから人々が住み、用いられた地名であることがわかる。さらに宇治市の立地等を考えると、今後、遺跡の分布調査、発掘調査、あるいは他の要因によって、今は数少ない集落をはじめ、各時代・各種の遺跡数は現在知られている数をはるかに凌駕するものと考えられる。(長谷川 達)

3. 調査経過

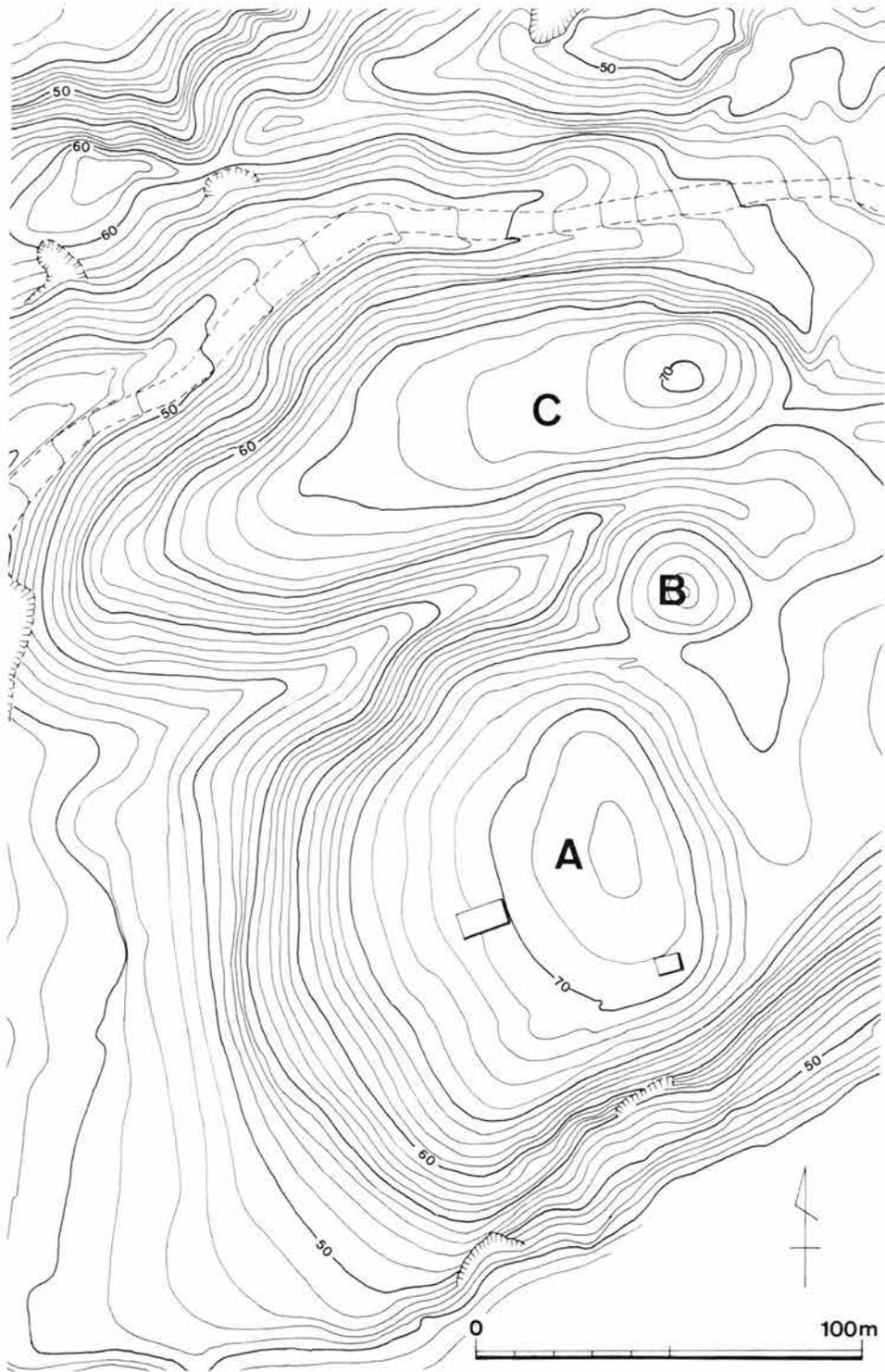
上述の10か所の調査対象地点の伐採作業の後を受けて、昭和52年7月28日から各地点の地形測量に着手した。これと並行して、8か所の古墳推定地点では、掘削用基準杭をその墳頂部中央に打ち、また、城跡推定地点2か所に於いては、基準杭を公団の測量基準杭に求め、磁北方向を軸に4m四方のグリッド網を設定した。そして、旧盆明けの8月18日から掘削を開始した。

以下、北から順を追って各地点の調査経過概要を述べる。尚、遺構番号は各地区別であるが、遺物については、本報告の本文・実測図・図版のいずれについても共通の通し番号である。

(1) 一番割古墳群は、開発予定地の北辺の尾根上にある3か所の地形の高まりである。トレンチを入れたところ、1・2・3号墳のいずれに於いても、直ちに地山面に達し、3か所とも自然地形であると判断した。

(2) 五雲峰古墳群は、一番割の南隣の尾根に点在する古墳状隆起である。古墳と想定して、それぞれにトレンチを入れたが、1・2・3号墳には人為的な盛土はなく、砂・粘土・小石を主体とする自然堆積層であり、また、埋葬施設・外部施設等、古墳を示唆する証左は全く検出されなかった。4号墳は、一番割に見られた地山層が表土のすぐ下に見出された。従って、これらは古墳ではなく、浸食等によって古墳状に残存した自然地形の一部であると判断される。

(3) 一番割城跡は、広い頂部(約4,000m²)をもつ半独立丘陵である。上述のグリッドに従ってトレンチを入れ、調査を行った結果、当初予想していた城跡に関する遺構・遺物は全く検出されなかったが、弥生時代と推定される土壌群が30数基検出された。詳細は、「6. 羽戸山遺跡C地区の調査」で報告する。



第 65 图 羽戸山遺跡A・B・C地区地形图

(4) 羽戸山古墳は、一番割と羽戸山の両丘陵間の谷奥に位置する径約30mの円墳状隆起である。当初は、古墳と想定して調査を開始したが、それを裏付ける遺構・遺物は全く検出されなかった。ところが、北側の裾近くの斜面に於いて、弥生時代後期の土器を伴うテラス状遺構を検出した。これについては、「5. 羽戸山遺跡B地区の調査」の章で詳述する。

(5) 羽戸山城跡は、開発予定地の最南西部に位置する独立丘陵で、当初は城跡を予想していたが、検出された遺構は、弥生時代後期の住居跡1基と土壇数基、古墳時代後期の住居跡1基、及び近世～近代の礎石建物跡と数条の溝であった。この地区の調査については、「4. 羽戸山遺跡A地区の調査」で詳しく報告する。

以上、概略述べたように、遺構・遺物が検出されたのは、開発予定地の南半部であり、その3か所は、特に弥生時代後期の遺跡である。従って、同時期ないしは非常に近接した時期に利用されたと考えられる。そこで、これら3地区については、当初の呼称を廃し、一括して「羽戸山遺跡」と総称し、各地区を南からA・B・C地区と命名した(第65図参照)。

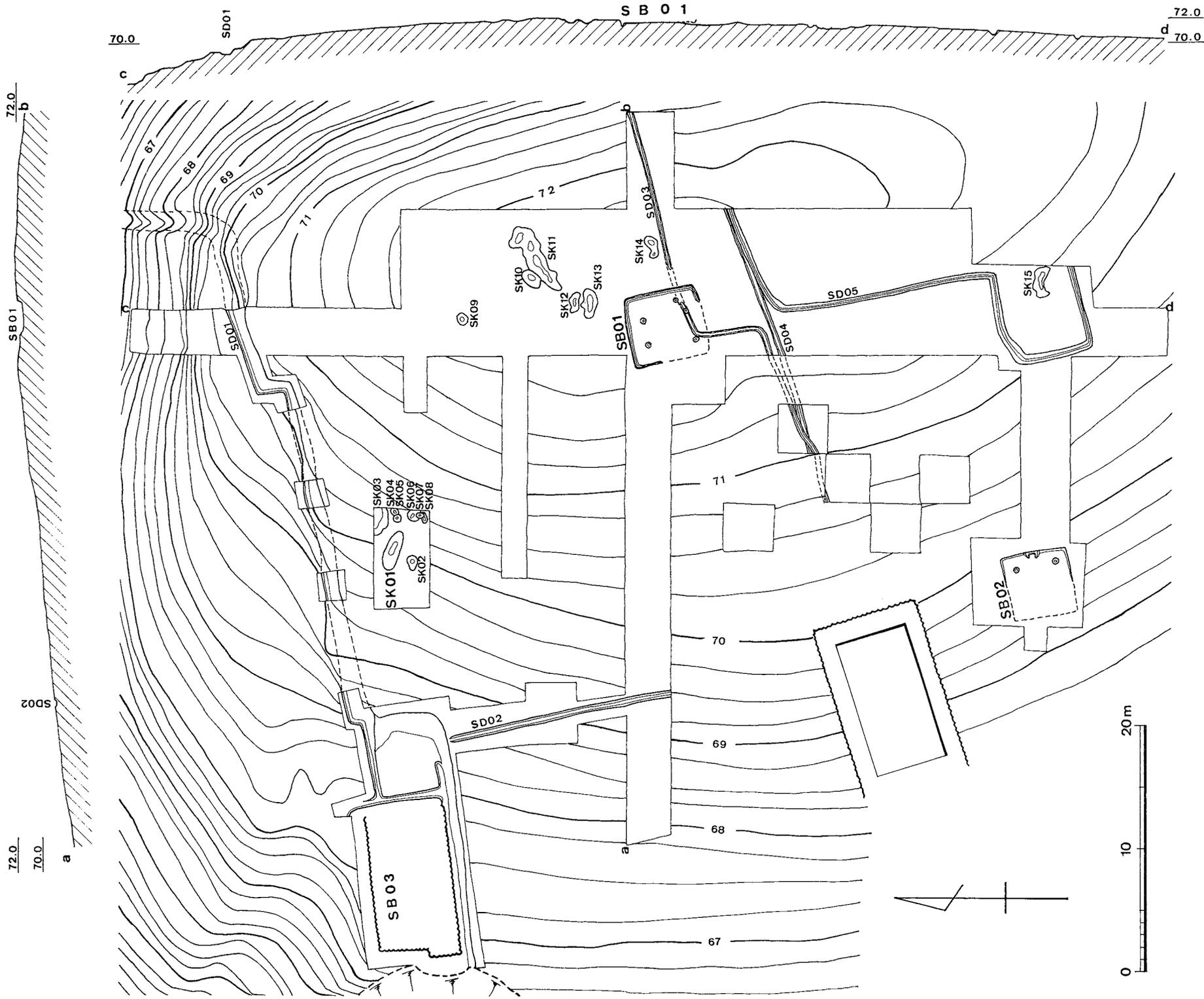
調査期間は10月31日までの予定であったが、類例の少ない遺構等の検出によって、更に周囲を拡張して他の遺構の有無の確認の必要が生じた為、公団側との話し合いの結果、調査期間を更に半月延長することになった。現地説明会は11月7日に行い、現地での調査は11月14日に終了した。出土遺物等の整理作業は、これに引き続いて、当センターの整理室に於いて翌昭和57年3月末日まで行った。

4. 羽戸山遺跡A地区の調査

地形と基本層序

当地区は、南北にやや長い独立丘陵であり、約4,000㎡の頂上部は、東から西へゆるやかな傾斜をもつものの、際立って平坦である。四方の斜面はかなり急峻であり、登り降りは険しい。

羽戸山A地区の基本層序は、北半部と南半部とでは若干異なる。北半部に於いては、①表土層②黄褐色砂質土層(包含層)③赤褐色小礫混じり砂質土層(地山)の順であり、この地山は非常に堅固である。一方、南半部では、②黄褐色砂質土層の下に、③'淡赤褐色砂質土層と④赤褐色砂質土層が識別できる。しかし、住居跡(SB02)の竪穴はその2層(③'と④)を切っており、また2層共遺物を全く含まないので、両者共地山と判断した。この南半部の地山は、北半部ほど礫を含まず、また固くない。



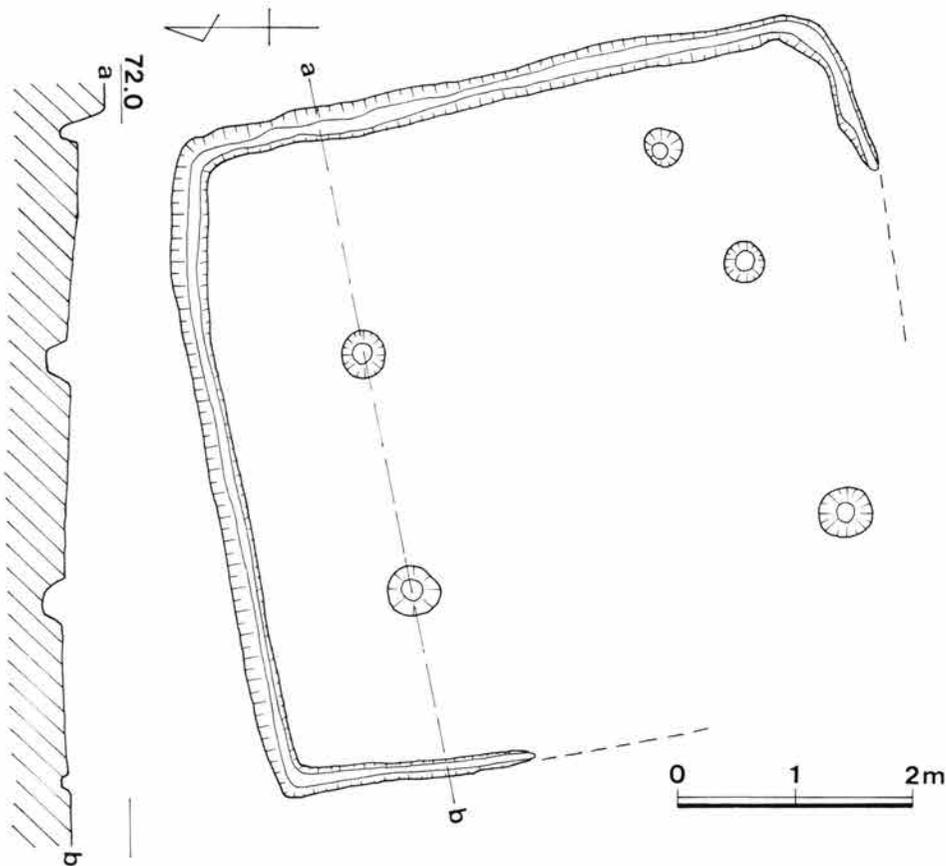
第 66 图 A 地区調査区域全图

検出遺構

(1) 竪穴式住居跡 S B01 (第67図, 図版第60)

当地区の頂上部中央東寄り、即ちこの丘陵の最も標高の高い地点で検出された遺構である(標高72m, 比高約42m)。平面形は方形である。南辺と西辺の大半が後世の攪乱によって失われているが、北辺5.70m, 東辺5.50mを測り、ほぼ正方形を成していたと思われる。周溝は幅8~12cm, 深さ8~9cmである。壁が残る部分で検出されており、四辺を廻っていたものであろう。柱穴は四隅近くの床面にそれぞれ1個ずつ検出された。径30~46cmで、深さは20(北東)~60(北西)cmと差がみられる。柱間は北辺2.1m, 東辺3.4m, 南辺2.3m, 西辺3.7mと、やや不揃いながら、南北方向に長い長方形を呈する。尚、東南の柱穴の東にもう一個柱穴に類似したピットがある。

この住居跡は、西南方向から楔を打ち込まれた形に攪乱層(旧耕作土と思われる茶褐色土



第67図 住居跡 SB01 実測図

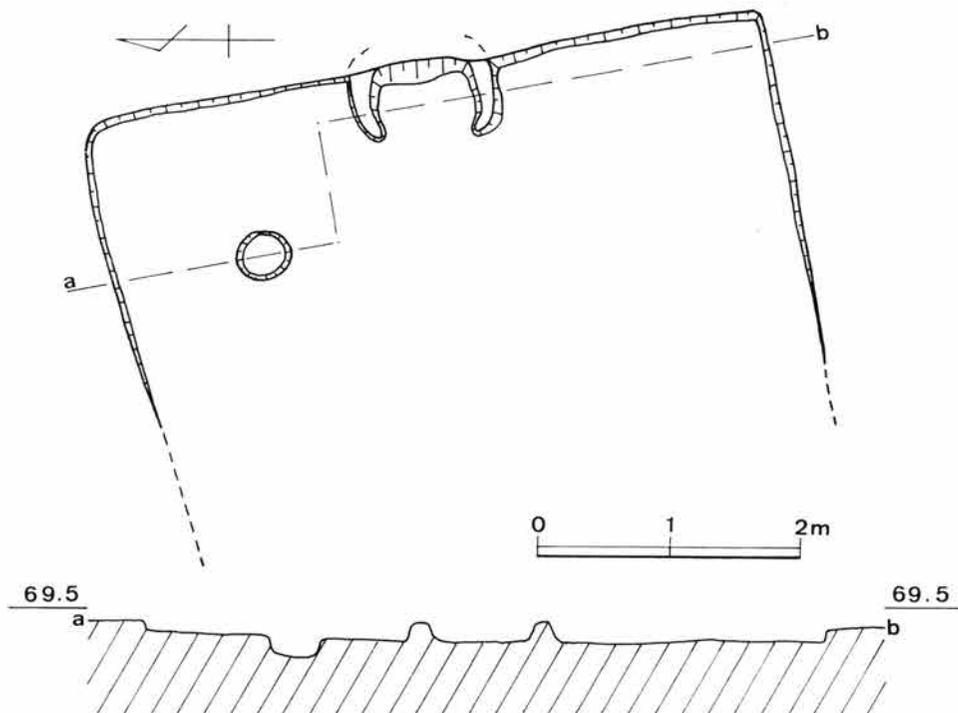
と礫石群)が入っており、更に南部では、途中で途切れる近世以降の溝SD03によって貫かれている。炉跡を示唆する焼土は検出されなかったが、この攪乱によるのかも知れない。

出土遺物は、すべて弥生式土器片であり、後述の1点を除きいずれも、攪乱を受けていない北辺と東辺に囲まれた部分の床面近く、ないし床面から出土した。遺物の量自体が少なく、しかも細片が多いので、実測可能な土器は第71図に示した9点に過ぎない。ただし、甕口縁(3)は、攪乱層に近い包含層直下から出土した。SB01周辺の包含層から弥生式土器が出土していないことから、この住居跡に伴うものと考えておく。

(2) 竪穴式住居跡SB02 (第68図, 図版第61)

SB02は丘陵頂上部の南西隅近くに位置する。低地との比高は約40mである。方形を呈するが、西半分が削平によって全く残存していない。東辺は5.15mを測る。周溝はない。柱穴は、精査したが、床面(地山)の赤褐色土と竪穴埋土の橙褐色土が非常に見分け難く、北東の1個を検出したにとどまった。壁は、最も残りのよい東辺でも10数cmしか残っていない。

東辺の壁に竈が作り付けられている。平面では、灰色の粘質土がU字形を描いており、その中の炭混じりの焼土塊中から土師器の甕(17)が出土した。他には、須恵器の破片が極く



第68図 住居跡SB02 実測図

少数、床面から出土している。竈の存在と出土遺物から、古墳時代後期の住居跡と考えられよう。

(3) 北部土壇群SK01~08 (図版第62)

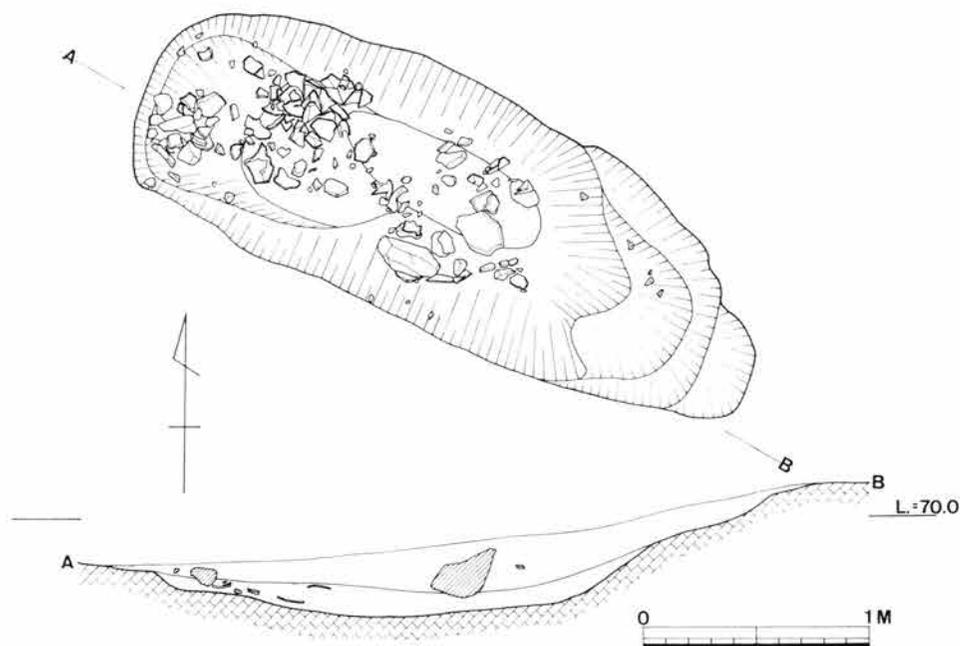
丘陵頂部の北端近くで、土壇を8基検出した。その内3基からは弥生式土器が出土している。

SK01(第69図, 図版62(2))は、最も大きく、舟形を呈し、長さ3.0m、中央最大幅1.1m、深さ0.3mを測る。土壇内の堆積土は2層に分かれるが、下層により多くの炭が混じる以外、ほぼ同質の濁黄褐色土である。特に下層からは、かなりの数の弥生式土器片が出土した。いずれも破片であり、完形近くまで復原出来たものは少数である。また、同一個体に属する甕の胴部片が数枚、曲面の向きを同じにして重なって出土していることを考え合わせると、破損した土器の廃棄場所ではなかったかと考えられる。

このSK01に近接して、他に7基の土壇状掘り込みを検出したが、SK03とSK08から、弥生式土器の微細片が出土したのみである。

(4) 北東部土壇群SK09~14

住居跡SB01の北東の一画は、他の住居跡の有無を確認する為に拡張したのであったが、不定形の土壇が6基検出されたに過ぎなかった。いずれも20~40cmの深さをもつが、底面の



第69図 土壇SK01実測図

起伏が激しい。SK11の埋土からは、弥生式土器の細片が少量出土したが、実測可能なものは皆無であった。ただし、第73図の底部(23)は精査中に出土したものであり、SK11に伴う遺物かも知れない。

(5) 南部の土壙SK15は、直角に屈曲するSD03が方形を成すその中央に位置する。不定形を呈する。検出面が②黄褐色土層面であり、土質も後述するSD03に近似しているもので、近世以降の何らかの掘り込みと思われる。遺物は皆無であった。

(6) 溝SD01~05

溝は5条検出された。確認し得た限り直線に走る溝SD02とSD04に対し、SD03とSD05は所々で直角に屈曲する直線の溝である。これら4条の溝は、検出面が表土層直下であること、SD03とSD05に磁器片が入っていたことと、埋土がほぼ同質であること等から、すべて近世以降のものとして判断できる。

丘陵北辺を東西に走るSD01は、上述の4条といささか性格を異にしていると思われる。弥生式土器片が堆積土中から出土しているが、これは後述するSB03の石垣盛土中の弥生式土器と同じ混入であろう。検出面や埋土が、他の4条と同じであるから、これも近世以降の溝と判断できる。

(7) 礎石建物跡SB03 (第70図, 図版第63)

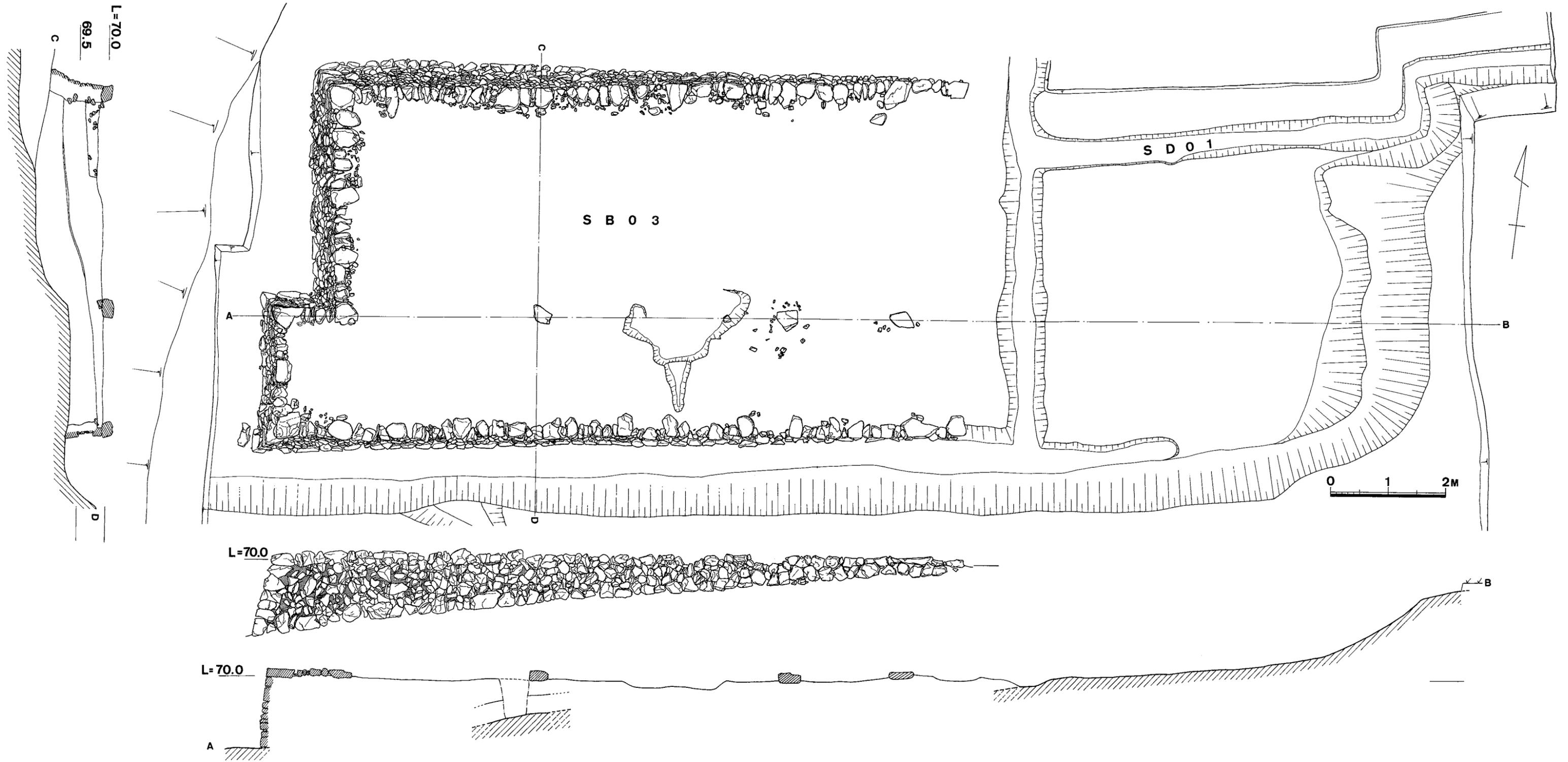
発掘調査以前に顕在していた石垣上の建物である。表土を除去したところ、石垣の裾部を巡る溝SD01の延長が確認でき、礎石3個が原位置と思われる所で検出された。

石垣は、本来北西へ徐々に傾斜する地山面の上に盛土を行い、その崩壊を防ぐ為に築かれたものである。背後には裏込めが認められる。盛土は、大きく2層に分かれるが上層には弥生式土器(25他)が混入している。また、下層には近世以降の瓦片が混じっている。石垣は、乱石積みで、特に西方へ行く程多くのしっくいを使用している。

検出した3個の礎石は一直線に並び、これと直交する直線が石垣最上段で出会う石に、礎石らしく上面が平らな大型の石が選ばれていることから、石垣の全面積を占める梁行3間・桁行5間の建物が復原できよう。40m南に現存する建物と性格を同じくするものであろう。

出土遺物

羽戸山A地区の出土遺物は、発掘面積に比較して非常に少なく、コンテナ4箱分程度である。弥生式土器・土師器・須恵器の他に、石垣付近や溝・包含層から出土した瓦・磁器・寛永通宝があるが、瓦以下の遺物については、近世末ないし明治初年頃のものであり、今回は報告を省略したい。



第70図 A地区礎石建物跡SB03及び石垣実測図

(1) SB01出土土器(第71図1~9)

(1)は器台かも知れないが、一応広口壺の口縁部と見ておく。外反する口縁部の端部を、粘土の貼り付けによって下方に拡張し、3~4本の浅い凹線を施している。口径15.8cmを測る。外面はヨコナデ仕上げで、内面は丹念な横方向へのヘラミガキである。

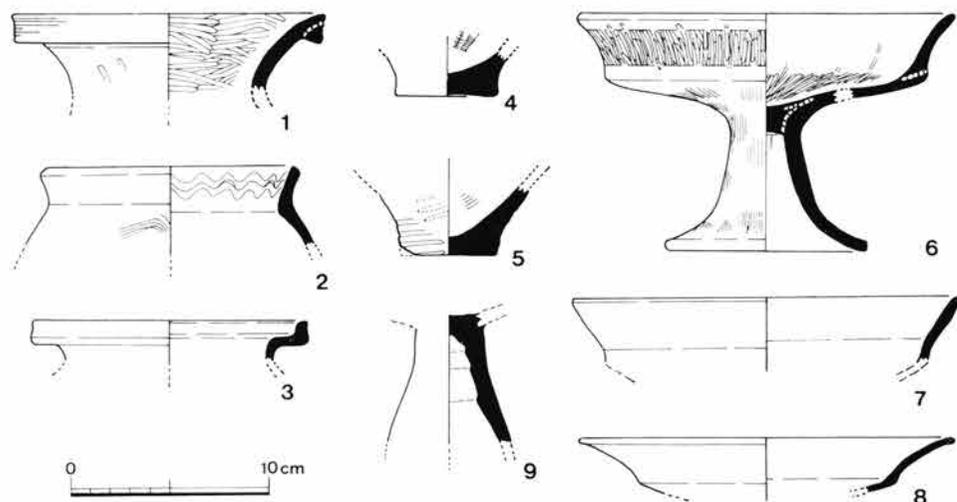
(2)は、やや外反する口縁端部に面をもつ。残存部は内外面ともヨコナデで仕上げているが、外面にはハケ目が一部見える。口縁部内面にヘラによるぎこちない波状文を施している。

(3)は口縁部が外反した後、端部が立つ所謂受口状口縁を有する甕であるが、磨耗が著しく、調整や施文の有無は確認できない。

(4)と(5)は底部片で、内面には共にハケ目が見られる。(5)は甕の底部と思われるが、外面に右上がりのタキ目が残っている。

高杯(6)は、やや外反する口縁部をもつ。脚部との接合は、円板充填と同じく、脚部から底部までを作り、後に上方から粘土をつめ込んでいる。脚柱部内面には絞り目が認められるが、ナデで消そうとした痕跡がうかがわれる。杯部内面と口縁部外面はタテヘラミガキであるが、杯部底部から脚部にかけての外面は、あまり例を見ないがタテハケで調整している。図面上では完形に復すことが出来たが、欠損部が非常に多く、脚部に円孔が穿たれていたのか確認出来ない。径19.1cm、高さ12.1cmを測る。

(7)も(6)と同じく、杯部の屈曲部の稜が明確な高杯であるが、口縁部内面はヨコナデによる調整である。



第71図 A地区SB01出土土器実測図

高杯(8)は(6・7)に比して、大きく外反する口縁部を有する。

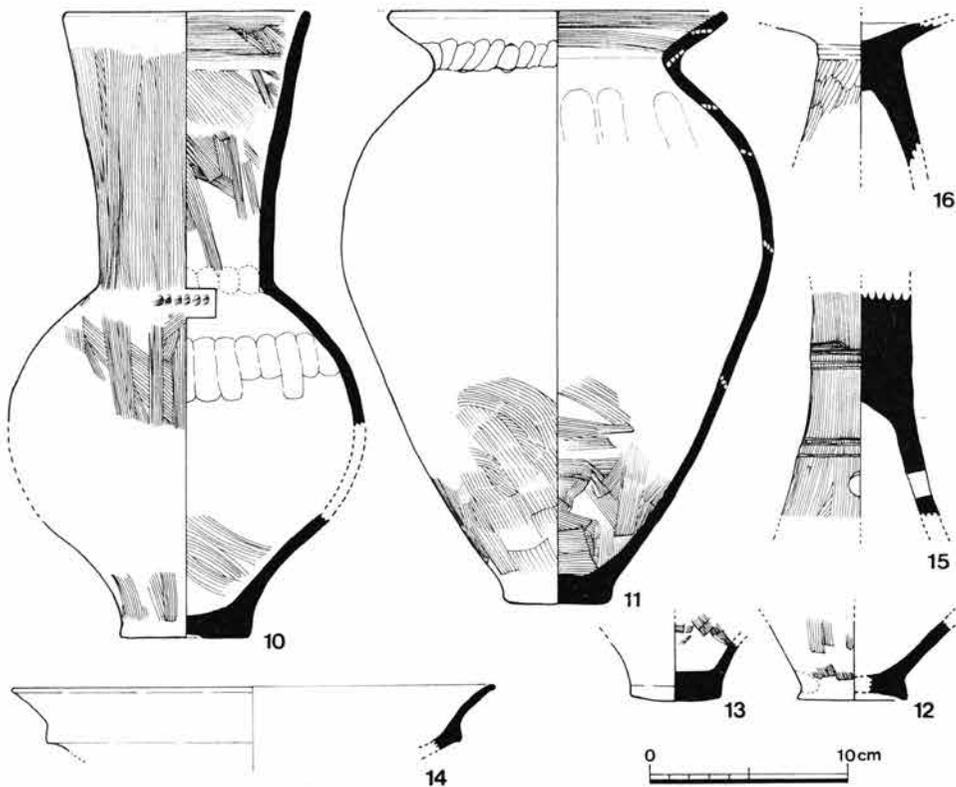
以上のSB01出土の土器の色調は、黄褐色～赤褐色である。胎土に径2～5mmの石英やチャートを多く含んでいる。軟質の土器が殆どであるが、本遺跡のような高地から出土する土器は、低地出土の土器より一般的に軟質で脆い。つまり遺存状態が悪いのであって、必ずしも使用時の土器の状態もそうであったとは言えないであろう。

(2) SK01出土土器 (第72図10～16)

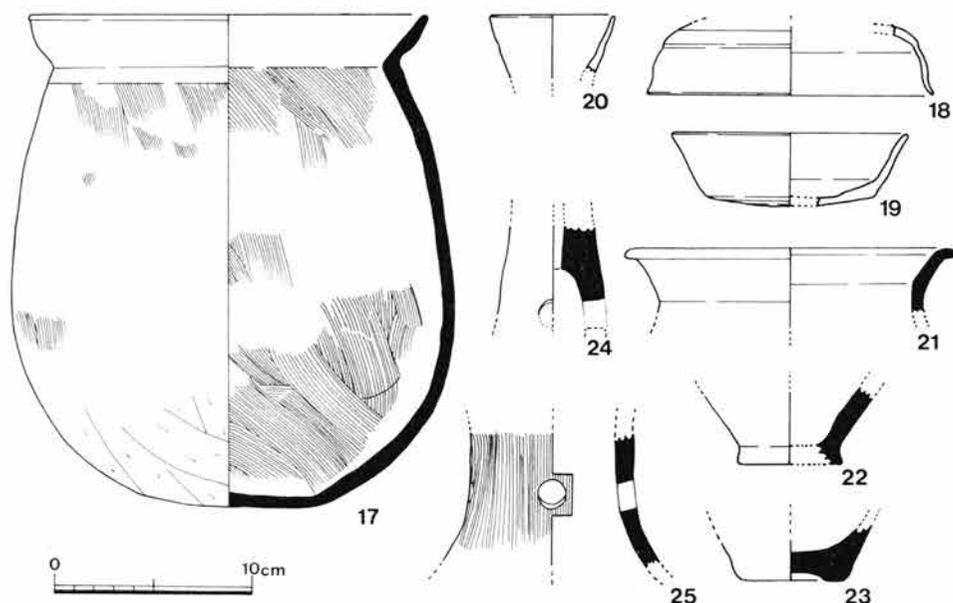
北方土壌群出土土器のうち、図示可能であるのは、SK01出土の7点に過ぎない。

長頸壺(10)の口頸部は、やや斜め上方にまっすぐ伸び、端部は丸くおさめる。体部は球形である。口縁部径12.6cm、頸部高14.0cm、体部径18.0cm、推定高さ32cmを測る大型品である。指ナデを残す肩部内部以外の器体全面に、7～8本/cmのハケ目が施されているが、口縁部のみはヨコナデで仕上げられている。肩部最上部、頸部との境近くに、ハケ原体による列点文状の施文が数個ずつ4か所に見られる。

甕(11)は、外反する口縁の端部に面をもち、肩の張った倒卵形の体部である。口径17.7cm、



第72図 A地区SK01出土土器実測図



第73図 A地区出土土器実測図

体径22.0cm，高さ30.1cmを測る。肩部の調整は，やや不分明で，ヘラミガキのような光沢を有するが，単位が確認できない。腹部より下は，ハケ目調整である。タタキの痕跡は見えない。内面上部3分の2はヘラケズリを施したようであるが，剥離が激しい為，詳細は不明である。下部3分の1はハケ目調整である。口縁部の接合は，体部最上部を約3cmの粘土帯で作り，短く「く」の字に折り返し，それに口縁部を取り付けている。この時，外面に短く強いナデを施したまま調整していないので，指頭痕が残り，やや雑な印象を与える。腹部最大径のやや上から底部にかけてと，口縁部外面とにススが厚く付着している。

高杯口縁部(14)の屈曲部はS B01出土の(6・7)に類似している。

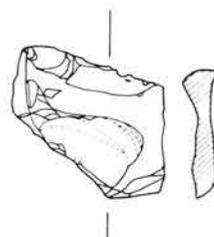
高杯脚部(15)の外面は，細かいタテヘラミガキで，その上に数条の沈線を巡らしている。

(16)は中空の高杯脚部である。杯部底部内面と脚部外面はヘラミガキである。

以上のS K01出土土器は，S B01出土土器に比して，焼成良好であるが，胎土は共通ないし類似している。

(3) 包含層出土弥生式土器 (第73図21~25)

甕 (21, 壺か?)・底部 (22・23)・高杯脚部(24)は，いずれもA地区北半部から出土したものであるが，傷みが激しく，また小片であり，調整等は詳らかにし難い。器台(25)は，石垣の盛土の中から出土したものである。



第74図 サスカイト片

尚、当地区南東部で、サヌカイト片1点が表土から出土した(第74図)。これ以外、羽戸山遺跡で石器類は全くみられない。

(4) 古墳時代以降の土器(第73図17~20)

S B02の竈の中から出土した甕(17)の体部は、底部外面のヘラケズリの部分を除いて、内面・外面ともハケ目調整である。口縁部外面は横ナデ、内面はハケでナデた後にヨコナデしている。この住居跡の出土遺物は、他に図化できる資料がなく、年代決定は難しいが、古墳時代後期(6世紀)頃ではなかろうか。S B02の東方20mの包含層から須恵器杯蓋(18)が出土しているが、この土器が陶邑の編年によるⅡ型式の第2段階前後であり、S B01と同時代の遺物と仮定するなら、6世紀後半頃の年代が得られよう。須恵器杯身(19)はS B01の東方10mの黄褐色土包含層から出土した。7世紀中葉~後半に位置づけられよう。平瓶の口縁部(20)は表採品である。

小 結

以上報告したように、羽戸山遺跡A地区の遺構・遺物には3期が認められる。

第1期は、弥生時代の後期である。検出された住居跡は唯1基である。このS B01南西部に及ぶ攪乱や、古墳時代のS B02の残存状態に見られる後世の削平の跡から、南半部には他に住居があったが消滅したという可能性がある。しかし、S B01の北辺と東辺の壁の残り具合から見て、大した削平を受けていないと思われる北半部に於いて、他に住居跡が検出されなかった事実は、このS B01が弥生時代後期の一時期に、単独に建てられていたことを示唆し、少なくとも、集落を形成してはいなかったと結論できよう。

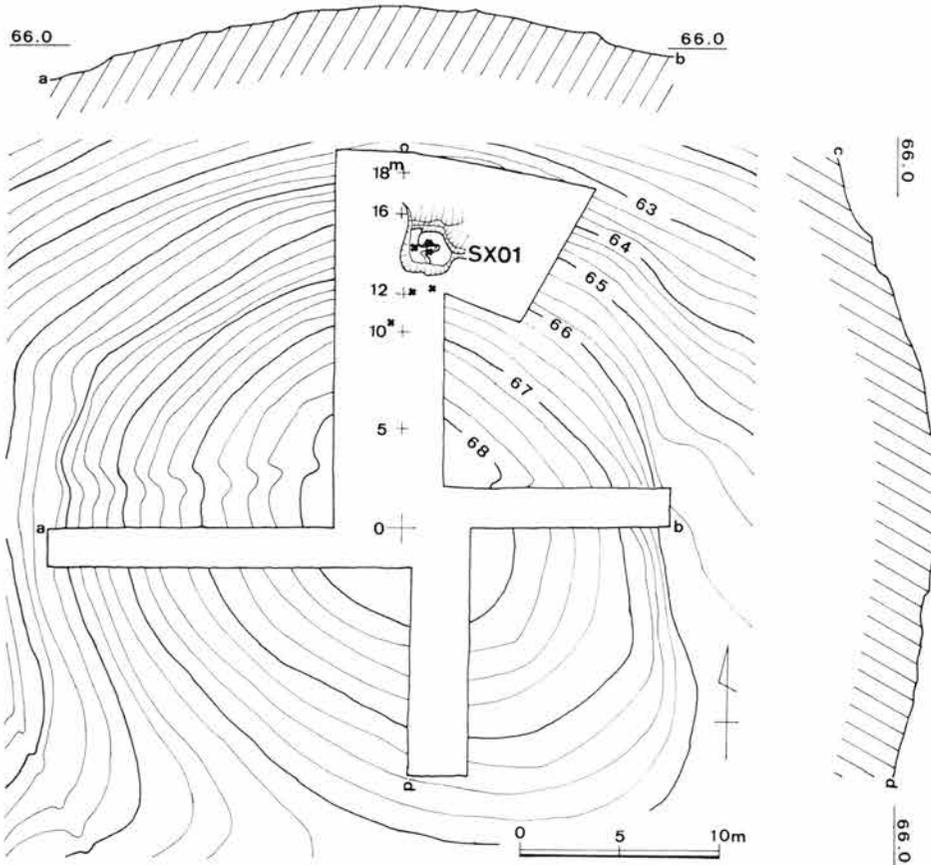
第2期は、古墳時代後期の6世紀頃である。この時期の住居跡もS B02唯1基しか検出されていない。上述したように南半には後世削平された他の住居跡があったのかも知れないが、この時期に属する遺物が殆ど見られないことから、この時も集落は営まれていなかったようである。

その後1000年以上、この丘陵は痕跡を残すような利用はされなかった。茶畑になったのは、いつの頃か分からないが、明治初年頃には礎石建物S B03が建てられた。これは南の現存建物と共に茶小屋ではなかったかと思われる。地元の人々の記憶によれば、S B03が崩壊したのは、昭和9年の室戸台風の時と言う。

5. 羽戸山遺跡B地区の調査

地形と基本層序

B地区(第75図)は、A・C両地区の谷間に位置する径約30mの円形の隆起である。頂上



第75図 B地区地形図

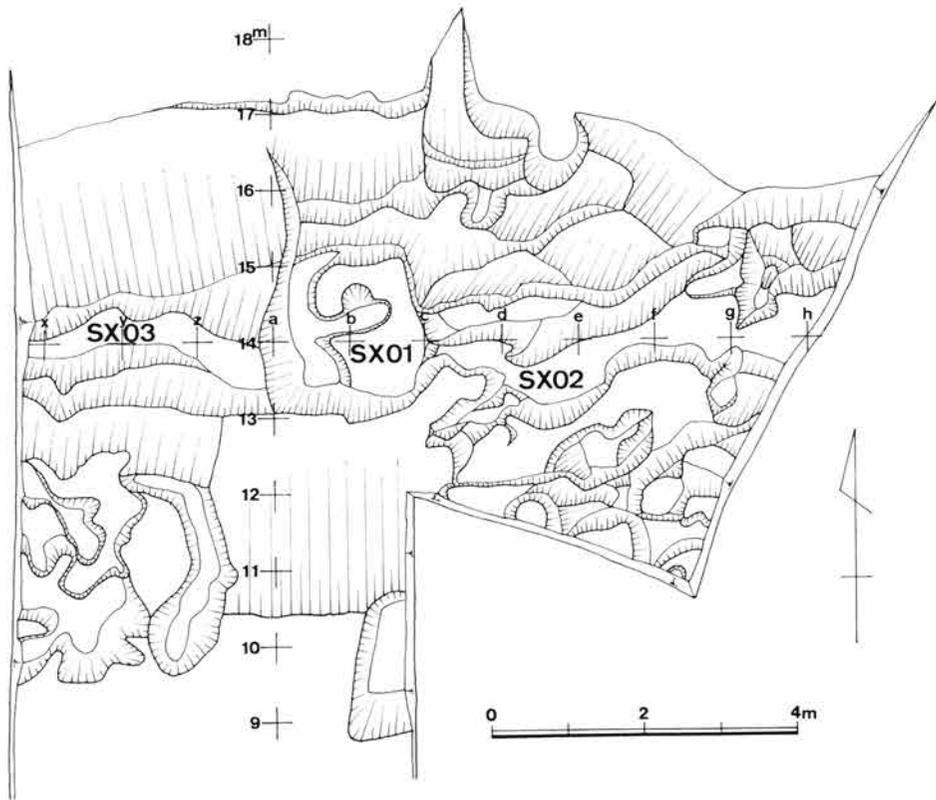
の標高は68.6mで、北のC地区の表部との比高が8mであるのに対して、南のA地区の表部からは約3mの比高しかなく、A地区から突出した半独立小丘陵を呈している。

伐採後、枯葉・腐蝕土等を除去したところ、丘陵北半部が一面コブシ大の礫で覆われていた。古墳の葺石の可能性も考えたが、礫は径4～10cmのものが大半で、極くまれに径15～18cmを測るに過ぎず、一定の秩序のない散乱状態であり、子細に見ると礫はすべて腐蝕土に埋もれているか、載っている状態であった。

①腐蝕土の下には②黄褐色砂質土層があるが、極く少数の磁器片以外は遺物を含んでいない。頂上付近に於いては、②の下にすぐ④赤褐色礫混じりの地山層がある。A地区北半部の地山とよく似た固い土である。しかし、中腹より下方では、次第に厚くなる⑤濁黄褐色砂礫土が②と④の間に堆積している。これが以下に述べる遺構の覆土である。

検出遺構

- (1) テラス状遺構 SX01 (第76・77図, 図版第65)

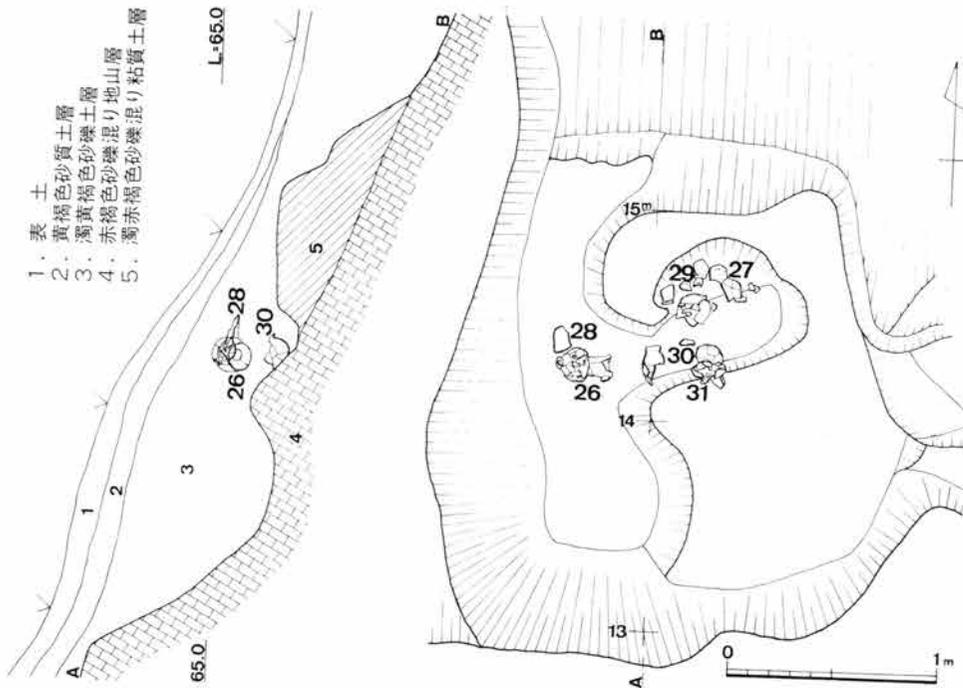


第76図 B地区北部平面実測図

B地区の中央から北方への斜面は、水平距離で約20mあるが、テラス状遺構は真北へその4分の3に相当する14m下った所に位置する。テラス部の南半分は地山の斜面に切り込み、北半分は地山と殆ど同じ色調の砂礫混じり粘質土を貼り付け突出させている。西方3分の1は、東の3分の2よりも一段低く、その高低差は南端で27cm、北端で10cm前後である。そしてこの西の3分の1の部分には貼り付けた突出部がない。この二段からなる平坦部は、北辺1.35m・南辺1.40m・東辺1.70m・西辺1.80mを測り、南北にやや長い長方形を呈する。東の高い部分の中央、やや北寄りには、径60~70cmのピット状の窪みがあり、その底面は同レベルで西の低い部分に連結している。

伴出遺物は土器のみである(第78図、図版第69)。テラス中央の窪みの北壁に長頸壺(27)と小型甕(29)、南壁付近に甕(30)と高杯(31)が、比較的大型の破片になった状態で検出された。保存の悪い高杯を除いて、いずれも完形ないし半完形に接合できたが、甕(30)の底部と胴部下半は失われていた。

西の低い部分からは、完形をとどめた状態の長頸壺(26)と長頸壺口縁(28)が出土した。全



第 77 図 テラス状遺構 S X01 土器出土状態

体に、土圧で壊れる前に破砕していたようである。

(2) S X02・03

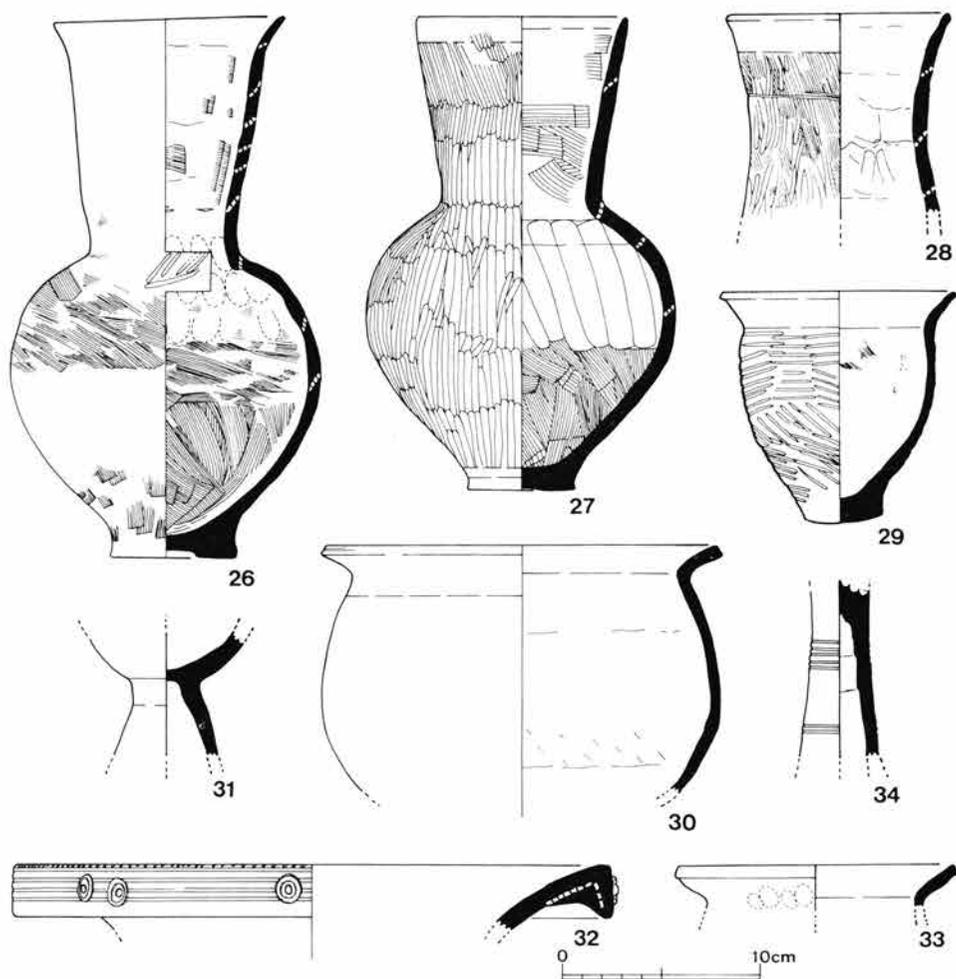
テラス状遺構の周囲には、起伏の激しい地山面が続く。その地形の中で、S X01の南寄りの東西両方に、それぞれ東方と西方に向かう細道状を呈する地形がある。S X01の北側正面に立って見ると、あたかもテラス状部分の両脇へ向かう道とも解せられる。遺構とすべき積極的な根拠はないが、一応 S X01に関連するかも知れないので、S X02と S X03の名を与え、報告しておくことにした。

出土遺物 (第78図)

B地区の出土遺物は、すべて土器であり、表土出土の磁器細片以外は、北方傾斜面中位以下の濁黄褐色砂礫土出土の弥生式土器に限られる。S X01に伴うものと、その周辺から出土したものに分けて報告する。

(1) S X01出土土器

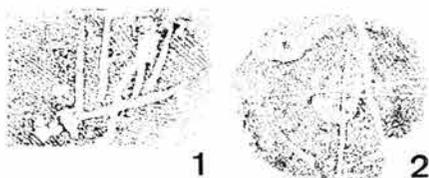
長頸壺(26)の口頸部は長く、やや斜め上方にまっすぐ伸びた後、端部近くで若干外反し、端部は丸くおさめる。体部は球形で、やや突出した底部はドーナツ状の上げ底である。体部は



第78図 B地区出土土器実測図

3段階に成形され、口頸部は7段の輪積み技法に依っている。器体は内外面ともハケ目調整であり、体部下半はハケ目の上をナデている。肩部内面は指でおさええているが、ハケ目は完全には消されずに部分的に残っている。この土器のハケ目には、1cmあたり9～10本、12～13本、16本、20本の4種類が見られる。肩部最上位の1か所に、ヘラ描きによる記号文を施

している(第79図1)淡赤褐色～黄褐色を呈し、体部に比して口頸部の焼成は甘い。器高27.4cm、口径11.7cm、体径15.6cmを測る。



第79図 長頸壺記号文拓影

長頸壺(27)の体部の形態は(26)とほぼ同じであるが、口頸部はやや短く、斜め上方にまっす

ぐ伸びたまま外反しない。器壁はやや厚く、(26)の約6mmに対して、これは8mm弱を測る。器体は外面を縦ヘラミガキ、内面をハケ目調整し、肩部内面の指ナデの範囲が広い。底部は浅いドーナツ状上げ底を呈し、ヘラ描きによる記号文(?) (第79図2)が見られる。器高24.0cm、口径10.6cm、体部径15.6cmを測る。

長頸壺の口頸部(28)は、内傾気味に立ち上がった後、斜め上方へ外反し、口縁端部に面を有する。内外面共ハケ目が見られるが、外面はその上にヘラミガキを、内面はナデを施している。口縁部は横ナデである。

甕(29)は器高11.8cm、口径12.0cmの小型品である。外反する口縁部の端部に面を有する。胴部の張りを殆どもたず、口径よりも体径が小さい。外面には右上がりのタタキが施され、口縁部は横ナデ調整である。内面上半はハケ目が見えるが、下半については磨滅のために不詳である。この土器は、底面が丸みを帯び、自立しない。口縁部を含めて器体外面全面にススが濃く付着している。尚、本遺跡各地区出土の実測可能な弥生式土器35点のうち、タタキがはっきり残る土器は、これとA地区SB01出土の(5)の2点に過ぎない。

甕(30)は、くの字形に外反する口縁の端部に面をもち、浅い数条の擬凹線が施されている。口径と体部最大径は共に20.3cmを測る。外面の調整は、剝離とススの付着で判別し難いが、不定方向のハケ目とナデと思われる。体部内面下半はヘラケズリとナデの調整である。

高杯(31)は、中空の脚部に起形の杯部を載せた形態である。表面がすべて剝離しており、調整は詳らかでない。

(2) SX01周辺出土土器

広口壺(32)は、口縁端部を粘土貼付けによって垂下させ、施文帯とし、4条の凹線文の上に、竹管文を施した円形浮文を貼っている。この円形浮文は、破片の端近くに2個見られたもので、図示したように2個ずつではなく、3個ずつ並ぶのかも知れない。口縁部上端には刺突列点文をめぐらせている。口縁部内外面とも横ナデ調整である。本遺跡出土のすべての弥生式土器の中で、この土器のみ暗茶褐色を呈し、角閃石・黒雲母を含む河内地方の胎土であり、搬入品であろう。推定口径30.3cmを測る大型品である。同型の広口壺が興戸5号墳の流土中から出土しているが、これも河内地方からの搬入品とされている。^(註2)

甕(33)は、外反する口縁の端部に面をもつ。口縁部中位にわずかなふくらみが見られる。復原口径14.3cmである。

以上の2点は、SX01よりも南方(傾斜面上方)から出土した。

高杯脚部(34)は、SX01よりも北方から出土した。調整は不明であるが、2か所に4本と2本の擬凹線をめぐらせているのが確認できる。

以上の本地区出土弥生式土器は、いずれも畿内第V様式に属するが、更に詳細な編年については、「7. 羽戸山遺跡の弥生式土器について」に於いて試みたい。

小 結

羽戸山遺跡B地区の円形丘陵は、古墳ではなく、弥生時代後期に何らかの目的で、丘陵真北のやや裾近くの斜面にテラス状の地形を作った遺跡である。その立地状況と遺構の形態から見て、居住地としても墓としても考え難いことは明らかで、また単なる土器の廃棄場所としては手の込み過ぎた遺構である。

そこで、何らかの祭祀的活動の為に作られた遺構ではないかと考えた次第である。特に積極的な根拠はないが、以下の特徴が挙げられよう。

- ① 斜面を切り込み、更に土を貼り付けてその面積を拡げ、斜面から突出したテラスを成形していること。
- ② そのテラスが丘陵の真北に位置すること。
- ③ テラスは丘陵斜面を4分の1上がった所にあり、テラスの高さと裾の平坦部との比高が約1.7m であり、裾部に立った人間の目の高さにはほぼ等しいこと。
- ④本地区出土の土器の殆どが、テラス上面に集中し、完形ないし半完形のものが多くいこと。
- ⑤ テラス上の6点の土器の半数が長頸壺であること。

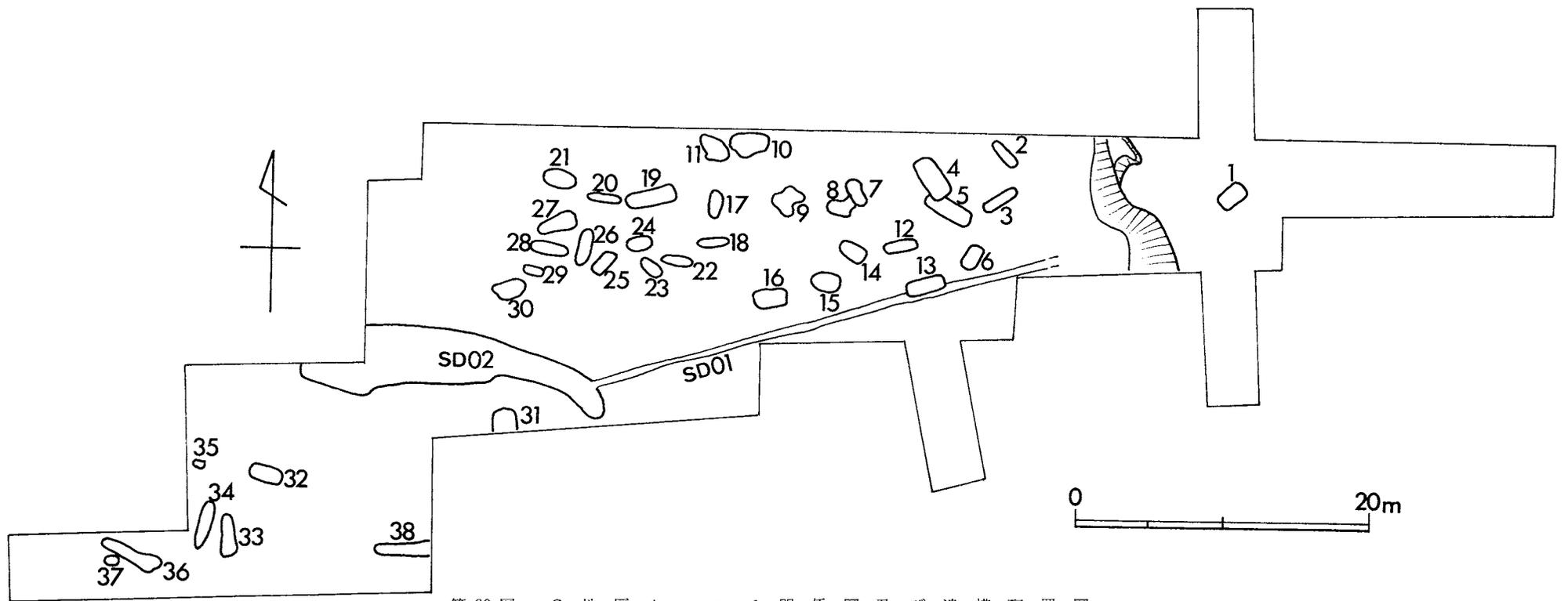
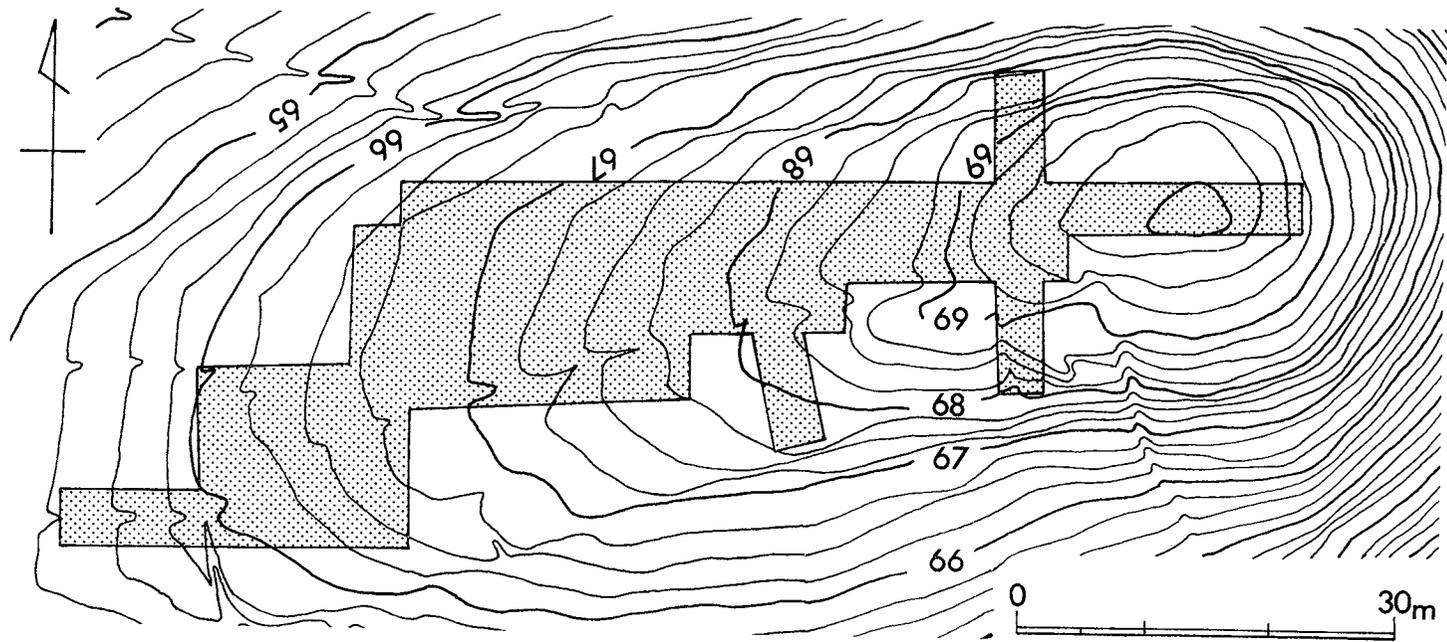
以上の諸点を合わせて考えてみると、このテラス状の遺構が祭壇ないしそれに類したものという推測に導かれるのである。

木津川支流の名張川が流れる三重県の名張市内の蔵持黒田遺跡と土山遺跡に於いて検出された遺構は、本遺跡のSX01に類似した斜面中腹に平坦部をもつテラス状遺構である。前者の東面する斜面のテラス状遺構には、手焙形土器が2点置かれ、後者には南面する斜面に4か所テラス状遺構があり、長頸壺・甕・鉢・器台・ミニチュア壺等が置かれてあったと報告されている。この2遺跡では、特に手焙形土器やミニチュア土器の存在から、遺構の祭祀的性格が指摘(注3)されている。

尚、SX01よりも斜面上方2～4mの地点から出土した土器片は、更に上方から転落した可能性があり、頂上部に、すでに削平消滅した遺構が存在したのかも知れない。

いずれにしても不明な点の多い遺構であり、性格・目的等に関しては、今後の類例の増加に俟つところが大きいと言えよう。

(小山 雅人)

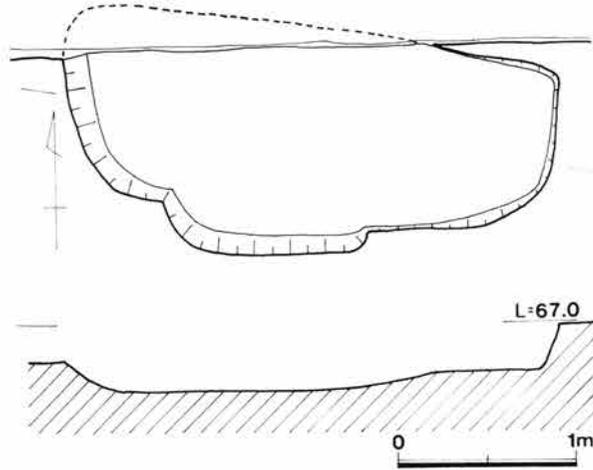


第80図 C地区トレンチ関係図及び遺構配置図

6. 羽戸山遺跡C地区の調査

地形と調査の経過

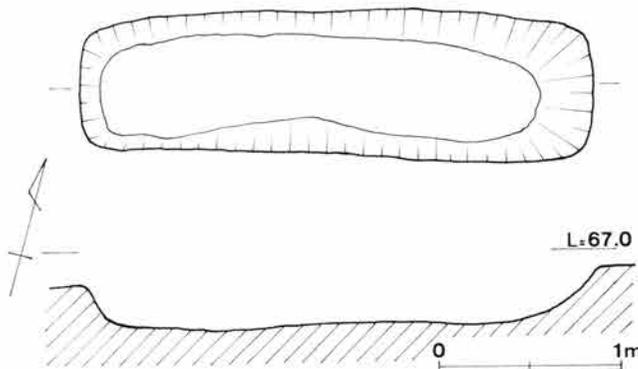
当地区は、標高約70mを頂点にし、東から西方向にゆるやかに傾斜するかなり平坦な地形を持つことから、当初は城あるいは館跡を想起して調査を開始したのである。調査は、まず尾根筋上に幅2m、長さ10mを基本型とするトレンチを7か所設定し、それぞれのトレンチ内の掘削に取りかかったのではあるが、木根が多く、掘削にはかなり困難をきたした。また地層そのものも判別し難い状況であった。ただ一部分に土器片の出土を見たことから周辺部を拡張し、精査を行ったところ、土壙状の掘り込みを検出するに至った。このことから、その周辺地域にはかなりの遺構・遺物が埋蔵されていると考えられたため、先に設定したトレンチに沿



第 81 図 C地区SK10実測図

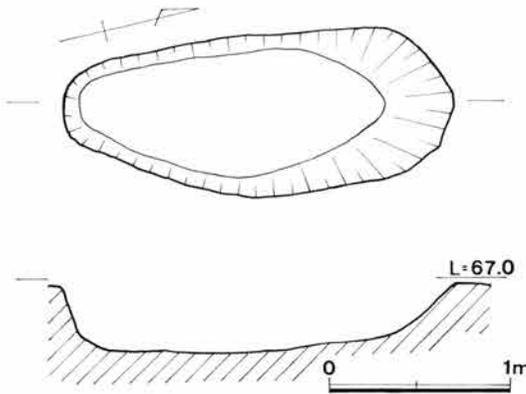
って、また尾根中央部を基本線として、重機により遺構面までの掘削を開始したのであった。重機掘削の後、遺構面精査を繰り返したところ、第80図に示すとおり38か所の土壙と2条の溝を検出するに至った。しかし、調査前に想起した城および館跡に関する遺構・遺物は全く検出することができなかった。なお調査面積は約1,500㎡である。

検出遺構



第 82 図 C地区SK19実測図

当地区において検出した遺構は、前述したように土壙38か所と溝2条である。土壙の性格づけについては、今のところ確定し難いが一応墓としてとらえることができよう。しかし、38か所の土壙すべてを墓としてはとらえ難く、その有り方に



第83図 C地区S K 26実測図

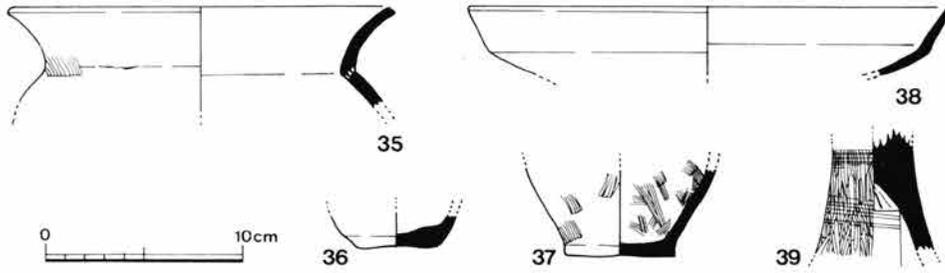
り、主軸をN33°Wに持つ。S K 05はS K 04と切り合い関係を持ち、長軸3.2m・短軸1.2mを測る。主軸はN61°Wに持つ。西方の土壌墓とも出土遺物は皆無であった。S K 10(第81図)は、長軸2.6m・短軸1.3mを測り、主軸をN89°Wに持つ。土壌内より、甕・高杯等が出土したが、いずれも細片である。S K 13は、長軸2.7m・短軸0.9mを測り、主軸をN73°Eに持つ。溝(S D 01)と切り合い関係を持つ。S K 19(第82図)は、長軸2.8m・短軸0.85mを測り、主軸をN77°Eに持つ。S K 26(第83図)は、長軸2.15m・短軸0.9mを測り、主軸をN13°Eに持つ。S K 32は長軸2.4m・短軸1.1mを測り、主軸をN71°Wに持つ。以上のように、いずれの土壌墓も長軸2m以上を測り、短軸も1m前後のものがほとんどである。しかし、S K 10以外のものからは、まったく遺物が出土していないことから、これらの時期を決定づけることはできないが、埋土および形態がS K 10のそれと類似していることから、ほぼ同時代的であると考えられよう。溝S D 01は、溝中から近世の磁器類が出土したことから、近世地境溝と考えられよう。またS D 02は、その性格こそ明確ではないが、S D 01と時期をほぼ同じくするものと考えられる。

出土遺物

当地区から出土した遺物はS D 01内出土の磁器片等を除けば、上記のとおりS K 10内出土の甕・高杯等(第84図)に限られる。(35)は甕の口縁部である。口径19.1cmを測り、外反する口縁部を持つ。肩部にはハケ調整が施されている。(37)は甕の底部で、外面はハケを施し、内面にもハケが施されている。(38)は高杯の杯部である。口径は22cmを測るが、磨耗が著しく、調整等については明確ではない。(39)は高杯の脚部である。外面は細かいヘラミガキが多用されている。

以上のとおり当地区出土の遺物について略述してきた。すべて細片であるために充分な観

については今後十分な検討が必要である。ここで土壌墓と考えられるものをいくつか列記してみることにする。S K 01は、尾根の最高所に位置し、長軸2.2m・短軸1.2mを測り、主軸をN51°Eに持つが出土遺物はまったくなかった。この土壌墓より西方約5mの地点に自然地形を利用した段を設け、他の土壌墓から独立した位置に立地しているS K 04は、長軸3.1m・短軸1.4mを測



第 84 図 C地区SK10出土土器実測図

察を行うことができなかったが、いずれも弥生時代後期に位置づけられるものである。

小 結

以上のとおりC地区における調査の結果について報告してきた。調査前に想起した城および館跡に関する遺構・遺物については全く検出することはできなかったが、予想に反して独立丘陵上の平坦面を利用して埋葬された土壙墓群を検出するに至った。ただ38か所という数の土壙をすべて墓としてはとらえる事が出来ない。すなわち、土壙内の埋土はすべて同じではあるが、一つの土壙墓の墓域を形成する溝的な役割を果していた土壙中にも中にはあるものと考えられる。しかし土壙内の埋土には特に顕著な変化もなく、また平面プランにおいてもいまひとつそういったものを考える要素に欠けていることから、今後とも十分な検討が必要であると考えられる。土壙墓群の有り方については、いうなれば一種の規則性があったものと思われる。つまり埋土等からはほぼ同時代的と考えられる土壙墓ではあるが、SK04・SK05以外は全く切り合い関係がない事から、そのことが窺われる。又それぞれの土壙墓の位置的なことからして、グループ形成についても考えなければならないであろう。すなわち、SK01から西方約5mの位置にある自然地形を利用した段が一応の境と考えられ、土壙墓密集地帯で1グループ、さらにその西方部において1グループというように、とらえられるであろう。いずれにしても、弥生時代後期における墓制の有り方について、一つの好資料が得られた事は言うまでもない。独立丘陵上の平坦部を利用した土壙墓群は、山陽地域においてはかなり発見されてきてはいるが、京都府下では初めての例である。

今後の資料の増加を待ち、十分な検討を加えていきたい。

(大槻 真純)

7. 羽戸山遺跡の弥生式土器について

土器の器種分類

本遺跡の各地区から出土した弥生式土器は、いずれも畿内第V様式に属する。

広口壺Aは、口縁端部を下方に拡張し、施文帯を設けた形態である。凹線文と円形浮文を飾る A₁(32)と、やや退化した凹線文のみを施す A₂(1) とに分けられる。いずれも口縁部片で、体部は不明である。

長頸壺Aは、球形の体部にやや突出した底部が付き、長い口頸部を有する。器体外面をハケ目で調整するもの(10・26)、ヘラミガキを施すもの(27)、そして両者を用いるもの(28)がある。口頸部の形状によって、直口の A₁(10・27)、口縁部のみがやや外反する A₂(26)、内傾して立ち上がった後外反する A₃(28)に分けた。

甕Aは、くの字形に外反する口縁部の端部に面を有する甕である。体部外面をハケやナデで仕上げたものを A₁(2・11・30~33・35)、タタキ目を残すものを A₂(29)とする。A₁の例には口縁部のみの破片を含むので、問題は残る。しかし、図示し得なかったすべての破片に目を通したが、タタキ目を残す胴部片は、全体の10%にも満たない数片に過ぎなかった。従って、実測し得た A₁と A₂の比5:1はかなり実情に近いと思われる。A₁の多くはハケ目調整である。

甕Bは、口縁端部を丸くおさめるものであるが、唯一例の(21)は壺の可能性も考えるべき形態を有している。

甕Cは、所謂受口状口縁の甕である。例は破片(3)のみで、刺突文等の存在は確認できない。

高杯Aは、浅い皿状の杯部底部から、口縁部が屈曲して立ち上がる。屈曲部の稜線が特に顕著で、やや突出気味のもを A₁(6・7・8・14)とし、稜線がさほど目立たないものを A₂(38)とした。

高杯Bは、碗状の杯部を有する高杯で、例は(31)のみである。

器台は、(25)が本遺跡の唯一例であり、全体の形状は知り難い。

底部に関しては、外面にハケ目が見られるものをa、タタキ目が残るものをb、不詳のものをcとしておく。

高杯脚部が6点あるが、いずれも柱状部のみの破片であり、全体の形態は明らかではない。(9)(15)(39)は中空であり、なだらかに広がる脚と思われ、(34)は中空ではあるが、円柱状を呈している。前者をa、後者をbとする。

以上のように分類した土器を、出土地点別にまとめてみたのが第2表である。

個体数が少なく、統計学的には問題が残るが、敢えて本遺跡の器種構成の特徴をいくつか挙げてみよう。

① 壺形土器には、広口壺と長頸壺しかなく、特に長頸壺が6点中4点を占めている。

付表6 弥生式土器出土地点別分類表

		A 地区			B 地区		C地区	合計点数	
		S B01	S K01	包含層	S X01	包含層	S K10		
広口壺	A ₁					32		1	2
	A ₂	1						1	
長頸壺	A ₁		10		27			2	6
	A ₂				26			1	
	A ₃				28			1	
甕	A ₁	2	11		30	33	35	5	8
	A ₂				29			1	
	B			21				1	
	C	3						1	
底部	a		12				37	2	
	b	5						1	
	c	4	13	22・23			36	5	
高杯	A ₁	6・7・8	14					4	6
	A ₂						38	1	
	B				31			1	
脚部	a	9	15				39	3	
	b		16	24		34		3	
器台				25				1	1

- ② 甕形土器に於いても、口縁部の残る8点の内、5点までをA₂類が占めている。
- ③ 高杯形土器は、6点中4点がA₁類であり、これらはいずれもA地区に限られ、他はB類がB地区に1点、A₁類がC地区に1点あるのみである。

④ 器種は、以上の壺・甕・高杯の他には、遺構には伴わない器台(25)が1点あるだけで、鉢は底部片の中にその可能性はあるが、口縁部等、鉢と確認できるものはなかった。

このように本遺跡各地区の土器を器種別に見ると、器種・器形がかなり限られている。このことは、調査面積に比して、遺物を伴う遺構が非常に少なく、また包含層にも少数の小片以外は弥生式土器の出土が見られなかったことと合わせて考えると、弥生時代に於ける羽戸山遺跡の利用が単一時期、それもかなり短期間のみ行われたのではないかと思われる。従って、土器の様相が共通する本遺跡各地区（但し、土壙墓群と考えるC地区出土遺物に関しては、群集墓そのものの性格からして、若干の時期の幅も考慮に入れるべきであろう）の遺構・遺物は、ほぼ同時期の所産と見做されよう。

出土土器の編年的位置

畿内第V様式の土器の変遷については、近年その細分化が、特に河内南部・和泉・大和の一括資料を標式として、いくつかの論文・報告書で行われている。しかしながら、本遺跡が位置する山城地方に於いては、最近特に各地域単位による編年の必要性がさげばれているにも拘わらず、主に資料が不足しているという理由で、いまだまとまった論考がないのが実情である。そこで本概報に於いては、本遺跡出土の土器群を、近畿南部を主とした細分編年と比較しつつ、第V様式のどのあたりに位置づけられるか考えてみたい。

畿内第V様式の細分化された各段階を、本稿では、基本的に森田克行氏の6段階編年^(注4)に拠りつつ、各段階を以下のように略称する。

V-1 = 西ノ辻I式〔及び瓜破北遺跡SD17・亀井遺跡H・I地区第IX区b層・同遺跡SD3008〕^(注5)^(注6)、

V-2 = 西ノ辻E式・唐古70号地点・池上遺跡第5号井戸〔及び亀井遺跡H・I地区第a層〕^(注7)、

V-3 = 安満遺跡周溝墓A5-2・池上遺跡第3号井戸〔及び同遺跡第6号住居〕^(注8)、

V-4 = 田能遺跡6Y-2溝・唐古45号下層・安満遺跡土壙3、

V-5 = 唐古45号上層・上六万寺遺跡等〔及び馬場川遺跡井戸I類土器・亀井遺跡SD3041〕^(注9)^(注10)、

V-6 = 北鳥池下層等〔及び亀井遺跡NR3001〕、

第V様式を3（ないし4）段階と見る説は、上記の略号で並べれば、V-1→V-2→(V-5→)V-6の各段階に標式を求めているわけである。^(注11)

また、第V様式を前半と後半に分かつ場合、二重口縁壺形土器や手焙形土器の出現以降を後半とする考え方や、長頸壺（小型や広口形・細頸形を含まない）の存在を以って前半とす^(注12)

る見方等^(註13)があるが、上記の6段階編年では、いずれの場合もV-3とV-4の間に区分線が引けるようである。

さて、本遺跡からは、二重口縁の壺や手焙形土器のいずれも出土せず、逆に直口で大・中型の長頸壺Aの存在が顕著である。また、口縁端部に面を有し、外面をハケやナデで仕上げる甕A₁も第V様式前半に特に多い土器である。高杯(6)には円盤充填法が認められ、これと形態が類似するA₁類が本遺跡の高杯の主流である。以上から、羽戸山遺跡出土土器は第V様式前半に属すると言える。

第V様式前半の3段階は、漸次的に変化しており、本遺跡の少ない土器の観察によっていずれかに位置づけることは困難かも知れない。しかしながら、土器の寡少性が、遺跡利用期間の短さによると仮定すれば、ここで、出土土器の中で比較的多く、またかなり良好な資料が得られた長頸壺の形態によって、細分編年へのある程度の位置づけも無駄ではなからう。

上記V-1段階の層位・遺構の中で長頸壺が出土しているのは、西ノ辻I地点のみである。他の資料がいずれも若干これに先行すると報告されていることからすれば、長頸壺はV-1段階に於いてもやや遅れて出現したようである。その形態は、斜め上方へ直線的に伸びる長い直口の口頸部をもち、球形の体部に付いた底部はあまり突出しない。

和泉の池上遺跡からは長頸壺が多く出土しているが、報告書では、長頸壺の口頸部の外反度を主な目安として、第8号土器堆積→第5号井戸(V-2の標式)→第3号井戸(V-3の標式)→第6号住居という時間的な順序が与えられている。これによると、長頸壺の口頸部は、古くV-1からV-2にかけては直線的であるか、あるいは若干の外反する形態が現われ、V-3になると後者が大多数を占め、かつ外反度も大きくなるに至る変遷が見て取れる。

一方全体の形状から見れば、V-1からV-2にかけては、肩の張った球形の体部で、頸部との境が明瞭であるものが殆どである。これに対して、V-3になると、頸部が太く、かつ体部の肩があまり張らない倒卵形で、頸部と体部との境がやや不明瞭になり、全体にややずんぐりした印象を与える器形が多くなる。

尚、第V様式後半になると、大・中型の狭義の長頸壺は、前半とほぼ同じ大きさの外反した口縁端部を垂下させた広口長頸壺を除いて、すべて器高20cm前後以下の小型品になり、口頸部の長さの器高に占める割合が小さくなるものの、前半のものに近い形状の小型長頸壺、口頸部の外反度が増すと同時に頸部が細くなり、体部が扁平な球形を呈する細頸壺等に分化する。

さて、羽戸山遺跡出土の4点の長頸壺の内、A₁(10)は器高も大きく、口頸部の形状から見ても古い要素を備えている。A₂(26)の口縁部の形状は、端部の形こそ違え、池上第5号

井戸に類例がある。A₁ (27)は、口頸部がやや短く、A₁ (10)より新しいと見るべきであろう。口頸部片 A₂(28) の類例は、池上第5号井戸や第6号住居に見られる。従って、本遺跡の長頸壺はV-2を中心とする時期に位置づけるべきであると考えられる。

ここで、再び他の土器に目を向けると、甕 A₁ はV-1からV-3に主に見られるが、口縁端部をやや上下に拡張して凹線文を施すような古い土器が見られないこと、少数ながら、タキ目をはっきり残す甕 A₂ が存在すること等を考慮すれば、甕類もV-2 併行時期に位置づけてもよからう。また、高杯 A₁・A₂ 共に杯部口縁の外傾度からして、V-1よりもV-2以降に置くべきである。

以上の検討の結果、羽戸山遺跡の第V様式土器は、6段階細分編年の第2段階、即ち、弥生時代後期前半中葉頃に位置づけられよう。

8 ま と め

宇治羽戸山弥生遺跡は、比高40mの独立丘陵上の住居跡1基と土壇数基、尾根上の土壇墓群、両者の谷間の小丘陵北斜面上に位置する祭祀用と考えられるテラス状遺構から成る弥生時代後期前半の遺跡である。稲作という生活原理上、平地に営まれるのが通例の弥生遺跡としては、本遺跡の遺構はいずれも特異なものである。その性格をめぐって今後考えていくべき多くの課題を残すと同時に、貴重な資料を提供した遺跡である。概要報告の最後にあたって、羽戸山遺跡の特徴と問題点を不十分ながら、個条書きにまとめておきたい。

① A地区は、高地性遺跡に属するが、集落と言える程の戸数があったとは殆ど考えられず、逆に建物は1基だけであった可能性が高い。

② その時期は弥生時代後期前半（のおそらく中葉）であり、中期末のほぼ全国的な争乱^(注15)に対して、畿内を中心に後期前半に出現する高地性遺跡のひとつである。本遺跡が属する淀川水系の高地性遺跡のうち、同時期のものとして、田辺町天神山遺跡・八幡町幣原遺跡・高槻市紅茸山遺跡・枚方市鷹塚山遺跡・大東市堂山遺跡があり、他に山城町椿井遺跡・田辺町飯岡遺跡・山城町城山遺跡^(注16)等も、羽戸山遺跡と同時期かも知れない。

③ 都出比呂志氏は、「高地性集落に固有のもの」は「見張り」^(注17)、「それによって得られた情報を『伝える』こと」であるとされ、「通信施設としての機能」を主張された。羽戸山のように高地に1棟のみ立っていた住居跡は、通信機能専用の施設であった可能性も指摘できよう。ただ、焼土は検出されていない。

④ しかし、すぐ近くの祭祀的性格をもつ遺構や土壇墓群の存在にはやや別の説明が必要であろう。名張市の蔵持黒田遺跡^(注18)では、祭祀遺構と住居跡はあるが、土壇墓は検出されてい

ない。三者がセットになっているのは芦屋市会下山遺跡^(注19)に例があるが、住居跡を7棟も数える集落である。羽戸山遺跡A・B・C地区のセット関係については、今後に残された課題の一つである。

⑤ 集落が山上になかったとすれば、想起されるのは羽戸山丘陵のふもとの低地に広がる菟道西隼上りの石包丁出土の伝聞がある弥生式土器片の散布地である。羽戸山の各地区の遺構は、この西隼上りの住人たちの、埋葬・祭祀・通信等、特殊な、あるいはむしろ一回限りの利用施設であったかも知れない。

⑥ 羽戸山遺跡の土器群に見られるひとつの顕著な事実は、大和・中南河内・和泉の所謂畿内中央部との結び付きである。直接的には広口壺1点(33)が河内からの搬入品であることがそれを示すが、周辺地域では例の少ない長頸壺の多用は、畿内中央部との深い関係を示しているようである。

京都府下に限って言えば、C地区の尾根上の土壙墓群も、B地区のテラス状遺構も、初めての例である。府下に於けるこれらの遺構の存在も、今後資料の増加を待ちながら、その性格を極めて行くべきであろう。

また、調査の経過説明に於いても述べたように、本遺跡に於いて初めて弥生式土器の出土を見たのは、調査の半ば近くであった。非顕在遺跡の典型とも言える例であり、今後、特に高地性遺跡について、十分な配慮が望まれるのである。 (小山 雅人)

(注1) 調査補助員・整理員として参加していただいたのは次の方々である。

福富 仁、北川みどり、久保直子、中川伸二、末澤幸一、小出正憲、中尾雅之、竹田 満、森 一九、西岸秀文、長谷川陶子、宮本 満、木戸裕美、山本 宏、竹下和子、谷本隆儀、山本健雄、井上和也、勝部一夫、田村 稔、安達佳明、榊原弘美、守田美和、大田正美、清水 隆、阪口浩章、有井広幸、小出賢一、福田桂三(順不同、敬称略)

(注2) 奥村清一郎「興戸古墳群発掘調査略報」(『筒城』26 田辺郷土史会) 1981

(注3) 水口昌也・門田了三『蔵持黒田遺跡』(名張市文化財調査報告 第1冊) 名張市遺跡調査会 1978

(注4) 森田克行「第V様式土器の型式細分について」(『安満遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書 第10冊 高槻市教育委員会) 1977

(注5) 永島暉臣慎・木原克司・田中清美・森 毅・京嶋 覚『瓜破北遺跡 共同溝建設工事に伴う発掘調査報告書』大阪市文化財協会 1980

(注6) 『亀井・城山』(寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書) 大阪文化財センター 1980

(注7) 注6に同じ。

(注8) 『池上遺跡 第2分冊 土器編』大阪文化財センター 1979(尚、森田氏論文に於いて使用された名称「J-2号井戸」「J-3号井戸」は、この報告書でそれぞれ「第5号井戸」「第3号井戸」と改称されている。従って、本稿でもこれに従った。)

- (注9) 下村晴文・福永信雄・芋本隆裕『馬場川遺跡発掘調査報告』(東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 17) 東大阪市教育委員会 1977
- (注10) 注6に同じ。
- (注11) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』第20巻第4号) 1974
- (注12) 注4に同じ。
- (注13) 注8に同じ。
- (注14) 注8に同じ。
- (注15) 石野博信「3世紀の高城と水城」(『古代学研究』68) 1973
- (注16) 都出氏論文(注11)参照。
- (注17) 注11に同じ。
- (注18) 注2に同じ。
- (注19) 村川行弘・石野博信『会下山遺跡—弥生後期・山頂式高地性集落址の研究』(芦屋市文化財調査報告 第3集) 兵庫県芦屋市教育委員会 1964
- (注20) 田辺昭三「先土器から稲作へ」(『宇治市史1』宇治市役所) 1973

6. 宮ノ平遺跡発掘調査概要

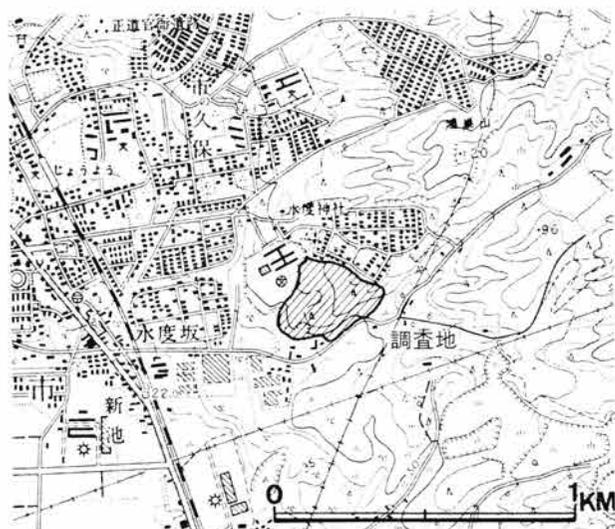
1. はじめに

城陽市は、京都市の中心地から南方約25kmに位置し、東は山塊、西は木津川にはさまれた山城盆地南部の東縁にあたる。この地域は木津川及びその支流により形成された河谷平野であり、古代より大和・河内・摂津・山城といった地域と結ぶ一要所を占めて来た所である。また、丘陵から平野部にかけて散在する各種の遺跡は、この地域が古くより政治・経済・文化等の重要な鍵を握っていたことを示すものである。

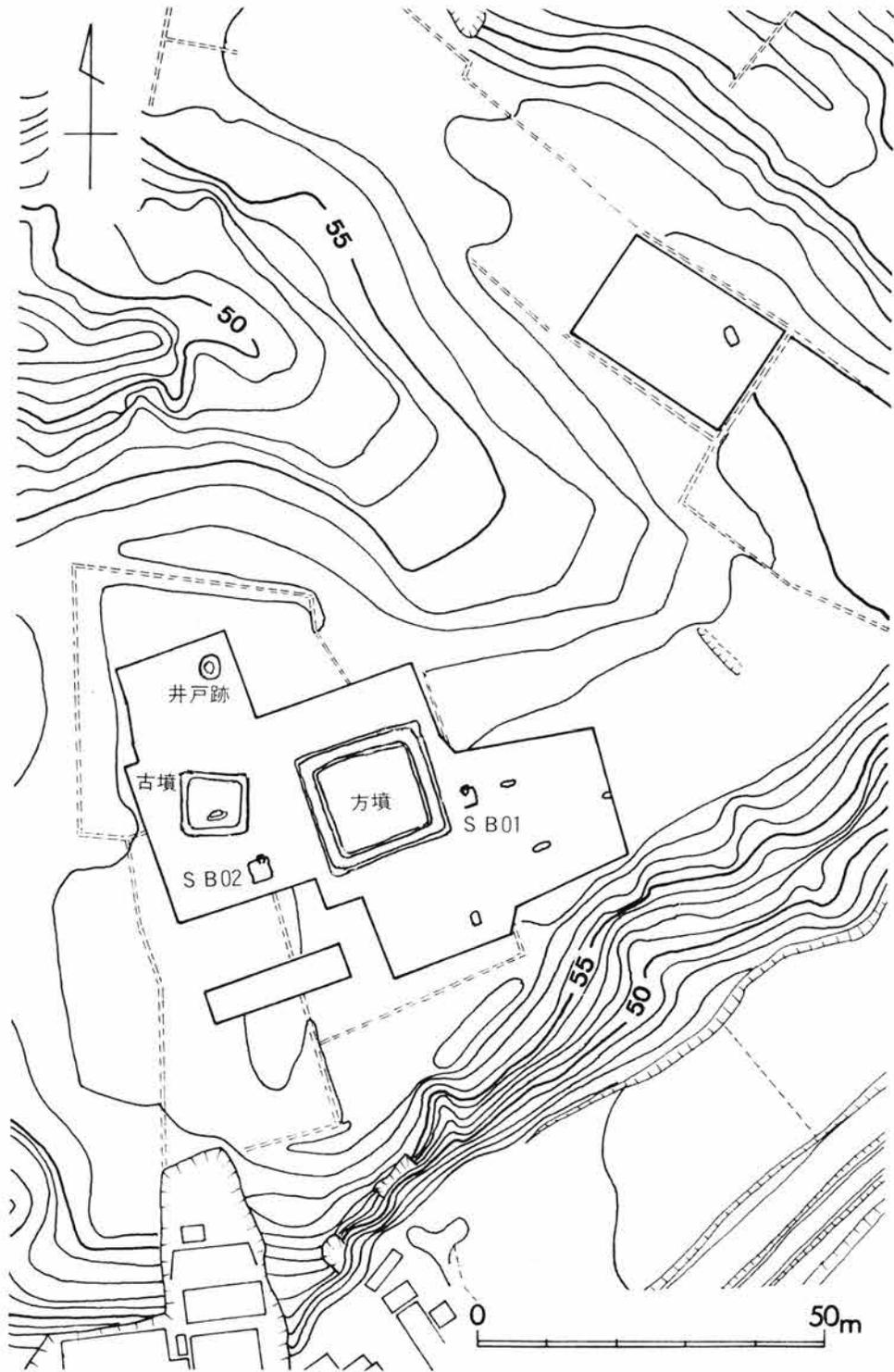
2. 調査概要

今回の調査対象となった宮ノ平遺跡が立地する丘陵は以前より土器片等が採集されていた所であり、又隣接する京都府立城陽高等学校のグラウンド造成の際に調査された宮ノ平古墳群^(注1)と同一丘陵であることから注目視されてきた地域である。この度、京都府住宅供給公社がこの地に宅地造成を計画した為、同計画について城陽市教育委員会と京都府教育委員会で協議がなされたところ、工事着手前に遺跡の範囲・性格等を明確にする事が急務であるとの結論に至った。そこで昭和55年6月3日から8月4日までの約2か月間、試掘調査が行われた。^(注2)試掘調査の結果、古墳時代から平安時代に至るまでの土壇墓及び井戸跡等が検出されたことから、付近一带には、かなりの遺構・遺物が埋蔵されていることが予想されたため、今回発掘調査を実施することになった。調査は昭和57年1月21日から3月31日までの予定で開始した。

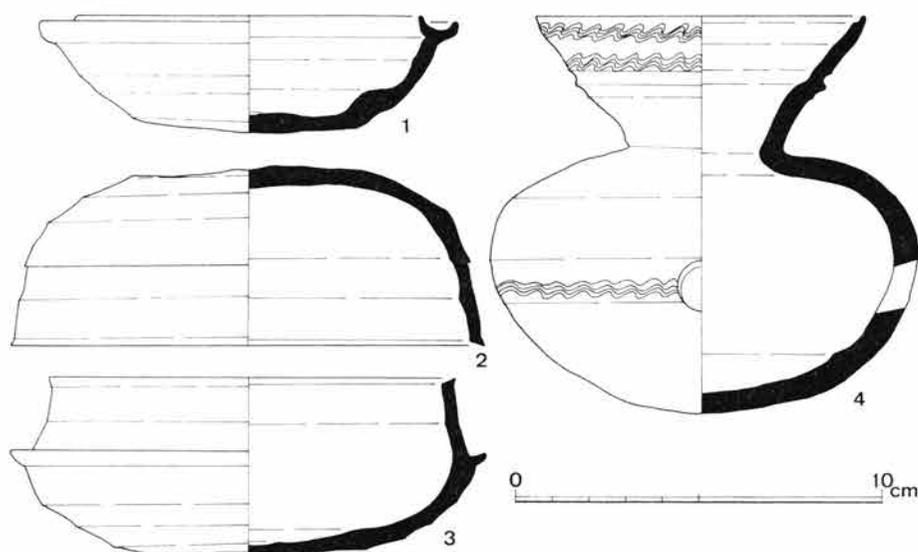
調査方法としては、試掘調査において遺構が検出されている部分を中心に、その周辺部を尾根筋に沿って掘り広げる事とし、顕著な遺構・遺物が検出された場合には、さら



第85図 調査地位置図



第 86 図 トレンチ関係図 (遺構配置は略測)



第 87 図 出土遺物実測図 1. S B01 2~4. 古墳

に掘り広げる方法をとった。現在までに確認されている遺構は、住居跡2基・土壙墓13基（試掘調査分を含む）・井戸跡1基（試掘調査に於いて確認済み）・古墳2基である。住居跡（S B01）は、一辺約3mを測り北辺中央部に竈を有する。壁高は約15cmであるが、一部分が近世地境溝によって削平されている。内部からは須恵器の杯身・土師器の甕片が出土している。住居跡（S B02）は、一辺約4m、壁高は約20cmを測り、北辺中央よりやや東寄りに竈を有する。内部からは土師器の甕及び椀が出土している。土壙墓は不定形をしたものが多く、特に遺物の出土も無かった。その為これらすべてを墓として把えることは出来ず、今のところは推測の域を出るものではない。井戸跡は、長径2.4m・短径1.9m・深さ1.6mを測ることができる。底部には炭まじりの青灰色粘土が堆積していることから、明らかに水が溜っていたことがわかる。西側の古墳は、一辺約10mを測り周囲には幅約1.2mの溝がめぐっている。その東辺溝の中には、須恵器の甕・杯身・杯蓋・壺・甕が北より順番に並べられた状況で出土した。中央よりやや南寄りに2基切り合った状況の土壙を検出した。いずれも主軸を東西方向にもつ。東側の古墳は、一辺約15mを測ることのできる方墳であるが、その主体部はすでに削平されており検出することはできなかった。しかし、埴輪・須恵器の高杯・甕等を含む幅約2.6mの周溝を検出することができた。

3. む す び

以上のとおり、これまでに検出されている遺構について略述してきたが、墓域内に於ける

予期しなかった住居跡の検出、又、主体部そのものは削平されてはいるが、宮ノ平古墳と同一丘陵上に於いて古墳が検出されたことは、今後、墓域と居住地及び墓制の形態等を考慮した上での調査及びその結果に期待をよせるものである。 (大槻 真純)

(注1) 高橋美久二・平良泰久「宮ノ平古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1974) 京都府教育委員会

(注2) 近藤義行・長谷川 達・鷹野一太郎「宮ノ平遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書 第10集』1981) 城陽市教育委員会

7. 木津遺跡発掘調査概要

1. はじめに

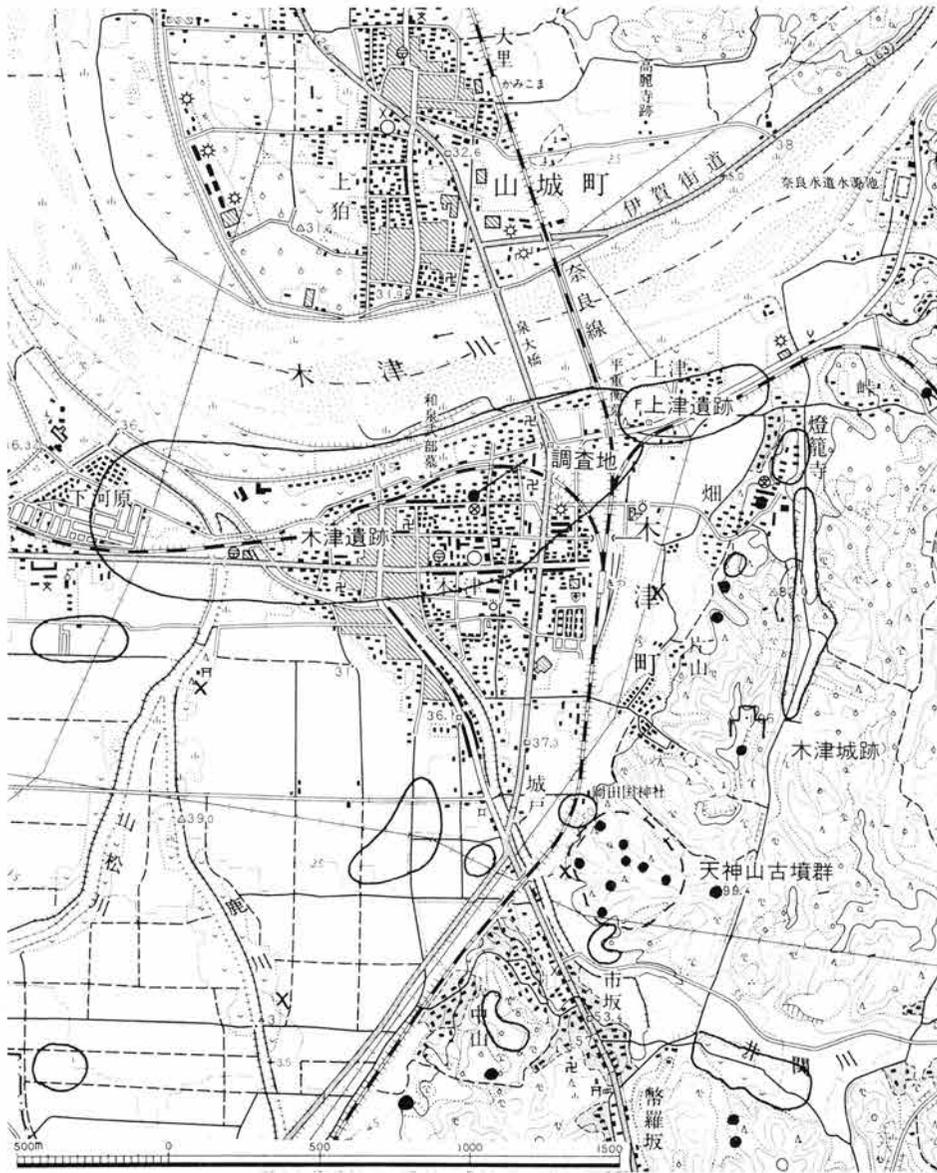
木津町は、北東方向から流れてきた木津川が、北の方向に大きく向きを変える地点の南岸に位置し、大和・伊賀・歌姫の諸街道および木津川に接するこの地域は、古くから交通の要所を占めてきた所でもある。今回の調査の対象となった木津遺跡は、国鉄奈良線の木津駅より北西約0.5kmの地点に位置し、東西約1.8km・南北約0.5kmがその範囲とされている。また木津遺跡周辺は『日本霊異記』に記載されている「泉津」の推定地であり、これまで数多くの土器片・瓦等が採集されている。

この遺跡の周辺には、灯籠寺遺跡などの弥生時代の遺跡や吐師七ツ塚古墳群・西山塚古墳などの古墳時代の遺跡があり、奈良時代になると瓦窯・須恵器窯が築かれるとともに、高麗寺跡・上津遺跡および一時期国政の中心地となった恭仁京もすぐ近くに位置している。これらの諸遺跡は、木津川の流れとともに各時代毎の新しい文化発展の途を歩んできたのである。

このたび京都府木津警察署待機宿舎が建設されることになり、同計画について京都府教育委員会で協議がなされた結果、当該地が木津遺跡の範囲内に位置しているため、この遺跡の範囲・性格等を明確にすることが急務であるとの結論に至った。そこで工事着手前に発掘調査を実施し、その結果によって処置の再検討を行うことになり、昭和56年7月6日から同年7月22日までの17日間、調査を行った。なお発掘調査は当調査研究センターが主体となって実施したのであるが、現地は当調査研究センター調査課調査員長谷川 達・大槻真純が担当し、京都産業大学学生中川伸二・阪口浩章・清水 隆・末沢幸一の各氏には調査補助員として、また北川みどり・長谷川陶子・久保直子氏には整理員として多くの協力を受けた。そして木津町教育委員会・京都府木津警察署等の諸機関からはそれぞれの立場で多大な御援助を受けることができた。ここに銘記して謝意を表わしたい。なお、この概要は大槻真純が執筆し報告するものである。

2. 調査概要

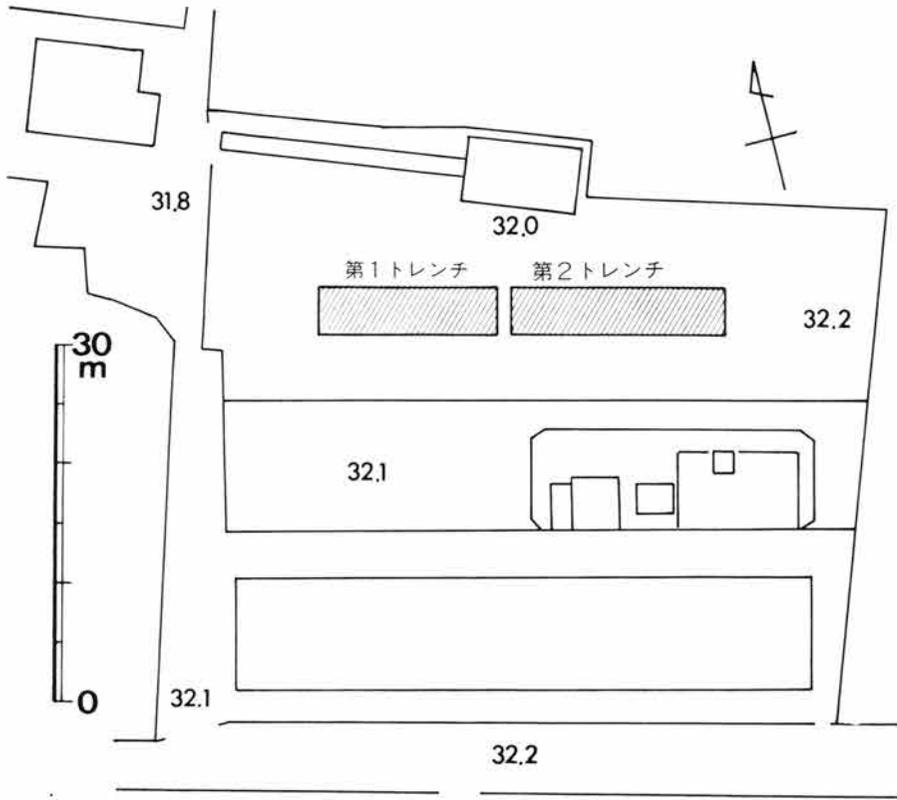
当遺跡は、前述したように土器片等の発見はあったというものの、具体的なことについては全く明らかではなかった。したがって待機宿舎建設前に遺跡の有無・範囲・性格等を明確にし、工事との調整を計ること及び遺跡保存等の協議に関する資料を得ることを主目的と



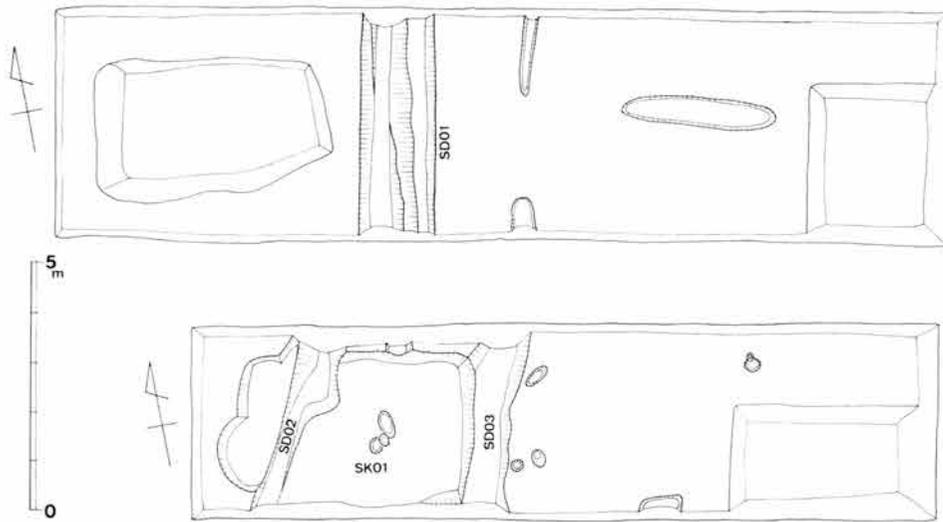
第 88 図 調査地位置図

して調査を実施した。

調査方法としては、原則として待機宿舎の建設予定地内に限り、その中軸線に沿って長さ 17m・幅 4m を基準とした試掘溝を第 89 図に示すとおり 2 か所に設定し、そのトレンチ内に顕著な遺構が検出された場合には、周辺部を掘り広げる方法をとった。掘削には機械を使用し、第 1 トレンチより開始したのではあったが、両トレンチとも攪乱が著しい状況であり遺



第 89 図 ト レ ン チ 設 定 図



第 90 図 第 1 トレンチ (下) ・第 2 トレンチ平面図

構面までそれが及んでいた。ただ土器片を含む土壌（SK01）及び溝（SD01）を検出することができたが、その性格等については明確に把握することはできなかった。

調査において検出された遺構としては、上記の土壌・溝の他に土壌7か所・溝3条があるが、これらの内からは土器等の出土がなかったため、その時期等については明確ではない。ただ埋土をSK01・SD01と同じくすることから同時代と考えられる。SK01はSD01・SD03と切り合い関係を持ち、南北3.0m以上・東西3.5m以上の規模を有し、深さは0.3mを有する。SD01は延長4m以上・幅1.5m・深さ0.6mを有し、北方向に傾斜するSD02は延長4m以上で、幅および深さは不規則ながら北に向かって極端に深くなる。SD03は延長4m・幅1.2m・深さ0.3mで北方向にやや傾斜する。

以上のように検出された遺構については、その性格等は確定し難い。

3. 出土遺物

出土遺物はそのほとんどがSK01・SD01より出土したものであり、それらはすべて鎌倉時代～室町時代を中心とした日常の用器として使用されていたものである。以下各々項を設けて述べていきたい。

SK01出土の土器（第91図）

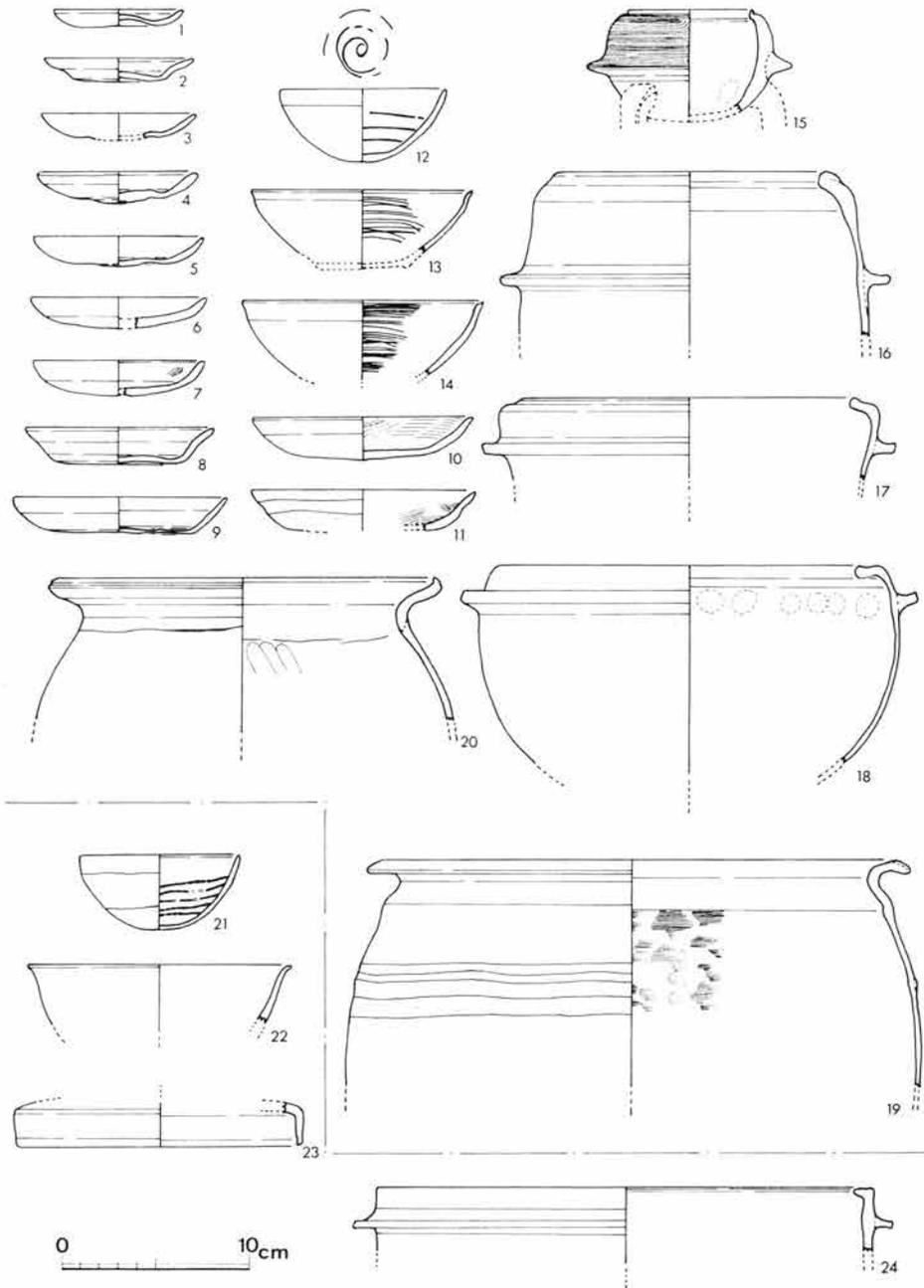
皿A（1～9）はいずれも口縁端部を丸くおさめ、内外面ナデ調整がされている。また口縁に対して器高が低い。2・8は口縁部が外方へ伸長する。1・2は底部中央が上方へやや突出する。

皿B（10・11）いずれも内面はハケ調整、外面はナデ調整が施されている。10は口縁端部がわずかに外反する。

瓦器椀（12～14）いずれも内面に暗文を施し、外面体部上半がナデ調整されている。12は、高台を有せず、丸底に作られている。また、内面底部にラセン状の暗文が施されている。13は、体部が湾曲し、上半に弱い稜を形成、口縁端部は丸くおさめるが、内端をやや凹ます。

羽釜（15～19）15は、瓦質のミニチュア製品であり、内外面とも横ナデ調整が施されている。おそらく脚がつくものであろう。16は体部が内湾ぎみに立ち上がる。口縁上端がやや肥厚する。17は、体部がやや外湾ぎみに立ち上がる。内外面とも強いナデ調整が施されている。18は体部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。内面には把手取り付け時の指圧痕がみられる。19は、体部がやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。外面はナメハケの後、堅いナデ調整を施す。

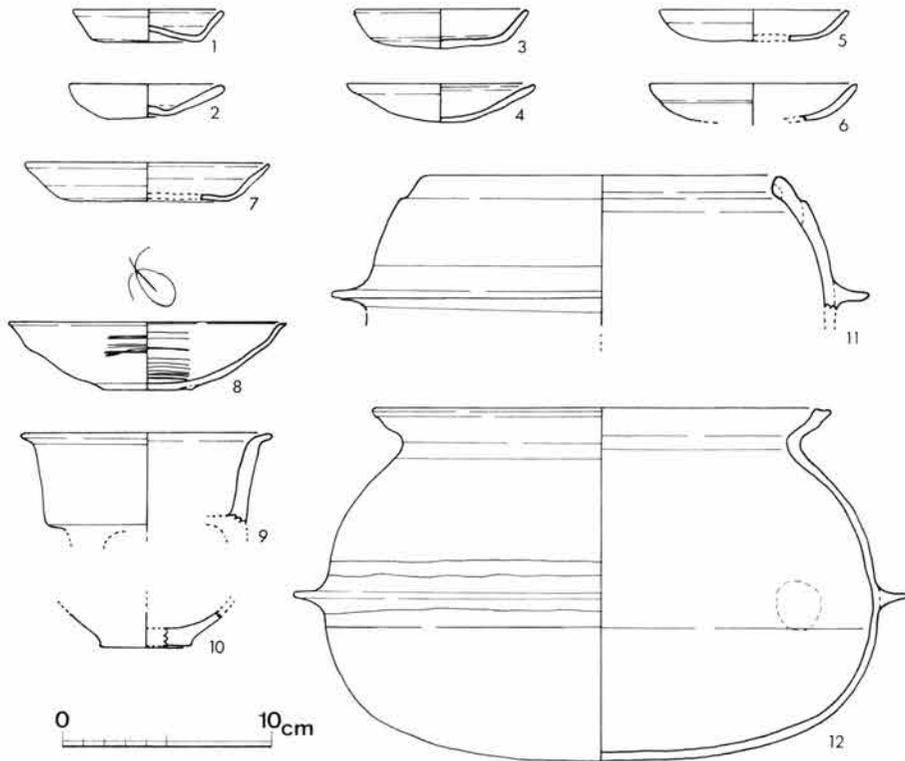
甕(20)くの字状に外反する口縁部を持ち、口縁端部は内外へ折り返し、端面はほぼ直立する。



第91図 出土遺物実測図(1)

SD01出土の土器 (第92図)

皿(1~7)いずれも口縁端部を丸くおさめ、内外面ともナデ調整が施されている。1・2は底部中央が上方へやや突出する。



第92図 出土遺物実測図(2)

瓦器碗(8) 内外面とも平行線状の暗文が施されている。浅い碗部に断面三角形の低い高台がつき、口縁端内側に稜を持つ。

香炉(9) 体部はやや外湾ぎみに立ち上がり、口縁は外反する。内面口縁近くより外面体部にかけてへら磨きが施され、内面はヨコナデ調整が施されている。おそらく脚がつくものと思われる。

緑釉碗(10) 底部糸切り痕あり、施釉は内外面に施す。

羽釜(11・12) 11は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁は内反し、やや肥厚する。12は、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁はくの字状に外反する。

4. む す び

以上のとおり、今回実施した調査の結果について報告して来たが、遺構・遺物ともに極く限られた範囲内での検出であったため、木津遺跡そのものの性格を明確に把握することは出来なかった。土層断面を観察するかぎり、遺構面以下の層は砂層・砂礫層・礫層が交互に堆積した状態であった。おそらく木津川が現在よりも南に流れていた頃の堆積もしくは木津川

の氾濫により堆積したものであろう。その為以下の層については特に遺構は存在しないものと考えられる。遺構内より出土した各種の遺物は、当時の日常生活を知るうえで重要な一括資料となるものであり、今後周辺地域で関連遺跡の発掘調査が行われた場合には、その基礎資料になるものと考えられる。今後周辺において顕著な遺構が検出され、今回の調査結果が補足されることを期待するものである。

(大槻 真純)

図版第1 三河宮の下遺跡



(1) 調査地遠景 (南から)



(2) 調査地遠景 (北東から)

図版第3 三河宮の下遺跡



(1) A地区調査地 (南東から)



(2) A地区調査地 (北から)

図版第4 三河宮の下遺跡



(1) A地区調査地 (南東から)



(2) A地区調査地 (西から)

図版第5 三河宮の下遺跡



(1) B地区調査地（西から）



(2) B地区調査地（北から）

図版第6 三河宮の下遺跡



(1) 6号住居跡(南から)



(2) 9号住居跡(北から)



(1) 7号・8号住居跡（東から）



(2) 石囲い炉跡1（東から）



(1) 石囲い炉跡1 (南から)



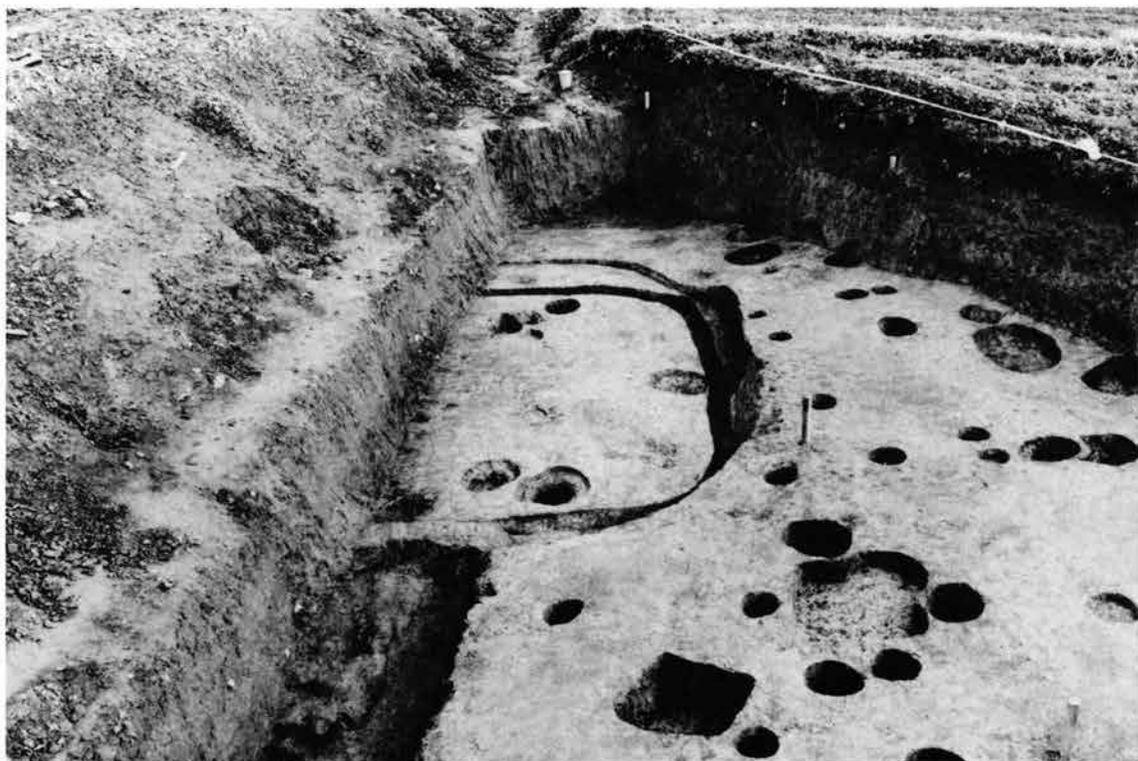
(2) 石囲い炉跡2 (東から)



(1) 配石遺構



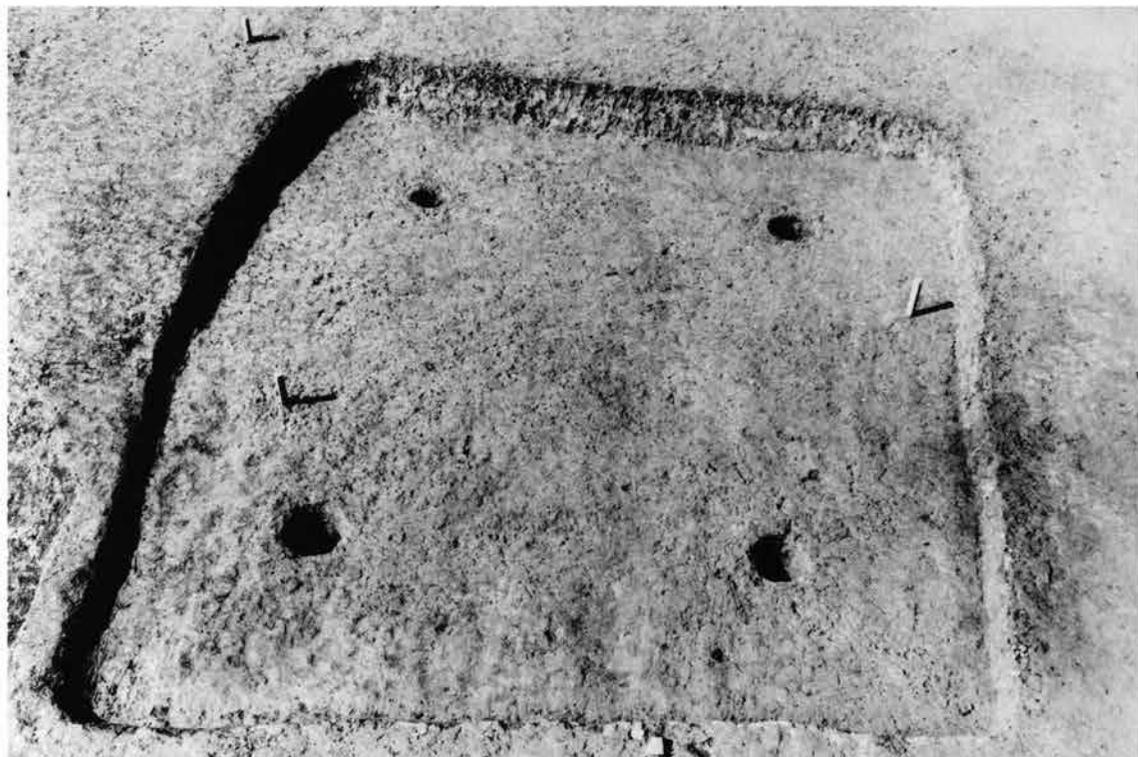
(2) 作業風景



(1) 10号住居跡（北から）



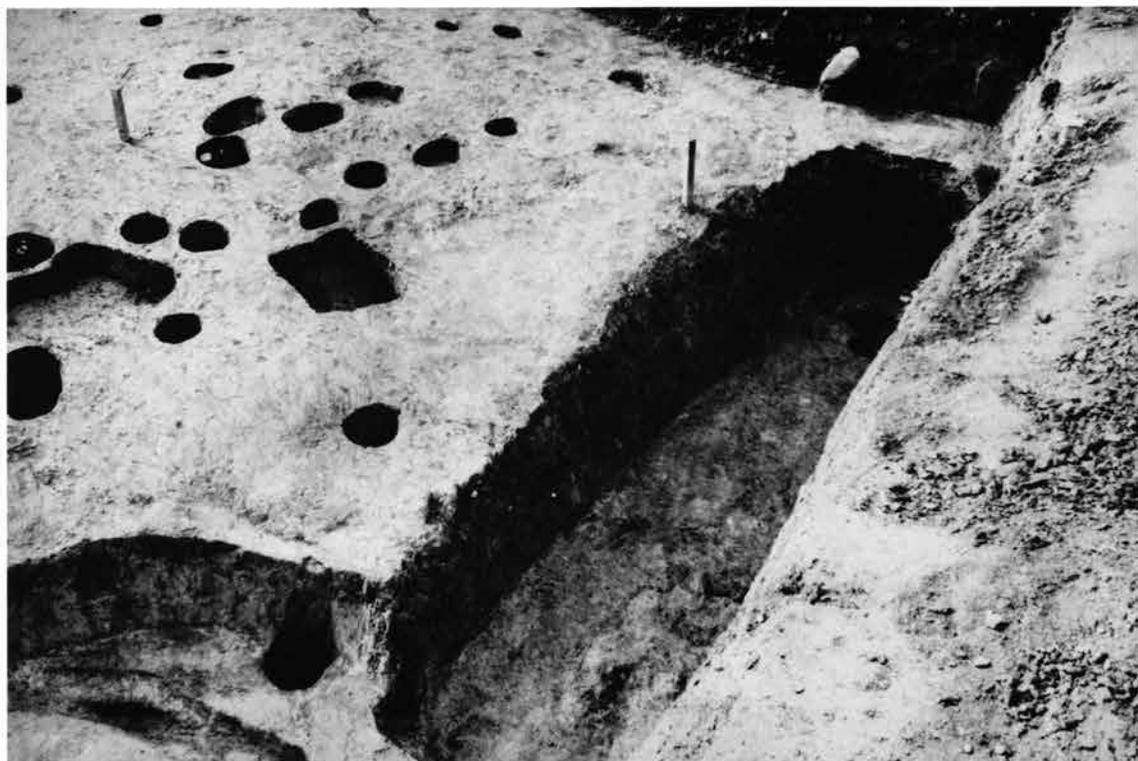
(2) 1号住居跡（西から）



(1) 4号住居跡（東から）



(2) 3号・5号住居跡（北から）



(1) 11号住居跡（南から）

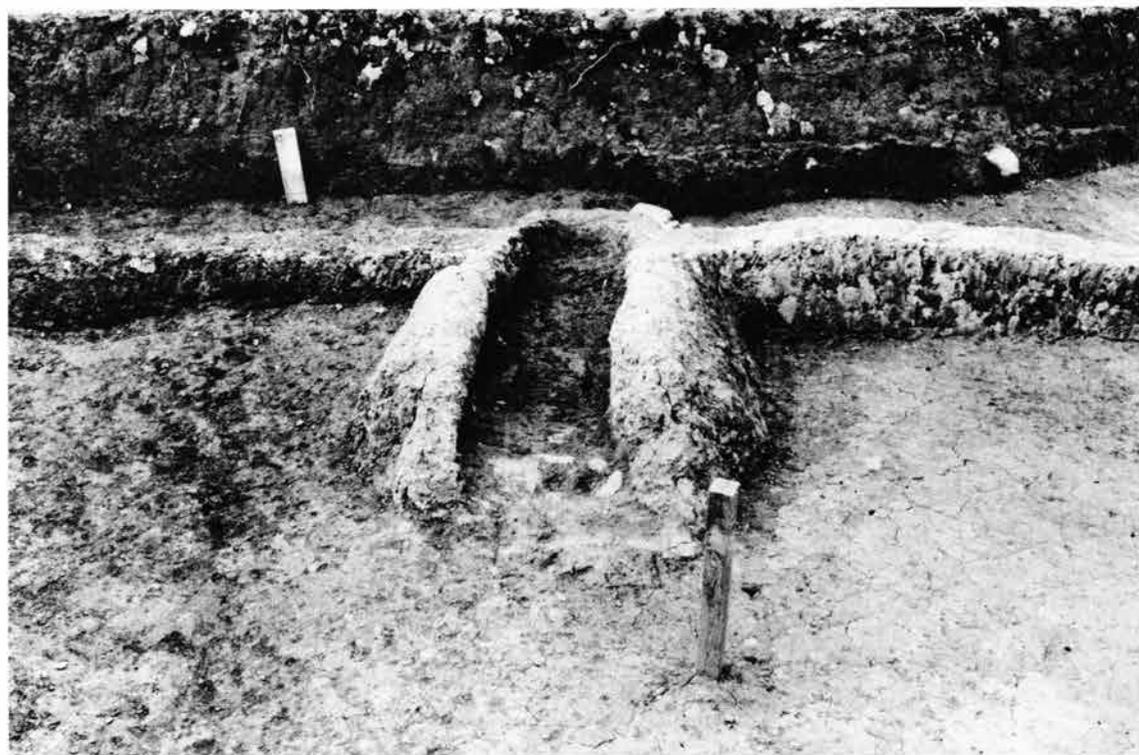


(2) 10号住居跡（東から）

図版第13 三河宮の下遺跡



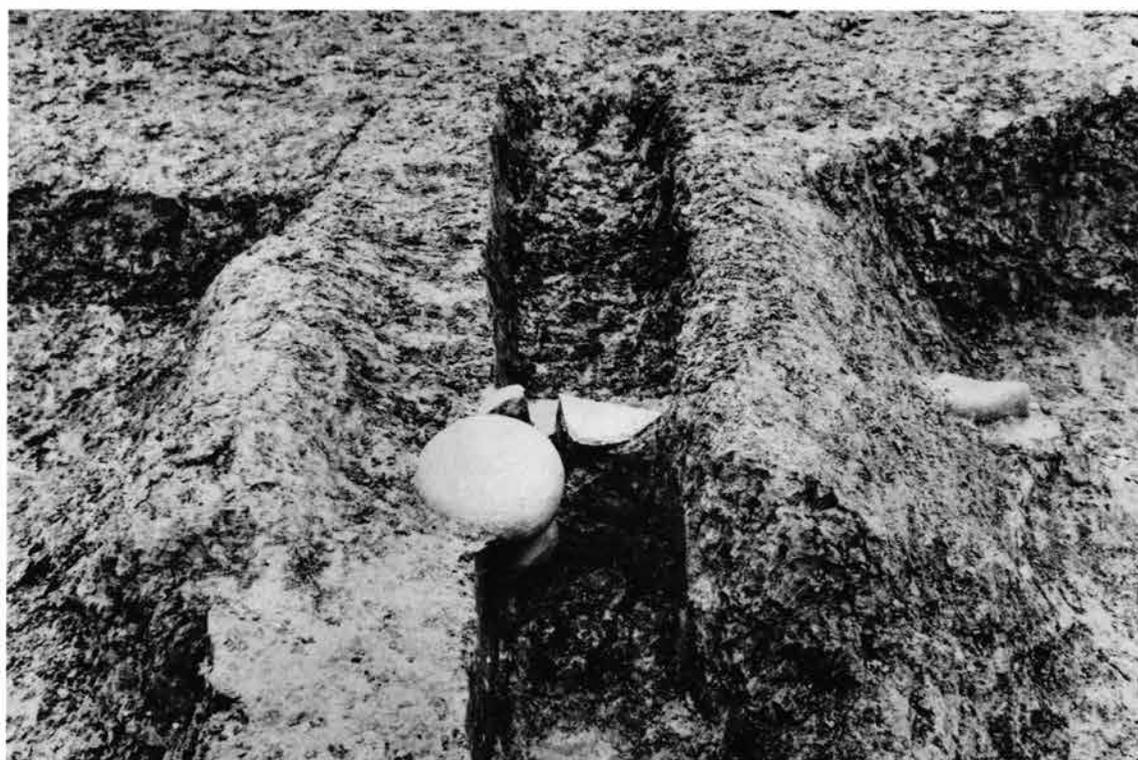
(1) 2号住居跡 (東から)



(2) 2号住居跡カマド跡



(1) 土師器出土状況



(2) 2号住居跡カマド内土師器出土状況



(1) 縄文土器出土状況



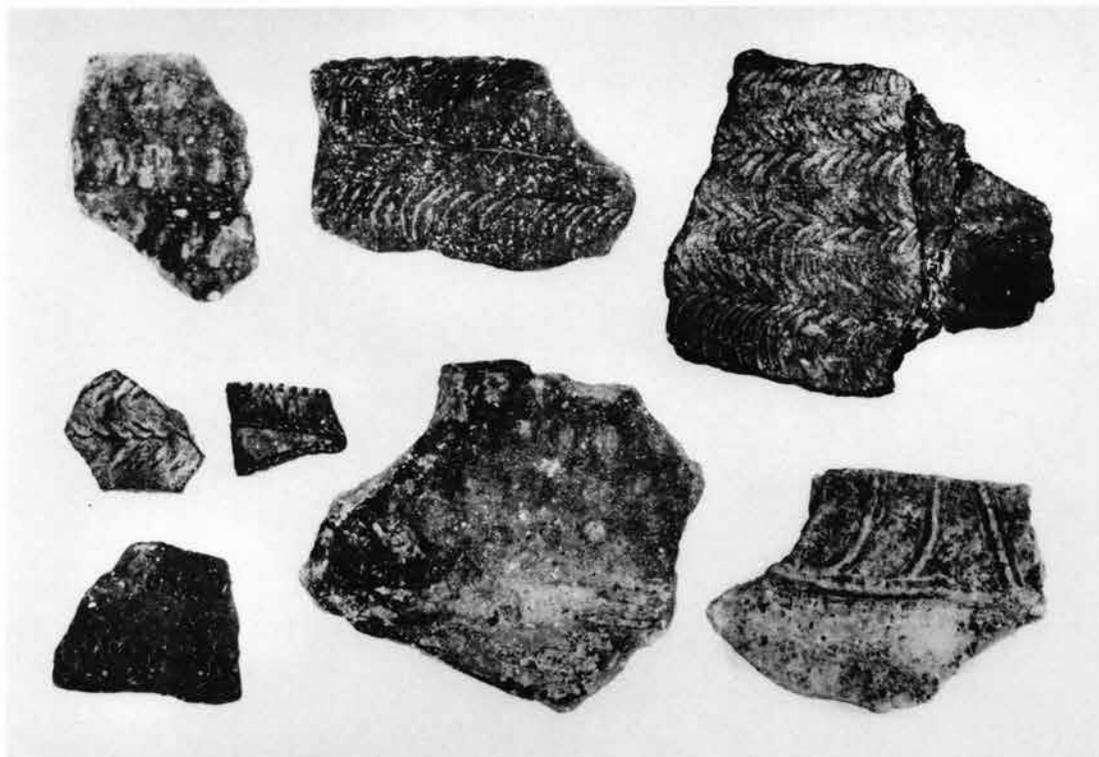
(2) 石製装飾品出土状況



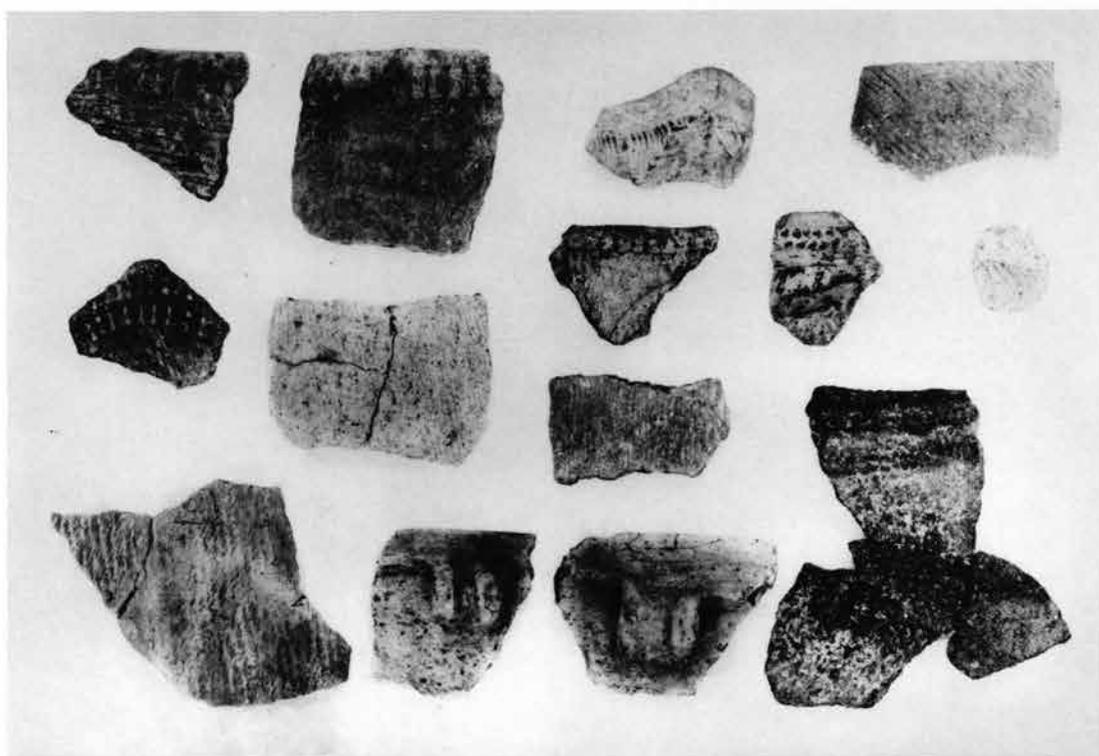
(1) 石錘出土状況



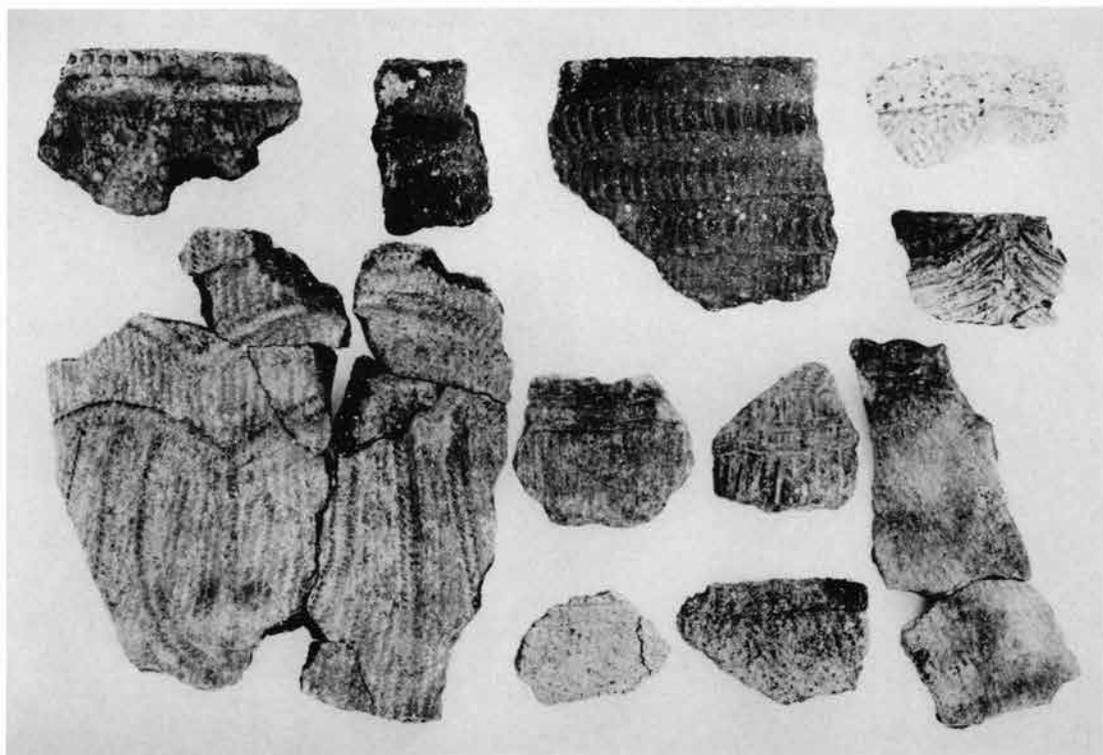
(2) 石匙出土状況



(1) 前期縄文土器片



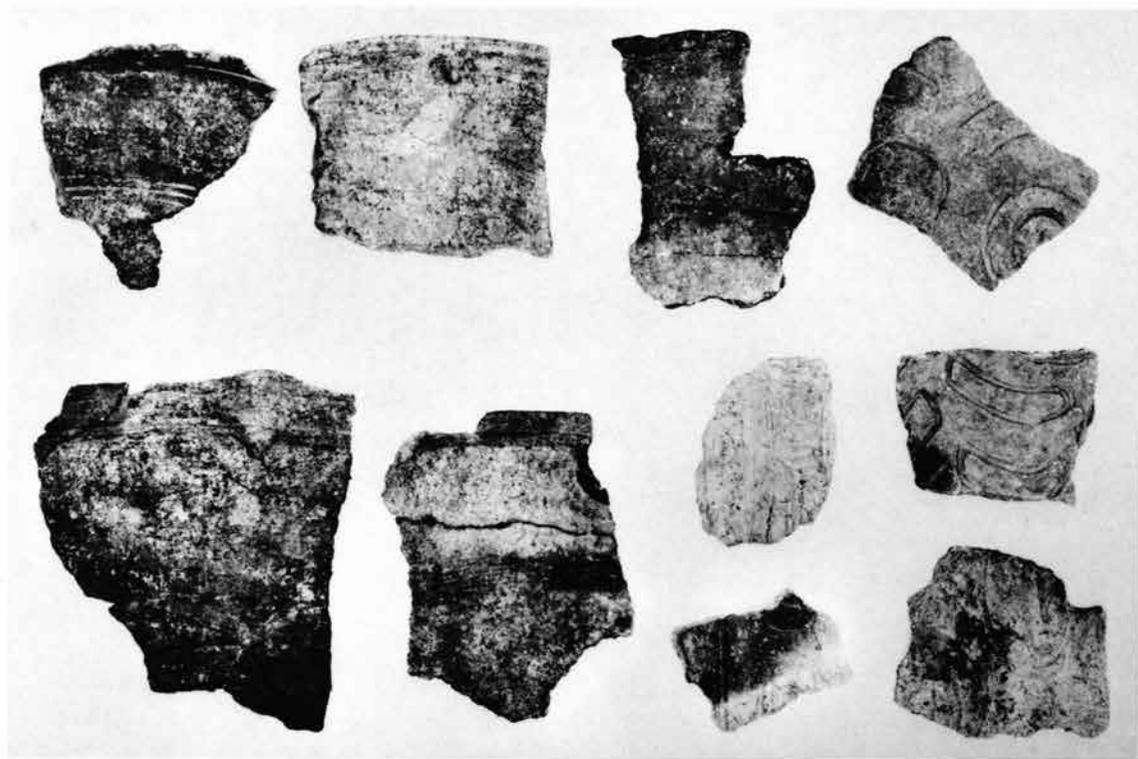
(2) 中期縄文土器片 I



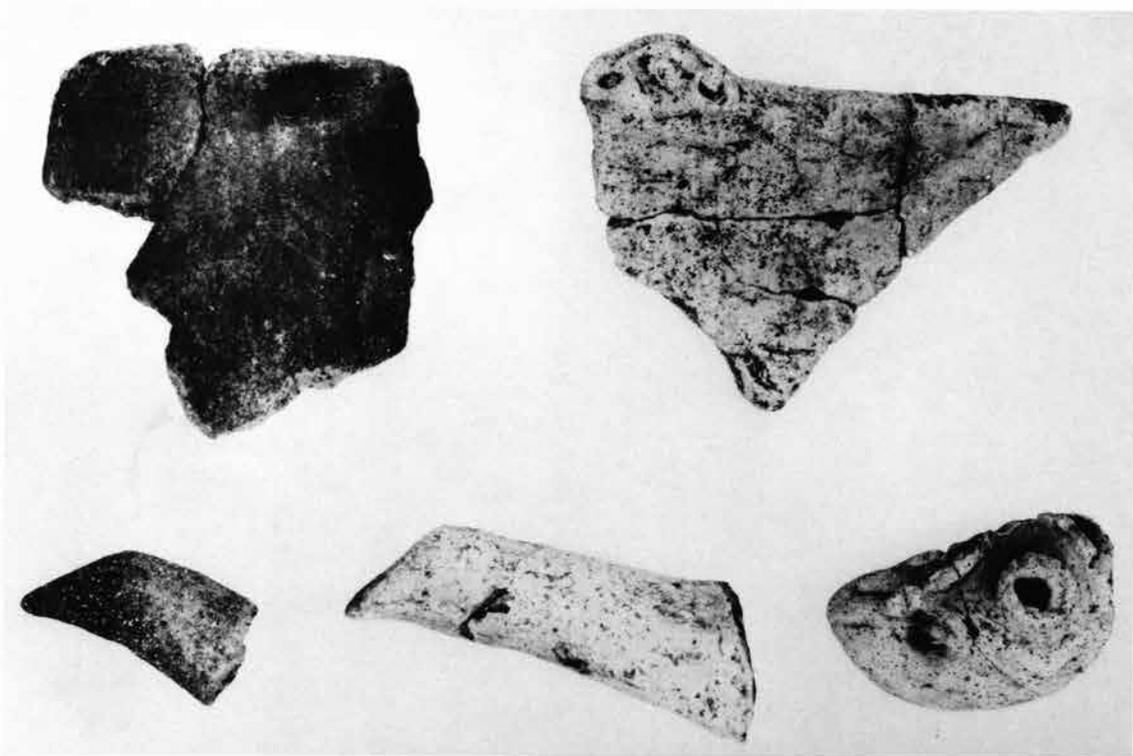
(1) 中期縄文土器片Ⅱ



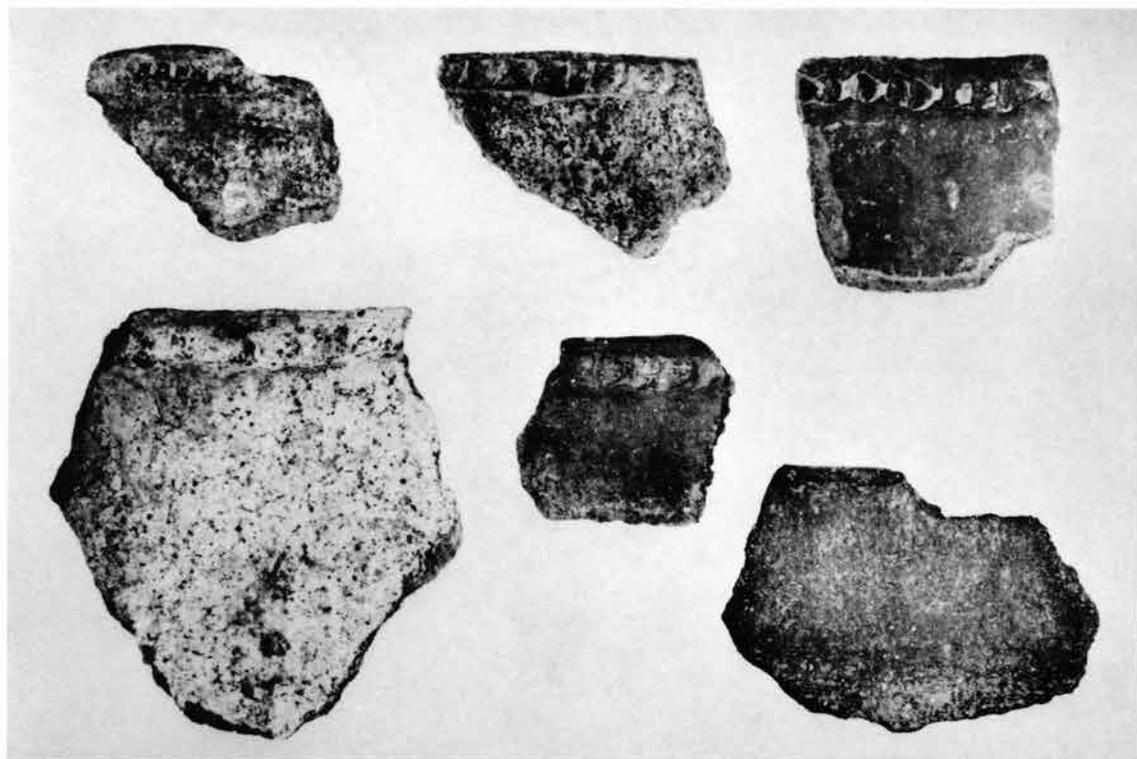
(2) 中期縄文土器片Ⅲ



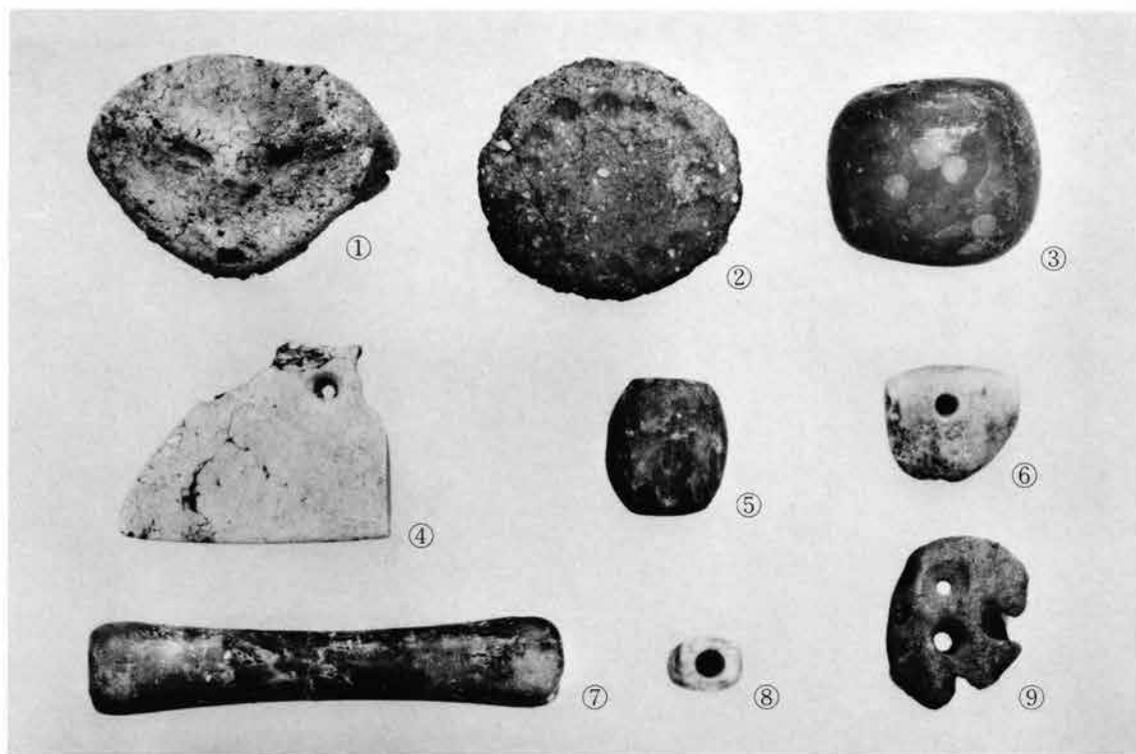
(1) 中期・後期縄文土器片Ⅰ



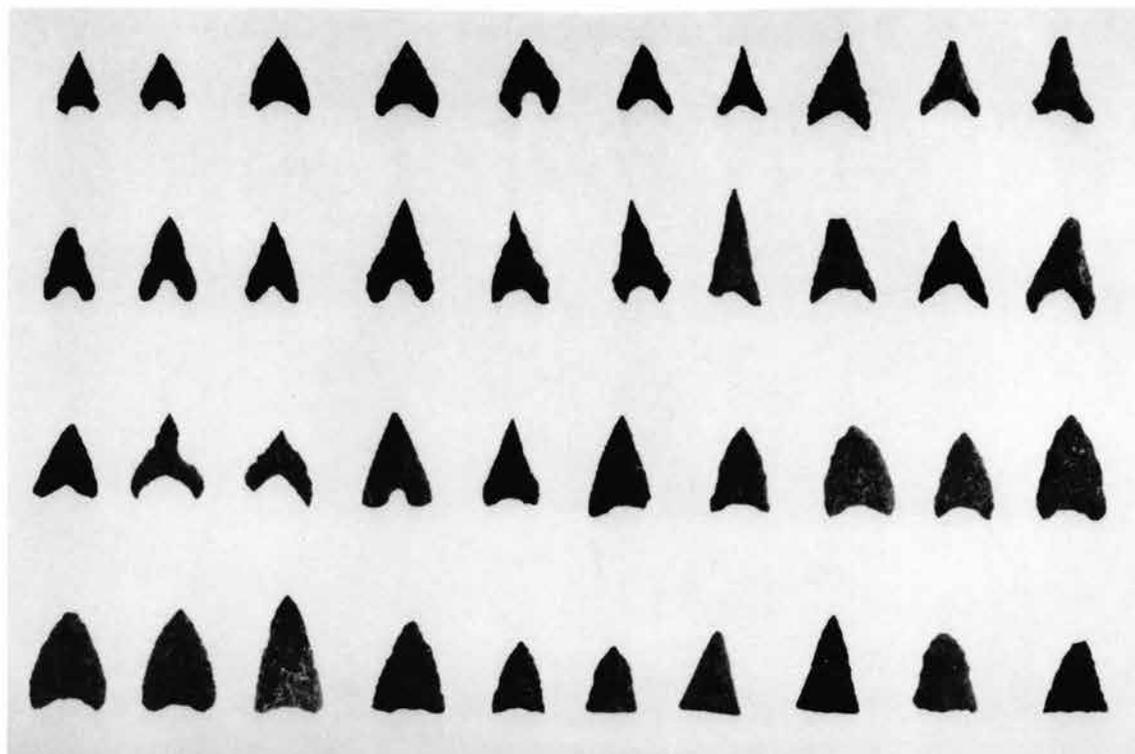
(2) 後期縄文土器片Ⅱ



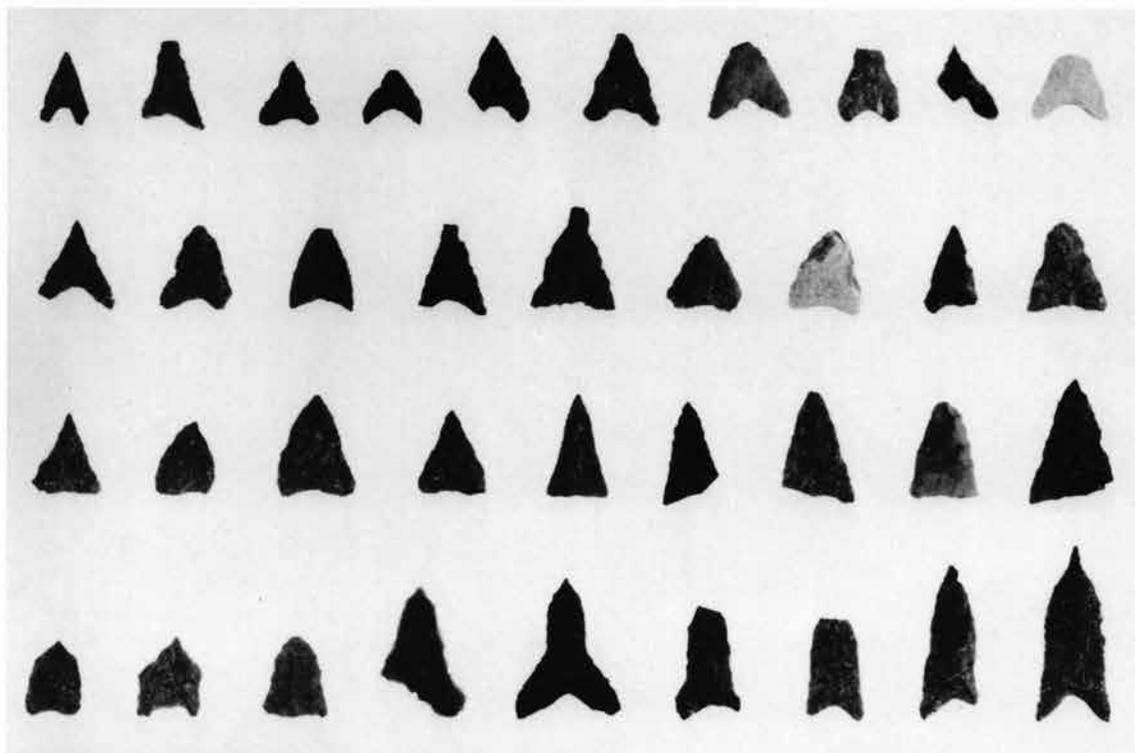
(1) 晩期縄文土器片



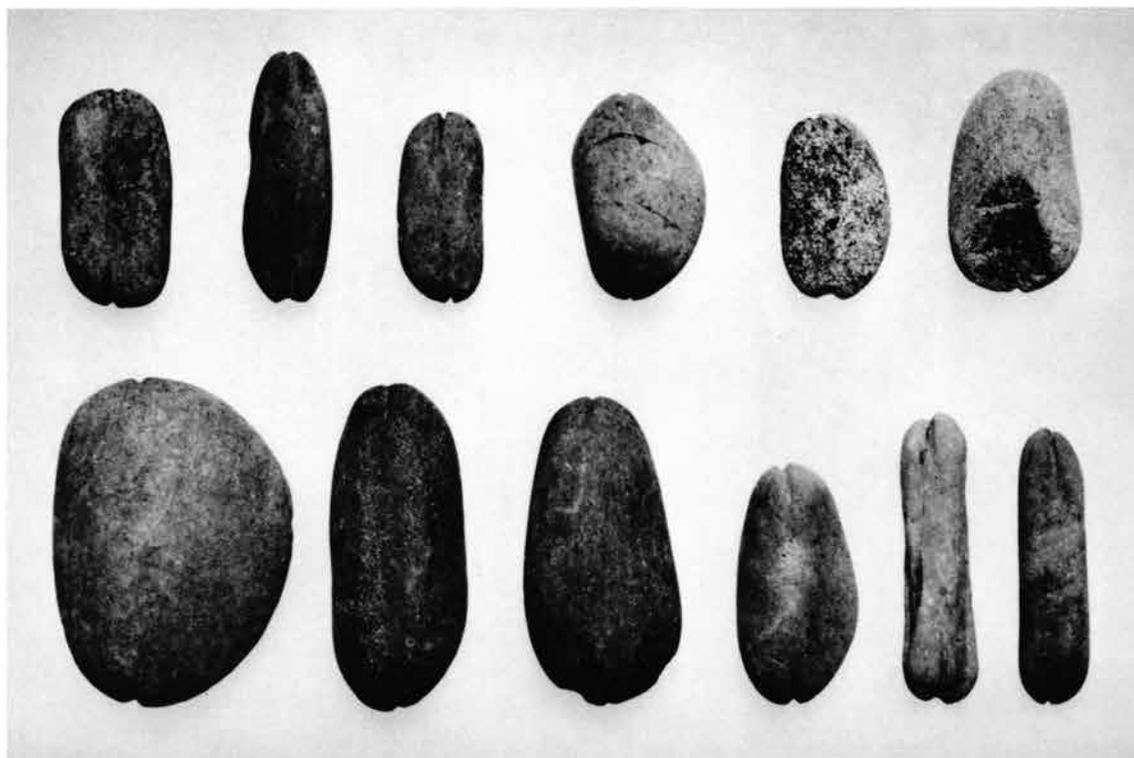
(2) 1. 土偶 2. 円錐形土製品 3~8. 石製裝飾品 9. 多孔石



(1) 打製石鏃



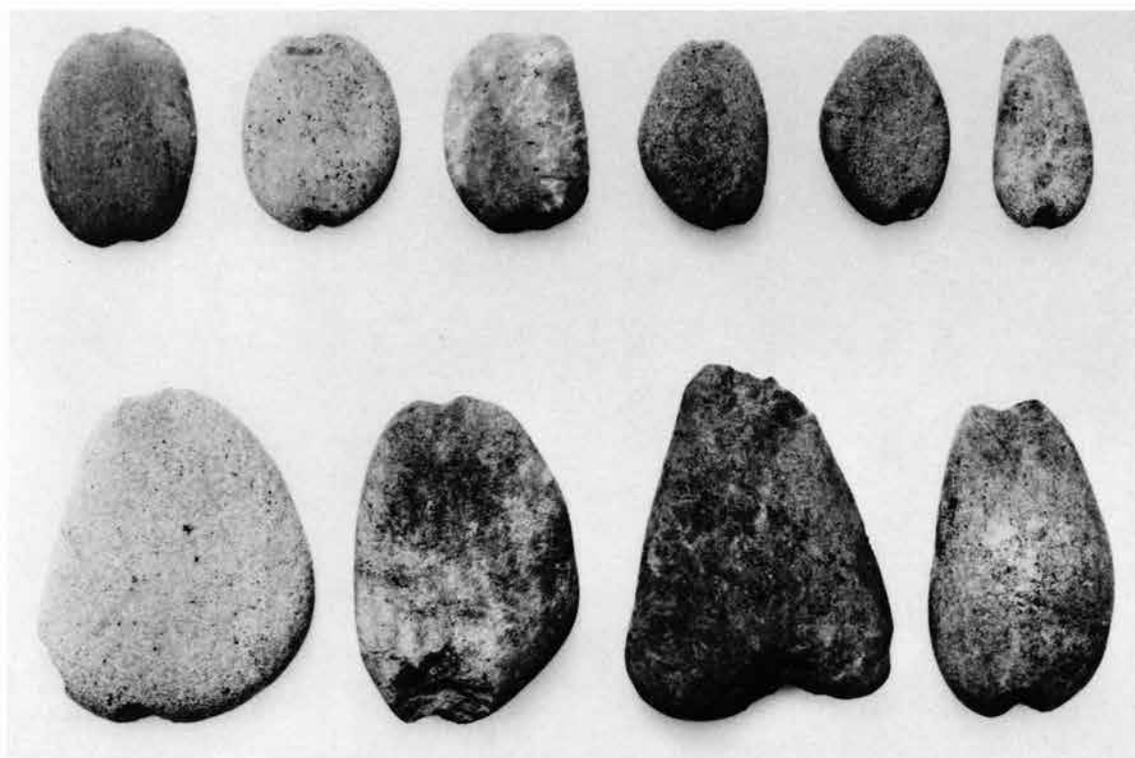
(2) 打製石鏃



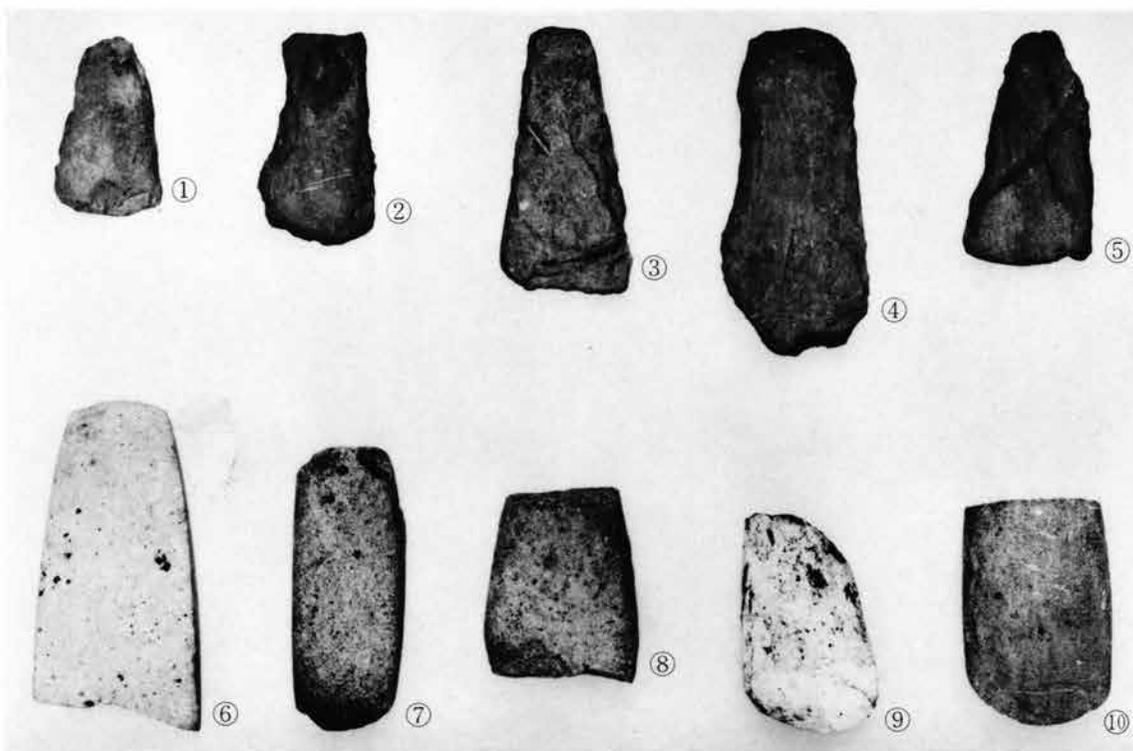
(1) 切目石錘Ⅰ



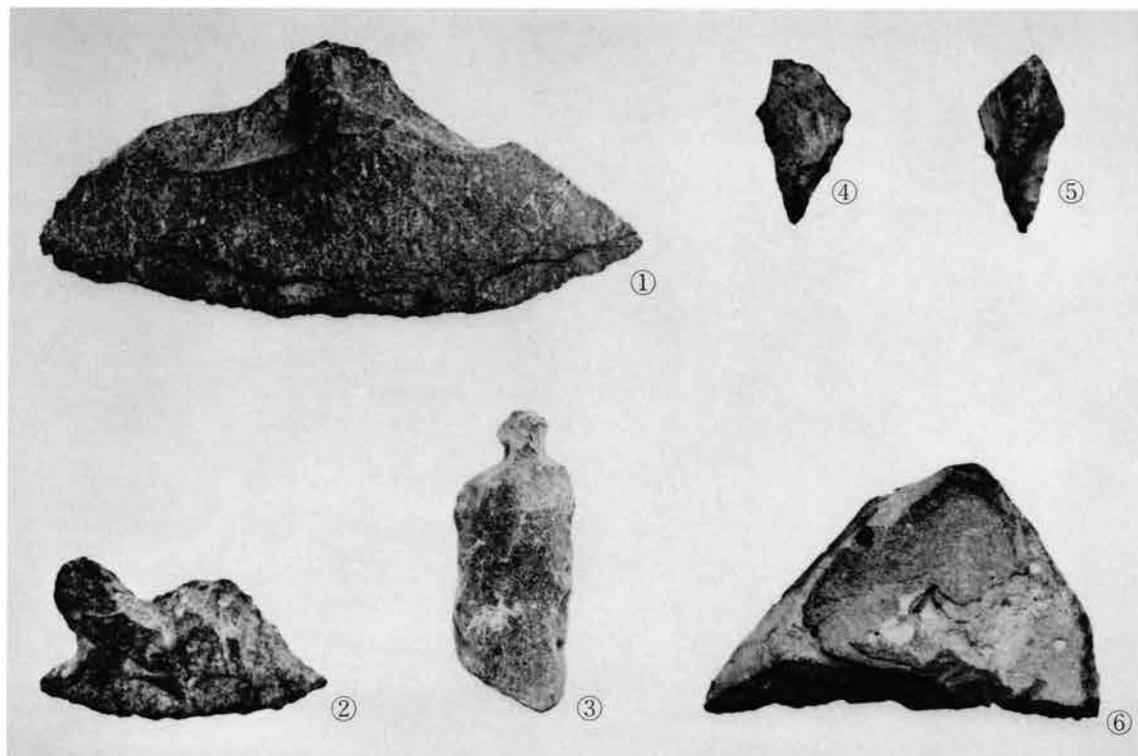
(2) 切目石錘Ⅱ



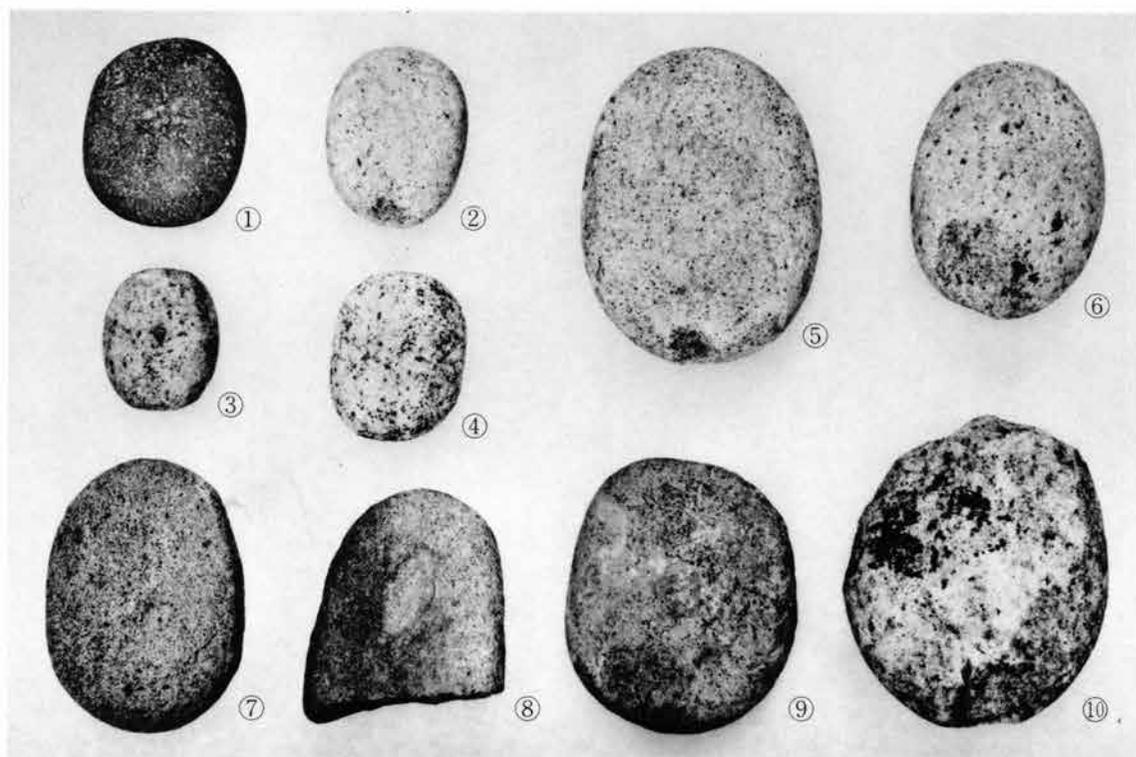
(1) 礫石錘



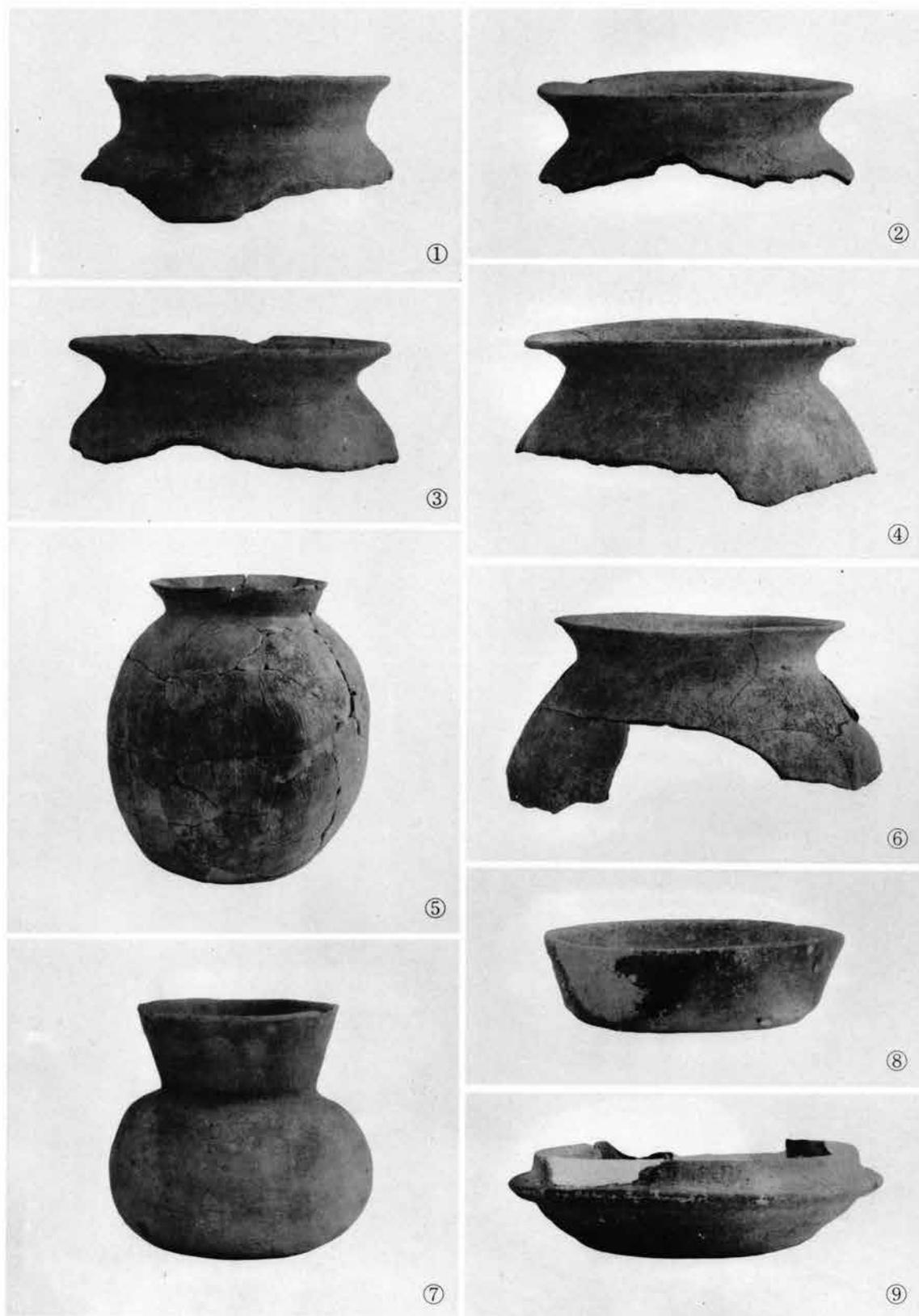
(2) 1~4. 打製石斧 5~10. 磨製石斧



(1) 1~3. 石匙 4・5. 石錐 6. 削器



(2) 1. 磨石 2~10. 敲石



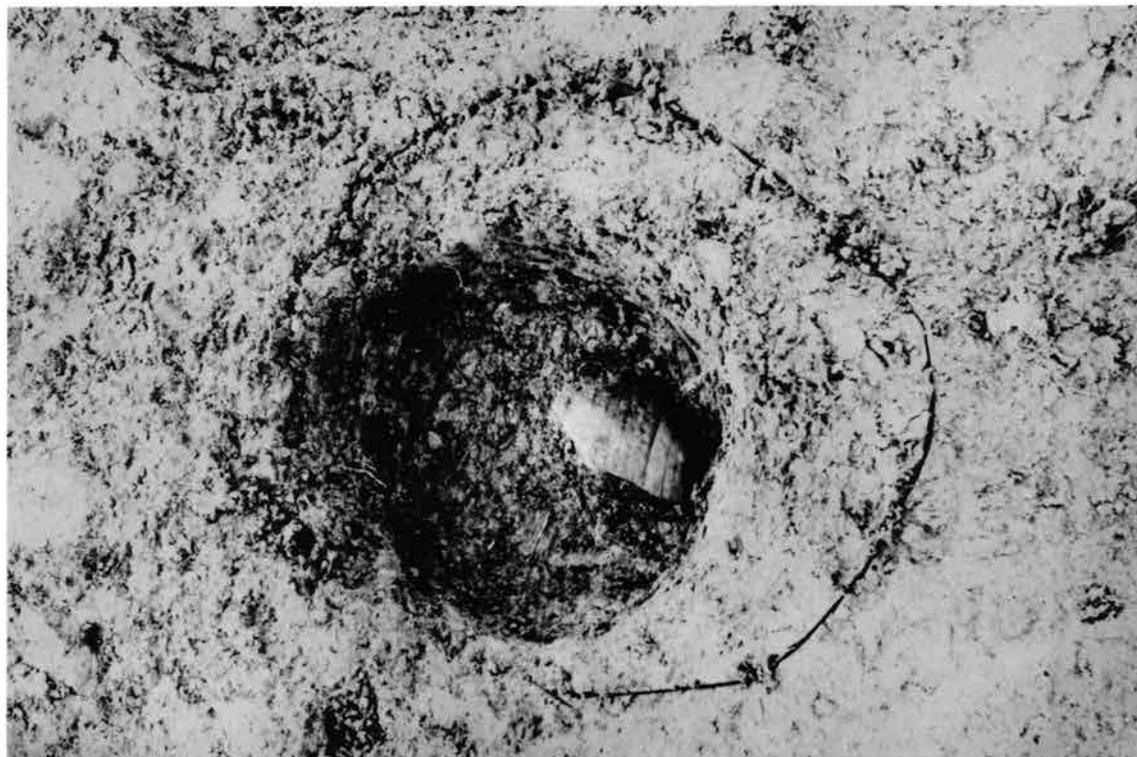
1-6. 土師器甕 7. 土師器壺 8・9. 須恵器杯



(1) 調査地遠景 (西から)



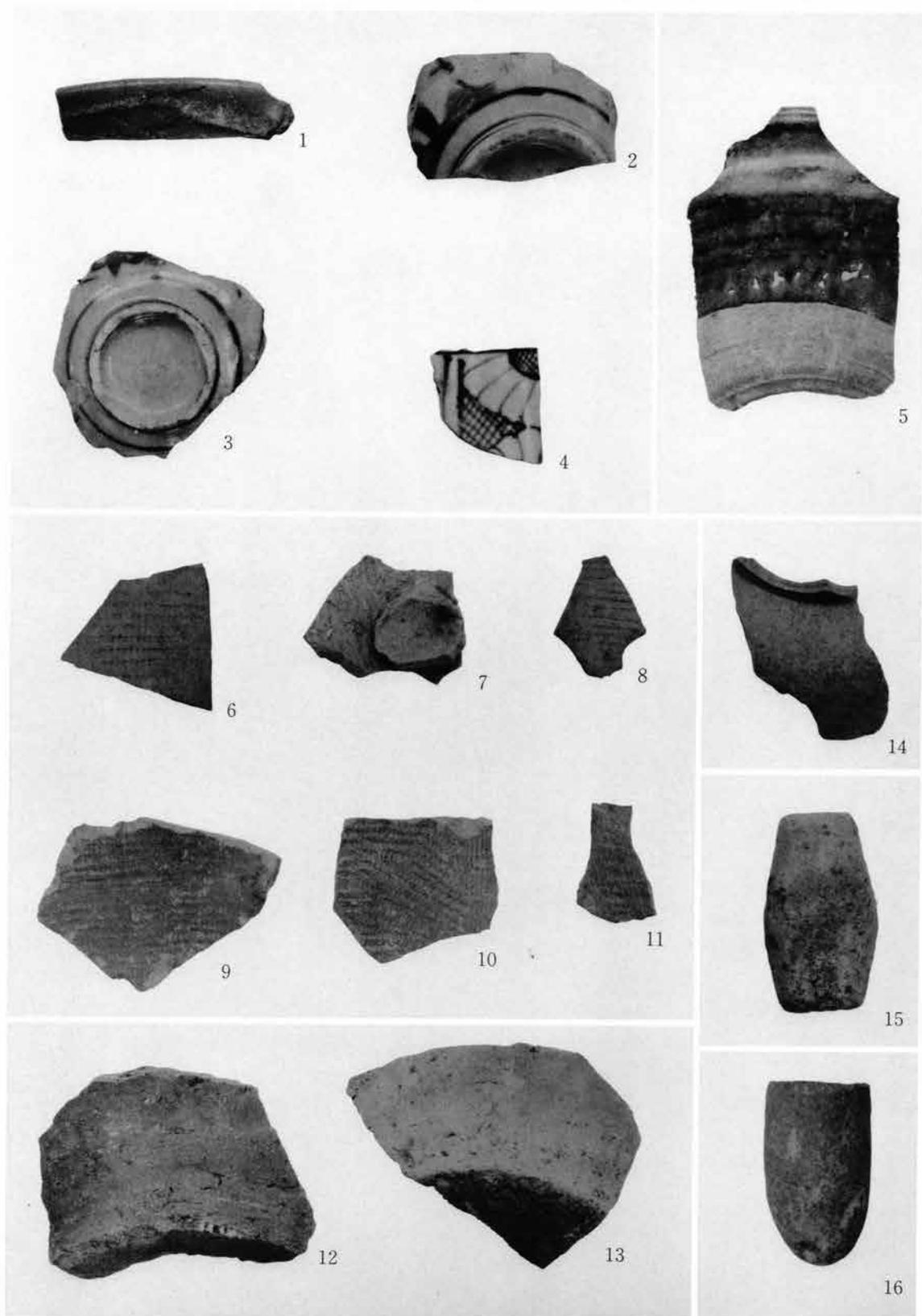
(2) C地区 (北から)



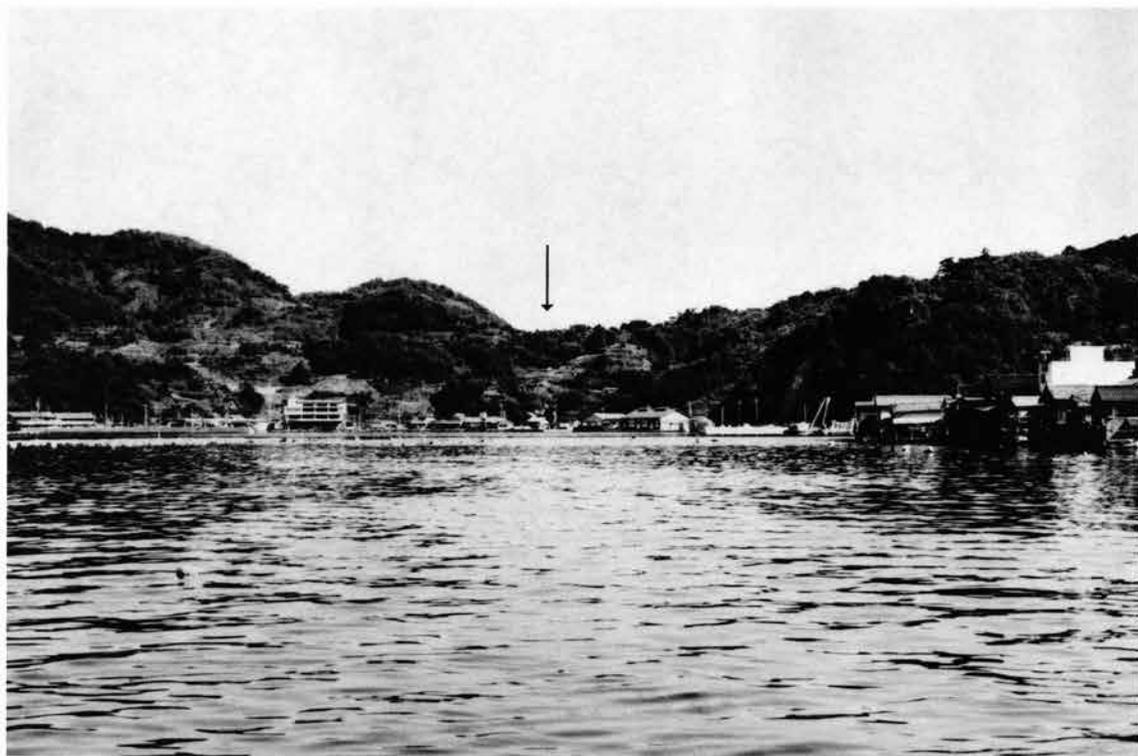
(1) A-1区柱穴内遺物出土状況



(2) A-8区 (南から)



出土遺物



(1) 中尾古墳遠景（南から）



(2) 中尾古墳遠景（西から）



(1) 石室調査前全景 (南東から)



(2) 中尾古墳調査前全景 (北東から)



(1) 石室検出状況 (南東から)



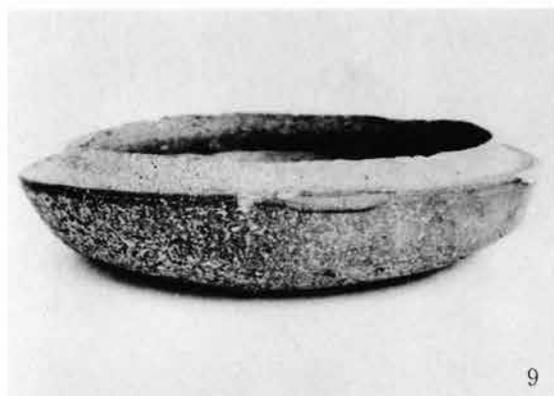
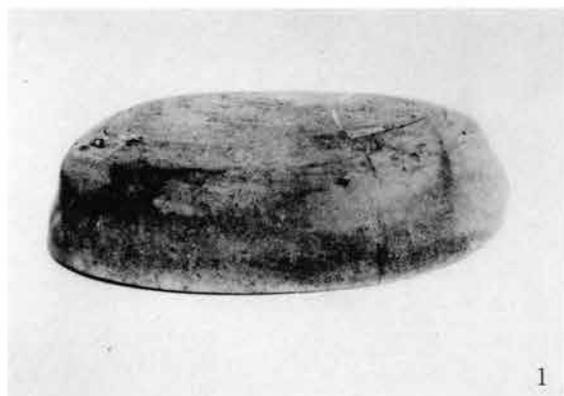
(2) 奥壁部遺物出土状況 (南西から)



(1) 石室中央部左側壁遺物出土状況（北東から）

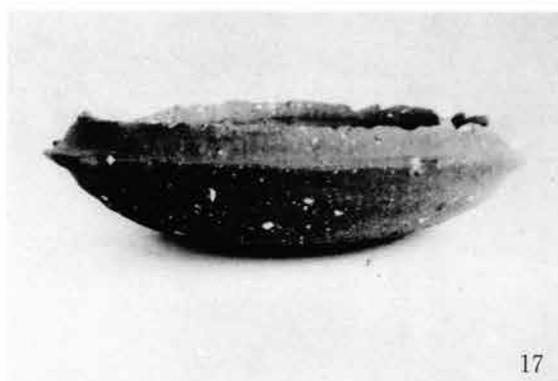


(2) 石室中央部右側壁遺物出土状況（南から）





19



17



12



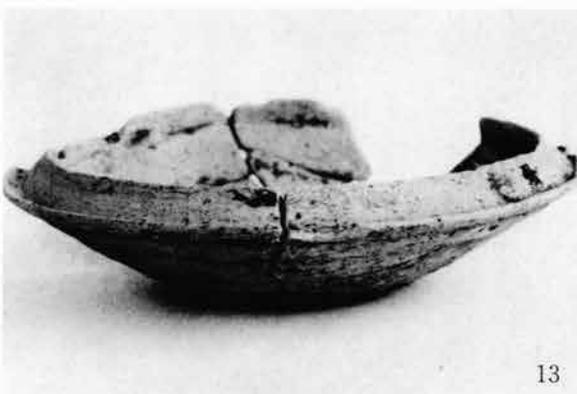
11



14



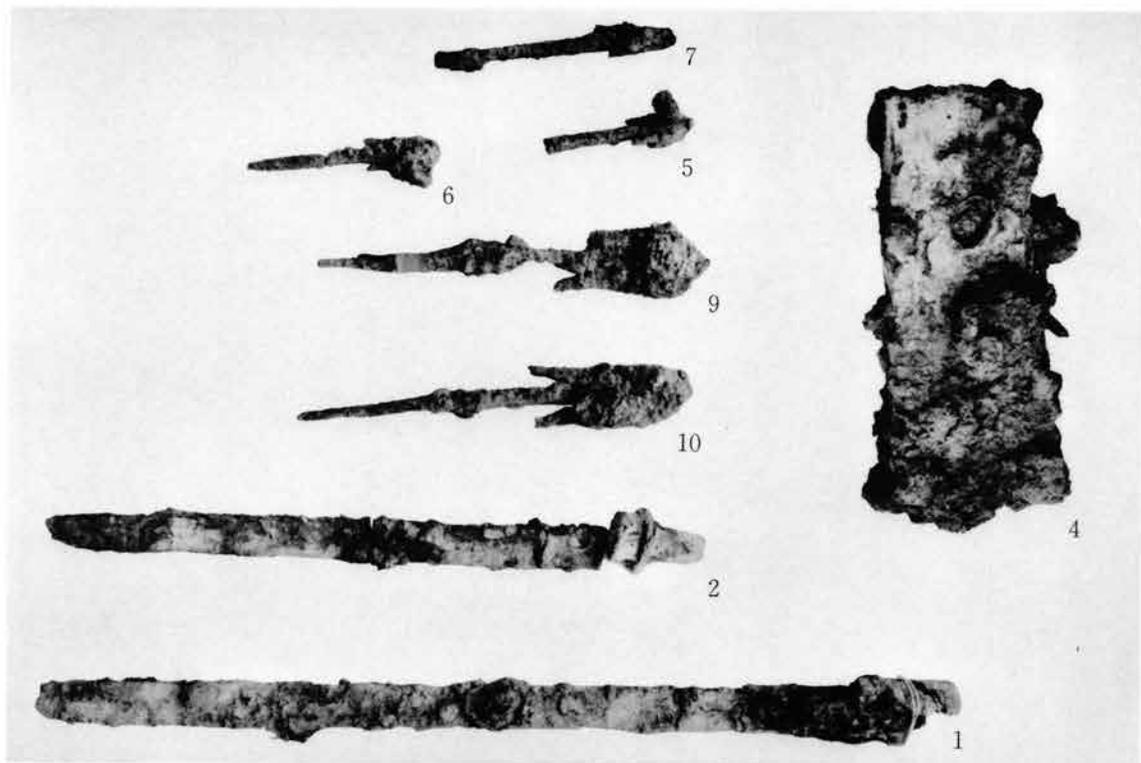
15



13



22



(1) 出土遺物(3)



(2) 石室完掘状況(南東から)



前柵2号墳・中世墓群航空写真（左が北）

図版第37 前 柵 古 墳



(1) 前柵古墳遠景 (南西から)



(2) 前柵古墳遠景 (南東から)



(1) 羨道部・外護列石 (南西から)



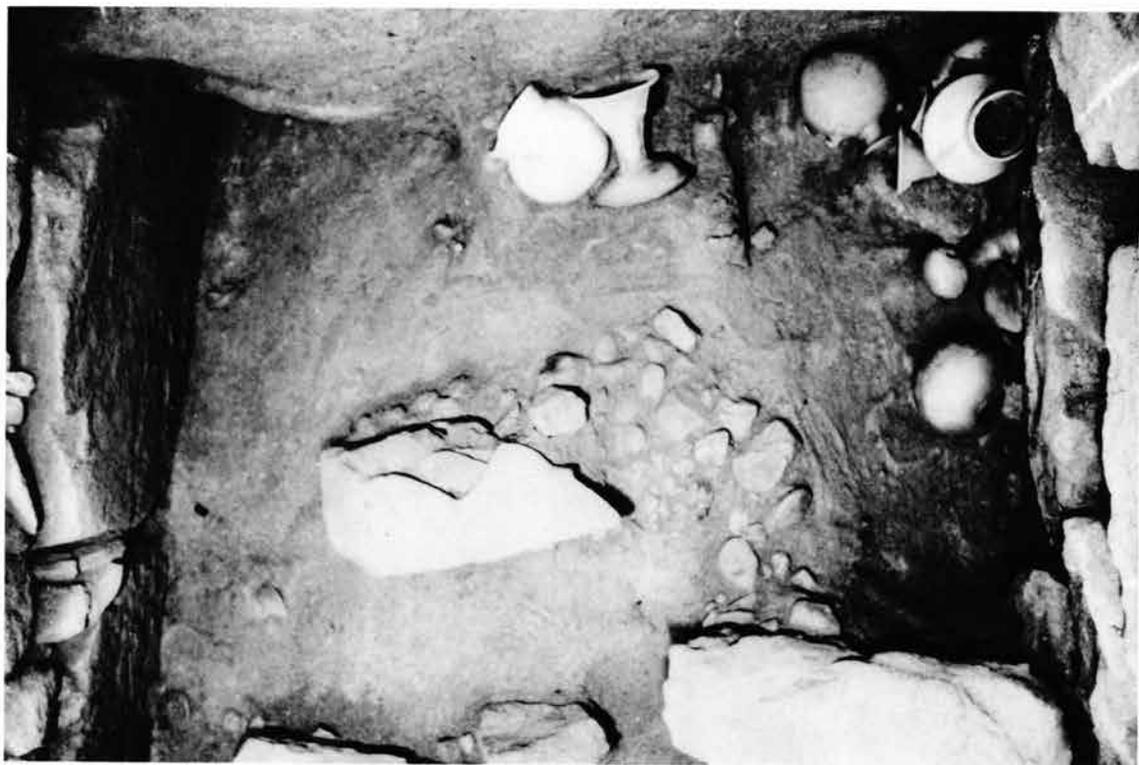
(2) 外護列石 (西から)



(1) 羨道部・閉塞石



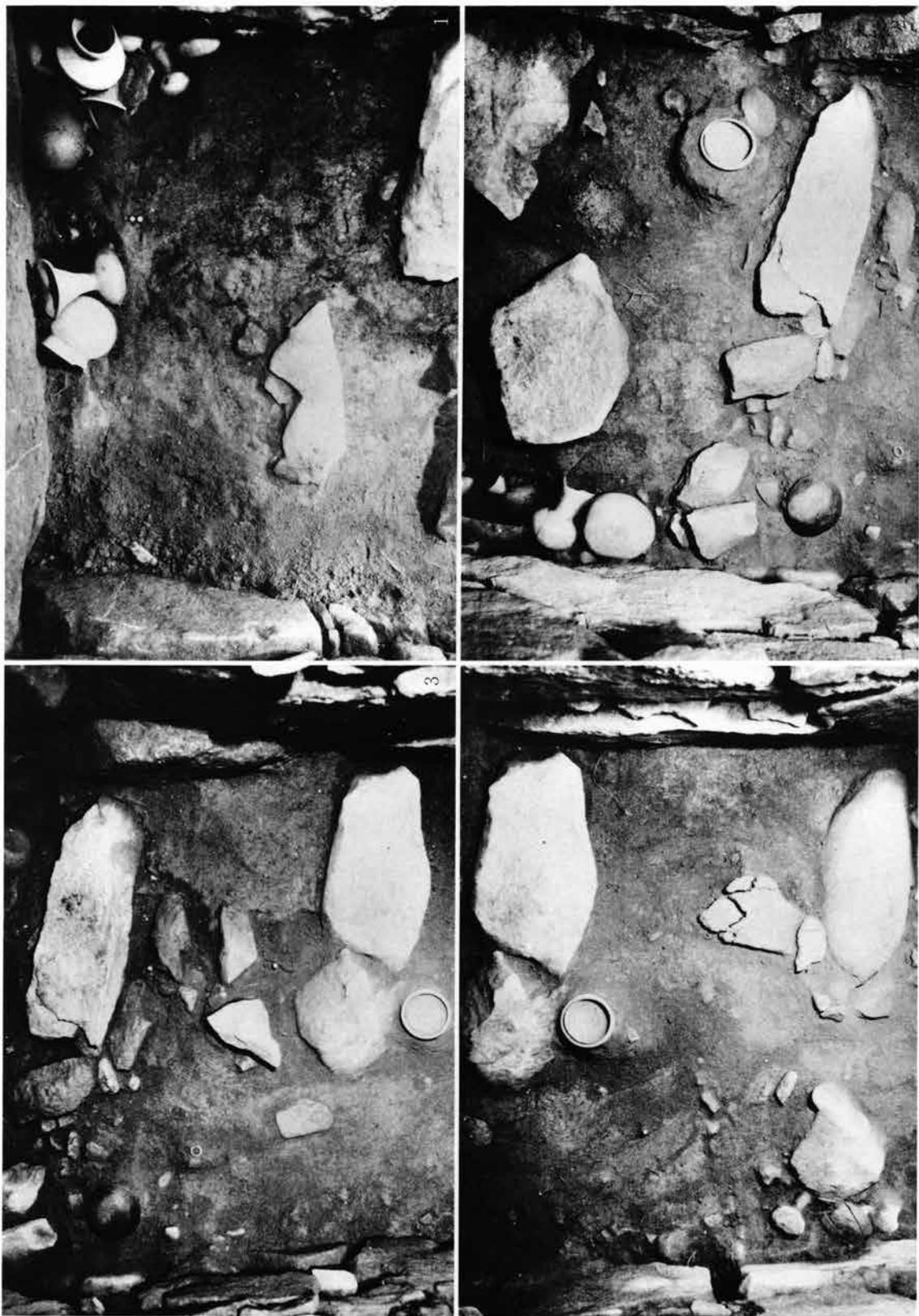
(2) 玄室



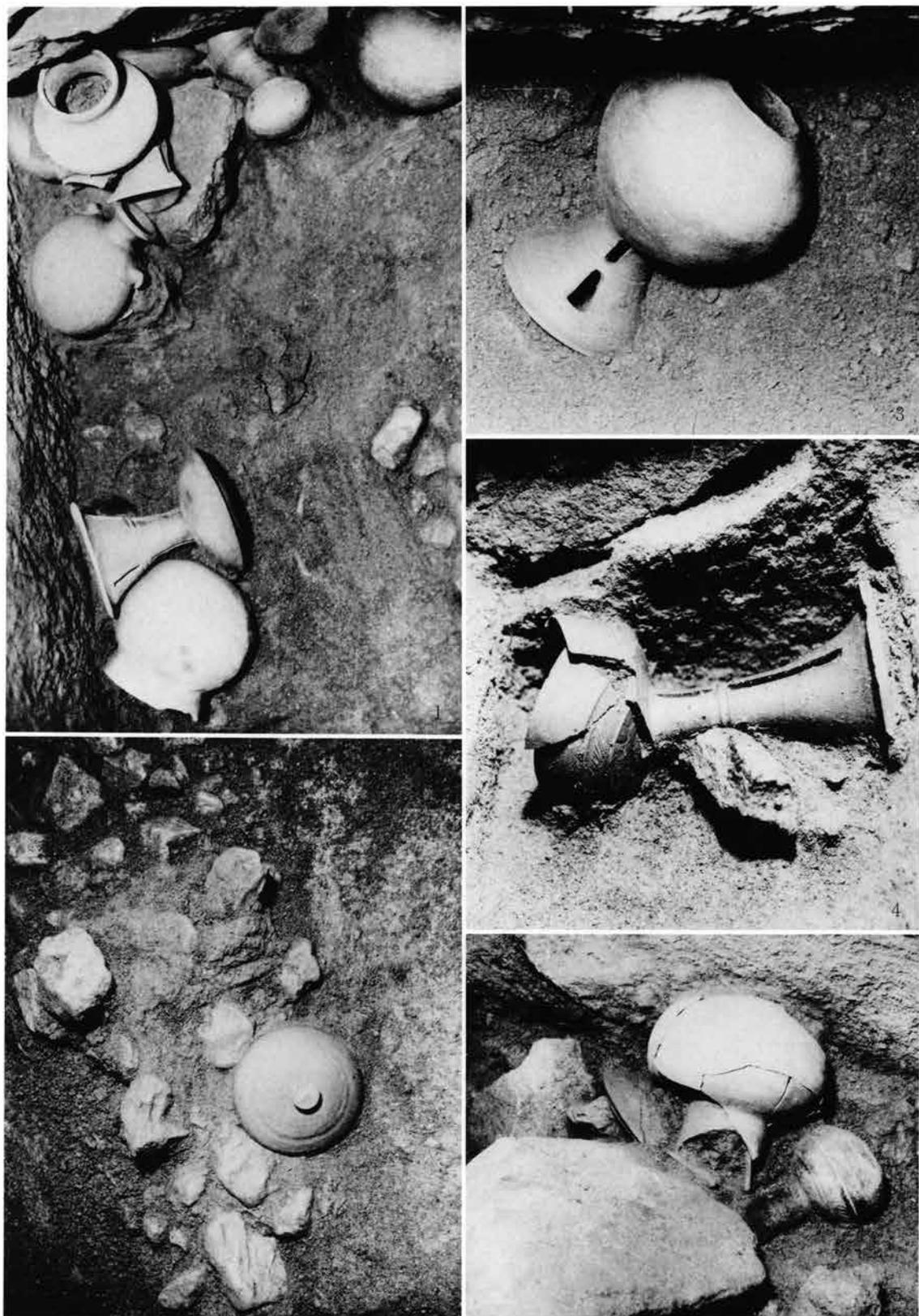
(1) 玄室内遺物及び棺台(1)



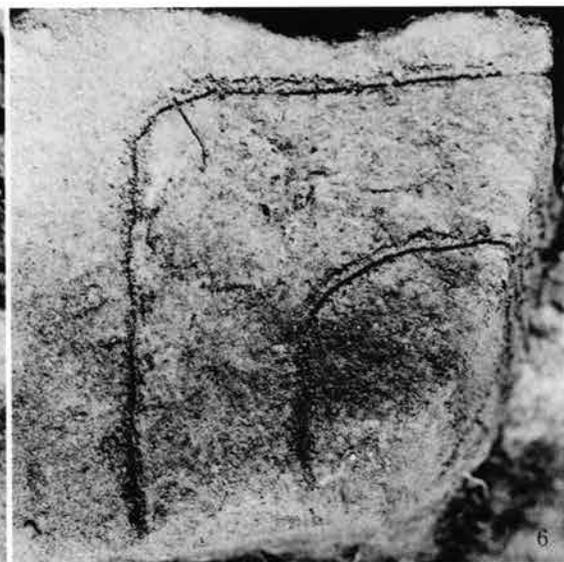
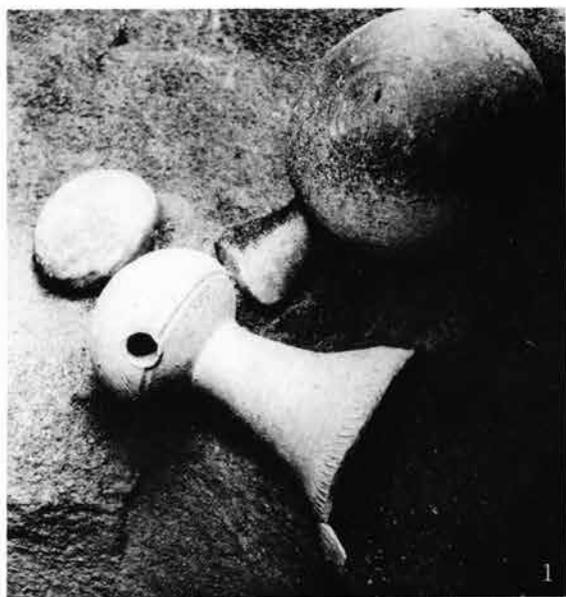
(2) 玄室内遺物及び棺台(2)



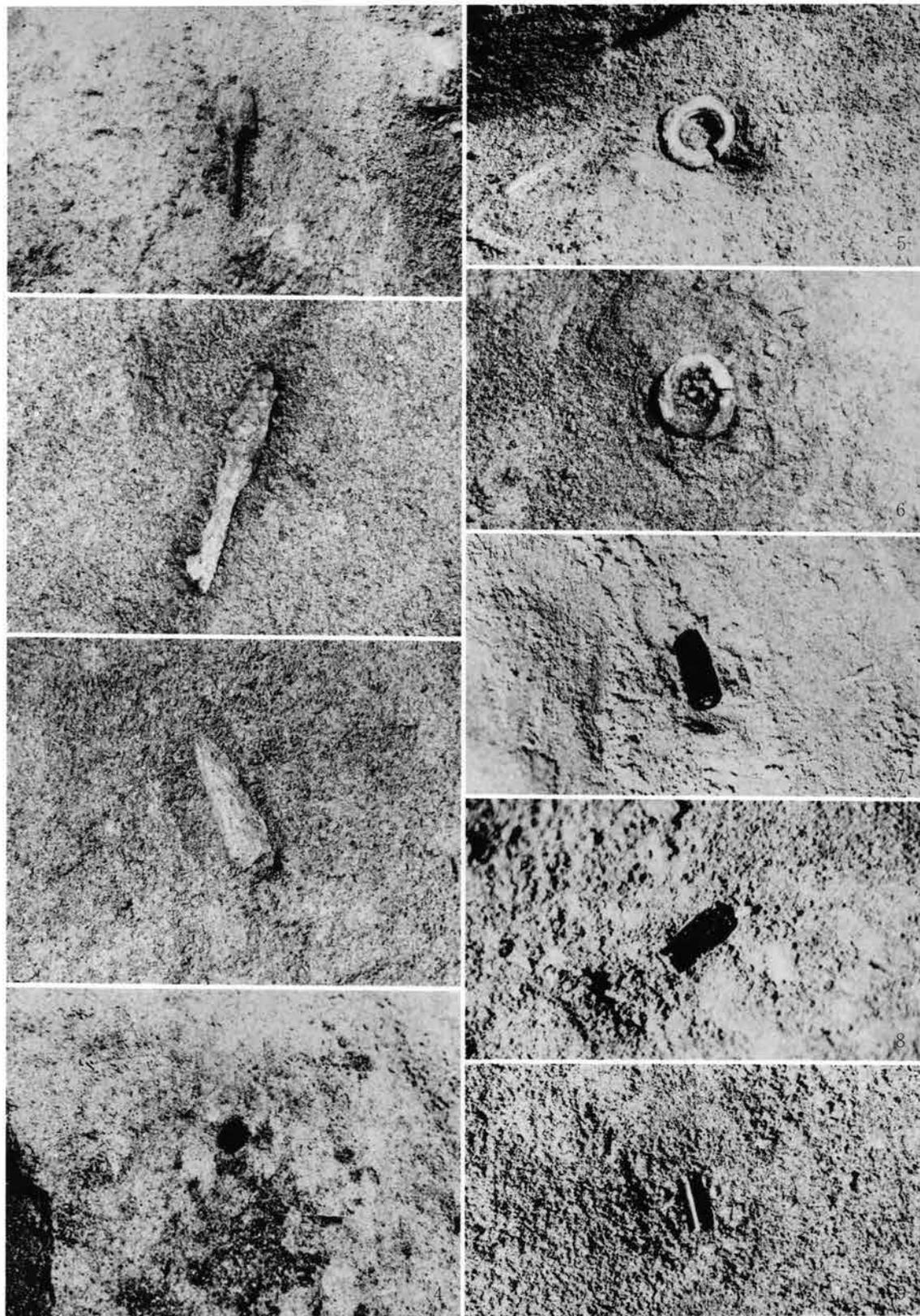
玄室内遺物及び棺台(3)



遺物出土状況(1) 1. 須恵器，壺，甃，埴瓶，有蓋高付 2. 台付壺蓋 3. 台付壺 4. 無蓋高杯，
5. 土師器甕，須恵器甃，杯身，土師器壺



遺物出土狀況(2) 1. 台付壺, 短頸壺蓋, 埴瓶 2. 埴瓶 3. 杯身 4. 埴瓶 5・6. 木棺検出狀況



遺物出土狀況(3) 1・2. 鉄鍬 3. 刀子 4. 種子 5・6. 金環 7~9. 管玉



人骨出土状況 1-1~4. 玄室奥左側人骨 2. 玄室中央右側人骨



7



8



6

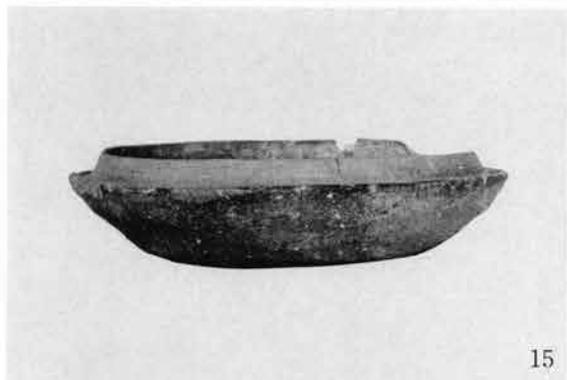
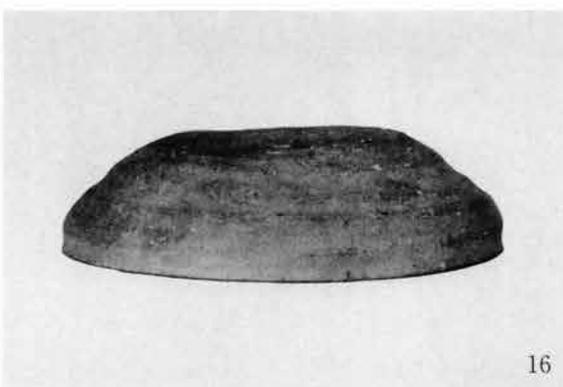
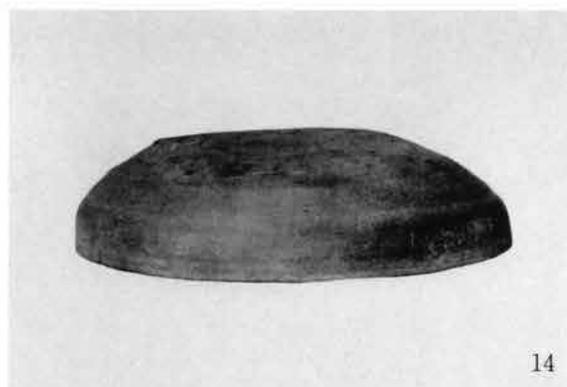


5

石室内出土土器(1) 7. 台付壺 8. 甕 5・6. 有蓋高杯



石室内出土土器(2) 2. 短頸壺 3. 壺 4. 埴瓶 9. 土師器甕 10・12. 杯蓋 11・13. 杯身



石室内出土土器(3) 14・16. 杯蓋 15・17. 杯身 27・28. 無蓋高杯



25



29



38



30



32



33



35



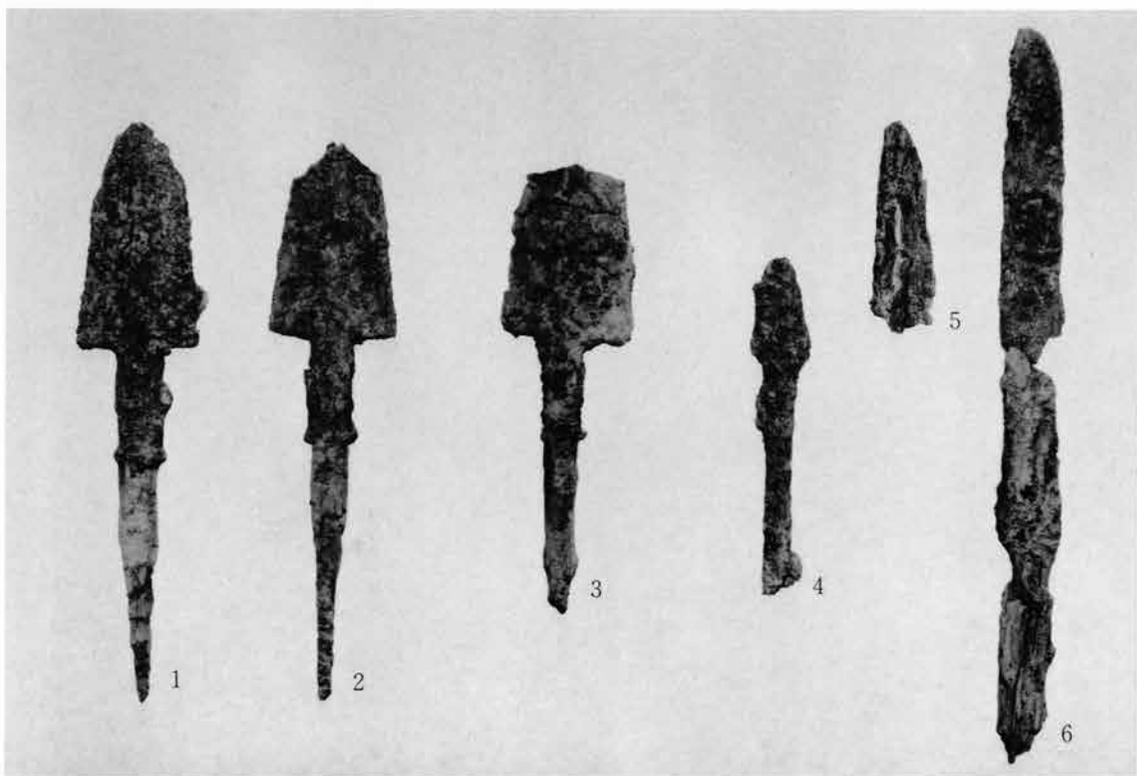
36



37



40



(1) 石室内出土土器(6) 41. 広口壺 39. 埴瓶

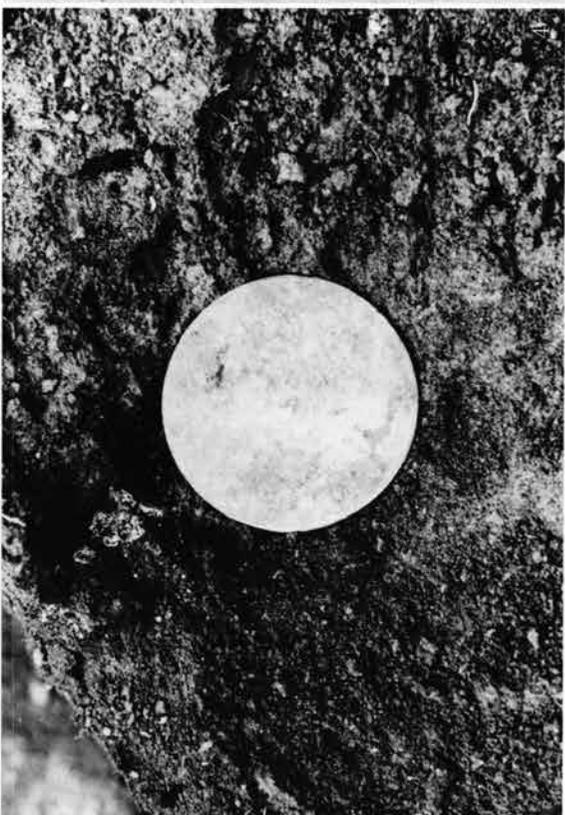
(2) 石室内出土鉄製品 1~3. 平根式鉄鏃 4. 細根式鉄鏃 5・6. 刀子



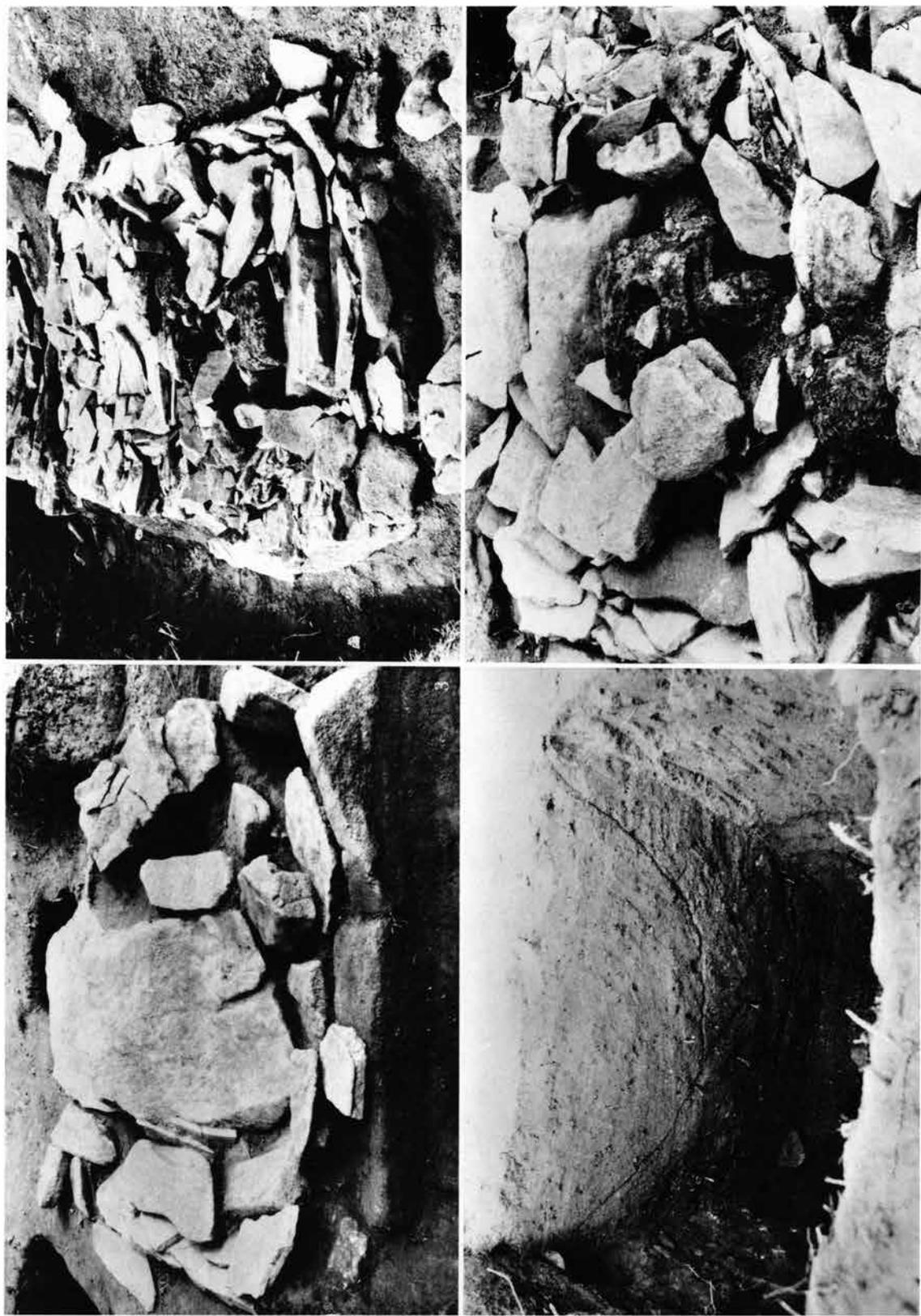
(1) 中世墓群復元全景 (北から)



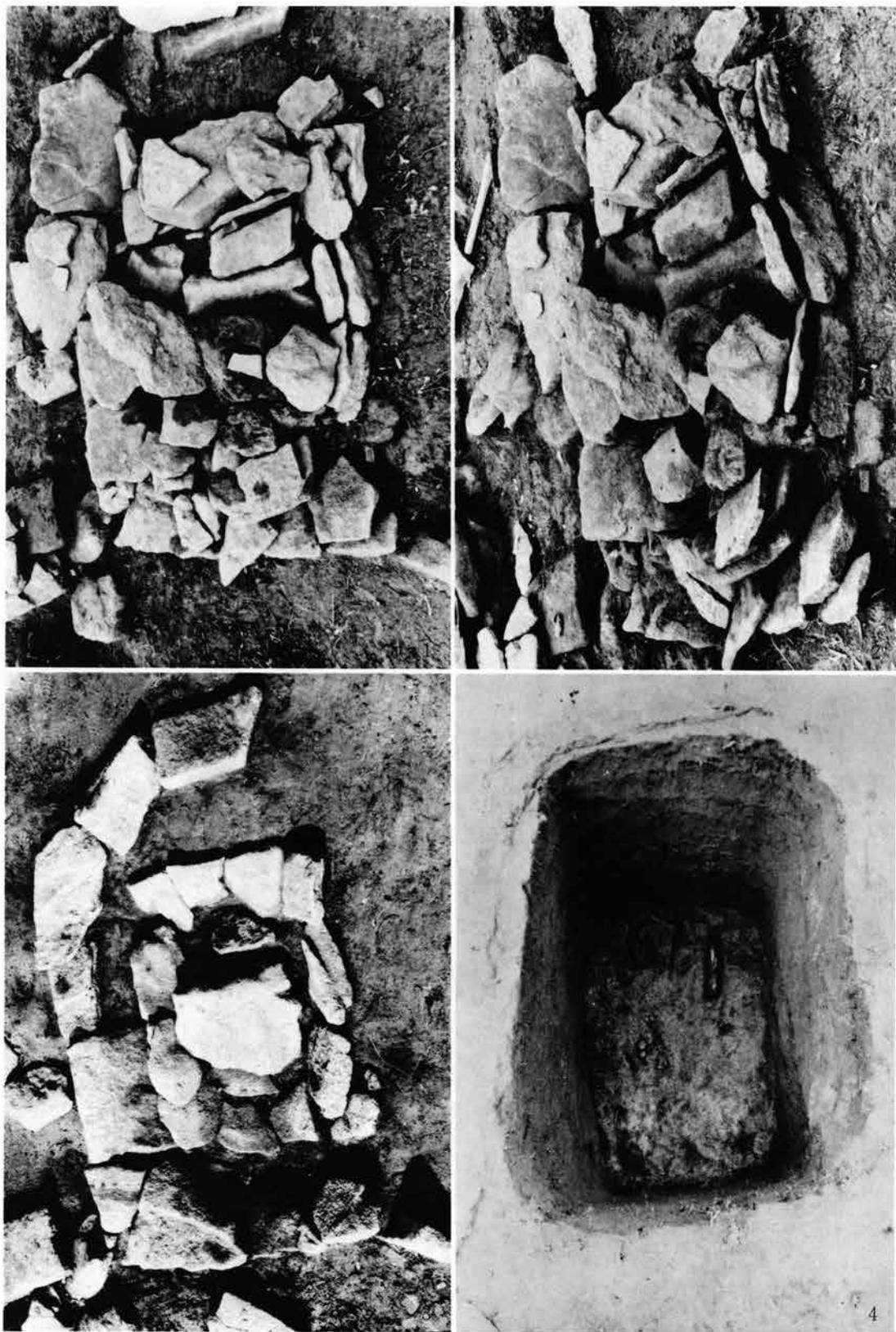
(2) 中世墓群墓壙全景 (北から)



1. 1号墓基段 (南東から) 2. 墓壇 3. 青磁・和鏡出土状況 4. 和鏡出土状況



1~3. 3号墓檢出状況 4. 墓壁断面

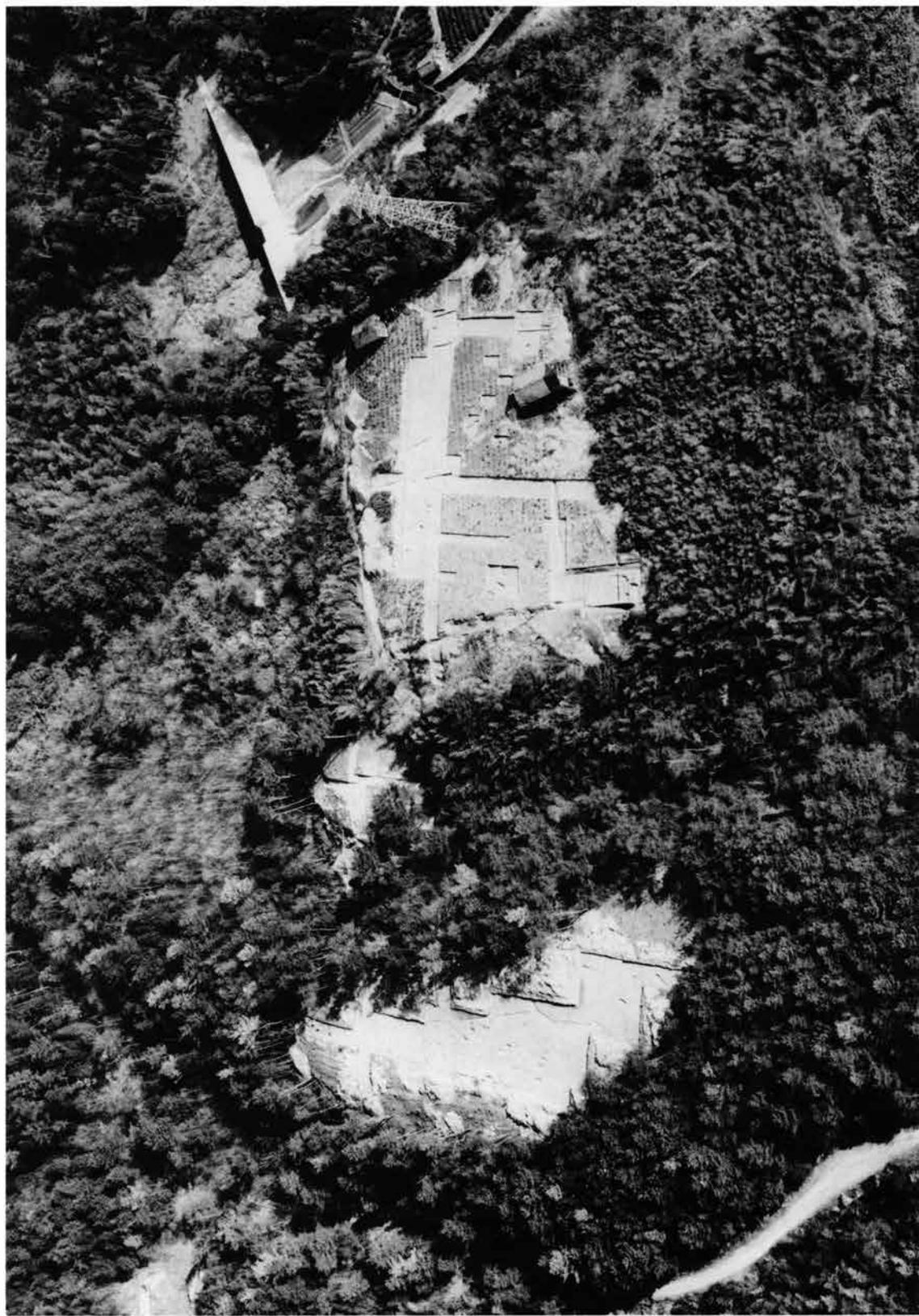


1~3. 4号墓検出状況 4. 遺物出土状況



1·2. 7号墓出土状况 3·4. 6号墓出土状况





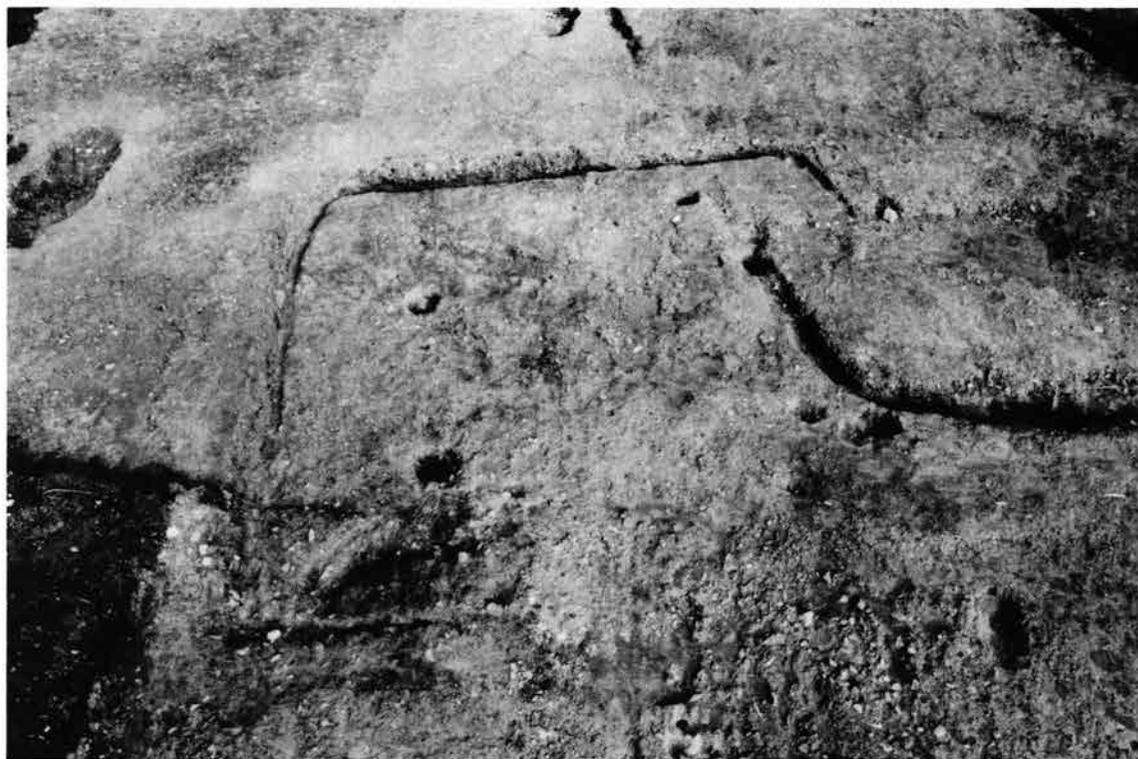
羽戸山遺跡全景



(1) A地区からの眺望



(2) A地区中央土壇群・SB01他（北から）



(1) A地区SB01 (西から)



(2) A地区SB01 (南から)



(1) A地区SB02 (北から)



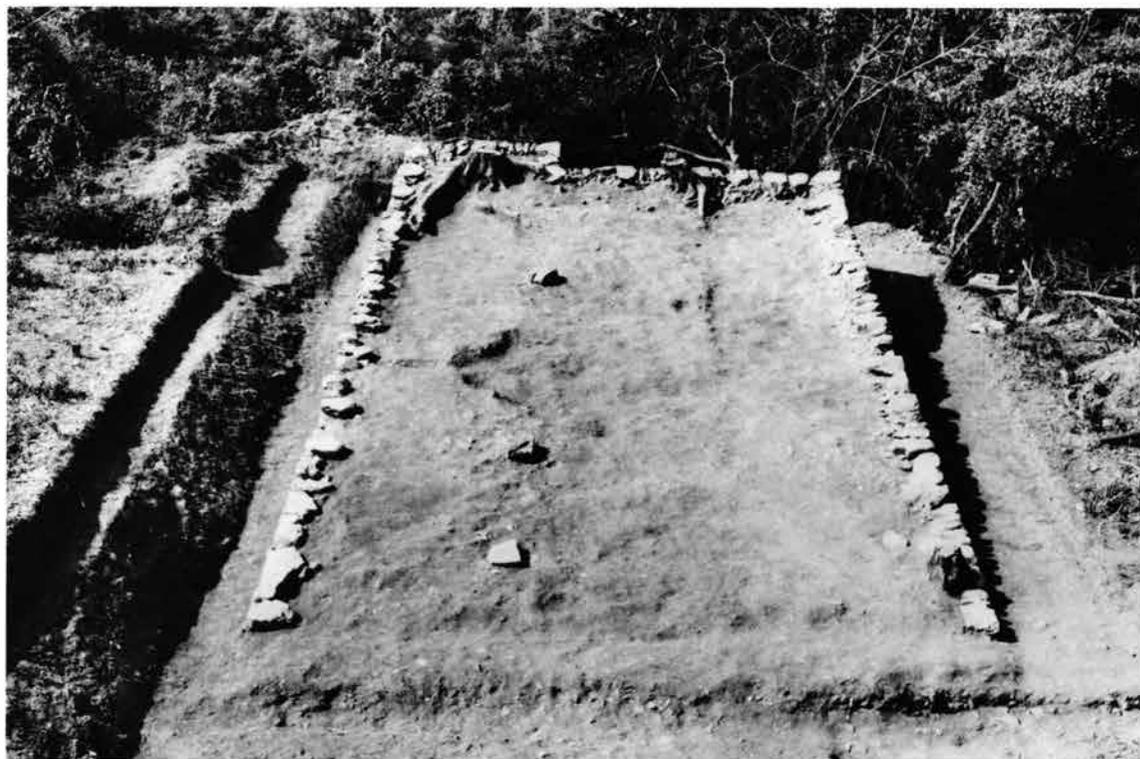
(2) A地区SB02竈 (北から)



(1) A地区北部土坑群（北東から）



(2) A地区SK01（西から）



(1) A地区SB03 (東から)



(2) A地区SB03石垣 (南西から)



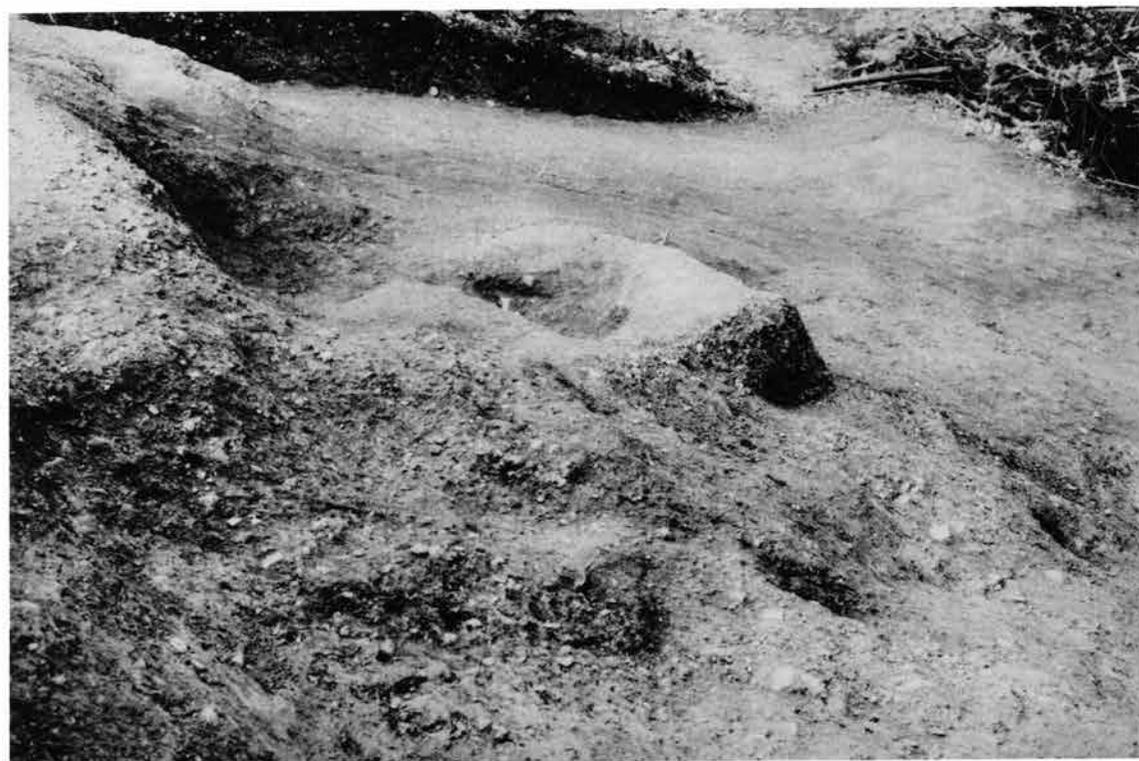
(1) B地区伐採後の状況（北から）



(2) B地区完掘後の状況（北から）



(1) B地区SX01 (北から)



(2) B地区SX01 (東南から)



(1) B地区長頸壺(26)出土状態(北から)



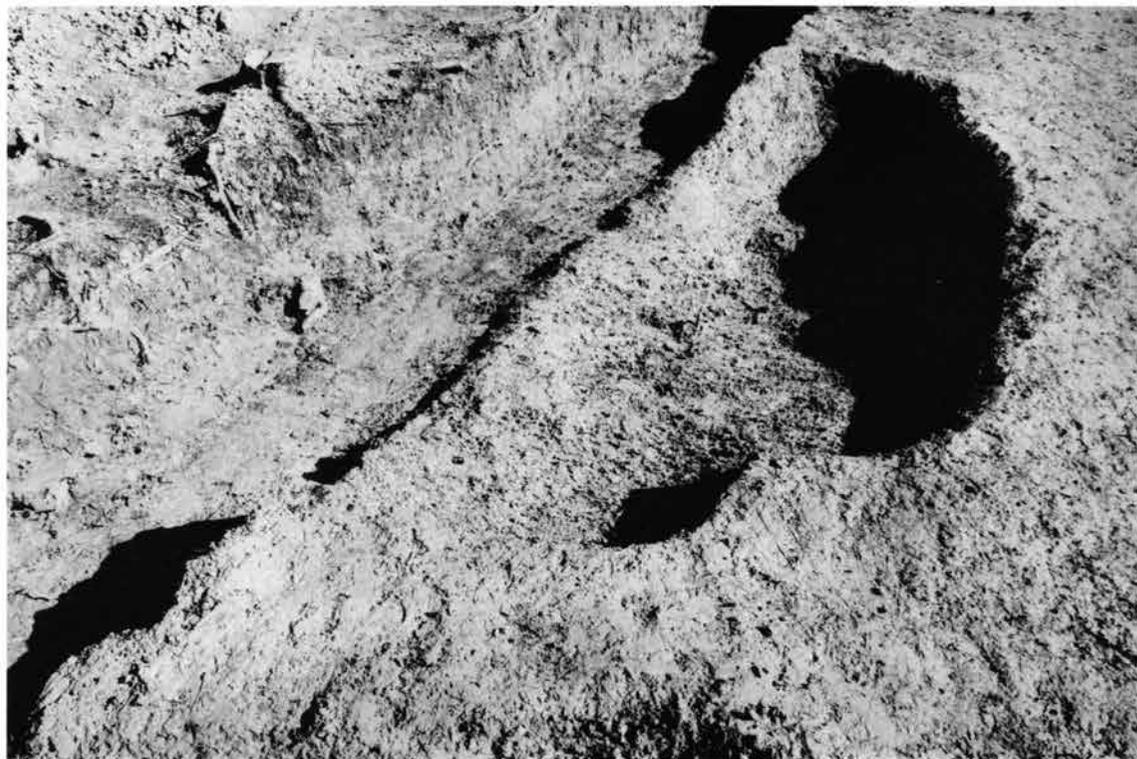
(2) B地区土器出土状態(北から)



(1) C地区全景（東から）



(2) C地区全景（西から）



(1) C地区SK10 (西南から)



(2) C地区SK25・26・28等 (北から)

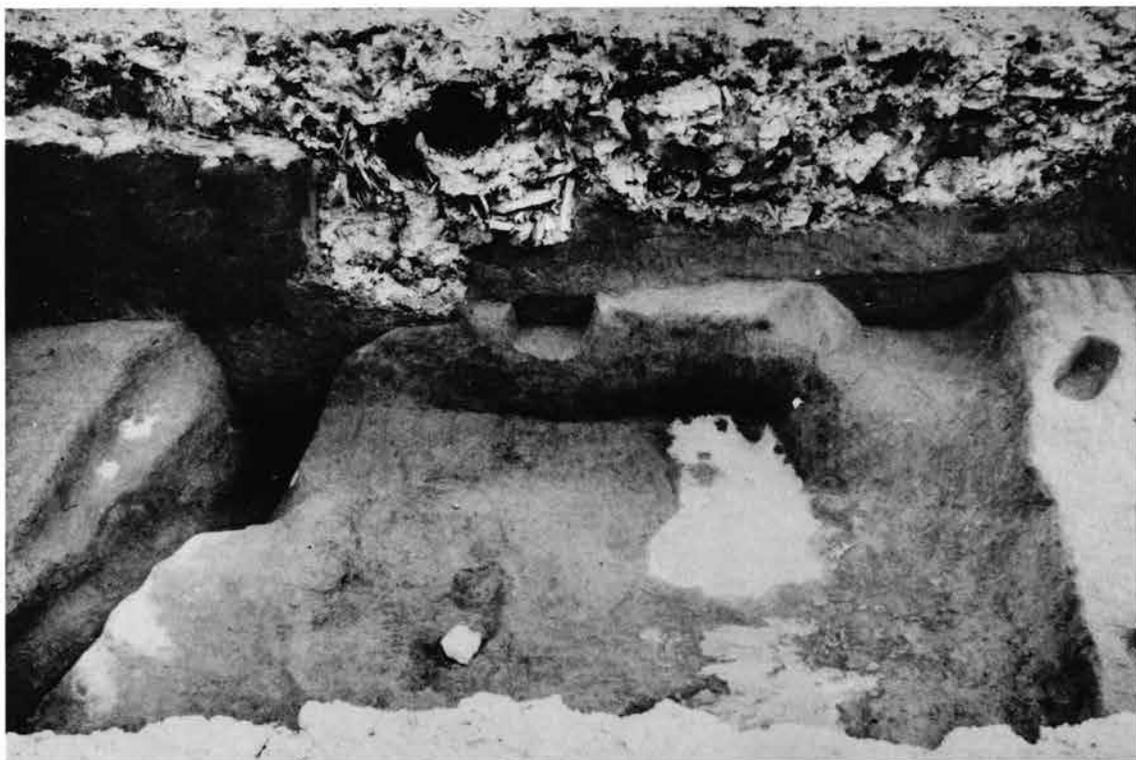




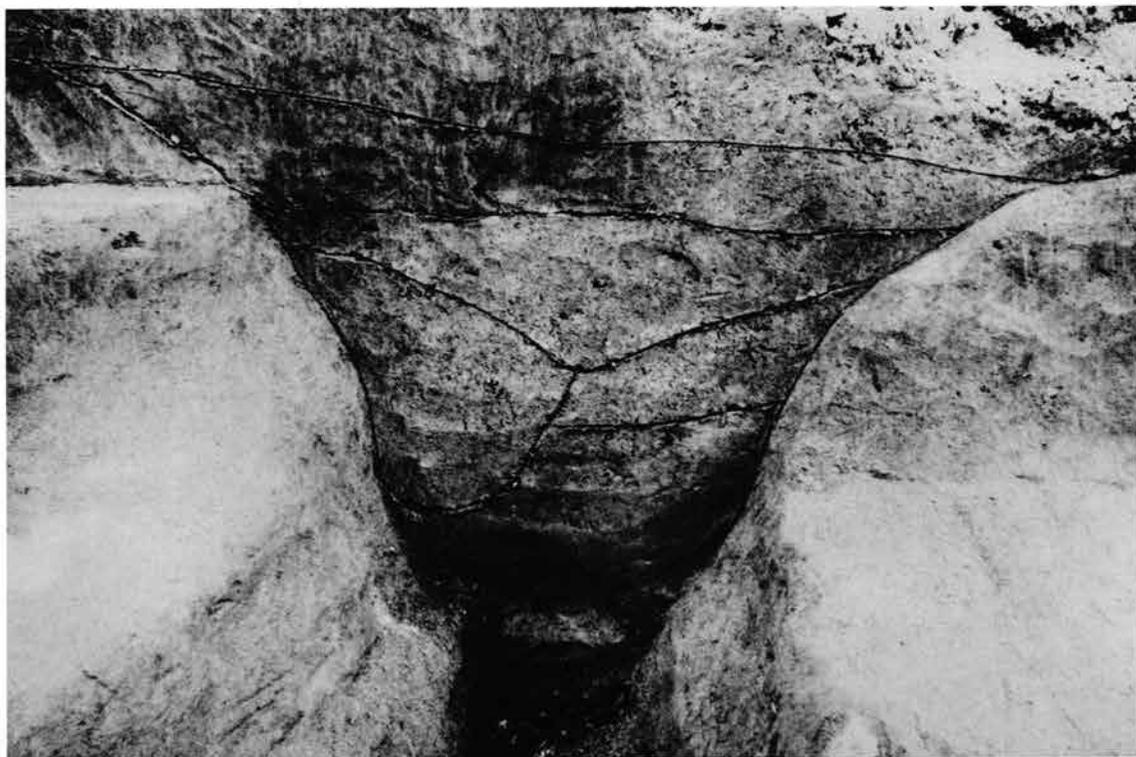
(1) 第Ⅰトレンチ全景 (西から)



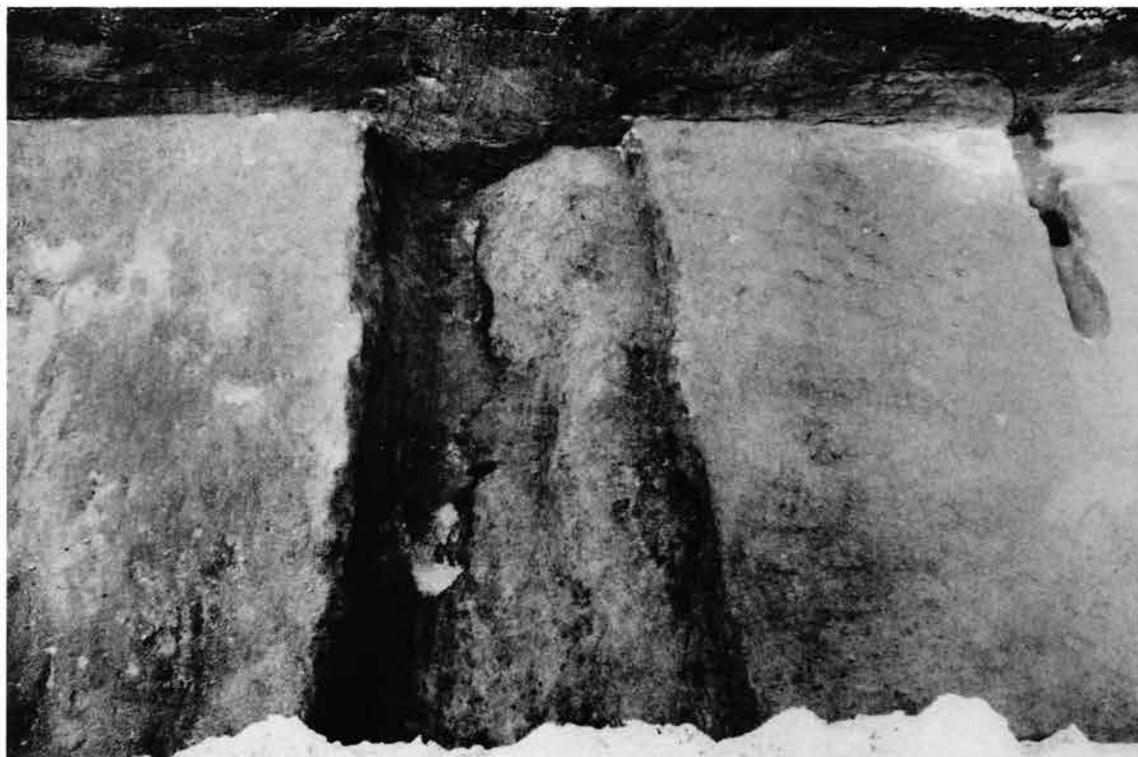
(2) 第Ⅱトレンチ全景 (東から)



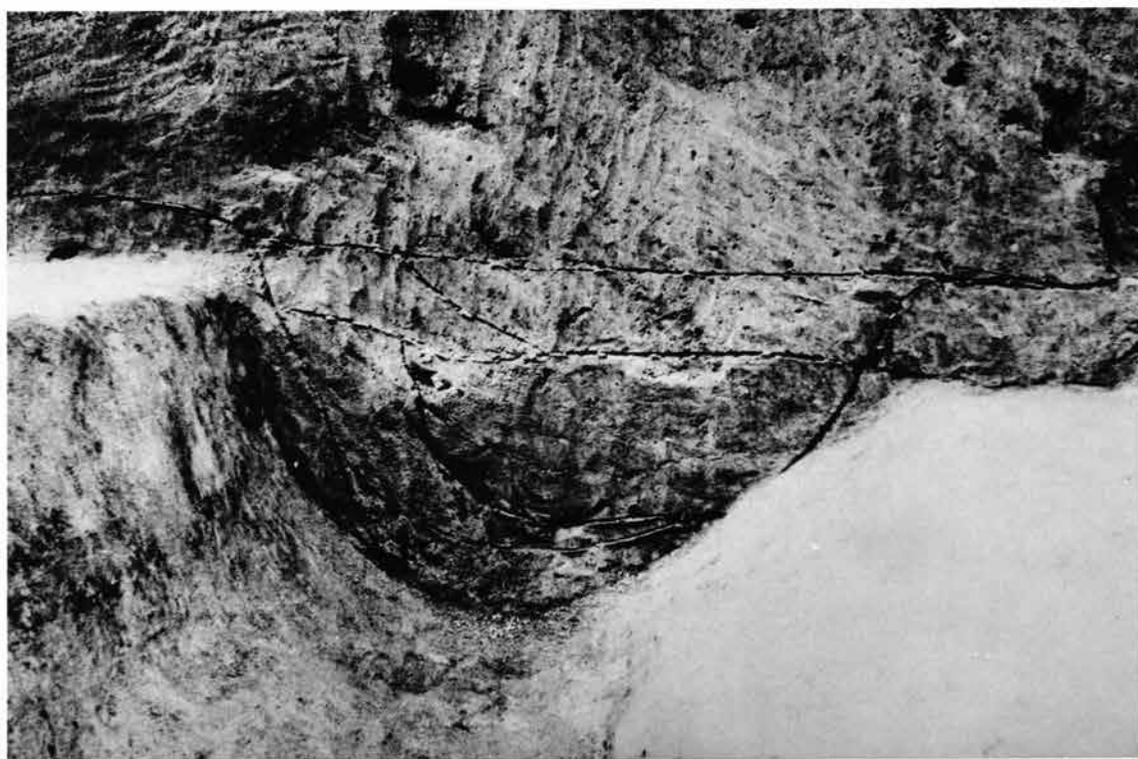
(1) SK01およびSD02 (南から)



(2) SD02北壁セクション



(1) SD01 (南から)



(2) SD01北壁セクション

京都府遺跡調査概報 第2冊

昭和57年3月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル
中御霊町424番地

TEL (075) 256-0416

印刷 中西印刷株式会社
代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075) 441-3155 (代)